
CROSS WORLD

数札霜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CROSS WORLD

【Nコード】

N6092W

【作者名】

数札霜月

【あらすじ】

異世界生活三日目。どうにか現実を受け入れた智宏は、元の世界に帰るべく、同じように別の世界から来た男レンドと共に行動を開始する。だがその帰り道、さらに別の世界から来た異世界人の少女ミシオと出会ってしまい……。やがて事態は、五つの異なる世界を巻き込んだ事件へと発展していく。

第二章連載中

それぞれの世界に帰るべく、まずはミシオの世界である第二世界アイデアを訪れた智宏達。だがミシオは、その世界についての途端忽然

と姿を消してしまふ。消える直前の様子におかしさを感じていた智宏は、ミシオの行方を捜すうちに彼女のとんでもない生活を知ってしまう……。

いつか訪れる、世界の交錯へ向けての物語。

章が変わるとジャンルが変わります。

現在のジャンル：ファンタジー 冒険。

1：異世界生活三日目

異世界に来てから三日目の朝が来た。

自分のいた世界ではかなり寝起きの悪かった智宏トモヒロも、他人の家でまで寝坊できるほどの強かな神経を持ち合わせてはいなかったらしく、驚くほどあっさり目が覚めた。

(いや、これはただ単に夜早く寝るようになった結果か)

よく自分の生活を思い返して見ると、最近の睡眠時間はかなり短くなっていったように感じる。その点この世界では暗くなってからすることもないので眠るのが早い。もっとも起きるのも早いのだが、それでも睡眠時間は長くなっているらしく、起きるのが楽に感じる。

「顔でも洗うか」

寢床から抜け出し、靴を履いて、顔を洗うため家の外に出て水場に向かう。水場と言ってもこの村は高台、もつと言えば切り立った崖の岩棚にある。井戸もないため、崖下の川から水をくんできて村の中心にある水場のためにいるような場所だ。聞いた話だと毎朝村の少年たちが川まで往復して水をくんでくるとのことだった。今朝は早く起きたため、実際にその光景を目にすることとなった。

(そろそろ、風呂にも入らんなくちゃな。この世界の風呂ってどんなものだろう？ そもそもあるのか?)

この世界に来てから体を洗うどころか、着ているものすら元から着ていた学校の夏服のまま変えていない。この世界の服はお世辞にも着心地がいいとは言えないものであるし、身だしなみにまで気を

使う余裕もなかったのがその理由だ。

水面に映る自分の顔を眺める。そこにあつたのは黒い髪と瞳の、ただ一点を除けば日本人として平均的な顔だ。以前はメガネをかけていたが、この世界に来たときに外してしまいそのままになっている。今のところ特に不便は感じていない。そもそもこの世界には元の世界のように遠くの文字を読むという局面が無いというのも理由の一つではある。

改めて現状を指摘するなら智宏は今異世界にいる。

この事実を真面目に考えるのは酷くばかばかしいし、まだたまに「自分はまだ混乱して頭がおかしくなっているのではないか？」というややこしい疑念に襲われることがあるが、結局のところ自分の現状を見直してみると、やはり「異世界に来ている」という事実は逃れようのない現実だった。

人間というものはなれる生き物だという意見があり、智宏もその意見には賛成している口だが、さすがに三日という短い時間では混乱から脱し、現状を把握するだけで精いっぱいだった。

だが、なぜ、どういう状況に陥ったらこういう事態になってしまったのか。その答えは三日目を迎えた今でも一向に出ていない。

智宏が覚えているのは、夏休みだというのに苦手科目である英語の補習に一週間も浪費し、ようやく最終日を迎えてのんびりできると思っていた帰り道に、近道をしようとしていきなり記憶が途切れるといういかげんなものである。かすかに足元が光っていたような記憶もあるがその記憶も定かではなく、結局原因と言えるものは不明のままとなっている。

もちろん智宏とて異世界などと言う単語を容易に受け入れた訳ではない。

本やゲームならともかく、現実に異世界など有ればそれは悪夢の類であり、悪夢でなければ悪い冗談だ。もしも冗談でないとすればそれはフィクションであり、フィクションの中ではファンタジーに該当する。頭に王道をつけても構わない。

(いや、でも王道を語るには少しおかしな所もあるか)

トモヒロが王道ファンタジーとは違うと感じる点、それが目の前に広がる水場のあちこちで顔を洗う村人達だった。彼らは一様に明らかに日本人ではない特徴をそろえている。

顔にうつすらと浮かぶ鱗のような模様。全体的に白や銀に近い髪色。異世界人と言ってしまうえばそれまでだが、智宏がイメージする異世界人とはやはり少しずれている。

この鱗模様はこの世界の人間に共通した特徴らしく、この特徴に当てはまらない人間は異世界人だけである。

そしてもう一つ。どちらかと言えばこちらの方が重要なのだが、奇妙なことにこの村には、鱗模様を持たない異世界人が智宏の他にも一人いるのだ。

(そついやレンドの奴まだ起きてこないのか?)

周囲を見回して、この二日ほどで早くも見慣れてしまった顔を探してみる。同じ部屋で寝ていたはずなので起きぬけに確認しておけばよかった。そう思いながらも周囲を見回し、しかし金髪にメガネと言つこの世界の人間にはありえない風貌の男はどこにも見受けられなかった。どうやらまだ起きていないらしい。

『よう。眼が覚めたかい? ようこそ、異世界エデンへ。まあ、お前も混乱しているだろうが、同じ不運に見舞われた者同士仲良くしようぜ』

つい一昨日の夜、村にある一軒の家で目覚め、混乱のるつぼに陥っていた智宏にそう声をかけたレンドは、昨日一日かけて智宏にどうにか異世界のことについて飲み込ませた。そして同時にこれから

の行動についても。

「そつえば今日って僕が見つつけられた場所に行くって言うてなかったか？」

昨晚決めた予定を思い出し、智宏は手拭いで顔を拭きながら内心でレンドを起こしに行くことを決める。

出かけるにあたってついでとばかりに身を寄せている家の仕事を手伝うことになっていいるため、早く起こさないと相手に迷惑をかけてしまうのだ。ただでさえ居候の身なのにこれ以上迷惑はかけられない。

「……はあ。しかたない、起こしに行くか」

智宏の異世界生活は三日目の朝はこうして始まった。

智宏が厄介になっているのはハクレンという初老の男性と、その妻のリンファという女性の住むログハウスのような作りの木造家屋だ。異世界人である智宏を住まわせることとなった理由は簡単で、ハクレンがこの村で唯一の医者で、患者を寝かせるために余計に部屋を一つ持っていたからである。この世界の家は基本的に木造一階建て、部屋も一つの部屋を家族で共有するのが普通という中で、余計に人間を泊めることのできる家はハクレンの家だけだったらしい。村の外れには客を泊める施設はあるらしいが、そこは他の村からの重要な客を泊めるためのもので、居候を泊めるためのものではない。智宏自身もそんな大それた部屋は遠慮したかった。

智宏が寝起きしているのはハクレンとリンファが眠る部屋の隣の大部屋で、そこでレンドも寝起きしている。否、起きていない。ひたすら寝ている。

「おい、起きろレンド。朝だ！」

「うう、あと五分」

「そのボケが異世界共通だとは知らなかった。じゃない、起きろ！
一応居候の身たる僕ら」

「ううう……。うるさいなあ」

そんなうめき声をあげながら、毛布から顔を出したのは金髪碧眼の若い男だった。かなりの美形といってもよい顔立ちに、いつもならメガネをかけているのだが、今は外して眠そうに目を細めている。加えて無精ひげも伸びているため、本来ならもてるであろう容姿がだらしないイメージに上書きされて台無しだった。

しかし何より目につくのは、智宏と（・）おなじ（・）（長い）（・）耳だ。

幼いころから、吉田智宏には一つのコンプレックスとなっている、エルフのように尖った長い耳。自分以外には母親やその親戚にしか見たことのないその特徴を、目の前の男は持っている。

実際、最初に見たときは驚いた。しかしよく話を聞いてみると、どうやらおかしいのは智宏達の方らしい。

何しろこの男は、

「スウ……」

「っって寝るなあー！」

二度寝を始めたレンドに、智宏は思考を中断して毛布に掴みかかる。だが、レンドからは全く起きる気が感じられない。

いよいよ蹴り起こそうかと智宏トモヒロが考え始めていると、背後で何かの気配がする。振り向くとこの家の家主であるハクレンがやってきていた。ハクレンは年齢は40代半ばといった感じの男性で、この村で数少ない医者だ。慌てて智宏が挨拶すると、落ち着いた雰囲気のアプローチが返ってくる。

ハクレンは毛布にくるまり三度寝の態勢に入るレンドを見て状況を理解したらしく苦笑いしながらレンドを起こしにかかった。

「起きたまえレンド君。働かざる者食うべからず」だぞ！」

「……ここホントに異世界なのか？」

智宏トモヒロの中で初日に否定した「実はドッキリでした説」が急速に力を持ち始めた。だが次の瞬間にはその考えがより強い疑念となって動きだす。

(いや待て、流石にこれはホントにおかしくないか?)

言葉が同じなのは一万歩くらい譲って何とか納得した。昨日の時点で言葉が通じること、それも相手が何を言っているのかが分かるのではなく、相手が本当に日本語を話しているという事態には驚きを隠せなかったが、それでも相手がごく自然に日本語を話しているという事態は納得するほかなかった。

だが、お約束のネタやことわざまで同じというのまでは納得できない。この二つは基本的に、何らかのエピソードから生まれてくる代物であることが多い。おないようなエピソードが異世界にも存在していると考えられることもできるが、はたしてそれだけなのだろうか？

トモヒロ
智宏が自分の中で異世界の存在そのものを根本から疑い直している
と、突然目の前で強烈な変化があった。

「ふっ！」

「ずおっほおっ！！」

いきなりハクレンから何か気合い入れるような雰囲気を感じたと
思えば、レンドが奇声を上げて飛び起きた。智宏自身も猛烈な寒気
を感じ、体中の毛が逆立つ。

(……え？ ……今いったい何を？ 殺気？)

なぜ自分までという疑問がトモヒロの心中に充満するが、実はただ
のとぼっちりである。

しかしながらその感覚はレンドを叩き起すには十分だったらしく、
飛び起きたレンドはハクレンに挨拶していた。いや、なぜか敬礼し
ていた。

「おはようレンド君よく眠れたかな？」

「はいっ！ ハクレンさん！ 朝までぐっすりであります」

すでにレンドの口調がおかしい。というか震えていた。

「ふむ。ところで今日はこれからレキハの森に行く予定ではなかつ
たかね？」

「はい。そのとおりであります！！」

「まあ、私としては特に頼んだ覚えもないし、村の子供でも連れていけば事足りるのだがね。はて、ではなぜ私は君たちを連れて行くなどと思ったのかね？」

「はい！！ 我々がそう願ったからであります！！」

嫌味を言うようにはなく、本当に疑問そうに投げかけられるハクレンの質問に、レンドは緊張に体をこわばらせながら答えていく。表情だけみればハクレンにそのつもりはなさそうだが、行われていくことはほとんど尋問だった。

目の前の光景を見ながら、智宏は今後あの人に逆らうのはやめようと心に固く誓った。別に逆らう予定があったわけではないが。

「ふむ。そうか。頼まれていたのでは仕方が無いな。それでは準備ができたなら表へ出てきてくれたまえ。持っていく者はこちらで用意しておこう」

「はい！！ 了解であります！！」

ひととき強く敬礼するレンドに背を向け、ハクレンが室外へと出ていく。後に残されたのは敬礼の姿勢で硬直したままのレンドと、あっけにとられる智宏だけだった。

仕事をするというのは昨日の夜、すなわち異世界にきて二日目の夜のことだ。智宏が一通り自分の住んでいた世界について話し終え、レンドの住んでいた世界の話聞き、元の世界に戻るにはどうすれ

ばいいかを話し合い始めたときに決めたことだった。

理由としては簡単で、これから元の世界に帰るにしろ方法が分からない以上ある程度この村に滞在しなければならぬ。しかしこの村に滞在するにしてもただで居候するのは心苦しかった。

なにより、この村は子供から大人まで一人一人が仕事を分担しており、そんな中で働きもしないよそ者がただ飯を食らって生きていくなどと言うのはいくら何でもこの世界を甘く見すぎだろう。

そこで、この世界について調べることも兼ねて自分たちでもできそうな仕事を回してもらおうことにしたのである。今回はその手始めにハクレンに付き添って、智宏が倒れていたというレキ八の森の中まで行き、調査がてらに薬草の調達に行くことになっている。

だが、

「はい、一応これを渡しておくよ」

「……は？」

いきなり短剣を渡されるのはさすがに予想外だった。

ために引き抜いてみると驚いたことに金属製ではないらしく、白っぽい刀身が姿を現す。何でできているのか分からないが、刃渡り20センチほどの短剣で、斬ることより突くことに向いていそうな形をしている。最初は作業用のナイフか何かかとも思ったが、とてもそうは見えなかった。

見れば、レンドも似たようなものを受け取っている。そうかと思えばハクレンに至っては槍を持ち出していた。

武装として持ち出したものであるのは明らかだった。

智宏の全身にいやな予感と寒気が走る。

「あのハクレンさん？　もしかして出るんですか？」

そして同じようなことを考えたのか、レンドがあまりにも不吉な質問をしている。

「いや、あくまで念のためだよ。あそこは村から近いし滅多に出ないよ。ただときたま人型が出て騒ぎになることがあるから用心に越したことはないけどね」

「いや、人型って『魔獣』のですよね！？ あんなの俺や智宏じゃ対応できないですよ」

(……………は？ 魔獣？)

「滅多に出ないから大丈夫だとは思うが、出たら出たであきらめて戦うしかないな。そのときは頑張って生き残ろう」

その言葉に啞然とする異世界人二人を残し、ハクレン自身はしっかりとした歩みでどこかに行ってしまう。村の出口ではないし三人で行くという話なので他にも取りに行くものがあるのだろう。

そしてあとには、再び呆然とした二人が残される。

「……………あっちゃあ。まずったな。まさかこんな近くでも出るとは……………」

「……………出るって何なんだ？ さっき魔獣とか言ってたけど……………」

「まあ、言ってしまえばこの世界の野生動物だよ。魔獣なんて呼ばれてるのは宗教上の理由さ。まあ、危険なことには変わりないんだが」

要するに猛獣と言うことなのだろう。

そう考えながら、智宏は視線を村の出入り口に向ける。そこから先に広がっているのははるか果てまで続く密林だ。日本の景色で無理やり近いものをあてはめるなら富士の樹海が近いだろう。もっとも密林を構成している木々は日本の物とは違うのだが。

居るかも知れない。

素直にそう思わせられる森だ。何が分布しているかまでは分からないが、地球ならトラやオオカミの一匹もいそうな森だった。

「だがまあ、考えてみれば当たり前の話だったな。俺が甘かった」

「当たり前？」

「ああ。この世界ではさ。この程度のことは危険の内に入らないんだよ。危険を危険と認識していないわけじゃないし、それを忌避してもいるんだけど、当たり前に存在し過ぎている危険だから避けようのないものとして認識されている」

恐らくこの世界において、森に魔獣と言われる生き物がいるのは当たり前なのだろう。いや、そういう意味では本来森に猛獣がいるのは当たり前のはずなのだ。地球の、それも日本などと言う国に住んでいるから忘れがちだが、智宏はあまりにもそういった危険と縁が無さ過ぎたと言えるかもしれない。

一步海の外に出れば、猛獣が住む地域に隣接している町だってあるし、日本国内でだって熊くらい出る。これはそういう次元の延長にある話なのだ。

村の前に広がる森を見れば分かる。この世界は自分のいた世界とは生態系が根本的に違う。少なくとも日本では見たことのない植物が多いことからみてもそれは一目瞭然だ。おそらく凶暴な猛獣も多くいるだろう。

この世界における人間は生物の頂点に立っていない。

安全な環境でぬくぬくと生きていられた今までとは違う。もしも今までの常識にとらわれ、この世界を軽く見ていれば間違いなく危険だ。

「やっぱりやめた方が良かったかもしれないな。どうするトモヒロ？ 今からでも別の仕事に変えてもらうかい？」

「……いや、そうもいかないだろう」

少し考えた後、智宏は静かにそう答える。たとえ危険だったとしても、目的を考えると森に行く必要はどうしてもあるのだ。

「確かに危険なのかもしれないけど、でも僕が倒れていたのは森の中だったんだろう？」

「ああ。ちょうど今から行くところだ。というよりトモヒロが倒れていた場所に行く用事に参加できるよう頼んだんだけど」

「ならやっぱり行かなきゃいけない。自分の世界に帰るためにも、何とか手がかりを見つけないと……」

そう言ったところで、家の影からハクレンが現れる。背後で何か言おうとしているレンドを意図的に無視し、なけなしの勇気で歩きだし、ハクレンに続いて森へと向かう。

そしてこの数時間後、智宏はそれが勇気とさえ呼べないものであったことを思い知る。

2：森へ

智宏の住んでいた歴葉市は街の東側に大きなビルが立ちならぶ都心部で西に、行くほど住宅地が増えていき、しだいに農村部へと変わっていくというつくりをしている。

その関係で智宏は住んでいた住宅街から少し行くと森や雑木林にお目にかかることができたのだが、それでも所詮は日本の森、ほとんど手つかずで残っているこの世界の森とは雲泥の差で、現在歩いている森は智宏の辞書の「森」の項目が書きえられるような密林だった。どこから獣が出てきてもおかしくないと思えるほど緑が濃く、そんな中を歩かされるといのは、智宏にはかなり胆が冷える思いだった。

いや、それを言うなら出かける前にハクレンの妻のリンファに無事を真剣に祈られた時もそんなに危ないのかと肝を冷やしたし、森に入る前も村がある岩棚から降りるのに柵なし、手すりなし、道狭し、加えて足を踏み外せば命が無いであろう道を下りなければならぬと知った時もかなり胆が冷えたのだが、それはまた別の話だ。そもそも出かける前の祈りは村の習慣らしいので特に特別なことではならしい。

そんなことがありながらも森に入り、歩くこと三十分ほど。現在智宏達はハクレンの指示のもと薬草取りに励んでいた。

智宏がこの世界で最初に発見された森の一幕。最初こそ薬草よりも手がかりになりそうなものを探していた智宏だが、痕跡や手がかりと言った物は見つからず、諦めて薬草取りに背念することにした。いつ襲ってくるかもしれない『なにか』に必要以上に警戒しながら、足元の草を刈り取る。

(それにしても薬草とはね。単語だけはファンタジーらしくなってきたな)

考えてみればそんな状況で学生服の半袖シャツにズボンという服装に、小さなかごをつけ短剣を腰にさして歩いている自分というのは、なかなか場違いな感がある。もっとも、すぐ後ろで同じく薬草の採取をしているレンドも、この世界の物とは違うシャツとズボンで場違いなのでやはり浮いているのだが。

(とはいえ、仕事自体はそんなにきつくもないな。できれば軍手がほしいけど)

そういった部分で贅沢を言うべきではないというのは智宏自身判ってはいるのだが、そうはいつてもどうしてもそう感じてしまうというのやはり現代っ子の性だ。

そこでふと同じ異世界人であるレンドはそういった感覚を持っているのかどうか気がなった。彼の世界の繊維技術がどのくらいレベルなのか知らないが、服以外にも生活する面での不便は多々あるだろう。それは異世界という文明も文化もかけ離れた世界という性質上仕方のないことなのだが、レンドがそういったことに不便を感じているような様子を見たことがない。

(なんでだろう？ 文化体系が似ているのかな？ でも昨日聞いた限りじゃそうとも思えないし……)

手を動かしている間の暇つぶしに近い思考だったが、こういった好奇心はおさえようとして出来るものではない。ひと思いに聞いてみようと考えて、レンドの方に振り返りそのことによってようやく気付いた。背後の異世界人が働く自身をしり目に倒れた木に腰かけてサボっていたことに。

(じ、い、っ……！！)

ちなみにハクレンはさらに奥の地形が複雑なところに行っている。智宏達がいるのは地形が平坦んで比較的とりやすいところだった。問題なのがハクレンがいるところからはこの場所が見えないことであり、それによってサボっていてもばれないということである。

(この男は始める前に『危険な生き物が来る前に早く終わらそう』などと言っていないかったか？ なのにかこの中身が半分も埋まっていないのはどういう訳だ……！)

疑問が一つ増えるたびに怒りのメーターが上がっていく気がする。もっと言えばレンドの「ばれたか」と言わんばかりの笑い方が癪に障る。

そして急に真剣な表情になったレンドが、右手を上げて口を開く。

「やあ、トモヒロのどかな森だねえ！」

「そ、こ、に、直れえええええっ！！！」

「なんだよ騒ぐなよ。そんなに騒ぐとハクレンさんとかやばい生き物に見つかるだろ」

「お前ってやつは……！！ っていうか何がのどかな森だよ。のどかな森に猛獣がいるか！！ やばいから早く済ませて帰ろうて行ったのはお前だよな？ 何堂々とサボってるんだよ！！」

「だって疲れたし」

「お前には体力って物がないのか！ 僕だって体力自慢って訳じゃないけどお前よりましだ！！」

そう、もともと智宏だって体力はある方じゃない。しかしそんな智宏でも疲れなくらいの労働なのだ。その程度の労働で疲れているというのはさすがに体力がなさすぎる。

しかし、レンドの反応は智宏の予想したものと大きく違った。彼はいきなり真顔に戻ると、何かをいぶかしむように黙って考え込んでしまったのだ。

(なんだ？ 何でそこまで考え込む？)

あごに手をやってなにやら考えこんでいる。彼の纏う空気が劇的に変化しており、先ほどの忠告の時に見せたのと同じ表情だ。

「今疲れてないっていった？」

「んあ？ あ、当たり前だろ？」

何も考えずにそう返す。それがいったいどうしたというのか本気で分からない。智宏がその変貌に驚いていると、レンドは今度はわざとらしく考え込むそぶりを見せる。この雰囲気はどちらかというところのものだ。

(なんだったんだ今の？)

気のせいだったのだろうかとも考える。だとしたら自分も疲れているのかもしれないなどと考えていると、

「魔術……」

「へ？」

いきなりレンドは口を開いた。

「君の世界ってさ……。魔術ってないんだよね？」

「……ああ。フィクションとしてならあるけど、現実問題としてないといった方がいいかな。」

「フィクションではあるんだ。……んじゃそれを踏まえたうえで質問。君は魔術を使えるか？」

「使えない、と思う。使ったことがないし」

「ふうん……」

「さっきから何が言いたいんだ？ 確かお（前）の（世界）は（魔術）が（あ）（る）（世界）な（ん）（だ）（け）（）？」

そう。このレンドのいた、彼らがオズと呼ぶ世界というのが、智宏のいた世界における異世界の代表的なイメージを体現したような世界らしいのだ。機械の代わりの魔術が文明して存在する世界、俗にいうところの王道ファンタジーのような世界というなら、この世界が正にそうらしいのだ。らしいというのは実際に行ったわけでも使っているのを見たわけでもないのだから信じているわけではないという話なのだが、それにしただって異世界に来てしまったという現実がそうだった話の信憑性を上げている。

何より、智宏自身も（元の世界にいたころからそう）
いったファンタジーとは無縁でなかったため、半信半疑以上の八信二疑くらいには信じられてしまうのだ。

「なんだ？ レンドはまだ僕が自分と（・）同じ（・）世界の（・）出身な（・）ん（・）じ（・）ゃ（・）な（・）い（・）か（・）と（・）疑っ（・）て（・）い（・）る（・）の（・）か（・）？」

「そりゃそうだよ。君の（・）その（・）長い（・）耳は僕ら（・）の（・）世界の（・）人間が（・）持って（・）いる（・）特徴だ（・）から（・）ね（・）。聞けば君は【マーキング】もできるんだろっ？」

「【マーキング】？ ああこれのことか？」

レンドの言葉に応じながら、智宏は目の前に手を差し出す。頭の中で適当にひらがなをイメージすると、空中に（・）銀色の（・）光で（・）そ（・）の（・）文字が（・）浮か（・）び（・）上（・）がる（・）。

「そうそのことだよ。昨日も話したけど、そいつは俺の世界じゃ【マーキングスキル】って呼ばれてるんだ。そいつはね、俺たちが魔術を使うために必須の能力なんだよ」

「えっ、そうなの？ それは初めて聞いたぞ。これってそんな使い方できたの？」

初めて聞く情報に、思わず智宏は目を白黒させる。昨日話したときに魔術などと言うものが存在するというのは聞いていたが、そのときはまだ混乱していたため詳しいことはまだ聞き出せていなかったのだ。

「っていつか君たちはどういうふうに使ってたの？ 正直魔術以外

にあんまり使い道のない能力のはずなんだけど」

「それがないから問題なんだ。この能力、変わってるわりに使い道がないからな。うちの家系なんてこいつ有効活用法を見つけることを一族の宿願にしてるくらいだ」

「それも変わった家系だな」

「ほっとけ」

そもそも、智宏がこの能力に気づいたのは十歳くらいの頃だった。きっかけは覚えていないが、とにかく空中に文字が書けるというあり得ないことができてしまった智宏は、当時親譲りの長い耳というコンプレックスを抱えていたことも相まってかなり舞い上がった。それまでコンプレックスだった長くとがった耳が、奇妙な能力を持つ者の特別の証のように思えてうれしく思ったのはよく覚えている。ただし、その熱は長く持たなかった。理由としては能力を試すうちにこの能力が、異質な割にさっぱり使いどころがないということが判明してしまったのもある。

しかし何よりも大きかったのがその能力を持っていたのが自分だけでなく、自分の母親や祖母、母方の叔父叔母などが皆持っているのを知ってしまったことだった。

トモヒロ本人にしてみれば思い出しただけで落ち込みそうな思い出だ。なにせ自信満々に見せた能力が「おー。お前もできたか」の一言で済まされた挙句、母親が何でもないので空中に文字を書いて見せたのだから。

これが普通の母親ならただの遺伝で済んだ話だが、相手は智宏に名前を付けるときとんでもなく痛い名前をつけようとした母親だ。それを防いで普通の名前を付けてくれた父親ならともかく、そんな母親と同じ特異点を持っていることを喜べるほど智宏は人間ができて

いなかった。

結果として、智宏のこの能力は自分だけの特別ではなく、どこかネジの一本や十本や百本抜けているのではないかと思える母方の家系が受け継ぐ非常識になってしまったのだ。

「まさかこいつにちゃんとした使い道があるうとは……」

「使ってみるか？」

「へ？」

「いや、トモヒロに後で【魔術】を教えてみようかと思ってたんだけど」

「……うええ！？」

「すごい反応だな。いやなら無理にとは言わないけど、でも君の能力がホントに【マーキング】の能力なのか確かめておきたいし……、つてどうした？　なんだかにやける一步手前のようなアホな顔してるぞ？」

「ほつとけ！！　待て待て、今心を落ち着ける。少しの間落ち着く時間をくれ！！」

キョトンとするレンドを制止し、智宏は自分が今言われた言葉の意味を考え直す。

魔術といえば、智宏の世界では実在していなくてもイメージは簡単だ。火の玉を出したり、雷を抱いたりという漫画のような現象は、男に生まれた以上一度はあこがれる代物である。

それが今、もしかしたら現実になるかもしれないのだ。それもず

つと使えないと思っていた変な能力によって。

「ああ……。君が気が進まないって言うなら別に」

「やりましょう！ やらせてください！ お願いします師匠！！」

智宏は自分のキャラが壊れていくのを感じながら無視して話を進める。何せ魔術だ。これを逃す機会はない。

「師匠って……。っていつかどうしたんだ一体！？ 何か少しキャラ変わってるぞ？」

「だって魔術だろ？ こっちの世界で魔術だの魔法だのって言った少年が一度は夢見て諦める初級にして最上級の幻想なんだよ！ それが現実に行けるって言うんだから興奮するなって方が無理だ！」

「あー……。なるほど。そうか。そうなのか。こっちではできて当然のことだから分かんない感覚だけ。よしわかった！ 簡単な魔術でよければいくらでも伝授してやるう！！」

「いくらでも！？ さすが！ 太っ腹師匠！！」

「盛り上がってるところすまないが、君たち、そろそろ仕事を再開してもらえるか？」

『……………』

残念ながら、戻って来ていたハクレンの言葉で魔術はしばらくお預けとなった。

3：魔術講座

異世界における魔術の使い方として、智宏が自分の中に持っていたイメージは呪文を唱えて発動するというものだった。だが実際に聞いてみると、現実はどうやら違うようらしい。

考えてみれば当たり前のはなしで、そもそも【マーキングスキル】、空中に文字を書く能力を使って行うのだから呪文より可能性が高いのはもつと別のものになる。

即ち文字や記号、そしてそれらを集めて描く魔方陣である。

基本となる形は円形の中に文字や図形を書き込んで、それを線でつなげたり、囲ったりといった代物であるらしい。

理屈としては、魔術の原動力になる魔力に文字で形や性質を与え、それを線でつなげ、違う性質の魔力同士を影響させ合うことで望む効果を導くというもので、そうしてできた魔方陣に体内の魔力を決められた手順、位置、順番、タイミングで流し込むことで発動するのが魔術らしい。

（イメージとしては電気回路を一から作ってそれにエネルギーを流し込むみたいなものかな？ この場合、電気回路もエネルギーも同じ魔力だけど……）

さて、ここで湧いてくるのが、まったくそうだった理論を知らない素人以下の智宏がどうやって魔術を使うのかという疑問だ。だが、これはやってみるとかなり簡単だった。

レンドが空中に描いて見せた魔方陣をそのまま真似して智宏も描き、魔力の注入も、レンドが魔力を流し込むのを感じ取ってそれを真似すればいいというものだったからだ。

最大の問題は魔力を流し込むのを感じ取れるのかということだったが、実際にレンドがやってみせると何となくその感覚が分かってし

まったためこの問題もクリアした。この魔力の感覚というのもレンド達オズの人間が普通に持っているものらしく、【マーキングスキル】と同じく智宏にも存在した。

さて、そこで別の問題が発生する。いや、別に魔術自体は驚くほど順調なのだ。ただ教えられた魔方陣デザインの形が問題だった。

円形の中心に横に三つの円が並び、その両端の円を曲線でつなぎ、それとは逆方向に二つ並ぶ文字。

実際に書いてみれば分かる。まごうことなきアパンマンだった。しかもただのアンパンマではない。

頬や鼻、額などにはそれぞれ文字が書かれ、いくつかの線も引かれている。

顔の汚れたアンパンンだった。

「なんだろう。猛烈に失敗する予感がしてきた」

「え？ 何で？ ……特に間違いはないけど？」

「いや、顔が汚れてると力が出ないんだよ」

「は？」

現在智宏たちはあまりにも長い薬草集めをようやく終え、来た道に戻る形で歩いている最中だ。時計が無いので正確な時間はわからないが、太陽が真上近くにあるため昼前後なのは想像できる。村まではあと二十分ほど。魔術を使うなら周りに迷惑のかからないこのあたりがいいだろうし、村に帰ればまた別の仕事が待っている。仕事をするのは自分たちで言い出したことであるし、ただ飯を食らう気はさらさらないが、そのために魔術を習うのがこれ以上お預けになるのは避けたい。

ちなみにハクレンは「魔術のことはわからないからね」と言って

話には絡んでこなかった。今は一人で智宏達の五メートルほど先を歩いている。森が獣道であるうえ、お世辞にもわかりやすいとは言いがたい。見失わないように注意しなくてはいけないのだが、それに注意しながらでも教われるくらい魔術というものは簡単だった。

（【マーキング】ができる人間なら、必要なのは知識だけ……、か。文明として成立する上で汎用性も高まったのかな……）

「どうした？」

「いや、何でもなし。それよりこれからどうすればいいんだ？」

「ああ、この術式の場合、最後はまだ魔力を込めてない真ん中の円の中に魔力を込めればいい。量は……、まあ適当に」

「適当って……、そんなんでいいのかよ？ 暴発とかしないの？」

「いや、多く注ぎこんでも無駄なだけで暴発とかはないな。その術式の場合は、だけど」

「ふうん。それじゃ！」

はやる気持ちを抑え、ゆっくりと魔力を流し込む。暴発などはないとは聞いていたが一応念のためだ。

ゆっくりと魔力を込め、魔法陣に変化が起きるのを待っていると

「お？」

魔方阵が輝いて人の中心の円の数センチ上に何かが現れる。光が集まって小さな物体を作っていく。だんだんと形がすっかりしてきた

それは、三角錐の形をした黄色つぼく光る半透明の物体で、大きさは親指ほどしかない。

「……なんだこれ？」

時間に見てみればほんの一秒にも満たない、それでも心情的には十分は見えていたようにも思える智宏の初魔術は、いきなりとがった先端部分をこちらに向けて倒れた。

「うおおわああああつー!!」

あわてて腕を上を持ち上げて体を伏せる。だが、

「……あれ？ 何も……、起こらない？」

最悪この三角錐A B C Dが弾丸のように飛び出すのではないかと警戒していたのだが、その後三角錐には何の変化もなく、こちらが手を動かすと手の上の魔方陣のさらに上でゆらゆらと揺れるだけで何の変化もない。しきりにさつきまで薬草を取っていた森の奥の方に先端を向けている。

「……何をしてるんだトモヒロ？」

「……レンド、この魔術は何だ？ もしかして失敗か？」

するとレンドは「えっ、そんなはずは……」と言って自分の手の上で見本として展開していた魔方陣に手早く魔力を注ぎ込み、魔術を発動させる。そしてレンドの手の上に現われたのも謎の三角錐A B C Dだ。

「別にちゃんと北を指してる）……（し問題ないと思うけど）？」

「……北を指してる？」

「何不思議そう顔してるんだよ？ 魔術の中でも初歩の初歩、うちの世界じゃ初等学校で習う基礎魔術【方位磁針】^{コンパス}。確かに発動してるぞ？」

よく考えてみれば分かることだが、智宏のイメージの中にあつた魔術というのは早い話が漫画やゲームに出てくる魔術である。それらはほぼ間違いなく戦闘シーンが存在し、魔術もそこで使われるものがほとんどだ。つまり何が言いたいかというと、智宏の中の魔術のイメージというのは早い話が攻撃魔術であり、その目的は人を傷つけることとなる。つまり、

「そんなもん禁術になるに決まってるだろ」

「禁術？ 使うことが禁じられてるのか？ なんでまた？」

「は？ いや、そりゃ攻撃術なんてホイホイ使われたら危ないだろ？」

「え？ ……ああ、そう言うことか」

当然のことなのに盲点だった。

使われたら危ない。考えてみたら当たり前の話だ。そもそも攻撃性があるということはその立ち位置や効果は智宏の世界における刃物や銃、下手をすると兵器のようなものになるだろう。そんなものを所かまわずぶっ放していたら下手な銃乱射事件より酷いことになるのは明白だ。攻撃魔術を禁止するということは、日本における銃刀法違反と同じような感覚なのだろう。あるいはそれ以上かもしれない。

「トモヒロが言ったような魔術はだいたいが攻撃目的の魔術だからな。そういうのはほとんど禁術扱いだ。……って言うか、そもそもどうしてそんな物知りたがるんだ？　もしかして君の世界は攻撃術が必要になるほど物騒なのか？」

考えようによっては当然ともいえる疑問に、智宏もあわてて弁解する。

「ああ、いや、別にそういう訳じゃないんだ。世界全体で見ればそりゃあ戦争している国や治安の悪い国もあるけど、僕の国は平和そのものだしな。ただ、こっちで魔術っていうと攻撃術のイメージが強いつてだけさ」

「それに憧れるってのもわからない感覚……、って訳でもないか。人間……、って言うか、特に男ってそういう生き物だもんな……」

それを聞いて少しほっとした。智宏としてもやはり自分の不用意な発言で自分の世界が悪く思われるのは嫌だ。

「こっちの世界で禁術っていうと、使用者にリスクがある術ってイメージが強いから、そういう意味での禁術かと思ったよ」

「そつちの方が分からない感覚だな。まあ、確かにそういう意味での禁術っていうのもないわけじゃないけど、ここで言う禁術っていうのは法律で使用を禁じられてる魔術のことなんだよ。『禁術使用罪』って言うてね。正当な理由無く禁術とされる魔術を使用した者は処罰するぞっていう法律があるんだよ」

「使用しただけでも処罰されるのか？」

「当たり前だろ。個人で街の一角を廃墟にできるような技術を、そうそうホイホイ使われてたまるか。もしも禁術を使って人を殺そうもんなら、殺人の罪と禁術使用の罪で普通に人を殺した場合より重い処罰が下るくらいだ。そういう訳だから俺は禁術なんか知らないし、知ってたとしても教えるわけにはいかないんだよ」

言われてみれば確かにそうだった。今の話から推測できる禁術とというのはほとんど武器と同じだ。それはつまり禁術を教えることは、武器を売ることと同じ意味合いを持つてくる。

そう思うと同時に、レンドが思いのほか法律的な話を始めたことに智宏は少し驚いた。もしかすると目の前の男は軽いノリの割にインテリなのかもしれない。

「そう考えると、禁術を知ってるってのは確かに取り締まる意味があるな」

「ああ、と、それはちょっと違うぞ智宏。教えるのは確かに罪になるんだが、知ってること自体は罪にはならないんだ」

「どういうことだ……？ まあ確かに知っている人間って処罰以前に摘発しにくいだろうけど……」

「まあそれも有るんだが、現実的な話、処罰したら禁術を忘れるかって言ったらそうじゃないだろ？」

「ああ、確かに。つまり処罰する意味がないから罪にならないってことか？」

「それだけじゃない。さっきトモヒロは【方位磁針】^{コンパス}の術式を攻撃魔術と勘違いしていただろ？」

「うっ、今となつてはお恥ずかしい限りですが……」

「いやそうじゃなくて。もし逆に、俺が【方位磁針】^{コンパス}の術式を教えたと偽つて、攻撃魔術の術式を教えてたらどうなつたと思う、ってことだよ」

「……ああ、なるほど」

つまり問題なのは術式を見ただけではそれが何に使う術式なのか分からないということなのだ。もちろん魔術とて、ちゃんとした法則性のある学問である以上、文字や図形、線の一本一本に至るまでちゃんとした法則性や意味があり、それが読める人が見ればどんな効果かは分かるのだが、それができるのは一部の知識人だけである。

（僕だってテレビの中の回路を見ても、何でテレビが映るのかはわからないし、大きさが同じなら、それがテレビの回路なのかDVDプレイヤーの回路なのかも判断できない。イメージとしてはそういうもののかもな……）

要するに理屈がわからなくても機械が使えるように、理屈がわから

なくても知識さえあれば魔術は使えるのだ。そして見た目に大きな差のある機械と違い、魔術というものは見た目に大差がない。乱暴に言ってしまうえばどれも文字と図形と線の組み合わせだ。ピストルとテレビの区別なら見た目で分かるが、普通の魔術と攻撃魔術の違いなど分からない。

「そういう事情を利用して禁術を普通の魔術、一般的なものは生活魔術とか呼んだりするんだが、そういうものと偽って教えて人殺しを企む輩がたまに出るんだよ」

「……なるほど。それで禁術を知っていることは罪にはならないのか。知るつもりがなくても知ってしまう事態があるから……」

考え直してみれば、知っていること自体が罪になるというのもかなり乱暴な話だ。これが禁術だったから智宏も先ほどのようなことを口走ったが、ほかの思想や宗教がらみの話題だったらと間違いないそんなことは考えなかつただろう。人権侵害もいいところだ

「残念ながらこういつた事例は少ないながらも結構存在してね。有名なものだと、禁術を知っていて重い処罰を受けずに人を殺したいと考えていた犯人が、殺したい人間の子供に接触して、『お父さんの前でこの魔術を使ったら喜ばれるよ』なんて言って禁術を教えた事件がある」

「……それは……えぐいな」

それは早い話、子供に爆弾を届けさせるようなものだ。生み出すであろう結果を考えれば、普通に人を殺すよりもたちが悪い。

実際にその場面を想像して気分が悪くなる。特に魔術を使った子供本人の心の傷は決定的だ。本人の望みに関係なく、親を殺した罪

を一生背負う羽目になる。

「残念ながらこういう話は決して少なくなくなってね。ある国ではグレネード手榴弾系の術式を【ポラロイド撮影術式】と偽った上で、その情報を人通りの多い町中のあちこちに落書きするって事件もあった」

「ちょっと待て、それって下手すりゃ大参事になるんじゃない?」

【ポラロイド撮影術式】という魔術は名前から察するにカメラのようなものだろう。そしてカメラというのは人に向けてつかむものだ(……)。……)。手榴弾系グレネードの術式というのがどういう効果の攻撃魔術かは知らないが、名前から想像するに爆発させることを目的にした術式だろう。そんなものを人に向けて使えばどうなるかなど考えなくても分かる。

「実際、一歩間違えれば大参事だったらしいよ。幸いにも術式の正体が早いうちに見破られて注意が呼びかけられたことと、得体の知れない怪しい術式を使おうとする者がいなかったことから最悪の事態は避けられたけどね。ただ、この事件で推定でも千人以上の人間が『禁術保持者』になってしまったと言われている」

「……なるほど、そりゃあ処罰もできないな。取り締まる訳にはいかない被害者が、無自覚に禁術を知ってしまうって状況が起きやすいのか……」

「ああ。だから法律は禁術を広めようとする人間を許さない。禁術を他人に教えることは『禁術教唆罪』というれっきとした犯罪だ。さらにさっき言ったような方法で人を殺した人間は『人を道具として使って禁術を使用し、人を殺した』として、殺人と禁術使用、禁術教唆の3つの罪に問われる。確かな意志で行っていることは明らか

かだし、強い悪意ありとも認識されるから罪はかなり重くなるんだ」

それを聞いて智宏は少し自分のイメージとの微妙な違いを感じた。

（思ったよりオズって世界は、なんとというか……、ちゃんとした世界なんだな……。レンドに聞いた世界観だと剣と魔法のファンタジーって感じの世界のように感じたけど、だからと言って法律が中世ヨーロッパの封建制のままって訳ではないみたいだし……。先入観で他人の世界を野蠻に見てたかな……）

「どうした智宏？ この話題で考え込むと犯罪の計画練ってるみたいぞぞ？」

「どんな思考回路だよ。……この際だから聞くけどレンドの世界ってさ、貴族とか騎士っているの？」

とりあえず智宏の中にある中世ヨーロッパ社会の代表的な特権階級を上げてみる。その扱いによってはまだレンドの世界には民主主義がない、あるいは有っても一般的でないということになる。

「一応いるぞ。騎士はまあ、昔そう呼ばれてたって言うだけの別組織だが、貴族なんかは今でも行くところ行けば会える」

「いるのか……。いや待て、もしかしてその貴族って特権とか持っていないの？」

「貴族の特権？ ああ、もしかして身分制の話をしてるのか？ 安心しろ。そんなもんとつくに廃れてるから。貴族って言っても今はただの金持ちだよ。正確に言うなら元貴族だ。俺の友達にシェフ目指して修行してるのがいるけど、そいつの先祖が確か貴族だったは

ずだ。身分制なんてとつくに廃れてるよ」

聞いてみると智宏が最初に思っていたより進んだ世界だ。ちゃんと民主主義のようなものがある。システムとしてはイギリスのそれに近いのかもしれない。

そう思い、智宏は自分の中のレンドの世界時代のイメージを百年単位で進める。レンドの話や服装から大まかにオズの文明レベルを推測していたが、よく考えると魔法のある世界の文明レベルを、科学文明のレベルで判断してもしようがない。科学的には進んでいなくても魔術的には進んでいるのかもしれないのだ。

「なあ、トモヒロさ……」

「ん？ なんだ？」

「もし帰る方法が見つかって世界を自由に行き来できたらさ、俺の世界に来てみたくないか？」

「えっ？」

「いやな、お前がずいぶん俺の世界に興味を持ってるみたいだからさ、招待できるなら、してみたいなと思ってさ」

それは思わぬ申し出だった。智宏も異世界というものに興味はある。帰れない異世界ならばごめんだが、元の世界に帰れることが前提ならば異世界旅行も楽しめるだろう。

「……ああ、それいいな！」

「おっ、魅力を感じたか？」

「ああ。特に魔術とか習ってみたいね。攻撃魔術でなくたって魔術のすごさはさっきので良く解かったし……。そもそも攻撃魔術なんて習ったって使いどころがないから、むしろさっきみたいなお生活で役立つ魔術の方がいい」

「それなら大歓迎だ。ついでに後で簡単で便利な魔術を教えてもいいな。例えば」

「君たち少しいいかね？」

『うっぐう!?!?』

いきなり後ろから声をかけられたと思ったら、二人は揃って口をふさがれた。見れば背後にいきなり現れたハクレンが、二人があげかけた悲鳴を口をふさぐことで封じている。

「君たちはなぜ私が何かするたびにそんなに驚くのかな？」

それはあなたが妙に怖いからですと心の中で叫ぶが口には出さない。というか口をふさがれているので出せない。朝のこともそうだがどうもハクレンは無駄にこちらを威圧するくせがあるようだ。別に智宏達に敵意を持っていたり、怒っていたりするわけではないようなのだが、なぜかハクレンは無駄に怖い。朝のレンドを起こすのに使った殺気らしきものもそうだし、今だって偵察のためだとかでかなり前を歩いていたはずなのに、いきなり後ろから現われて口をふさいできた。

(……ある種の天然なのか？ 個人的には心臓に悪いからやめてほしいんだが……)

とは言え今の問題は別だ。魔術の話に加わってこなかったハクレンが戻ってきているという事は

「何かいるんですか？」

さすがにレンドの理解は早く、すぐに空気を切り替える。下手をすると『魔獣』と呼ばれるような生き物に出くわしかけているかもしれないのだ。だがハクレンは「別に危険な魔獣がいるという訳じゃない」と二人を落ち着かせた。

「魔獣じゃない？」

「うむ。まずは安心したまえ。魔獣の類ではないよ。ただちよつといや、すごく、もつといえは鼻が曲がるほど臭いだけだ」

『臭い！？』

予想外の答えに思わず二人で声を上げる。二人、特にレンドにしてみれば危険な生き物が潜んでいるのかと思っただけに驚きを隠せないようで、それを聞いた後、表情が微妙なものに変わっていく。それに対してハクレンの表情はいたって真面目だ。

（でも、こう言っちゃなんだけど臭いってそんなに異常事態なのかな？）

見ればレンドも似たようなことを考えているらしく、自分が浮かべているであろう表情と同じようなものを浮かべている。

とはいえこの世界の人間であるハクレンが異常事態であると考えている以上、異世界人である自分たちの判断のほうに誤りであると

考えるべきだろう。

「ハクレンさんそれは危険な生き物の匂いですか？」

「いや、この臭いだともな獣は寄りつかん。鼻を頼りにしてい
たらおかしくなるような臭いだからな。現に今は私も鼻に詰め物を
している。そうでなければ気絶しそうだ」

そう言われてみても智宏にもその臭いというやつは感じられない。
もともと鼻はいい方ではないが、様子から察するにレンドにも感じ
られないらしく、ということは別に智宏の嗅覚が特別鈍いという訳
ではないらしい。

「あの、ハクレンさん？ その匂いってどこからするですか？ 俺
には正直よくわからないんですけど？」

「ここから少し歩けば君たちでも感じられるだろう。どうする？
行くかね？」

なぜかハクレンはこちらに判断を迫ってくる。いや迫られている
のは智宏ではなくレンドの方だった。

「……行きましょう。来るときはそんな匂いはしなかったんでしょ
う？なら俺たちがここを通過してから戻るまでの間に何かあったって
ことだ。調べた方がいい」

確かに妥当な意見だ。危険が少ないと予測されるとは言え異常
事態であることは確かなわけで、それを放置するのはやはり危険だ
ろう。

「とはいえ、いきなりにおいの大元に近づくのも迂闊でしょう。こちらにはこの世界三日目のトモヒロもいますしね。まずはそれがなんの匂いなのか確かめましょう」

「うむ、では慎重に進もう。私もこの臭いの正体に心あたりがある。その確認と原因の究明はどの道しなくてはならんしな。トモヒロ君もいいかね？」

「え？ あ、はい」

我ながら情けない返事だと思いながら、智宏は反射的に同意した。

「確かにこれは酷い匂いだな」

森の中をしばし歩き、それによって鼻のなかに侵入したそのにおいは確かににおいと呼ぶには強烈なものだった。

さらに進めばもはやこれはにおうなどというレベルではない。

来る途中でハクレンは、智宏たちに先行してここに来たとき「危うく気絶しかけた」と言っていたが、確かにこれだけ強烈なおいならそれもうなずける。

（まあそれでも気絶しそうっていうのはさすがに大げさな気がするが……）

「しっかし、くさいなあ！ この辺火山でもあるのか？」

「たぶん違つと思うよレンド。この臭いは硫黄じゃないでしょ。前に温泉に行ったとき硫黄のにおいを嗅いだけどこれとは違つ気がする」

「へえ、トモヒロには硫黄の臭いを嗅ぐくせがあるのか。それはまた変わった趣味だな」

「今の会話でどうして硫黄の臭いを嗅ぐのが趣味のステージにまで至るんだよ。昨日から思ってたけどお前頭おかしいぞ？」

「天才と言ってくれ！一を聞いて十を知る天才と！」

「ハクレンさんは何か心当たりありますか？」

「聞けよ俺の言葉」

智宏とハクレンは視線で無視して話を進めようと意思を交わした。またも智宏がこちらの世界のことわざを使っていたがもう気にしないことにした。今は臭いの正体を探る方が先決だ。

「やはり、ドレンナの実か……」

「え？」

「いや、このあたりにはない植物の実でドレンナの実というのがあるのだよ。普段は強烈なおいにてらられてしまうから、確認するより先に退散してしまうのだが……。こんな強烈な臭いはドレンナしかない」

「それってどんな実なんですか？」

「食べることはできるが好みは別れるといったとけるかな。この強烈な臭いは外側の皮から発生しているのに対して、中身の方は甘くておいしいのでね。臭いを我慢してでも食べる価値があるという者もいれば、臭いに耐えられず見るのもイヤだという者もある。私はどちらかといえば後者だな」

それを聞いて智宏は、ドリアンのような植物をイメージした。ひよっとすると異世界故に名前が違うだけで本当にドリアンなのかもしれない。

「ついでに言うと、この臭いは我慢できる生き物はいるが好む生き物はいない。だから、皮なども汁を絞ってエキスを造ると生き物が寄って来なくなるのだ。そのため結構重宝されるのだが、肝心のエキスを絞る人間がいなくて毎回揉めるのだよ。最近だとイタズラをした子供にやらせる形で躰に使っていたのが、子供がイヤがってみんないい子になってしまって、なり手がいなくて困っている」

確かに酷い臭いだからそれは仕方ないとも言える。智宏自身このおいと長時間お付き合いくらいなら自分だっていい子になるだろうと思った。

「そんなことより俺は群生地のことかについて聞きたいんですが…。来的时候はこんなきつい臭いありませんでしたよね？ ってことはこの臭いの元はさっきここを通ってから今までの間に来たってことでしょうか？」

「ああ、そうか。木の実が勝手に歩いてくるわけないから何かが運んできたことになるな」

問題なのはその運んだ者が何かということだ。もしも危険な生物に運ばれてきたのならすぐにこの場を離れるべきだろう。そういう意味で一番安心なのは横を流れる大きな川に流されて来たパターンだ。だがその希望をハクレンは首を横に振って否定する。

「群生地はこの河の下流から少しはずれたところにある。だから河に流された可能性はないな」

「となると生物ですかね。ハクレンさん。木の実を移動させる生き物に心当たりありますか？ やばい生き物が来てるかもなら俺逃げたいんですけど……」

「あまりいいないな。そもそも我慢できる生き物でも積極的に運ぼうなどという生き物はいない。臭いに構わず食らいつくタイプの魔獣ならいるが、奴らも好き好んでこの臭いと付き合おうとはせん」

「……いや、いますよ。運ぶ生き物」

智宏の発言に二人が振り向く。その視線に思わずたじろぐが、智宏の中にはある種の確信があった。

それは、

「人間です」

それは確かに人間だった。

ただし、ハクレンたちとの間で行った予想とはかなり違っていた。

予想として拳がったのはドレンナの実を何かに使おうと持ってきた村人か、他の村からの客人、もしくは他の村の遭難者というものだった。

だが、

「え？」

そこにいたのは遭難者だった。

ただし、この世界の人間にはない黒い髪。

鱗模様のない肌。

長くもない耳。

見たことのない奇妙な服。

そして日本人に似た容姿を持つ少女。

ただの遭難者ではない。第三の異世界人、異世界からの遭難者がそこにいた。

4：出会い

「足に少し怪我をしているようだが、これは森の中をはだしで歩いたからだろう。怪我自体はたいしたものではないな。過度の疲労で眠ってるだけと見ていいだろう」

それが発見から数分のうち、遭難者の少女を診察したハクレンの結論だった。

「そいつは良かった。……っというか、俺はこの臭いにあてられてぶっ倒れたのかと思っただよ」

そう言いながら右手の指で鼻をつまむレンド。視線の先にあるのはこの恐るべき臭いの元凶、ドレンナの実の特に臭いの強い皮の部分だ。冗談ではなく、本当にまともに嗅ぐと気絶しそうな臭いだっただ。その袋をこの少女は、よりもよって身につけていたということだから、レンドの心配のしかたもあながちバカにできない。

「それにしてもその娘ってさ……」

「ん？ ……ああ、智宏も気付いた？」

二人揃って少女に注目する。智宏達が見てとったそれは、少女を見た瞬間に気付いた、智宏とレンドにとって重要な意味を持つ明確な特徴だった。

「すっごい美少女だなー!!」

「注目するところはそのじゃねええええええええ!!」

訂正。

思った以上に二人の認識は深刻に食い違っていた。

確かに少女はかなり整った容姿をしている。体格も華奢で、肌も透けるように白く、腰に届くくらい黒髪もよく似合っている。美少女と言って納得する要素が揃っていると言ってもいい。

だが生憎と今智宏達が注目すべきなのはそこではない。少女の肌にこの世界の人間特有の鱗模様が無いことだ。それはつまり、

「まあ、間違いなく俺らと同じ異世界人だよ」

(やっぱりか……)

真面目な口調に切り替わったレンドの言葉に、智宏も頷いた。

「肌の色はともかく、鱗は無いし、僕らと同じ異世界人って線に揺るぎはないな」

「とは言え、君たちと違って耳が長いということはないようだが？」

「世界つてのが一つや二つじゃないってのはもう分かり切ってることですからね。俺らの知らない世界の住人なのかも知れない」

「それにこの娘、僕の世界の、というか僕の国の人間にそっくりです。もしかすると僕と同じ世界の人間かも……」

「ん？ ……ああ、そういえばトモヒロ君の世界の人間は本来耳が長くないのだったか。 ……ふむ、見たところ歳も近いようだな」

「ええ。見た感じ僕と同じか少し下ってところでしょうか……」

もつともその判断は見た目、もつと言えは体格や顔立ちだけで判断したものだ。その二つは特に学年一つ違っただけで劇的に変わるし、日常的に見ていると雰囲気の違いも分かる。

「智宏って今何歳よ？」

「十六歳。誕生日はまだ五か月……、って言っても通じないのか、えーと百五十日ほど先だけどね」

昨日のうちに暦の数え方が違うのが分かっていたので日にちで伝える。この三日間で獲得した、異世界人と会話するときのコツだった。

「ってことはこの子は十五歳くらいかな？ いいねえ。若い娘」

「黙れレンド。っていつか顔立ちと体格で判断しただけだから何とも言えないけどな。学校の制服でも着てればもう少しわかりやすいんだけど……」

「なんで制服？ 好きなの？」

「違う。制服の着方で学年を判別する方法ってのを教えてもらったことがあるんだよ。よく観察してみると制服って、学年を経るごとに着方が変わってくるからな。気慣れてくると着崩したりするし……」

たとえば、男子なら学ランのボタン外したり、女子ならスカート丈短くしたりと言った形で。学年を経るごとにその装いは微妙に変化する。他にも、入学したてなら制服って大きめに作ることが多いし、

傷んでるなら長く着てるかどうかも分かる。

「長いこと学校通つてると同じ服の人間がうじゃうじゃいるからそういう差も分かりやすいんだ。僕が元の世界で通つてた学校は小中高一貫校だったから観察できる世代の幅も広がったし」

「ああ、なるほど」

「まあ、そういうのも体格なんかと同じで個人差があるから確かなことは言えないけど、少なくとも目安にはなる。それ以上に制服見ればどの学校の生徒かも分かるしね。もしこの娘が僕と同じ世界の住人なら、制服で判断できるかもしれない」

もつとも智宏は他校の制服の知識などほとんどなかったので、これに関しては大分怪しいのだが。

「なるほどねえ。んでさ、服の話が出たからついでに聞くけどこの娘の服ってなんだかわかる？」

「……いや、わからん。と言つか見たこともない」

明確な疑問を抱きながら今度は少女の服装に注目する。

それは服に深い関心を持つてこなかった智宏が「見たこともないと断言できるほど奇妙なものだった。」

最初に見た印象では、少々見慣れないが、半袖のチャイナドレスかとも思った。服の脚の部分の側面にスリットが入ったあれである。少女の服は裾が足下まであり、そこから腿のあたりまでスリットが入っていて非常に目のやり場に困るものだったからだ。

だが、一番妙だと感じたのは少女の服が余りにもシンプルなことだった。

智宏の頭に思い浮かぶ女性用の衣服のイメージはおしゃれな物がほとんどだ。それ以外の物が全く無いとは思っていないが、少女の着ている服はくすんだ白一色、それだけならまだしも、飾りと言うには違和感のある黒いベルトがあちこちに付いている。腰の後ろあたりには袋状の物が付いており、その中にドレンナの皮が入れられ、口がベルトで縛ってあった。だが、そんな収納スペースを作っておきながらポケットのようなものは一つも見あたらない。

（ってああ、そうか。何が一番おかしいのかやつと分かった。この服、何のための服なのかがさっぱり分からないんだ）

服という物も目的をもって作られる。それはおしゃれを目的にした物だったり、動きやすさを目的にした物だったり、物のしまいやすさ目的とした物だったりと色々だが、そういった目的を持って作るという点ではドレスも作業着も変わらない。

にもかかわらず、この少女の着ている服はそういった目的がさっぱり見えないのだ。おしゃれを目的にしているにしては色合いが地味だし、動きやすさを目的にしているにしては裾がじゃまだ。物のしまいやすさに関しては腰の袋があるが、だからと言ってそれだけでしまえる量などたかが知れてるし、数も少なく、取り出しやすくない。

「金をかけないことを目的にしてるにしては妙なベルトが多すぎるし……。っていつかこのベルトなんだ？」

「俺に聞くなよトモヒロ。俺の世界にはこんな服ないんだから。…でもほんと、こんなベルトなんの役に立つんだ？ いや、それ以前に、この娘ホントにトモヒロの世界の娘なのか？」

「僕も自信なくなってきた。この服もしかして僕らの世界とはさら

に違う別世界の服なのかな？」

「よし！ 脱がして確かめようがっ！」

言い切る前にレンドの顔面に裏拳を叩き込んで、今度はハクレンに話を聞くことにする。後ろでレンドが「ウギャー」などと叫びながらごろごろ転がっているが、元気そうなので無視することにした。

「ハクレンさんは何か気になります？ 他に持ち物とかは？」

「持ち物は腰の袋のドレンナの皮しか見当たらなかった。他に気になることと言えば」

「ようしボディチェックだグッ！」

今度はハクレンが視線も向けずにレンドに蹴りを叩き込んだ。レンドを見ると、今度は地面にうずくまってピクピクと痙攣している。声を出す余裕もないらしい。ハクレンの突っ込みに容赦はなかった。しばしの間レンドの復活を待つ。

「く、う……、トモヒロ、ハクレンさん」

「なんだレンド？ またくだらないボケじゃないだろうな？」

「ふむ、それならどうだろうトモヒロ君、今度は二人一緒に一撃」

「怖いわ！ なんて話しかけただけで暴力を受ける流れなんだよ！」

「いや、だって……ねえ？」

「日頃の行いというやつではないかね？」

「くっそおおおっ！！」

「んで？　なんだレンド？　用件は手短に済ませろ」

「そうだぞレンド君。それともこれが異世界におけるつつこみ待ちというやつかね？　ならば　」

そう言っつて拳を構えるハクレンをレンドはあわてて止める。それはもう必死の形相だった。智宏としても話が進まないの、いい加減止めに入ることにする。

「んで？　何の話だレンド？」

「ああ、そうだった。いやな、ここで考えててもしょうがないから、この娘担いでいったん村に帰らないか？　俺一応この子のこと村にいる仲間に連絡しといたから。迎えは来ると思っけど、こんな場所に長居するのも危ないだろ？」

言われてみれば確かにそうだ。そもそも今抱いているような疑問はあとで少女本人に聞けばいいことなのだ。

「ん？　仲間？　村人じゃなくてか？」

「ん？　……ああ。あっそうかトモヒロにはまだ言っつてなかったな。村にはおれ以外にも俺と同じ世界出身の仲間が三人いるんだよ」

「……はい？」

「いやね、この世界にいる異世界人ってここにいる俺たちの他にもさらに三人いるのよ。具体的には俺らのリーダーやってる爺さんと、職人の真似事してるおつちゃんと、軍人のハゲたおつさんが」

「ちょっと待てええええええ！！！」

最後の人だけひどい言われようだったのは今は捨て置くことにする。今一番重要なのは智宏が二人目の異世界人ではなく五人目だったということになることだ。そしてそれ以前の問題として、

「な、ん、で、もつと早く言わなかったんだあ！？ そんな人がいるならレンドみたいにちやらんぽらんな奴じゃなくて別の人と行動したのに。お前のおかげで時間を無駄にしたぞ」

「おまつ、そこまで言うか？ この頼りがいのある年上のお兄さんの何がそんなに不満なんだよ？」

「昨日の朝不安でいっぱいお前のお前の朝寝坊のせいで何時間も放置されたときなんか本気でぶん殴ってやるうかと思っただが？ あの時点で他の人の存在を知っていればすぐにでもその人たちに教えを請うたのに……」

「……ちっ！ まだ根に持ってたのかよ。しっこい男は嫌われるぞ」

「ついでに私も言わせてもらおうなら、仕事を任せるとも隙あらばサボろうとするのもやめてもらいたいな。その点で言うと君がハゲたおつさん呼ばわりしたブライン君は実にその辺がしっかりしている」

「えっ？ そつちからもこの批判来るの？ 何で俺への不満暴露する流れになってんの？ なにこれ？ 袋叩き？」

レンドが自分の立場を嘆いているのをしり目に、智宏は、他の異世界人についての情報を記憶していくことにした。一人はブラインというハゲたおっさんで軍人らしい。ハゲたおっさんという情報はあまりにも失礼な気がしたが、わかりやすいのでそのまま覚える。記憶能力が悪い智宏にとって、わかりやすい特徴があるというのは非常に助かることだった。

「ふーんだ。あのハゲはただの堅物だよ。そもそも俺がトモヒロについたのは俺の方が適任だってなったからだし」

「どの辺が適任なんだよ。純粹に聞いてみたいぞ」

「リーダーの爺さんは村の偉い人との交渉なんかで忙しかったし、職人のおっちゃんは何かこの世界に自分の作った品を広めるんだって閉じこもったまんま出てこないし。残るは俺とブラインの野郎だけだってなって、無口無愛想堅物のあの野郎にトモヒロ任せたら尋問みたいだっていうんで俺に決まったの」

「消去法じゃねえか！ っていうか、それってただ単に暇そうだったのが二人しかいなかったって話なんじゃないの！？」

「そ、そ、そ、そんなこと有る訳ないじゃん。俺働いてるよ？ 役にたってるよ？」

「それについて言うならブライン君は村の戦士たちが狩に行くとき一緒に参加したりしているから暇なのはレンド君だけなのだがね。ブライン君は自分の世界にいたとき戦うことを生業にしていたらし

いからね」

いよいよレンドが何もしてなかった説が有力になってきた。

「その憐れむような視線やめてくれる？　なんかいやな感じに心がざわざわするから。はっ！　まさかこれが恋！？」

「そういえばさっき軍人だって言っていましたね」

「そうらしいな。この世界にはない概念なので良くわからんのだがね。そもそも私には戦わない男がいるということ自体が信じられん」

「無視はやめてええええ！！」

背後で叫ぶレンドをなおも無視する。だが、それは別にレンドがうっとうしかったからだけではなかった。ハクレンの口走った言葉が智宏にとってそれだけ衝撃だったのだ。

戦わない男がいることが信じられない。ハクレンの反応は大げさでも何でもなく、ここはそういう世界らしいことを物語っていた。

「まあいい。とにかく今はレキ八に帰ろう。このままここにいても時間と安全の無駄だ」

「そうです……、え？」

同意しようとした智宏の思考に、遅れて驚愕が飛来する。驚いたのはただ一点。今ハクレンが口にしたただ一つの単語だ。

「ハ、ハクレンさん？　今歴葉っていいいました？」

「む？ レ（・）キ（・）ハ（・）村がどうかしたのかね？ ああ、この森もレキハだから混乱したのかね？」

レ（・）キ（・）ハ（・）村。智宏の住んでいた歴葉市れきはしと同じ響きを持つその名前が、智宏達が世話になっている村の名前なのだ。そしてそれはこの森にも当てはまるらしい。

おかしな話だが、智宏は今までこの世界で滞在している村の名前を一度も聞いていなかった。今まではそれどころでなかったというのもあるが、それによってこんな手がかりらしきものを見逃していたのかと思うと後悔に襲われる。

（どういうことだ？ ただの偶然、じゃあないよな。まさか、同じ名前の土地同士で？）

智宏がこの世界にどういう理由で来ることになったのかは未だにわからない。だが、なぜここだったのかと言う仮説なら立てられるかもしれない。

「おい、智宏。考え（・）て（・）い（・）る（・）こ（・）と（・）は（・）大体分か（・）る（・）け（・）ど（・）今は後にしな
いか？ いい加減村に帰ろう」

「え？ あ、ああ」

レンドの言葉の意味を理解しながらも、智宏はその言葉に従う。考えてみればいつ野獣に教わるかもしれない森で長話や考え事など正気の沙汰ではない。考え事なら村でもできる。

「では帰るとしよう。トモヒロ君、その娘を担いでくれるかね」

「う、……まあ、僕しかないよな……」

二人の顔を見て智宏は渋々納得する。正直意識のない少女を背負うというのは男として若干照れくさいものがあったが、流石にこんな森で最大戦力であるハクレンの両手をふさぐわけにもいかない。レンドは別の意味で論外だ。目の前の少女に危険が及ぶ。

しきりに担ぎたがるレンドを手伝いにだけ使い、ぐったりとした少女を背負う。予想どおり、そのあまりの軽さと、確かな体温に若干どぎまぎしたが、すぐにドレンナの鼻につく猛烈な臭いで気分が悪くなり、うんざりするはめになった。

(……なんだろう。男として女の子を背負うというシチュエーションになったらもっとドキドキするものだと思うってたんだけどなあ……)

まさか一刻も早く解放されたい事柄になるとは思いもしなかった。

あるいはもっと別のシチュエーションなら年相応の異性と触れ合うことへのドキドキする感覚を味わえたのかもしれないが、ドレンナの臭いはそういった気分を味わうには圧倒的に邪魔だった。智宏は内心がっかりしたような安心したような微妙な気分に襲われながら歩きだす。少女を背負った智宏を真ん中に前にハクレン、後ろにレンドの順番だ。

「ところでハクレンさん？ 腰の袋のドレンナの皮捨てませんか？ そうすれば少しは臭いがましになるかかも知れませんか……」

「ふむ、……それはできればしたくないな。さっきも言ったがドレンナの皮からエキスを絞ると絶好の獣除けになるんだ。このにおいてはほとんどの生き物が嫌がるからね。この娘が無事にいるのもおそらくドレンナの実のにおいで獣が逃げたからだと思うくらい

だ。においも体中からするみたいだし、意図的に体中においをつけたんだろう」

「ってことは、この臭いがあると猛獣は寄ってこないんですか？」

「大抵はね。ただ、なかにはこのにおいにもお構いなしに襲ってくるようなやつもいるにはいるから安心はできないけどね。特に人型の魔獣なんかはその典型」

と、言いかけたそのとき、ハクレンの醸し出す空気が唐突に変わった。

そして直後、いきなり血相変えてこちらに向かってくるハクレンに押しのけられて地面に転がるはめになる。訳が分からないままで少女を庇えたのは、自身を褒めてやりたい行動だったが、そんな感情は次の瞬間には跡形もなく消え去った。

「ギュゲユツ！！」

トモヒロの背後で奇妙な声が響く。驚いて振り返ると槍で貫かれて奇声を上げたそれ（・・・）がそこにいた。

鱗だらけの体、鋭い爪、ぞろりと口の中に並んだ禍々しい牙、そして二メートル近い長身を人間のように二本足で支える。巨大な獣。

彼らが『魔獣』と呼ぶ存在が立ったまま絶命していた。

5：遭遇

「なっ!？」

すぐにはそれが何を意味するかわからなかった。しかしながらその場所と距離がどんなものを把握したことによってやく理解する。魔獣が絶命している場所は先ほど自分の立っていた場所の真横、距離にして二メートルもない。そんな場所に立つそれは鋭い爪の光る左腕を振りかぶった形で絶命していたのだ。

(……もし、もしもハクレンさんが反応してなかったら、僕はどうなっていた……?)

そんな恐ろしい想像に震えあがる。もしあのままその腕が振り下ろされていたら、智宏かもしくは背中に担いだ少女、あるいはその両方がこの魔獣の餌食になっていたであろう。

だが智宏にはそんな想像に凍りつく、その暇さえなかった。

「走れエ！ トモヒロオツ！ 村まで走れエ！」

いきなりレンドに腕をつかまれ引つ張られる。一瞬少女を落としそうになり、それを立て直しながらレンドに引きずられるように走る。智宏にしてみれば意味が分からない。なにしろ魔獣は今ハクレンによって殺されたはずだ。

だがすぐにそんな智宏の認識が甘かったことを思い知らされた。後ろを走っていたハクレンが追いつくと同時にその直前に通った場所に重いものが着地するような音がいくつもしたのだ。

「振り返るなトモヒロ君！ 奴らは常に三・四匹のグループで狩り

を行う！ その上人間を目の敵にしているからこの臭いでもかまわず、いや、臭いを目印に襲ってくるぞお！！」

「ハクレンさん、後ろから二匹！ トモヒロはそのまま走れ！」

言うなりいきなり二人の気配が遠ざかる。否、遠ざかっているのは智宏の方だった。二人は立ち止って後ろから来る二匹を迎え撃つつもりらしい。

思考がマヒしてまともに働かず、今は言われた通り逃げることにする。それと同時に猛烈な後ろめたさが心を苛む。まるでこの世界での恩人とも言える二人を見捨てて逃げているようなそんな感覚。罪悪感、嫌悪感、無力感、そして何に対するか分からない恐怖。

だがそんなものは次の瞬間吹き飛んだ。

自分のすぐ後ろに魔獣が降ってきたことによつて。

「うおおおおあああああつ！！」

背後の気配に振り返って見えた魔獣は先ほどの魔獣よりさらに一回り大きかった。鋭い爪のはえた右手を振りかぶって木の上から飛び降りてくる。狙いは智宏、ではなくその背にいる少女だ。

「くそおおおつ！！」

体を無理やり倒すようにし、さらに足に力を込める。どっちの足に込めているかなど自分でも判断できない。とにかく前に体を投げ出すために全力を傾ける。

それが功を奏した。体は背中少女ごと前に投げ出され、魔獣の右手は空振りして空を掻いたのだ。

だがその後が良くなかった。全力で後先考えず動いたため、空中でバランスを崩し、二人まとめて前に投げ出される。否、少女の方は

智宏からさらに投げ出される形でより遠くに飛ばされ、智宏は背中から地面に転がった。

(ヤバいまずい危険だピンチだ……!!)

混乱しながらも倒れた状態からはね起きて、魔獣に向きなおる。そうしてみても初めて、智宏は魔獣とやらの正体を目の当たりにした。その魔獣の正体は二足歩行する爬虫類だった。先ほど真つ先に目に入ってきた長い爪と牙、そして全身に鱗だらけの皮膚を持った。二足歩行の獣。ファンタジーに出てくるリザードマンと似ていると言えは似ているが、それと比べると目の前の魔獣は実にリアルで、いかに自分の想像力が貧弱かを見せつけられているような気分になる。

全体的に大柄な印象だが、特に腕が異様に大きく、人間よりも印象としてはゴリラに近い。この世界の人間の肌には鱗模様があることを考えると、もしかしたらこの魔獣は智宏の世界における類人猿の類なのかもしれない。先ほど上から降ってきたのも恐らく木の上を移動して飛び降りてきたのだろう。

類人猿だとすれば、否、もし類人猿でなくともこの手の生物なら高い知能を持っているとみて間違いない。考えてみれば一緒にいた四人のうち、少女を除けば一番小柄で、さらに人一人背負っている智宏を、この一番大きい魔獣が狙ってきている。それはつまり、

(畏だ……! さっきの三匹は陽動だ!!)

智宏の中でその確信が強まっていく。今自分にはだれも味方がいない。ハクレンとレンドは先に襲いかかってきた二体の相手をしている。今ここにいるのは智宏と眠ったままの少女だけだ。

(そしてたぶん目の前のこいつは獲物をしとめる役だ……!! こい

つらは僕たちを　　！)

目の前の魔獣が智宏に向って身を倒す。前のめりの突撃姿勢。そして振りかぶられたその腕には鋭い爪と確かな殺意が宿っていた。

(　　僕たちを獲物にするつもりだあああ！！)

瞬間、魔獣の足が地面を蹴り、その巨体が恐ろしい速度で迫ってきた。

「うあああああああああ！！」

智宏の体を絶望が支配する。体格も身体能力も相手の方が上、加えて知能も高い生物と、喧嘩もろくにすることが無い高校生ではどちらが強いかなど明白だ。すでに魔獣の爪は智宏に防げるものではない。

だがそのまま智宏の命を奪うはずだった腕は振り下ろされなかった。代わりにジャラジャラという音とともに振り上げられた腕に鎖が巻きつき、その動きを阻害する。

「……………え？」

「……………無、事、か、ト、モ、ヒ、ロオオオオ！　すぐに、離れるお！！」

見れば、魔獣の背後には右手に魔方陣を展開し、そこから伸びる鎖で魔獣の腕を拘束しているレンドの姿があった。魔獣の力が強いせいか左手でも鎖を掴んで綱引きのような体制をとっている。

「ぬ、ぐ、おおおおお！！」

うめき声と同時にレンドは自分の右肘部分にもう一つ魔方陣を展開する。右手の魔方陣と同じ鎖の術式。新たに展開されたその魔術は先に展開されていた鎖の魔術を助けるべく、魔獣の腕に絡みつく。だが智宏は、すぐにその行為の危険性に気が付いた。

「だめだレンド!! そいつは !!」

その先を言う暇はなかった。なぜなら言う前にレンドの体が鎖ごと投げ飛ばされてしまったからだ。

「な、にいいいいっ!!」

そのままレンドは智宏の背後に投げ飛ばされる。レンドは途中で鎖を消し、地面に叩きつけられる際に受け身をとっていたが、それでも地面に叩きつけられた勢いは絶大だ。到底すぐに起き上げはしないだろう。

(怪力……。ゴリラなんか目じゃないくらいの怪力!!)

目の前の生き物は体型的にはゴリラのそれに近い。元より類人猿は腕の力が強いので有名だ。人間より小柄なチンパンジーでさえ人間の二倍以上の腕力を持っている。そしてその類人猿に近い形態をした生き物で、体格は智宏の知るゴリラよりも巨大な目の前の魔獣が、人間と綱引きなどしても負けるわけが無いのだ。

レンドに向いていた注意を魔獣に向け直す。いつの間にかかなりあとずさっていたのか、距離こそさつきより大分空いていたが、構図としては先ほどと同じ状況だ。レンドとてあれではすぐには動けないだろう。

(逃げてもだめだ。足は向こうのほうが早い。それに何とか逃げ切れたとしても……)

背後には少女とレンドがいる。たとえ智宏が逃げ切れても二人は逃げきれない。そして今二人を守れるのは自分だけだ。

「……ハア、ハア、ハア……」

その答えにたどり着いたとき、智宏はほとんど自動的に短剣を引き抜いていた。それは他の二人を見捨てて逃げることへの忌避感からくるほとんど反射的な行動だった。ほとんどパニックになっていたと言ってもいい。

緊張で乱れる呼吸を一時的に止め、何も考えずに全力で突進する。狙いは魔獣の左胸。先ほどハクレンが貫いていた、心臓のあるであろう位置だ。

「ウオアアアアアッ!!」

魔獣の左胸に向かって全力で走る。足場はデコボコしてお世辞にもいいとは言えない。もしも躓こうものならその瞬間アウトだ。転べばその瞬間魔獣に首を差し出すことになる。それを意識しながらも、ひたすら魔獣の心臓を意識して走る。

だが、見ればすでに魔獣は腕を振り上げていた。あれを振り下ろせばこちらの命など簡単に奪えるだろうとようやく気付く。だが今から止まることはできない。すでに魔獣はこちらを殺せる距離にいる。

(あ、死んだ……)

既に手遅れだった。何を後悔していいのかもわからない。こんな無茶な特攻をかけたことか？ 先ほどレンドが隙を作ったときそこ

を突かなかったことか？ 少女やレンドを見捨ててでも逃げようとしなかつたことか？ この森に入る時に覚悟を決めておかなかったことか？

それとも、混乱に任せて考えることをやめたことか？

周りや自分の動きがやけにゆっくりに見える。自分に向けて振り下ろされる腕を見る。こんなもの殴られただけで凶器だ。首の骨が折れてしまっただろう。ましてや爪がついているのだ。間違いなく必殺に違いない。

そう思った瞬間だった。

べしゃっ、と言う音とともに魔獣の顔面に何かが張り付いた。それが何なのかを理解する前に振り下ろされた腕は、しかし智宏の頭を砕くことはせず、さりとて首を斬り裂くこともなく、目測を誤って左にそれ、智宏の肩の肉を斬り裂き、智宏を転倒させただけで終わった。

「いいいいっ！！」

痛みで再び麻痺しかけていた思考が回復する。見れば魔獣も顔を抑えてもだえ苦しんでいた。

見れば魔獣の足元にはドレンナの皮が落ちていた。

(……もしかして、これを鼻先にまともに食らったのか？)

さすがの魔獣もこの臭いを至近距離で嗅げば一溜まりもなかったらしい。腕で顔面を抑え、その巨体を苦しみに振り回している。

(……いったい誰が？)

振り返るとそこには起き上がり、両手にドレンナの皮を握りしめた少女がいた。まだ顔には疲労の色が浮かび、座り込むような姿勢ではあるが、その眼には確かな力が宿っている。

「早く!!」

初めて聞く少女の声にようやく気付く。まだ危機は去っていないことに。そしてまだ自分の手には短剣が握られていることに。

「っあああああ!!」

肩の痛みも恐怖も無視して突撃する。短剣に全体重を込め、臭いに苦しむ魔獣の左胸に突っ込んだ。

腕がしびれるような衝撃と、全身に二度の衝撃。合計で三つの衝撃とともに気づけば智宏は地面に転がっていた。おそらく魔獣に弾き飛ばされたのだろう。頭がクラクラして満足に動くことができない。

(っ！ 魔獣は？ 殺せたのか?)

見れば魔獣はまだそこにいた。顔を右手で抑え、胸から短剣を生やして、それでもまだ立っている。確かに刺したはずの短剣はしかし、硬い鱗に阻まれたのか、骨に阻まれたのか、はたまた力が足りずに深く刺さらなかったのか魔獣の命を奪うには至っていないかった。その証拠として魔獣の眼は今も爛々と生命力に満ちた光を放っている。

「っ……ああ……」

ただし、そこにある感情は先ほどと違った。先ほどまで魔獣が放っ

てたのが獲物に対する殺気だとすれば、今放っているのは怒りから来る殺気だ。自分に対して刃を突き立てたものを決して許さないという怒りからくるより冷たい殺意。

「あ、あ……」

もはや声さえ満足に出せない。恐怖で思考が全くできない。それは生物の本能に訴えかける「食べられる」ということへの根源的な恐怖だ。

何よりも生物が忌避し、それゆえ避けようとする捕食の恐怖。

「うあああああああ!!」

目の前にいる者への恐怖で思わず絶叫する。振りかぶられた爪が物語る智宏の末路はあまりにも情けないもののように思えた。

だが、それでも魔獣の爪は智宏に届くことはなかった。

「レンド！ そいつを引き離せ!!」

いきなり耳に飛び込んできた声とともに、智宏の体が後ろにもものすごい速さで引つ張られたからだ。

反射的に後ろを見るとレンドが先ほどの鎖の魔術を発動させている。どうやら鎖を智宏の体に巻きつけた上で、その鎖を魔方陣の中に回収する形で引つ張っているらしい。なるほどそういう使い方をする術式なのかと漠然とした思考能力で考えていると、今度は魔獣のいた方向で猛烈な光とバチバチという大きな音がした。

振り向き見れば魔獣を電撃が貫いている。それは文字通り貫いていた。本来の電気なら起こるとは思えない物理的な破壊、魔獣の体を串刺しにして背後の木に縫い付け、帯びた電気で焼き尽くしていくという、刺突と感電による殺害を同時に行うという、おそらくは

魔術。

「なっ……、ええ？」

あまりにも一方的な最後に、智宏は驚愕する。その魔術はあれほど恐ろしく、三度も智宏に死を覚悟させていた魔獣を一瞬で絶命させると周りに僅かな焦げ跡を残して消滅した。

「……いきなり【サンダーランス雷槍】って……。ずいぶん派手なの使っただなブ
ライン」

いきなり隣で発せられた声に、智宏は一気に現実に戻される。隣を見るとそこには智宏を引っ張って受け止めたらしいレンドの姿があり、背後には恐らく自分と同じように目の前の光景に驚愕しているのだろう少女の姿もあった。

「無駄話はいい。ハクレン殿はどうしたんだ、レンド？ あの御仁のことだ、まさか死んではいまい？」

そう言いながら目の前に現れたのは長い耳を持つ黒人で、表情が顔をしかめているように見えるのは元からののか、何か原因が他に
あるのかは分からなかったが、がっしりとした体をこの世界の物らしい鎧で包み、背筋を伸ばしてきりきりと歩いてくる。

「ああ、ハクレンさんなら向こうで残った一匹と交戦中だ。俺と協力してもう一匹いたのを片付けたら、残りは一人でも大丈夫だって言っ
て一人で残った。多分死んでないよ。もしかしたら最後の一匹片付けてるかも」

「っ！ それを早く言え！」

そうしてブラインと呼ばれた男は背後にいたこの世界の人間らしい二十代半ばほどの若者二人に何かを話すと、その二人はハクレンのいる方角に走って行ってしまった。そうして残ったブラインが智宏達の方に歩いてくる。

そこで智宏が目の中のブラインという男性が、先ほどの話に出てきた人物の名前なのだと初めて気が付いた。その姿は確かに聞いていたイメージとあっている。何より真っ先に目についたのは黒い肌でありながら確かな輝きを放つその頭。

「おいレンド、貴様異世界の少年に何を吹き込んだ？ この少年真っ先に私の頭に注目したのだから？」

「あつ、すいませ」

「ハツハツハ、そりや仕方無い。黒光りする良い頭だからな！！真っ先に目につく！」

「喧嘩を売っているのか貴様？ いいだろう我が電撃を食らってなおそんなセリフがはけるか試してやろう」

「っちょよ！！なんで【強放雷】^{×ガボルト}なんて術式展開してんだよ！！こいつがどうなってもいいのか！？」

「ちょっと待てレンドオ！！なんで僕を人質に使用としてるんだよ！！勝手に挑発したんだから勝手にやられるよ！！」

「何を言っただトモヒロ君。たった今僕たちは生死の境をともにさまよい戦友^{戦友}となっただばかりじゃないか！死ぬときも一緒だ覚悟しろ」

「それが戦友トモに言うセリフかあ！！ やだよ！！ お前ろくな死に方しなさそうなんだもん。付き合いきれないよ！」

「まあなんて酷い子なの！！ いいもんいいもん！ 戦友はもう一人いるもの！！……ってそうだもう一人遭難者いるんだった」

今更のように思い出し、レンドに合わせて二人も少女の方に向き直る。見れば少女は完全に引いていた。

否、それは引いているのではなかった。彼女は明らかにこちらを警戒していた。その内心を示すように、全員の視線が集まっていることに気付いた少女は、

「っ！！」

「危ない！！」

次の瞬間、いきなり少女が立ち上がり、しかしよろけて後ろに倒れそうになった。慌てて倒れる少女の手をつかみ、引き寄せて体を支える。

「いきなり立ちあがっちゃ危ない。だいぶ疲れてるみたいだし、怪我もしてるんだから」

「……え、あ、うん」

智宏の言葉に少女も小さく反応する。どうやら意識はすっかりしているようだ。若干困惑はしているようだ、それ自体は考えてみれば当然のことだろう。

「……あなたは、その、私の味方なの？」

「……え？」

突然の質問に智宏は困惑する。なぜそんな質問をするのかがよく分からない。確かに味方というなら確かに味方だろうが、彼女が予想どおり異世界人ならどちらかといえば同類とか、仲間とか言った方が正確だろう。

トモヒロが困惑しながらも少女にそう答えようとすると、少女は答える前に「わかった」と言ってお答えを遮ってしまった。

(まだ答えてないんだけどな?)

答えてほしかったわけではないのだろうか？ では何のために質問したのか？ そんな疑問が浮かんだが今は考えないことにした。考えてみれば状況が状況だ。そんな質問の一つもしたくはなるだろう。

「ってそうだ。名前言ってなかった。僕は吉田智宏」

「……私はミシオ。……ハマシマミシオ。……よろしく？」

智宏の自己紹介に少女もただどしく答える。その口調はどこかぎこちなく、智宏は何となく少女、ミシオが会話に慣れていないような印象を受けた。

「えー……。失礼お嬢さん。私は」

「あ、ブライン。所属と階級とか言っても警戒されるだけって分か

ってるよね?」

「ぐっ、あー……、ブライン・バーツと申すもので……」

「奥さんに愛想尽かされかけてるハゲた四十代のおっさんだ」

「貴様ぶっ殺すぞ!?!」

「つてのが口癖で顔も口も悪いので気をつけた方がいい。そんなことより俺の自己紹介をしよう。俺はレンブランド・リード、通称レンド。よろしく!」

脇で雄叫びを上げるブラインを放置して、レンドは手を差し出す。智宏個人としてはレンドの本名を始めて聞いたことによる驚きもあったのだが、とりあえず今は少女の反応を見ることにした。

その少女はと言えば差し出された手を真剣な顔で見つめていたが、少しすると意を決したように握手に応じた。どうやら彼女は握手と言う文化がある世界の住人ではあるらしい。だが、

「っ!?!」

手が触れたとたんいきなり少女はレンドの手を振り払ってしまった。その顔には再び警戒の色が浮かび、その警戒はすでに先ほどまでより強くなっている。

「……おいレンド。正直に答えろ。今何をした?」

「つてトモヒロ? 何で俺そんなに疑われてるの? 何もしてないのは見ててわかったでしょ?」

「いや、貴様のことだ。我々の目を盗んで少女にセクハラを行った可能性は否定できん」

「いや、否定しろよ！ 出来ねえよそんな超人的なセクハラ！！
っていうかいくら俺だって時と場合は弁えるよ！」

「えっ！？ 弁えられるの？」

「弁えられるよ！ って、あーもういいや。とりあえず細かいことは村に帰ってからにしよう。またこの臭いに惹かれてまたやばい生き物が寄って来てもたまらない」

「それに二人の手当てもせねばならんようだしな」

二人の会話が村に帰ると言う判断を下したことで、それについて行くべく、座り込んだままのミシオに手を差し伸べた。怪我の様子は相変わらずだが、肩を貸すくらいはできる。

だが少女は差し出された手を強く引き寄せると、智宏の体に抱きつくような体制をとる。

「なっ！！」

あまりの近さに一瞬ドキリとして、顔を背けると、少女は耳元にさらに顔を近づけて耳打ちした。

「あのレンドって人……、何か、隠してる」

「……え？」

突然の言葉に智宏は呆然とする。頭の中に空白が生まれ、智宏は

その言葉が持つ意味をすぐには理解できなかった。それどころか彼女がどうしてそんなことを言ったのかもわからなかった。

(レンドが……?)

だが、先ほど彼女がレンドに対して見せた警戒が、その隠しているということに起因しているのは理解できた。

智宏の中で動揺が心臓を震源として全身を揺るがしていく。智宏には意味も根拠も意図すらも分からない今の言葉が、自分の世界を揺るがす言葉のように感じられた。

6：疑念

「まさかその匂いをさせたまままで居るつもりじゃないだろうね？」

村に帰ってすぐにかげられたのは、当然と言えば当然なそんな言葉だった。

考えてみれば、智宏達はドレンナの実という恐ろしくくさい果実の皮と行動を共にしていたのである。智宏達にしてみれば鼻が既に麻痺し始めていたことと、危機的状况に追い込まれて失念していたが、そのにおいは確実に智宏達に染み付いており、特に直接持っていたミシオ自身と彼女を背負ってきた智宏は全身からは致命的に酷いにおいがした。どうやらブラインと最初に会ったとき顔をしかめているように見えたのは気のせいではなかったらしい。

その結果として、智宏、レンド、ハクレン、ミシオの四人は全員体を洗うよう命じられることとなった。

幸いなことにこの世界にも入浴の習慣はあり、それを男女で分ける習慣も存在した。結果としてミシオはハクレンの妻であるリンファに村の奥の洞窟の中にある女性用の浴場に連れて行かれ、そこでおいを落とすこととなった。

聞くところによると洞窟の中には神殿などの村の公共施設が集中しているらしく、その一つに女性用の浴場があるらしい。よその村から来たその村の代表者を泊めるためのスペースもあるらしく、一部は大使館のような役割も果たしているのかもしれない。

さて、ここまではいい。ここで問題となるのは女性ではなく男性である。具体的に言えば場所だ。女性用の浴場が洞窟の中なら男性用はどこなのかということだ。

答えは村の中心の水場の周り。衆人監視のド真ん中だった。

智宏と同じく臭いが染み付いたハクレンが、恥ずかしげもなく裸になって、水場に貯められた水を汲み、手拭いを濡らして体を拭き始

めたのを見て、智宏はまたもカルチャーショックを受けることになった。恐ろしいことにこの世界では男の羞恥心など鼻で笑われるらしい。

もちろん智宏にこんな真似ができるわけがなく、同じようにこの習慣になじめていないレンドと共にハクレン宅に水を運び込み、そこで体を洗うことにする。

「いててて……」

魔獣につけられた傷に注意して、濡らした手拭いで体を拭く。傷自体はハクレンが応急処置をしてくれたが、本格的な治療はこの後と言うことらしい。包帯のようなものを巻かれ、その場所を濡らさないようにとだけ言われた。智宏個人としては早く治療してもらいたかったのだが、この世界ではこの程度の傷はまだ浅いと判断されるらしく、臭いを落とすことの方を優先された。

（医学的にそれでいいんだろうか……？ 後で手遅れってというのは勘弁だぞ……）

異世界の医学に不安を覚え、できるだけ早く済ませようと考えながらふと後ろを見ると、そこには自分と同じように体を洗うレンドの姿があった。彼の方は軽い打撲くらいで大きな怪我はないらしい。

『あのレンドって人……、何か、隠してる』

先ほどミシオに言われたことを思い出す。隠しているとはどういう意味か？

もちろん智宏だってレンドに自分のすべてを話したわけではない。彼と話したことは自分の世界と自分の簡単なプロフィールくらいで、話していないことのほうが多いくらいだ。

だが話していない)・・・)ということと、隠している)・・・)ということでは話が変わってくる。それはつまり言うべきことを意図的に言わないようにしているということになるのだ。

(でも、一体何を隠しているって言うんだ？ お互いこんな状態で隠すようなことってあるのか？ そもそもお互い違う世界の間人だっというのに……。だめだ。判断材料が少なすぎる)

それにそもそも隠し事が重要なことだとは限らないのだ。実際はレンドがミシオに対して抱いた下心を隠して、それを見破られたというオチが待っている可能性もある。

そもそもあの少女がなにをもってレンドが隠し事をしていると判断したのかも謎だ。その判断材料が分からない状態で一方的にレンドを疑うのも得策とは言えないだろう。

(でも……)

再び背後のレンドを見る。レンドは自分と同じく体に染みついた臭いと格闘している。

(……こいつは自分の世界で何をしていたんだ?)

考えてみれば、智宏はレンドの世界のことについては聞いたことがあるが、レンドのプロフィールについては聞いたことが無い。その程度で疑うのも馬鹿らしいと言えば馬鹿らしいが、それでも謎であることには違いない。

試しに今判明しているレンドについての情報を頭の中でまとめてみる。レンブランド・リード、通称レンド。性格は割といいかげん。寝坊グセあり。年上なのは間違いないが、敬語を使うことをためらうタイプ。現在この世界にいる6人の異世界人の一人。何番目にこ

の世界に來たのかは分からないが、この世界における異世界人の先輩。魔術の世界の人。魔術で使っているのを見たことがあるのは、基礎魔術という彼の世界では常識に近い【方位磁針】コンパスともう一つ。

「ってそう言えばさ、レンド。お前あの魔獣に使ってた鎖の魔術はなんだ？ 見たとこ戦闘用っぽいけど、お前の世界って戦闘用魔術って違法じゃなかったっけ？」

「んん？ 何だよ突然？」

「いや、単純に疑問で……」

「あれは戦闘用魔術じゃないよ。【蛇式縛鎖】チェインロックって言う生活魔術さ」

「生活魔術？ あれが？」

「ああ。高等教育で習ったりする魔術で、難易度はお前に教えた【方位磁針】コンパスより大分高いがな」

そう言うつとレンドは手元にドーナツ状のデザインの魔方陣を浮かべ、件の【蛇式縛鎖】チェインロックを発動させる。魔方陣から半透明の鎖が地面に垂れ下がり、次の瞬間には蛇のようにグネグネと動き出した。見れば、レンドが中心の穴の部分に次々と曲線を描いている。その曲線が消えると同時に鎖が曲線と同じ形をとるところを見ると、中心に描く線によって鎖を操作しているらしい。

「手元の魔方陣である程度操作できるんだ。魔力を魔方陣の特定箇所に流し込むことでこんなふうに動かせるし、軽い人間くらいなら持ち上げられる。あの魔獣は力が強すぎたけどな。んでもって、」

見ると鎖が急激に魔方陣の中に吸い込まれていく。智宏は何となく家にあつたメジャーを思い出した。魔法陣はすべての鎖を吸い込むと霞のように霧散していく。こちらは先ほどの【方位磁針】^{コンパス}のときも見せてくれた、イメージによる魔術の終了手順だった。

「こんな感じに巻き取ることも可能だ。一般的家庭でも使われてる便利魔術だよ。もちろん人間の捕縛にも使えなくもないが、そういう目的に使うならもうちょっとパワーのあるバージョンがあるから、そっちを使うのが普通だな」

「……すごいな。すごい便利そうだ！ 頼む。この次はその魔術を教えてください」

あまりのすごさに当初の目的を忘れて飛びついた。生活魔術とはいえ智宏の理想に近い魔術である。物騒でない割にかなり便利なのだ。

「へ？ まあ、魔術は術式と操作法を覚えれば理論なしでも使えるから何から教えてもかまわないけど。でも、魔術のまの字も知らない人間にはこの術式を覚えるのは大変だと思うぞ？」

そう言いながら「ほれ」っといって魔方陣を智宏に見せてきた。確かにそこには、ンパンマンもどきとは比べ物にならないほどの複雑な魔方陣が広がっていた。ドーナツの輪の部分にビッシリと見たこともない文字が刻まれている。確かにこれは難しいかもしれない。

「まあ、今日みたいなことがあると教えといたほうがいいかもとは思っけどな。せっかく魔術が使えるんだ。身を守るのに役立ちそうな魔術もいくつか教えておいてもいいぜ」

「そうしてくれると助かる。……正直何かないと不安です」

たとえ戦闘用の魔術でなくても役に立つのなら覚えておく価値はあるだろうという考えだ。あのような危機的状況にいつ出くわすかわからないという恐怖が既に染み付いているのを自覚するが、存在する危険を自覚していないよりはいいだろう。

「まあ、後いざという時にできることといえば神祈ることくらいだからな。『神様、私にこの危機を乗り越える力をください』ってなかんじで」

「そう言うときって『神様私をお救いください』じゃないのか？」

奇妙な祈り方にふと疑問を覚える。それでは神に祈る意味が無いような気がした。それでもレンドはそれが普通だとも言うように首をふった。

「それだと他力本願で自分じゃ何にもしなくなるだろ？ 『乗り越える力をください』なら自分が頑張らなきゃいけない分生きる努力ができるんだよ」

「そんなもんかね……？」

よくわからない感覚だが理屈は通っているようなので納得しておくことにした。異世界の価値観が自分の物と同じなはずが無いことはある程度体験済みだ。まして神様という単語から考えると宗教的思想かもしれない。それを否定する勇氣は智宏にはなかった。

「まあ、今度やばい状況に陥ったら願ってみるよ。それより早く体洗っちまおうぜ。お前に関しては傷の手当てもしなくちゃいけない

んだしさ」

「あ、ああ」

返事をして体を洗い始め、すぐに自分の中にあつた疑いが薄れて
いるのを自覚する。

（やっぱり何かの間違いじゃないか？）

そう思ってしまうほど、そこにいたのは今までと何も変わらないレ
ンドの姿だった。

7：世界拡大（前書き）

申し訳ありません。

一度アップした後、次話に使おうと思っていたシーンがあまりにも短いことに気づき、後からその部分も追加してしまいました。

7：世界拡大

「いだだだだだっ！ 痛い痛い痛い痛い！」

「騒ぐなトモヒロ君。君はそれでも男か」

そう言いながらハクレンが肩の傷口に薬を塗り付ける。その薬が傷口に染みて智宏は再び悲鳴をあげた。

体を洗い、なんとかドレンナの臭いを落とした智宏達は、同じく臭いを落としたハクレンの治療を受けていた。

とはいえ、智宏達がハクレンの家に着く頃には既にミシオの治療は終わって隣にベットに横たわって眠っており、ハクレンは驚くべきことに無傷。レンドも打ち身程度の怪我だったので、事実上智宏の治療がメインだった。

そうしてようやく傷口を洗い、薬を塗るところまで行ったところで、智宏は恐ろしい事実気付く。

智宏の傷は深刻なものでこそ無い、だが智宏が今まで負った傷の中では深い方であり、智宏の見立てでは縫う必要があるような規模であった。

（さて、ここで問題です。この世界には果たして麻酔があるのでしようか？）

薬を塗るまでで既にヘトヘトに成っていた智宏は頭をよぎった疑問に身を震わせる。早い話が麻酔なしで傷口を縫われるのではないかという不安だ。

「さて、さっさと終わらせようか」

「ち、ちょっと待って下さいハクレンさん！　せめて、せめて心の準備を！！」

「そんなものいらんよ。ほら」

そう言っただけで肩の傷口を手で覆う。すると、暖かい感覚と共に痛みが急に薄れていった。

「え？」

行われているのは文字通りの手当で。しかしながら、ただ手をあてているだけではないらしい。

（これは……、魔力？）

ハクレンの手からは確かに魔力が感じられた。否、手だけではない。傷の周りからもハクレンの魔力と同じものを感じる。どうやらハクレンが自分の魔力を流し込んでいるらしい。

（魔力ってこんな使い方もできるのか。……あれ？　でもこの世界に魔術は無いって聞いたような？）

そんなことを考えていると治療が終わってからどこかに消えていたレンドが、部屋に戻って来た。片手になにやらたたまれた服のようなものを抱えている。

「hey、トモヒロ着替え持ってきたぜ！　……ってまだ治療中か」

「……ああ、それでいなかったのか。サンキュー。そこに置いといて」

返事をしてからふと思いついて先ほどの疑問をレンドにぶつけてみることにした。理由はミシオの言葉の存在だ。

先ほどのミシオの言葉を聞いた上で智宏が出した結論は、結局のところ「保留」だった。そもそも判断材料が少なすぎて結論など出せなかったのだ。

それゆえの「保留」だ。だがいつかなんらかの答えは出さなくてはならない。

(そのためにはコイツのこととかもつと知つといたほうがいいだろう。それにあの娘に疑惑の根拠も聞かなきゃいけないな)

疑惑が間違いであると考えerことは簡単だ。だが一応の確認くらいはするべきだろう。できることなら解消しておくのも重要だ。これから共に元の世界への帰還方法を考えなければならぬ人間同士で、不信感を持ったままと言うのはあまりいただけない。

そしてそのためにはあれこれと質問して嘘が混じっていないかを考えるほうが手っ取り早いのだ。もしもレンドが何か隠したり嘘をついたりしていればどこかに違和感が現れるはずだ。

「おいレンド、聞きたいことがあるんだが」

智宏が声をかけると、レンドは「なんだよ？」と言いながら手近な椅子に腰をおろした。その態度にもやはり怪しいものは感じない。

「ハクレンさんの使ってるこの治療はなんだ？ 魔力を使ってるみたいだけどこの世界に魔術は無いんじゃないかなかったのか？」

「ん？ 何で俺に聞くんだよ？ ハクレンさんに聞きゃあいいだろ？」

「いや、魔力の話ならお前かなと……」

「私としてはどちらでもいいと思うが、魔力云々が分かっているレンド君の方が適任ではないかね？」

都合のいいことにハクレンもそう言ってくれる。実際は治療で手いっぱいなのかもしれない。

「まあ、ハクレンさんがそう言うならそれでいいか。んじゃ説明すると、それは『気功術』と言って、『気』を使って肉体の治癒能力を強化する技術だ」

「気？ 魔力じゃなくてか？」

「まあ、結論から言うと簡単な話で、俺らが『魔力』って呼んでるもんがこの世界では『気』って呼ばれてるんだよ」

「ってことは同じものなのか？」

「まったく同じってわけじゃないけどな」

言われてみれば魔術を使ったときの魔力の感覚と、今肩に注がれている感覚は微妙に違うように思える。と、そこまで考えて智宏は一つの可能性に気が付いた。

「もしかして『魔力』と『気』が同じものってことはレンドや僕にも気功術ってのは使えるのか？」

智宏としてはかなり期待を込めて聞いたのだが、残念ながらレン

ドは首を振った。

「生憎と俺たちには気功術は使えないんだ。正確には気功術と同じように魔力を操作することはできるんだけど、同じ効果は得られないってところかな」

「……………どういうことだ？」

「料理をする時の材料の違いみたいなものでも思えばいいのかな。俺達オズ人の使う魔術ってのは、自然界に存在する気体、液体、物体、熱、光、影みたいなそれらが生み出す自然現象を魔力から作り出す技術なんだ。さっきの【方位磁針^{コンパス}】も魔力で作った鉄に、魔力で作った電気を帯びさせて磁力を発生させて作る」

「それに対して我々の使う気功術というのは主に四種類の気を肉体に流して、肉体の機能を強化する技術だ。筋肉に作用し腕力や瞬発力を上げる『筋』、骨や歯、爪や鱗に作用して硬度を上げる『爪』、感覚を強化する『感』、自然治癒能力を高める『血』の四種類だ。今私が治療に使っているのは『血』だね」

治療しながらハクレンが説明を加える。気功術のことならこの世界の人間のほうが専門であるので自分が説明した方がいいと考えたのだろう。

「ちなみにこの世界の武器は『爪』で強化するためにほとんど生き物の骨や歯で出来てる。鎧も同じように鱗だな。他にも『筋』で肉体を強化して戦ったり、森に入る時に『感』で感覚を強化したりする」

「へえ……………、ってそうか、ハクレンさんがドレンナの臭いで気

絶しそうになっただって

「あのときはちょうど鼻を強化していたのでね。臭いのおかげで強化をやめざるを得なかったが、そうしたら今度は魔獣に襲われるはめになった。ついていないとしか言いようが無いよ」

「……あれ？ でも今僕は『血』の魔力……気を感じてますが、他の『筋』や『感』は使っていても感じませんでしたよ？ 『筋』は場合が場合だったんで気づかなかったのかもしれませんが、『感』は目の前で実際に使ってたんですよね？」

森での警戒に使うなら行き返りの道中は気功術を使っていたことになる。しかしながら智宏はハクレンから魔力の感覚はまるで感じなかった。その疑問をぶつけると、今度はハクレンではなくレンドが質問に答えた。

「それは肉体の中で行われていることだからな。肉体の外で行われる魔力の行使は結構感じやすいんだが、中での行使はかなり鋭い感覚の持ち主じゃないと感じられないんだ」

「私たちなら気を感じるための感覚そのものを『感』で強化することもできるからそうでもないのだがね」

「でも気功術が使えない俺たちはそれができない。っと、話も戻つたし、肝心の俺らが気功術を使えない理由に移るけど、肉体に魔力を流すことは俺らにもできるんだ。ただ

「その流した魔力が肉体を強化する力を持っていないってことか？」

智宏が自分のなかで思いついた答えを口にすると、レンドは一瞬

驚き、すぐに笑みを浮かべて「そう言うこと」とつぶやいた。どうやら正解だったらしい。

「ついでに言っ飛ばしまえばエデン人にも基本的に魔術は使えない。こつちの理由は簡単だ。この世界の住人には魔法陣を展開するための【マーキングスキル】が無い」

「ああ、なるほど」

魔術というのは【マーキングスキル】で描いた魔方陣が魔力に形を与えることで発動する。肝心の魔法陣が展開できなければ使用はできないのは当たり前のことだった。

「これは要するに人間が体内で変換している魔力の属性に関係しているんだ。生き物つてのは常に空気中に存在している魔力を吸収しているんだけど、そのまま使ってるんじゃないくて、体内で魔力の性質を使いやすい性質に変換しているんだ」

「それが、エデンの人間とオズの人間では違うってことか？」

「そう。エデン人は肉体系の属性、俺たちが【気属性】なんて呼べるものに、俺たちはさっき言った【六属性】、その元となる【元属性】にそれぞれ変換している。どちらも大元にある属性を必要な属性に変換して使ってるんだけど、大元が違うから俺たちの魔力を体に流しても気属性の魔力と同じ効果は出ない。まあ、気功術も人によって得意不得意みたいな偏りはあるから、だれもが【感筋爪血】の四属性全部が使えるわけじゃないんだけどね」

「なるほど……」

「でも、逆に言えば属性の問題さえ解決すればお互いの技術を使えるんだ。現に、エデン人がすでに展開している魔法陣に魔力を注ぎ込むことで、魔術を発動させることには成功している。魔法陣の中には魔力を必要な属性に変換する機能が付いているからね」

「へえ……。ってことはさ。ひょっとして魔術で気功術の真似事ができる可能性もあるの？」

「まあ、できるようになるかもしれないね。実際【六属性】しか知られてなかった頃と違って、それ以外の属性もいろいろ発見されるし。それらと同じようにその属性に変換する方法が見つければ魔法陣を介した身体強化もできるかも」

「それ以外の属性ってのは？」

「そつちはいろいろあるな。一般的なものと、転移魔術に使われる【空間属性】なんかが有名だが……。どれも変換に大量の術式が必要でな。使おうと思ったなら生身では展開できない大きさの魔法陣を張らなきゃならん」

「そんなのが一般的なのか？」

「人間に展開できない大きさの魔法陣を展開する技術があるんだよ。【儀式魔術】って言ってな。特殊な溶液に魔力を込めて地面に大きな魔法陣を描くんだ。後はそれに魔力を流し込めば魔術が発動するって寸法だ」

「よく考えられてるなあ」

「同じ理屈で、簡単な術式を持ち運べるサイズに加工して、魔力を

流すだけでその魔術を使えるようにする【魔石】って言う製品もある。実は村にそれが作れるダインって人が来ててな。今村のなかで作って人気を呼んでいるよ」

「それがさつき言ってた四人のうちの一人か」

聞きながら智宏はダインという人物の情報を記憶しておく。魔石を作ることができると言うのがどうも特殊技能のようであることを考えると、ダインは職人か何かなのかもしれない。

「まあ、そんな感じで、魔力ってのはかなりの可能性を持つ存在なんだよ。【万能概念】って呼ばれてるくらいだからね」

「【万能概念】？」

「昔は【万能物質】じゃないかって言われてたんだけどね。炎が物質ではないと判ったあたりからそう言われ始めたのさ。魔力とは物質だけではなく、現象まで内包する概念なのではないか、ってね」

「へえ……」

確かに炎というものは物質ではないというのは智宏自身聞いたことがあった。炎、もしくは火というのは燃焼現象の一部で、燃焼現象というのは簡単に言えば熱を伴う化学反応だ。そして熱自体も分子の高速振動という現象である。

智宏が感心しているとハクレンが手当の終了を告げてきた。言われてみれば、傷口は完全にふさがり、痛みも消えている。若干の違和感はあるが、ほとんど全快といってもいいだろう。

「気功術で治療したからもう動かしても痛みはないと思うが、どう

かね？」

「すげー……！」

「ではこれでおしまいだ。先ほどのミシオさんも足の治療は終わってるから、目を覚ましたらいろいろ話してやるといい」

そう言うとハクレン道具箱を持って家から出て行った。他にも何か用があるのかもしれない。智宏はそれをお礼の言葉で見送る。本当にハクレンにはいくら感謝してもきれない。

「んじゃ、俺も用事あるから出かけてくるよ」

「ん、お前も？」

ハクレンを見送ったあと、レンドも席を立った。脱いだ智宏の服を回収し、籠のようなものに放り込むと、それを持って扉に向かう。

「ああそうだ。ミシオちゃんが起きたら適当に話し相手になってやってくれる？ 何か知らんけど智宏には気を許してるみたいだし、ついでにいろいろ教えてやっというて」

そう言いながら扉をあけ、出る前にニヤリと笑って「変なことすんなよ？」ととんでもない捨てゼリフを言い残して出て行った。

「……あの野郎」

レンドの持ってきたこの世界の服を着ながら、智宏はそつと横を覗きこむ。そこには先ほどからずっとミシオが眠っている。森の中を彷徨っていたのだ。さすがに疲れていたのだろう。

と思っただらいきなり目を覚まし、勢い良く起き上がった。

「うおわぁー！」

驚いて声を上げる智宏をよそに、ミシオは自分の足に触れてしばし呆然とする。

どうやら足の怪我が完治していることに驚いているらしい。

「……け、怪我はさっきハクレンさんが治していったよ」

とりあえず言われた通り説明しようと考え話し掛けると、ミシオもこちらに意識を向けて小さく頷いた。

「……うん。……えっと、気功、術、だけ？」

「え？あ、うん。……あれ？」

「あつ、……さっきまで、寝てなかったから。起きてただけけど、その、寝たふりを……」

「ああ、なるほど」

どうやら先ほどまでの完成度の高い狸寝入りだったらしい。

疑問も解決したので、このままこの異世界云々の事情を話してしまふことにする。何も分からないまま放置されるのがどれほど不安を掻きたてるのかは身を持って体験済みだ。できるなら目の前の少女のそれは早めに解消してやりたい。

「えっと、ハマシマさん？」

「？ ……なんで名字？」

「へ？」

「なんでトモヒロは私のこと、名字で呼ぶの？」

「なんでって……」

「普通は名字で呼ばないか」と言おうとしてふと思い直す。考えてみれば智宏もレンドのことを名前、というよりあだ名で呼んでいるし、レンドも智宏のことを名前で呼んでいる。それどころかあの馴れ馴れしい男はミシオのことも「ミシオちゃん」などと呼んでいるし、ブラインのことも呼び捨てだった。

「でも……、普通は名字で呼ばない？」

「え？ 普通は名前で呼ぶと思うけど……」

「……そうかな？」

「そう、じゃない？」

（あれ？ 何このカルチャーギャップ？ それともこの娘の通っている学校ではそうなのか？）

とりあえず智宏は、同じ国に住んでいても習慣の違いくらいあるだろうと納得しておく。「さん」をつけるかどうかで少し悩んだが相手もこちらを呼び捨てにしていることだし、ここは変な遠慮はない方がいいだろうという判断だ。

「えつとそれじゃ……、ミシオ、でいいかな？ いろいろ説明したいことがあるんだけど」

「説明？」

「ああ。僕たちが置かれてる状況について」

「レンド、ここにいたのか」

レンドがドレンナの臭いの染みついた衣服を洗濯のために預け、これからのことについて考えていると、背後から声をかけられた。振り向いて相手を確かめるとそこには黒光りする禿げ頭が。

「……おい貴様、今何か失礼なことを考えなかったか？」

「エ？ ソンナコトナイヨ」

「嘘をつくな！ 今また真っ先に頭に注目しただろう！」

「しょうがないだろう。生物つてのは光り輝く者に引き寄せられるもんなんだよ。夜とかに火に集まってくる虫と一緒にさ」

「ならば虫のように焼け死ね」

とりあえずお決まりのやり取りを適当にかわす。このようなやり取りはこの世界に来てから日常茶飯事だ。人間どんな場所でもユ

モアを忘れてはいけない。

「それで？ 何ようだ？ 何か用があったから呼び止めたんだろう？」

「ああ。だが目を離していて良いのか？ お前はあの二人の担当だろっ？」

「それに関しちゃ問題ないよ。ミシオちゃんに関してはトモヒロに説明頼んできたから。どうもミシオちゃんには警戒されてるっぽいし、無理に付きまとして警戒を深めるよりもしばらく様子見た方がいいだろう」

「大方貴様の下心を見透かされたのではないか？ 貴様は女子に嫌がられるようなことを平気でするしな」

「自分だって奥さんに振られそうなくせに偉そうに言うなてえの」

「ぬ、それは職業柄家族にも話せない機密が多いからで……」

「今だって何も言えないままこの世界だしな。でも知り合いに似たような状況でも上手くやってるやつもいるぞ？ なんなら今度コツを聞いて来てやるっか？」

「ぬ、むう……、考えておこう。それより今は要件だ。危うく話が脱線するところだった」

そう言ってブラインは歩き出す。どうやらついて来いと言つことらしい。

「先ほど森に出ていたブハウ殿達が帰ってきてな。だがやはり言うべきか、人の痕跡は見つからなかった」

ブラインの言葉を、レンドは即座に理解する。それは智宏やミシオのような遭難者はいなかったという意味ではない。彼らが捜している者たちが見つからなかったという話だ。

「先ほどの娘、見たところ異世界人のようだったが……、どう思う？ 何か関係ありそうか？」

「まだわからないね。おんなじような遭難者って可能性もあるし、でも……」

「森の中に奴らがいるのは確か、だろう？ まあいい。明日から本格的な搜索だ。かなり出遅れてしまったが、なんとしても痕跡を見つけてやる」

「それならそっちは任せるよ。こっちはまあ、智宏達のことがあるから」

そう呟くレンドの目には、智宏達にはまだ見せたことのない強烈な意思が宿っていた。

ミシオへの説明が終わるころには既に大分日も傾いていた。

人にものを教えるというのには思いのほか難しいもので、智宏としては既に聞いた知識を適当に整理して話せばいいと思っていたのだ

が、その整理が難しかった。

とはいえ智宏が話そうと思っていた異世界云々の話だけならここまで苦労しなかっただろう。極端な話、「自分達は今異世界のレキ八村と言うところに来ていて、別の世界から来たというレンド達と元の世界に帰る手がかりを探している最中だ」と言えばそれで済んでしまうのである。

これは別に智宏が手抜きをしようと思っていたわけではなく、自身が異世界に来たという事実を飲み込むのに苦労した経験から来る気遣いである。本来なら、ミシオがこの事実を飲み込んだのち、自分の今まで得た知識を少しずつ教えていこうと思っていたのだ。

しかし、ここで誤算があった。ミシオが異世界に来た事実をあっさりと納得してしまったのだ。本人曰く森にいた時点で生態系が根本的に違う事に気がついていたので納得しやすかったとのことだが、それでも舌を巻くような適応能力だ。おかげで智宏はこの世界に来てから見聞きした知識や、レンドや自分の世界に関する話をほとんど絞り出されるように話してしまった。

そしてそのことが一つの勘違いを発覚させた。ミシオと智宏とも別の世界に住む人間だったのだ。

「つまり君の世界のレキ八は市じゃなくて町なのか？」

「……うん。私が住んでる村の近くに、確かにレキ八って言う地名はあるんだけど、そこは市じゃなくて、町だから。それに……、私が住んでたところは海沿いの村だったから、市って言うほど都会じゃない」

「別に歴葉市も都会って言う訳じゃないんだけど……」

むしろ田舎の側面の方が若干強い。一応都心と言えるだけの大きな町もあるにはあるが、どちらかと言うと農地や住宅地のほうが多

いいイメージがある。

「それに、電話が携帯できるって言う話も私の世界では聞かない。電話自体そう触れる機会があるものじゃないから。多分、そっちの世界のほうが、科学が発達しているのかも」

「なるほど……」

どうやら完全に別の世界の出身だったようだ。ただ、レンドの世界などと比べると智宏の世界に近いイメージのある世界らしい。聞いた感じだと科学レベルの差もせいぜい三十年程度だろう。服装に関してはさすがに文化が違うのかもしれないが、それでもこの世界やレンドの世界に比べれば理解しやすい世界だ。

「まあ、電話があんまり無いっていうのは不便そうではあるがな」

「……そう？ 私はあんまり困ったこと、あまりないけど……。あ、でも私の場合通念能力があるから……」

「……なに？」

さらりと、とんでもないことを口にされたような気がして、智宏は思わず怪訝な表情を浮かべてしまう。だが、流石に聞き流すには今の言葉は意味があり過ぎた。

「……今、通念能力って言ったか？」

「え？ あ、うん」

「テレバシー通念能力ってあのテレバシー通念能力？ 言葉を使わずに考えるだけで会話

ができるっていつ？」

「うん。私の場合【伝心】や【感覚投影】はともかく、【読心】は相手に触れていないとだめだけど……」

当たり前のことを説明するような雰囲気です。そう言うミシオの口ぶりに絶句しかけてふと気付く。ミシオの話から推測できる可能性がある。

「……もしかしてそっちの世界では通念能力者テレパシストみたいな超能力者が普通にいるのか？」

「え？ うん。通念能力者テレパシストに限らなければ、三十人に一人ぐらいは能力者だけど……」

「ひ、ひとクラスに一人いる計算かよ……!!」

智宏は今度こそ絶句する。ここ数日で智宏の中の常識は袋叩きにもあっているのではないかと思った。実際には異世界の常識が押し寄せているだけなので、智宏の世界の常識は全くの無傷なのだが、気分的には同じようなものだ。

「……って待てよ。もしかしてミシオがレンドのことを疑ってた理由って」

思い出すのは先ほど初めて会った時の様子だ。

ミウミが智宏にレンドが何かを隠していると告げる直前、ミシオはレンドと)……………(握手しているのだ)……………(。それはつまり、

「もしかしてレンドの心を読んだのか？」

案の定ミシオはバツの悪そう顔をしながらも小さくうなずいた。
ミシオは先ほど【読心】、つまりは心を読む行為はは相手に（・）
触れ（・）（て）（・）（い）（・）（な）（・）（い）（・）（と）（・）（だ）（・）（め）
（・）（だ）（・）（と）言った。それは裏を返せば触れ（・）（て）（・）（い）
（・）（れ）（・）（ば）（・）（相手の）（・）（心）（を）（・）（読）（め）（・）（る）（・）
ということだ。詰まる所、ミシオは読んだのだ。恐らく握手した時
にレンドの心を。

そしてそうなると話が変わってくる。実際に心を読んだ上でレ
ンドの隠し事を疑っているというのなら、それは強力な疑念の根拠だ。
「でも、一体あいつ何を隠しているって言うんだ？ 疑いを向けて
るってことはやばいことなのか？」

自分の体に緊張が走っていることを自覚しながら質問する。あま
り考えたくないことだが、事と次第によってはレンドへの対応も考
え直さねばならない。

「あの……そのことなんだけど……、実は何を隠しているのかまで
は分からないの」

「なに？」

それがどういふことなのか分からず混乱する。心を読んでも隠し
事の内容が分からないというのは大きな矛盾だ。だからと言って先
ほどのミシオが嘘をついていたとも思えない。

するとその混乱を収めるように頭の中で声が響いた。

『えっと、テレパシー通念能力で相手の声を感じるっていうのは、感覚として

はこんな感じ。でも相手の心の中が全部のぞける訳じゃなくて、強く考えてることとか、相手に伝えようとしてることじゃないと伝わらないの。だから何かを隠そうと意識していると、隠そうとしていた意識だけが伝わって、肝心の内容まではわからないの』

頭の中でする声が彼女の能力だと気がついて、智宏は改めて超能力の存在を実感した。別に疑っていたわけではないが、やはり話を聞いただけのときと実際に体験した後では真実味がまるで違う。言葉を介さないせいか、伝わってくる言葉もスムーズだった。

「……ってことはあれか？ 隠しているのはホントだけど、実際の内容はかなりしょぼいことだった可能性もあるってことか。」

「……うん。実はさっきのことは少し……、過剰反応だったかなって反省して……」

「まあ……、それは確かに。」

人間に来ていれば隠し事は必然的に発生してくるものだ。それは確かに相手をだますことを目的としたものもあるかもしれないが、極端な話、下世話な下心だって隠し事の一つだ。それにいちいち反応していたら身が持たない。

「少し安心したよ。正直テレパシーの話聞いたときはレンドが何か企んでるのかと思った」

「……なんていうか、レンドって……その、ずいぶん信用されてるんだね」

「ん？ そっか？」

「うん……。そうだよ」

言われてみれば確かに、考えてみれば確かにレンドの隠し事が悪意のないものだとは決まったわけではない。隠し事の内容はあくまで「不明」だ。

「でも、正直あいつから悪意みたいなものを感じたことはないんだよ……。隠し事にしても相手が女の子だったからって方が納得できるし」

「女の子、だったから？」

不思議そうな顔をする少女に、智宏は何となく後ろめたいような気分になった。なんだか自分が汚れてしまったような気分だ。

「まあ、多少探りを入れてみる必要はあるかもしれないけど、あんまり深刻になる必要はないと思うぞ？」

「うん……。そうだね。そう、だよね」

そう言ってミシオは心なし安心したような笑みを浮かべる。どうやらミシオは智宏のことは信頼しているらしい。

そして、それがなぜか考えてすぐに思い当たった。

(……ああ、そうか。こいつ僕の心も読んでたのか……)

思えばあの時、智宏もミシオに触れていたのだ。ミシオが智宏を信頼したのもその直後だ。ミシオが智宏の中の何に信頼の要素を見つけたのかは分からないし、本当なら勝手に心を読まれたことを怒

るべきかとも思ったが、不思議と怒りも湧いてこなかった。奇妙なことに、ミシオが自分の心を読んだことで安心感が得られたのならそれでいいという気分になっている。

「さてと、そろそろ村のみんなが夕食の支度をはじめてる頃かな。僕は手伝いに行くけどミシオはどうする？」

「私も……、行こうかな。長いこと森の中にいたからお腹すいたし……」

「僕もだ。この世界、朝は食べない上に、なんだかんだで昼飯食いそこなっただけだから。支度手伝って早いところ食事でありつこう」

そう言ってどちらともなく立ち上がる。なんだか久しぶりに食事を楽しみに出来た気がした。

「……あ、そうだ。そう言えばさっきのことで、その、聞こうと思っただけがもう一つあったんだけど……、聞いていい？」

「ん？ なに？」

「さっきレンドさんが言ってた『変なこと』って何？」

その質問はあまりにも純粹で、それゆえ智宏を二度目の窮地に追い込んだ。

レキ八村における夕食の時間は智宏の世界の一般的な夕食の時間よりはるかに速い。とは言っても正確に何時と言えるわけではない。もともと智宏は時計を持っておらず、智宏がこの世界に来たときに一緒に持ってきていた携帯電話の時計は、この世界に来てから明らかにずれた時間を指すようになってしまったため正確な時間が分からないのだ。もっとも携帯電話の時間のズレは時差のようなものである可能性もあるためそこから計算するという手段もあるのだが、そんなことをするよりも太陽の位置から大体の時間を計算した方がわかりやすい。

現在の時間はすでに七時を過ぎているだろう。空はようやく日が沈み、すでに星が見え始めている。星明かりと村の中心にあるたき火のおかげで完全な暗闇とまでは言わないが、現代日本の街灯などもちろんないこの世界は夜になるとかなり暗くなる。そのためこの世界では日が落ちてからはあまり活動せず、食事が終われば後はわずかな人員を残してほとんど寝静まってしまい、夜明けとともに起床するという生活習慣が普通だ。

この世界の夕食の特徴として挙げられるのが村全体から成る食卓形態だ。村の中心の広場で女衆が各種食材の調理を行い、それを決められた順番で人々に配っていく。配られた人々は思い思いの場所に集まり、その場で夕食をとるといふもので、周りを見渡せば二十代くらいの若者が数人集まって酒盛りをしていたり、十代前後の少年たちが剣を振り回す老人の話を何やら熱心に聞いていたりする。先ほど通りかかったときに聞いた限りでは、どうやら老人が子供たちに武勇伝を語っているらしい。思い返してみれば昨夜も別の男性が同じように何かを話していたので、毎晩行われる授業のようなものなのかもしれない。

そんな中で智宏が食事をともにするのは、やはりと言うべきかし

ンドとミシオの二人だった。

ミシオによる恐るべき追求をすつとぼけてかわし、夕食の支度を手伝う中でどこからか戻ってきたレンドと合流することに成功した智宏は、二人と共に広場の片隅に集まって渡された夕食を食べることにした。

夕食のメニューは何かの肉の串焼きと、見たことのない葉野菜、そしてクッキーに近い食べ物だった。どうやらこのクッキーがこの世界の主食にあたるものらしく、聞くところによると木の実や植物を粉状にしたものを混ぜて練って焼いたものらしい。箸という文化が無いので必然的に手で食べる形になるが、メニューは手で食べることに違和感を感じさせないものばかりだ。

「それにしても……。狭い村だとは思ってたけど、人数もやっぱりこれしかないのか？」

「ああ。総勢でも百名弱つてところだ」

レンドの答えに再び周りを見渡してみる。村は巨大な岩山、その中でもかなりの広さをもつ岩棚に作られている。すぐ真下に川が流れ、そこから汲んだ水を岩棚の中心の広場にある溜池に溜め、その周りにぐるりと民家が囲み、それにプラスして岩棚の岩壁にある洞窟の中に村の公共施設があるという単純なつくりだ。そしていまその村人のほぼ全員が広場に集まって夕食をとっている。

「この村は元々山の向こう側にある大きな村から分離してできた村だからな。今年で四十歳になるっていうおっさんが成人したころだつて言ってたから、できて二十五年つてところかな」

「ふうん……。あれ？ それだと計算がおかしくないか？ 二十五年だとその人まだ十五歳だろ？」

「ん？ …… ああそうか。智宏の世界とは成人年齢が違っただよ。この世界では十五歳で成人と認められるんだ」

「へえ……」

相槌を打ちながら智宏は出された肉に口をつける。薄味だがスパイスが効いたその肉は、何の肉なのかは分からないが、脂が少なくさっぱりと強いて言うなら鶏肉の味に近かった。

「それじゃあ、私たちも、この世界では成人になるの？」

「ミシオちゃんが十五歳ならそう言うことになるね」

「ちょうど十五歳。あ、もうすぐ誕生日だから、そうなれば、十六歳」

「おっ、トモヒロの予想ドンピシャじゃん」

「……予想？」

「森の中でミシオちゃんを見つけたときにこいつ、自分と同じか少し下くらいって予想したんだよ。トモヒロが今十六だから大正解じゃん」

「だからどうしたって感じだけだな。それより僕らが成人として扱われるってことはそれ相応の働きを求められてることになるんじゃないか？ 参考までに聞きたいんだけどこの世界の男の仕事って実際何なの？」

いやな予感を感じつつ智宏は質問する。実際智宏が思っている以外の答えが出てくれば御の字のといった質問だ。

「この世界の男の仕事って言ったらほとんどが狩猟とか、昼みみたいな森での採集。まあほとんど森の中での活動がメインだな」

「やっぱりですか……」

昼にあつた魔獣を思い出して智宏は身震いする。森に入るとなれば、事と次第によるとあれと何度も戦わなくてはならないということになるかもしれない。

「まあこの世界でも単純な腕力は男のほうが強からね。だからこの世界の男子は五歳から十二歳まで水汲みみたいな力仕事による体力作りや気功術、武術の基礎を学んで、十二歳から十四歳でそれらに年少者の教育や大人たちの見習いが加わる。それで、十五歳になると成人して本格的な狩りへの参加つてのが普通なんだ。まあ、この世界の男はその生活の大半を訓練と狩りとその準備に費やしていると思つていい」

「そんなのと同じように戦えるわけないじゃん！」

「ああ。だから俺もこの世界では雑用ばっかこなしてる。安心しろ。この村の連中は弱い奴を戦わせるほど鬼じゃないさ」

「それは良かった……、つて言つていいのかな？」

戦わなくてもいいと言われひとまず安心するものの、それでも手放しで喜んでいいものかは分からなかった。

話しに聞いた限りではこの世界の男はかなり腕っ節の強さを重視

されるようだ。そんな中で無力でいることが、はたして軋轢を生ま
ずにいられるだろうか。

レンドは自分のことを無力であるように語っているが、実際には
昼間、ハクレンのサポート程度はできている。そんな中でいつまで
も智宏一人が無力でいるわけにはいかないだろう。すぐに帰れるめ
どが立たない以上、この村での人間関係を軽視するわけにもいかな
い。

(同時に自分の世界に帰る方法も探さなくちゃいけないんだよなあ
……)

すでに異世界人も六人目になっているというのに、まだ異世界に
帰る方法はわかっていない。智宏としては自分が倒れていたという
場所に都合よく手がかりがあるのではないかと期待してもいたのだ
が、生憎と昼間の薬草取りのときは何も見つけれなかった。

(……でも、「世界を移動した」という結果がある以上、その「原
因」が何かあるはずなんだ。それが何かさえわかれば……)

主食らしきクッキー状の物体をかじりながら、元の世界に帰る方
法について思考する。だが結局予測の域を超えるものは出てこなか
った。この世界についての知識がまず少なすぎるのだ。

「おいトモヒロ？ さっきから黙りこくってどうした？ そのクッ
キー、それだけで食ってもあんまりうまいもんじゃないぞ」

「え？ ……ああ、言われてみれば」

考えながら食べていたので味など気にしていなかったが、気がつ
いてみると確かにおいしいものではない。何となく防災用の乾パン

を思い出す味だ。

そこでふとそれを指摘したレンドを見て気が付いた。考えてみれば自分よりもレンドや他の異世界人のほうが知識や情報は持っているのだ。より多くの情報を望むなら彼らに聞くのが手っ取り早い。

「なあ、レンド頼みがあるんだが」

「なんだよ改まって」

「この世界のことについてもっと知りたい。何でもいいから教えてくれないか？」

智宏の言葉にレンドは考え込むような素振りを見せながら手元の串に残った最後の肉を口に入れる。もぐもぐと口を動かしながら腕組みをしてさらに考え続け、口の中のものを飲み込むと同時に口を開いた。

「ミシオちゃんは大丈夫？ さっき聞いたら智宏がだいぶ説明してたみたいけど、ここからさらに聞く余裕ある？」

「うん。大丈夫」

「そうか。ならそのうち話そうと思ってたし、いろいろ話してみますか」

「よろしく頼むよ」

「話題は何でもいいのか？ 正直知りたいことを教えられるかどうかは分からないんだが……」

「ああ。何がヒントになるか分からないからな。この世界で生活する上で役立つ知識もあるだろうし」

そこでレンドは「そうか」と言うと再び考え込んだ。どうやら何かから話すか考えているらしい

「それじゃあまず大きなところから、この世界と俺の世界の関係性がら行くかな」

「……関係性？」

「ああ。前にも言ったが俺たちはこの世界をエデン、俺たちの世界をオズと呼んでる。そこで、俺たちはこの二つの世界はパラレルワールドの関係性にあるんじゃないかと考えているんだ」

「……パラレル並行、ワールド世界？」

「それってあれだよな？ 本来の歴史とは別の歴史をたどった世界ってやつだよな？」

「別の、歴史？」

「そう。要するにオズとエデンってのはさ、まったく別の世界なんじゃなくて、どこかで別の道をたどることになった同じ星なんじゃないかって考えてるんだ」

「えっと……、つまり、元は同じような世界だったってこと？」

「そう、そんな感じ。まあ、あくまで仮説なんだけどな」

そう言ってレンドは二本目の串に手を伸ばす。ミシオはといえば聞きなれない概念をどうにか理解したらしく、こちらを見て小さくうなずいた。

「でもさ、それって何を根拠に言ってるんだ？ 仮説って言ってもなにがしかの根拠はあるんだろう？」

「そりゃあな。……そうだな、話すついでに確認してもらおうか。俺たちの世界と二人の世界が同じようにパラレルワールドかは分からないし」

「確認？ 何をするんだ？」

「その前にまず根拠を見せちまうよ。それではお二人とも、上をご覧ください」

そう言ってレンドが肉の刺さった串の先端を上に向けるのに合わせ、二人揃って上を見る。そうしてから智宏はそこに広がっていた光景に思わず絶句してしまった。

そこに広がっていたのは見事な星空だった。日が沈んでからまだ間もないというのに見える星の数はかなり多い。おそらく智宏の世界と違い、地上の明かりが極端に少ないため、星の輝きがよく見えるのだろう。もっと遅い時間、それも空気の澄んだ冬ならどれだけの星空が見えるかは想像もつかない。

「すごいな……。この世界ではこんな早い時間からこんなに星が見えるのか」

普段星を見る習慣を持たない智宏でもさすがにここまで見えると感動を覚える。見ればミシオも同じような心境なのか、食い入るよ

うに星をみつめていた。

「でもレンド、これが根拠って言うのはどういう……、ってもしかして、

星座で（・）判断し（・）た（・）の（・）か（・）？」

頭に浮かんだ考えに智宏はもう一度星空を見渡す。もしも今見えている星座が別の世界でも見えるとしたら、それは世界が違って同じ星から見えているということだ。

なぜなら星座を見るのに使われる星というものはその一つ一つが同じ平面上、地球から同じ距離にあるという訳ではない。一つ一つの星と地球との距離がそれぞれ全く違うのだ。そのため、同じ星々を見るのでも、見る側の星の位置が違えば星座は全く違うものになってしまう、一つの絵を横から見るとように星座を見ることはできないということになる。もしも星座の一致を偶然の一致で済ますとすれば天文学的數字の天文学的數字乗という想像もつかない確率を無視しなければならぬ。

「星座が一致するってことは少なくとも星は同じってことだ。緯度や経度の違いは有るみたいだけど、少なくとも同じ星から見える星座であることは俺らのリーダーやってるゴードンって爺さんが保証してる。あの人、天体観測が趣味らしいからまず間違いないだろう」

「それじゃあさつき言ってた『確認』って言うのは……」

「そう。二人にこの星空を見て自分の世界の星空と一致するかどうかを確認してもらいたいのだ」

「……って言われてもなあ」

生憎と智宏に天体観測の趣味はない。当然どこにどんな星があるかなど知る由もないし、そもそも歴葉市では見える星にも限りがあった。時間が早いというのにすでに歴葉市で見られる星空をレキ八村の星空は軽く凌駕している。二つを比べることは智宏には不可能だ。

「だめだ。僕にはわからん……」

「そうかい、そりゃ残念。ミシオちゃんは？」

「えっと……、私の世界の星空とは、多分あっていると思う。星座や星の名前までは分からないけど……。普段星を見ることが多いから……」

「おっ！ サンキューミシオちゃん。これで世界が三つともパラレルワールドって確認できたぜ。トモヒロもこれからは星くらい見とけよ。人生どこでどんな知識が役に立つか分からないからな！」

「たぶん分からなかっただろうとお前に言われると腹が立つが、まあ、その通りだと肝に銘じておくよ」

そう言っつて悔し紛れに肉にかぶりつき、ふと気が付いた。

（あれ？ もしかしてレンドのやつ僕とミシオが違う世界の出身だっつてことを知らない？）

考えてみればミシオを発見したとき、智宏自身が見た目から同じ世界の出身かもしれないと言った。その後二人で話したときミシオの発言から二人がまるで別の世界の人間であることが発覚したわけだが、考えてみたらそのことをレンドに報告していない。今訂正す

べきかとも思ったが、その根拠の一つがミシオの超能力であることを考えると迂闊に話すのもためらわれた。心を読めるといふ事実を自分がすんなり受け入れたからと言って、他人がそうできると思うほど智宏も馬鹿ではない。

「さて、パラレルワールドの確認が済んだところでこの世界がどういった点で違う歴史をたどったかって話になるんだが、まあこれは君らの世界について詳しく知ってるわけじゃないんで完全に俺の世界基準で言わせてもらうけどいいかい？」

「ああ。構わないぞ」

「そう。それじゃ、簡単に言ってしまうえばこの世界は『恐竜が絶滅しなかった世界』だと思うんだ」

「恐………」

「………竜？」

恐竜。それは今から六、七千万年前まで地球上に栄えていた巨大な爬虫類だ。その絶滅理由には諸説あるが、隕石の衝突による環境の激変が原因とする説が一般的で有力だ。

さすがにミシオの世界での恐竜がどうかまでは分からないが、少なくともレンドの世界では既に絶滅しているらしい。

「加えて言うと、恐竜は絶滅はしてないけどその形は大きく変えている。その代表例は昼間の『魔獣』やこの世界の人間だな」

「えっと、この世界の人間って？」

「ミシオちゃん気付かなかった？ この世界の人間ってさ、肌につすら鱗模様があるんだよ。もともとが爬虫類だったころの名残だからなんだけど」

「……ああ！ ……刺青かと思ってた」

そのセリフに智宏も同意する。最初は智宏も村の風習に刺青があるのかと思っていた。

「っていつか待てよ？ そうなるともしかしてあの魔獣って……」

「ああ、トモヒロも気付いたか？あの『魔獣』、その中でも昼間の『人型』って呼ばれてるのは、こっちで言うところの旧人や猿人にあたるんじゃないかってのが俺らん中での見解なんだよ。だから俺たちの中ではあれのことを『ダイノロイド竜猿人』なんて呼んでる」

「ダイノロイド竜猿人……」

「まあ、ダイノロイド竜猿人なんてのはこの世界では序の口でな。大きいものになると五ギーマ……、って言っても通じないか？ えっと俺の背丈の約五倍くらいの大きさのやつも存在する」

「五倍!？」

それは恐竜としてはどうだか知らないが、生物としてはかなりの大きさだ。レンドの身長は目測で約180センチほど。その五倍ということはおおよそ9メートルということになる。まさしく見上げるような大きさだ。

「もしかして……、あれがそうなのかな？」

「へ？」

「えっと、森で彷徨ってたとき、大きな、地響き？　みたいなのを聞いたことがあったから」

「……………」

ミシオの思わぬ発言に二人とも絶句する。ミシオ本人はこともなげに言っているが、それは一步間違えれば命を失いかねない危機だったのは明らかだ。

「すぐに遠ざかって行ったから大丈夫だったんだけど……………。そのちよつと前にすごく臭い木の実を拾って獣除けに使ってたから……………」

「それは…………、それは……………」

「…………ミシオちゃんって結構たくましいのね」

智宏がもしも森の真ただ中に出現していたら絶対に生き残れなかっただろうと思った。むしろ目の前の少女が生きてこの村にたどり着けたというだけで奇跡のようにも思える。

「まあ、それはともかくとして、この世界の生態系については以上でいいか？」

「あれ？　まだ竜猿人ダイノロイドのことくらいしか話してくない？」

「ぶつちやけあんまり知らないんだよ。そう言うのはむしろ後で村の人に聞いたほうが確かだよ。ああ、それと『竜猿人ダイノロイド』って呼称は

村人の前で使うなよ」

「へ？ 何で？」

「この世界の人々にとって竜猿人ダイノロイドは憎むべき『魔獣』だからさ。人間を殺す天敵って点を除いてもな。……そうだな、ちょうどいいから次はこの世界の宗教の話でもしようか。社会の話をするのにも前提になるしな」

9：第一世界エデン 中編

「宗教？」

「そう。この村以外でも広まってるらしいからこの世界の宗教って言うてもいいだろう。……で、まずは創世神話からかな」

「創世神話？」

「そう。この世界は神様が作りまして言うあれ。ミシオちゃんの世界にもあるだろ？ 似たような話は結構どこにでもあるしね」

「ああ……。僕の世界にも確かにあるよ」

そう言いながらふと気付く。その神話で作られた理想郷の名前もこの世界とおなじエデンだった。さすがに関係があるかどうかまでは分からなかったが、気にはなった。

「まあ。俺も詳しく知ってるわけじゃないから重要な部分だけ掻い摘んで話すよ。内容としては創世神話らしく神様がこの世界を作るところから始まる。天地を作って草木を植えてって感じた。まあ、これは他の世界でも似たような話があるだろう」

「多分。うちの世界にも同じようなものがあつたはずだ」

「まあそうだろうね。ただ、特徴的なのがその先で、この世界を作った神が、世界が生まれた後この世界に降り立とうとするんだ。ところが、いつの間にか世界に侵入していた魔獣たちによってこの世界を追い出されてしまう」

「追い出される？」

「どうも神様のくせにあの魔獣たちになわなかつたらしい。んで、世界を追い出された神様はそれでもなんとか地上に降り立つために一つの策を練ったわけだ。魔獣に対抗できる生物を作り出して、そいつに魔獣を倒させようってな」

「……神様、他力本願？」

「いやまあそうなんだけど……。まあいいや。とにかく、ここで重要なのは、この世界では竜猿人^{ダイノロイド}を含む肉食恐竜の全てが神に仇なす『魔獣』ってことになってることだ」

そう言うってレンドはさらに乗った最後の串を拾い上げると、「人型なんて、人によっては悪魔って呼ぶんだぜ」と言っつて、思いきり肉にかぶりついた。どうやら昼間の人型は、魔獣の中でも特別視されているらしい。

「そんでそれと戦う人間は神がこの世に使わした先兵って訳か。何か少し選民思想っぽいな」

「どちらかというと選人思想って感じだけだな。この話には続きがあつてね。地上に降り立った人たちが、いつの日にか魔獣を根絶したその日には、神様がこの世界に降りてくるって話もあるんだ」

「つまり神様のために魔獣を倒そうって話か？ 随分この世界の間は神様に酷使されているんだな」

「でも、そういう思想が広まるのも頷けないか？ 何せ厳しい世界

だ。この世界で生き続けるには自分たちは選ばれている、使命を持つているって考えた方が団結しやすいし、敵となる生物に遠慮することもなくなる。選ばれているものの使命感と優越感ってのは厳しい状況で戦うものにとって心の支えになるしな」

「そう言われてみればそうか。ああ、それで『ダイノロイド竜猿人』って呼ぶなって言ったのか」

「え？ …… どういうこと？」

ミシオの疑問にどう答えようか智宏が考えていると、一足先にレンドが説明に身を乗り出す。

「分からないかいミシオちゃん？ この世界の人々にとって『ダイノロイド竜猿人』を含む『魔獣』ってのは、天敵である以上に己の生存と、正義と、使命を持って滅さなくてはいけない宗教上の敵なんだ。そんなものが『ダイノロイド竜猿人』、つまりは人の親戚みたいな生物だなんて言ったら、この世界の人々に喧嘩を売るようなものだろう？」

「……それは、確かに」

「それに実際^{ダイノロイド}竜猿人を含む魔獣が人々の生活を圧迫してるのも確かだ。この世界に人類が生まれてどれだけの時間が経過しているかは分からないが、この世界の文明は魔獣によって進歩を止められていると言ってもいい」

「進歩を止められている？ どういうことだ？」

「そのままの意味さ。ハッキリ言ってしまうとこの世界における人間は勢力としてそれほど強くない。結果としてこの世界では人間が

他の生き物との縄張り争いに負けるといふ事態が起こってる」

「縄張り争いに……、負ける？」

「早い話が恐竜に生活空間を圧迫されてるんだよ。この村の人間たちのテリトリーと言える土地なんて、この村と森の一部だけだ。それだって昼間みたいにダイノロイド竜猿人が侵入したりしてる。完全に人間が完全に生きられるスペースなんてこの村くらいのもんだ」

「あ、そっか、だからこの村こんなところにあるんだ……」

「え？ ……それどういう意味だ？」

先ほどとは逆に今度はミシオが納得の声を上げる。それに対して智宏は意味が分からず疑問の声を上げると、ミシオは少しだけ困った顔をする。周りを見回し、やがて村の入り口を指差した。

「この村って、入るのがすごく難しくなってるの。岩棚の上にあつて、周りが断崖に囲まれてるし、登って来る道もすごく狭くて、一人くらいしか通れない」

「つまりこの村って、天然の要塞になってるってことか？」

「うん。ここならレンドの五倍もあるっていう恐竜はまず昇れないし、そのダイノロイド竜猿人が昇ってきてても迎え撃てるんだよ」

「そう！ 大正解！！」

智宏が感心すると同時にレンドはそう叫んで拍手した。確かに今の答えは見事な見解だ。レンドが「はい、商品」と言つて智宏のさ

らに残っていた最後の肉をミシオの皿に置いてしまったのは業腹だが。

「つとまあ、今ミシオちゃんが言ってくれたように、安全な土地を確保するだけでもこんな天然の要塞みたいなところを使わなくちゃいけないような世界だ、必然的にどうしても不足してくるものがある」

「ここまでくれば僕でもわかる。土地だろ？」

「そう。この世界の人間は圧倒的に土地を持っていない。そうなる」と必然的に広大な土地を使う農業や酪農はほぼできないし、特定の土地を長い時間をかけて掘る、鉱物の採掘なんかも行えない。おかげでこの世界じゃあ、主要な第一次産業は狩猟と採集、加工製品も木や恐竜の骨みたいな手に入りやすい品は結構なレベルの品を作れるようになってるが、鉄製品なんて無いに等しいって状況だ」

「なるほど。それで進歩が止められてるって訳か」

農業や酪農、そしてそれ以上に金属や鉱物などの地下資源は文明発展の基礎だ。それが封じられた状態では文明の発展は難しいだろう。

厳しい世界なのは分かっていたつもりだが、ここまで厳しさを突きつけられると流石にへこむ。これでは自分の世界に帰るまでどれほどの危険と向き合わなければならぬか分かったものではない。

「よおう、レンド」

智宏がそんなことを考えていると急に後ろから轟くような声が聞こえた。智宏が驚いて声のした方を見ると、立派なひげを蓄えた大

男が何やら壺のようなものを片手で掴んでやってきた。ノツシノツシという擬音が似合いそうな大股歩きで歩いてくる。

「よおう、異世界人諸君。レンド、お前はまたただ飯を食っているのかあ？ 働かざる者食うべからずだぞ」

「今日はちゃんと仕事してましたよブホウさん。そうしたら魔獣に出くわしてこうして食料調達して来るはめになりました」

「うそつけ。仕留めたのはほとんどハクレンの奴じゃないか。それともおまえが連れてるその異世界人二人が食糧だともいうのか？」

智宏は冗談だと分かっているにも笑えなかった。目の前のブホウという大男は本当に人でも食べそうなイメージがあったからだ。見ると、ミシオも同じことを思ったのか、頬を引きつらせている。

「……おや、異世界人の二人には冗談に聞こえなかったか？ 安心しろこの世界に人を食う習慣はねえよ。天が作りし人を人が殺めるなど有っちゃあならないことだ！」

そう言いながらブホウは三人に向き合うような位置にドツカリと座りこむと、持っていた壺のようなものを目の前に置いた。中にはなにやら液体が入っている。ブホウの様子からすると酒かもしれない。

「お初にお目にかかる。儂はこの村の戦士長を務めるブホウつつもんだ。よろしく頼むぞ異世界人の若人よ」

「……えっと、ハマシマミシオ、です」

「吉田智宏です。あの、戦士長……っっていうのは？」

「この村で一番強い男さ。本当ならこういう挨拶は巫女がするべきなんだが、今ちよっとゴードンのやつと話しててな。悪いが俺で我慢してくれ」

「巫女？」

「この世界におけるトップの役職だよ。戦士長は男の、巫女は女のな」

智宏がブホウの話にどう反応していいか分からずにいると、レンドが助け船を出すようにそう言った。

「戦士長に、巫女？ 男女それぞれに、トップがいるの？」

「ああ、そうだけ譲ちゃん。戦士長は村で一番強い男が、巫女は村で最も選ばれた娘がこなすんだ」

「最も、選ばれた？」

「えっと、要するに巫女の選定ってのは占いで行われるんだよ。先代の巫女が自分の巫女就任時に、その年生まれた女の子の中から次の代の巫女を占って決めるんだ。んで、選ばれた子供はその後成人するまでの間巫女としての教育を受け、十五歳で成人すると同時に巫女の座を継ぐ」

「それで、新しい巫女の就任と同時に、俺ら男も試合をして次の戦士長を決めるのさ。それで選ばれた巫女と勝ち抜いた戦士長は夫婦

「なって村を治める」

そこでブホウは碗を取り出して壺の中の液体を注ぎ、一気に飲み干す。やはり入っていたのは酒の一種らしく、注がれた白っぽい液体からはきついアルコールの臭いがした。

「さっきも言ったけどこの村の男は主に戦闘などの村の外での活動に必要な役職、戦士やその長、あと気功術が必要になる医者なんかを担当してるんだ。それに対して女性は主に道具、武器、防具の生産や政治、シャーマニズムなんかを担当してる。道具なんかを作るためのアイデアや政治的判断なんかはお告げだし、メッセージ以外にも目に見えない運氣なんかも受け取れるんだ」

「……運氣？」

「ああ、トモヒロなんかは心当たりがあるだろうけど、今朝村を出るときハクレンさんの奥さんのリンファさんに祈られたら？ あれは女性である奥さんが天から運氣を受け取って夫に渡す意味合いがあっただよ」

「天から運氣をつてのはどういうことだ？」

「女性つてのは男と違って神様と直接の繋がりがあるからね。神様が作った人間の赤子を最初に受け取ってこの世界に生み出すのは女性だ。だから女性つてのは神様からの賜り物を受け取れる大切な存在なんだよ」

そう言えば、と智宏は思い出す。この世界における人間というのは神様が作ったものだ。だとすればレンドの話は神が作った人を女性が産むという事態を説明づけるものなのだろう。

レンドは解説しながらも、どうやらこの世界の人間であるブホウに気を使っているらしく、宗教的価値観らしき話を当然の心理のように語っている。智宏はそのそのそのなさに内心舌を巻いた。

「それにしても……、意外に男女の分担がしつかりしてるんだな……」

「差別意識みたいなものを想定してたかい？」

「ん……、まあ」

智宏としては、先ほどの話から勝手に男尊女卑の精神が息づいているのではないかと危惧していたのだが、レンドやブホウの話からはそれは感じられなかった。仕事こそ完全に分担されているものの、権力はほとんど女性が握っているとも言ってもいい。

「差別というとあれか？ 自身と違う者達を迫害するとか言う異世界の愚行か？」

「ええ、そうですね。レンドにでも聞いたんですか？」

「まあそんなところだ。あいにくと我らの世界にはないものだったのだな。天も人同士の益の無い争いを禁じている。そもそも魔獣共と戦うのに人同士で争っては危険極まりない」

「なるほど……」

どうやら宗教上の教えによって差別を含む争いの火種を禁じているらしい。よくできた宗教だと思いつつも、智宏はどこかそれがある種の必然であるようにも感じられた。

宗教というのは信仰する人々の生活から生まれるものだ。そこには当然、その世界がより効率的に生きるための手段も含まれる。もしかすると人同士で争わないように定めた教えというのはこの世界の人々が生きる上で欠かせない知恵だったのかもしれない。あるいはそう言った争いを禁じなかった者たちが生きに伸びることができなかったという可能性もある。

「そっぴゃあレンド、さっきブラインの奴がお前を呼んでたぞ。明日の狩りのことで聞きたいことがあるそっぴゃあ」

「……狩り？ レンド、明日狩りに行くの？」

「ああ、いや、別に俺が行くわけじゃないんだけどね。ブラインが明日、村の戦士たちと大きな獲物を捕まえに行くんで、その準備を手伝ってるんだ。大きな獲物だから絶対に取り逃したくないんだろっぴゃあ」

「大きな獲物って……やっぱり恐、魔獣か？」

「まあ、そんな感じだ。ちょうど話も終わったことだし俺はブラインのところに行くてるよ。たぶん遅くなるから先に寝ててくれ」

そうやって最後のクッキーもどきを口に放り込むと、レンドは立ち上がり、小走りに洞窟のほうに行ってしまった。

「あれ？ ブホウさんは行かなくていいんですか？」

どういつ訳かレンドが去ってもブホウは動くことなく、智宏とミシオの間に座って酒を飲んでいた。

「んん？ …… ああ、あいつ等が特別準備があるっただけで儂らは特に準備はないからな。一緒に行ってもすることが無いし、それに何より儂はお前たちに興味がある」

「興味……、ですか？」

「ああそつだ。興味だ」

そう言つてブホウは再び酒に手を伸ばす。あれだけきつい臭いのする酒を、このペースで飲めるということはブホウはかなりのウワバミなのかもしれない。

「ところでお前ら、もう肉はいいのか？ 今日には獲物が多かったからまだまだ有るぞ？」

「え？」

見れば三本あつた肉の串焼きはすでに二人の皿から綺麗に消え去つている。智宏の三本のうちの一本は先ほどミシオに渡されているが、ミシオは合計四本の串焼きを見事に食べきつたらしい。ちなみにそのことについて智宏は何かを言つつもりはない。

「新鮮な肉を思う存分食べられるいい機会だぞ？ 明日になったら残りはほとんど保存用に燻製にしちまうからな。お前らも狩るのに関わってるんだ、食つてもだれも文句は言わんぞ」

「……は？ 狩るのに関わってる？ どういうことですかそれ？」

「なんだ？ 知らずに食つていたのか？ あの肉はお前らが出会つたつていう『人型』の肉だぞ」

瞬間、智宏の内心を何とも言えない不快感と嫌悪感を混ぜた上で、それを十倍に薄めたような微妙な感覚が襲った。先ほどまで平然と食べていたせいもあって吐き気を催すようなことこそなかったが、どうしてもゲテモノを食べたような気がしてならない。

(……………って言うか食べたのって『ダイノロイド竜猿人』だよな？ ……僕の世界でいう猿人だよな……………?)

頭の中に「カ」で始まる横文字が浮かびそうになるのを全力で阻止する。これは間違いなく考えてはいけないことだ。むしろ今までその可能性に気付いていなかったことの方が問題かもしれない。考えてみれば、レンドあたりがそれらしいことをとどころで言っていた気がする。

「あれって魔獣の肉だったんだ……………。食べたことが無かったから、何の肉かと思った」

控えめながらも普通の肉を食ったような感想を述べているミシオは、果たして状況を理解していないのか、あるいは神経が見た目に反して太いのか、智宏には判断できなかった。

「今ならまだ肉も残っているだろうし、なんだったら取って来てやるるか？」

「……………私はさつき他の人の分ももらったから、むしろトモヒロの分を……………。私が貰っちゃったから……………」

「……………え？」

予想外の悪意のない言葉に智宏は絶句する。いくら何でも拒否できない流れをこのタイミングで作られるとは思っていなかった。見れば、ブホウはすでに肉を貰いに行ったらしく、すでに取り返しのつかない事態に陥っていた。

10：第一世界エデン 後編

「さあ、食べ。食って力をつける」

数分後、ブホウが運んできた山もりの串焼きを目の前にし、智宏は変に葛藤することを諦めた。もともと知らなければ食べられたのだ。変に意識しなければ味は悪くない。

幸い、流石に一人で食べさせる気はなかったのかブホウも酒と合わせて食べているし、ミシオも小動物のように齧っている。ただし止まらないが。

(細い体のくせに意外に……いや……)

それ以上は考えるのをやめた。

幸い他に考えることがあったためそれは簡単だった。ブホウが智宏達の世界について質問してきたのだ。どうやら智宏がレンド達とは違う世界の住人であることは村の中で広まっているらしい。

「なんだ？　じゃあお前の世界にも気功術は存在してないのか？」

「ええ、だから傷の手当てを受けたときは驚きました。僕の世界にはあんな風に簡単に傷を治す技術はありませんから」

「まあ、そうはいつでも並の奴じゃあそこまではできんよ。ハクレンの野郎はもともと気の扱いがうまいからな。それにあいつは強い！　この村で医者 of 役職を継ぐやつは大抵弱くて戦闘じゃ役に立たない奴が多いんだが、あいつの場合槍の腕と『血』の気功術を両立させとる」

そう言われてみればダイノロイド竜猿人と戦ったときも、不意打ちで襲つてきたのを一体、レンドの援護があつて二体、そしてそのあと一対一で三体目を倒している。それだけでもハクレンの戦闘能力の高さは分かるというものだ。

「なんだつたら元の世界に戻る前にハクレンに『血』の気功術を習つたらどうだ？ 元の世界に帰つてからも役に立つだろう？」

「えっと、それが……、無理なんです。魔術と気功術つて使う魔力の性質が違うので魔術が使えた僕には気功術が使えないんです」

智宏としては気功術の話聞いたとき魔術と同じように期待していたので残念な話だった。だがブホウはそうは思わなかつたらしい。

「んん？ お前さんはレンド達とは違う世界の異世界人と聞いたが？」

「ええ、そうですけど」

「じゃあレンド達にはできなくてもお前にはできるかもしれないじゃないか。……ふん、物は試した。やるだけやってみろ」

そう言うとブホウは自分の串の肉を頬張ると、残った串を智宏の目の前に突き出して見せた。様子から察するにこの串も骨か何かからできていたらしい。

「体の中の気を意識して動かすのがコツだ。動かした気をこの串に集めてるのが分かるか？」

「……ええ、わかります」

よく注目して見るまでもなく、神経を研ぎ澄ますと【気】が串に集まっているのが分かる。ブホウはそれを確認させると、近くに転がっていた石ころを素早く串刺しにして見せた。

「まあこんなところだ。おおざっぱに言えばこれを体中の筋肉に使えば【筋】、目や耳や鼻なんかを集めれば【感】、傷口に集めれば【血】って寸法だ。やってみろ」

「……はい」

智宏は覚悟を決めて試してみることにした。元よりだめで元々だ。失敗したからと言って何かある訳でもない。

それに気を動かすことは智宏にとって難しい作業ではない。気と魔力が同じものである以上気の操作は魔術と同じ要領でやればいい。智宏は試しに魔方阵に魔力を流し込む要領で串に魔力を流し込む。

「ん！」

「ほう、とりあえず発動はしたな」

「……はい。でもこれ効果はどうなんでしょう？」

「レンド達の場合も発動はしたが効果はなく、気をとどめておける時間も短かった。お前の気功術がどうかはまあ試してみれば分かる」

「へ？」

そう言うとブホウは自分の串の気功術を解くと、串を左手に持ち替え、空いた右手で腰から短刀を引き抜いた。さすがに村の中であ

ることもあつてか完全武装ではなかったが、短刀ぐらゐは持ち歩いているらしい。

智宏がその短刀で何をするのだろうかと思つてみると、いきなり右手が目にもとまらぬ速さで動いた。

「うわー!!」

かろうじて動いたと分かつたのは、ブホウが抜いたばかりの短刀を鞘に納めていたことと、ブホウと自分が持つていた串が奇麗に切られて地面に落ちたからだつた。

それをやつたブホウ本人といえは冷や汗を流す智宏をよそに落ちた串を拾つてまじまじとみつめてゐる。

「ふむ、まさか本当に効果があるとはな。」

「あの、ブホウさん？ 割とおつかないことしといて何を言つてゐるんですか？」

「うん？ いやなに、何もしてない串とトモヒロが気功術を使った串を試しに切り比べてみたのだが」

「そう言う事はせめて断つてからやつてください！ おかげで冷や汗が止まりませんよ!!」

「なんだ、異世界人は肝の小さい奴が多いな、まったく……。まあいい喜べ。一応の効果はあつたぞ」

「は？」

「智宏の串のほう若干斬り応えが強かつた。気功術が成功しとる」

それはつまり智宏の気功術が一定の効果を示していたということだ。つまりは智宏は魔術だけでなく気功術も使うことができることを意味する。

しかし智宏はそれを聞いてもすぐに喜ぶ気になれなかった。あまりにも都合のいい展開が逆に不気味だとさえ思う。魔術のない世界に生まれながら魔術が使えたことは今さらなので対して不安を呼ばなかったが、気功術は話が別だ。魔術は血統的なもので説明がつくかもしれないが、気功術はそうはいかない。

（えっと、気功術が使えるってことは僕の魔力の属性は【気属性】ってことになるのか？ 魔力の属性は魔方陣が変換できるから、それならそれでどっちも使えることの説明はつくけど……）

智宏が考え込んでいると、その目の前にブホウの顔が突然突きつけられた。その表情は先ほどとは違い怪訝そうなものに変わっている。

「なんだ、なんだ、せつかくできたのに浮かない顔なぞしおって。少しは喜ばんか。せつかく強くなる道が見つかったというのに」

「いや、まあそうなんですけど。何か色々出来すぎていて気味が悪いつて言うか……」

「異世界人というのは難しく考えるのが好きだなあ。良いではないか、お得だとも考えておけば。実際この世界で生きていくのに使えそうな力を二つも持っているんだ。お前さんも人間の男に生まれだからには弱きものを守り、戦うために力を振るわねばならん」

「……弱きものを守る、ですか……？」

「そうだ。その点昏間は良くやったと褒めておこう。女子を守って魔獣に立ち向かったそうではないか」

「いや……、はあ」

ブホウの言葉に、智宏はうまく答えることができず、曖昧な返事を返す。「魔獣に立ち向かった」といえば聞こえがいいが、実際は恐慌状態に陥って無謀な特攻をしたただけだ。お世辞にも褒められる行為ではない。むしろ反省すべきだとすら思っていた。

「弱きものを見捨て、あるいは迫害、淘汰することは簡単だ。実際魔獣のみならず虫も獣も皆そうしている。その方が生き残りやすいと本能的に知っているからだ。実際人間にもその本能はある」

それでも智宏の内心をよそにブホウは力強くそう語り出した。その口調には酒の勢いだけでない熱がこもっている。

「だがしかし！　しかしだ！　天より使命を賜った我々人は、その本能に従ってはならない。それは獣のすることだ。弱気を慈しみ、守り、ときにはその力を借りることは人間のみができる、天が人間にのみ与えられた道だ。我々はその道を踏み外すことがあってはならない。我々は獣の道を歩くことがあってはならない。我々は人の道を歩かねばならんだ」

「人の……、道」

智宏は自分のことを勇気のある人間だとは思っていない。戦う術を持たない智宏にはこのような思想をまっとうする方が危険だ。だがそれでも引き込まれる。

それほどブホウが語る生き方に強い魅力があった。

「なんか……、いいですね」

「ほう、わかるか？ ならば精々己の持つ力の使い方を考えておくことだ。お前さんの力はきつと何かの役に立つ。特に【刻印】や【魔術】みたいな力はこの世界の人間には使えないから引く手あまたじゃぞ。」

「……【刻印】？」

【気功術】と【魔術】は分かる。だが【刻印】という言葉は聞き覚えが無い。一瞬ミシオの使う超能力のことかと思っただが、そもそもミシオがこの村に来たのは今日であり、ほかに彼女と同じ世界の住人が来ているという話も聞かない。そもそもミシオの能力に関しては、まだ他の人間に話していないのだ。知っているはずもない。

「なんだ？ 【刻印使い】についてレンドの奴から聞いてないのか？」

見かねたブホウがそう言って来たのですぐに頷く。どうやらまだ智宏の知らない要素があるらしい。

「なら教えてやるのが年長者の務め……、なのだが、生憎と僕もよく知らんだ。レンド達の話聞いたには聞いたんだが、願いがどうの、魔力がどうのと難しくてさっぱり分からなかった」

「願い？」

「ああ。聞けば、叶うんだとよ、願いが何でも」

「……え!？」

その言葉に智宏は衝撃を受ける。もしそれが本当なら元の世界に帰る方法に成り得るかもしれない。

「まあ、詳しいことはレンドあたりにでも聞いてみる。儂に聞いてもこれ以上詳しくは話せんよ」

そう言いながら先ほどの酒が入った碗を手に取り、しかしそれを飲み干そうとして怪訝な顔をした。

「どうしたんですか？」

「酒が水に変わってる」

「は？」

智宏がその意味が分からないでいると、いきなり視界の隅にいたミシオが倒れた。

「え!？ ちょっとミシオ!？」

見るとミシオは横倒しに倒れていた。髪が顔にかかって表情は靨えず、どうかすると死んでいるようにも見える。が、

「間違えてわしの酒を飲みおったな……」

「途中からやけに静かだと思ったら……」

よく見てみると胸がかすかに上下しているし、髪に隠れて見え辛いが、顔も真っ赤だ。口に出すまでもなく原因は酒だろう。

「できればこの娘にも話を聞きたかったのだが……、これでは無理そうではないか……」

「……とりあえず、寝床に運んだほうがいいでしょうか？」

「そうだな。そろそろ時間も時間だし、話の続きはまた今度にするでしょう」

暗い洞窟の中から出ても、明かりと言えるものは手元の魔術以外ほとんどなかった。星明かりだけはきれいに瞬いているが、すでに村の灯は消えている。すでに食事時からかなりの時間がたっているのだ。すでに村人たちは一部の見張りを残して寝静まった頃だろう。

そうしていると、ふとすぐ目の前に人の気配を感じる。

「ブライン、ここにいたのか。光ってなかったから見えなかったよ」

「っ！ 貴様は……、まあいい。それで？どうだった？」

待っているだろうとは思っていたが、明かりもつけずに座っていたことにレンドは少々驚きを感じる。明かりをつける魔術を使わなかったのは、星を見るためなのか魔力を節約していたのか。レンドは感で両方だろうとあたりをつけた。

「予定通り、明日の朝には増援が来ることになったよ。人数は二人だけだね」

「たった二人か……。やはり、人手不足はこの村の人間に頼るしかないな……。了解した」

「一応飛行系術式の使える人間を送ってもらおうようにっておいたから、あとはそっちで何とかしてくれ。俺はあの二人の方にそろそろ決着をつけるよ」

そう言うのとレンドは自分の真実を知ったときに、あの二人、特に疑うことを知らないトモヒロはどんな表情を浮かべるかを考えて薄く笑みを浮かべる。驚くだけで済むか、あるいは怒り狂うか。どちらにしろあまり愉快的気分にはならないだろう。

「分かった。そちらはお前に一任しよう。どの道決断は早いほうがいいしな」

「ああ。あの二人のこの村での生活は……。明日で終わりだ（・・・）（）」

かすかな星明かりしかない深夜の森で、二人の異世界人が動き出す。

11：変質

無造作に床に投げ出される。

手足でうまく受け身を取ろうにも、それすらなぜか縛られていてうまく動かせない。

周りを見る。

そこには自分と同じように縛られた二人の人間。人間が減る。

最初は一人。そして二人目。瞬く間に減っていった部屋の中の人数は、その後一人も増えることはなかった。

恐怖が這い上がる。

二人がどうなったのかわからない。知りたくもないのに無性に気になる。なぜなら彼らと同じ道を自分も通ることになるのだから。

(なんだ……これは……?)

やがて部屋の中に、白衣を着た男たちが入ってきた。

もがく。だが意味をなさない。縛られた体はなす術もなく引きずられ、前の二人と同じ道をたどっていく。

声を上げる。だがことを成せない。どうやら口もふさがれているらしい。声すらまともに上げることができず、ただただ無力にどこかへと連れて行かれる。

(待て、なんだよ……! なんなんだよこれ!!)

やがてその部屋が現れる。周りに並ぶ幾人もの白衣達。そしてその白衣達の中心に描かれた奇妙な図形。部屋の床に円を書き、その中にいくつもの文字や絵、線や図形が描かれた奇妙な部屋。そして二人の白衣達はその中心へと自分を引きずっていく。

(止せ!! やめろ!!)

そして床一面が輝きだす。

最初に発生したのは、どす黒い色をした煙のような、霧のような存在。円の周囲から発生したそれは、なぜかその向こうにいる白衣達の姿を透かしながらも、瞬く間に周囲の空間を埋め尽くして行く。

(あれ、待て……?)

そして周囲を完全に霧が満たしたとき、霧に第二の動きが生まれる。

最初はゆっくりと、たちまち一斉に、中心にいるその体を目指して、霧が一斉に殺到する。

(これ、誰だ……?)

霧に触れた瞬間、視界が急激に変動する。体が波打ち、まるで服に火がついたように駆けまわる。

(・) (・) 人物は感じている。強烈な異物感を、焼けつくような激痛を、凶悪な死の危険を、こ

(誰だ……?)

(いや……)

(こいつは誰だ……?)

(痛い! やめて!!)

(これは僕じゃない)

(やめて!!! 入ってこないで!!!)

(こいつは一体誰だ……!?)

思考が分裂する。いや、分裂ではない。二つの人間が同時に思考している。いわばこの場では自分の意識こそが異物であり、見ているだけの立場にいるのだ。

その証拠に、痛みは伝わってこない。苦痛も、異物感も、死の危険も、そう感じているのは分かるのに感じることはできていない。代わりに伝わってくるのは恐怖。それにさらに悲哀が混じり、少なくない憎悪や怨嗟が混じる。なぜ自分がという感情が、蹂躪される悔しさが、そして霧の向こうでこちらを眺める白衣達への激情が、猛烈な勢いで流れ込んでくる。

(くそっ!!! 何が起きてるんだよ、これ!!!)

と、思ったと同時に、視界の隅で変化が起きる。白衣達が、なにやら胸を掻き篁り、のた打ち回って地面を転がる。

(なんだ!?)

白衣達がバタバタと倒れるなか、見える景色がどんどん白くなっていく。わずかに潤んだ視界が次第に薄れ、真っ白になったとき、ようやくこの人物が意識を失ったのだと悟った。

そして景色が色を取り戻す。

最初に目に入ったのは、倒れた白衣達。そしてその手前にこの人

物のものらし細い腕。拘束されていたはずのそれは、どういふ訳か拘束から逃れてそこに飛び出していた。

(どうなった、んだ……?)

床に手をつき、ゆっくりと身を起こす。どうやら足はまだ拘束されているようで、例外的に腕の拘束はなぜかめちやくちやくに破壊されていた。

(あれ?)

視界の端に、再び黒い色が現れる。驚いて注目すると、先ほどの黒い霧が腕に纏わりついていた。

(なっ!?)

その光景に驚くが、霧の噴出は止まらない。腕から、足から、腹から、胸から、そして顔から。霧が、黒くなぜか透けて見える霧が、湧きだし、湧きだし、湧きだし、湧きだし、湧きだし、湧きだし、湧きだし、湧きだし、湧きだし、湧きだし……。

その瞬間、智宏は今まで生きてきた中でも最悪の気分と共に目を覚ました。

「…………ハア、ハア、…………くうっ、…………なんだ、今のは…………!!」

悪夢から覚め、飛び起きた智宏は思わずそう呟きながら額を拭いた。案の定、額だけでなく全身から嫌な汗が噴き出している。

夢のせいか記憶の細部がかなりいい加減だが、今見た夢は明らかに今までの人生で見てきた夢のそれとは明らかに異なっていた。うる覚えで痛覚などはなかったが、それよりももつとあり得ない生々しい感情のようなものを感じた。そしてそれは決して自分のものではない。その感情を感じている自分が確かに存在しているという奇妙な夢。

「驚いたな……。こんな夢があるもんなのか……？」

疑問に思いながらもとりあえず気分を落ち着かせる。深呼吸を繰り返し、慌ただしく鼓動する心臓を通常運転に戻す。

「はあ、まったく。いつたいなんだって言うん……だ？」

ようやく落ち着いたことでとりあえずベットを出ようとし、体を支えようとおろした左腕が予想外に何か温かいものを掴む。感触も毛布とは違う。まるで人間に触っているような、さつきとは別の意味で生々しい感触。

「……は？」

驚いて自分の横を見る。するとそこには、見覚えのある少女が、同じベットの上で眠っていた。

「……………」

全身から先ほどとはまた別の理由で汗が噴き出す。せつかく治まった心臓が再び鼓動を強め、白く染まった頭が新たな疑問を導き出

す。

ナンデコンナコトニナツテンノ、と。

「……………とりあえず、何かをしたという記憶は、無い」

自分の記憶を確認し、手をどけて自分やミシオに衣服の乱れなどが無いかを確認する。ちなみに手が触れた場所はミシオの肩だった。ミシオが横向きに寝ていたので余計な場所に触れなくて済んだようだ。断じて残念だなどとは思わない。

「いや、まあよく考えてみたら同じ部屋で寝てる時点でかなりヤバいんだけど……………」

そもそもの原因は昨晚ミシオが酒を誤飲して寝込んでしまったことに起因する。死んだように眠るミシオを周囲の生温かい視線に耐えながらハクレン家まで背負って運び、ベットに寝かせようとしたのだが、そこで一悶着あった。

どういう訳か、背負ったミシオが背中にしがみついたまま離れなかったのだ。どんなに降ろそうとしても腕で智宏の体をがっちりとホールドし、智宏が体を傾けても木にしがみつくコアラのようにしつかりとしがみついていた。

それから起こさないように気をつけながらもあの手この手で格闘すること十数分。無事に彼女をひきはがし、くたびれ果ててベットに倒れこんだ智宏は、どうやらそのまま寝入ってしまったらしい。

だが、その時に寝たのは別々のベットだったはずだ。断じて同じベットに潜り込むような真似まではしていない。

(っていつか、むしろ潜り込まれたのは僕の方か?)

よく見ると、本来少女を寝かせたはずの隣のベットが空になって

いる。対して智宏は移動した形跡がないことを考えると、どちらが移動したのかは明らかだ。

そこまで冷静さを取り戻し、同時にやっと智宏は一つの事実に関心があった。

横に眠る少女が自分の服の裾をしつかりと掴んでいることに。

(……やっぱり、心細かったのかな……)

考えてみれば、目の前の少女は昨日まで智宏以上に危険な目にあっていたのだ。そう考えれば、寝ていてふと不安になるくらいはあってもおかしくない。だからと言って男の寝床に潜り込むのはどうかと思うが。

(……って言うか、なんで誰も部屋の問題について指摘しないんだよ?)

考えてみれば部屋割の段階から問題があるのだ。智宏達が寝ていた部屋は、本来は病室だった関係でベットが三つ用意されている。最初はその一つをレンドが、その後この世界に来た智宏が、そして昨日、ミシオが加わって三人部屋が出来上がったわけだが、考えてみれば男二人の部屋に女の子一人加えるというのはかなり非常識な部屋割だ。

(……それとも異世界の貞操観念が緩いのかな? ……ミシオ本人も見てるこっちが不安になるほど無防備なところがあるし)

そのあたりは確認してみなければわからないし、どちらにしろ後でハクレンやその妻のリンファと話して部屋を変えてもらった方がいいかもしれない。

異世界の貞操観念はともかく、このままでは智宏の精神が持たない。

持たなかったらどうなるかは知らないが。

と、そこで智宏は一つ重要なことに気がついた。この部屋にはもう一人、レンドと言う同居人がいることに。

(ヤバい！！　こんな状況、人に見られたら言い訳が効かない！！)

慌ててレンドの様子を見るべく、ミシオと反対側に振り返る。いつも寝起きの悪いレンドならば今なら誤魔化せるかもしれない。

「……………あれ？」

だが、そんな思惑は予想外の形で空振りした。

どういふ訳かレンドのベットは寝た痕跡すら残さず空になっていたのだ。

あのレンドが早起きなどするのだろうか？

そんな、本人に多少なりとも失礼な思考をしながら智宏は顔を洗いかかる。

現在の時刻はまだ早朝。まだ朝日が昇り始めた時刻である。今朝の智宏は村の中でも比較的早く起きた方であるらしく村の中に見える人影もまだまばらだ。当然、昨日までのレンドならば寝ている時刻である。

(って、普段って言っても考えてみたらあいつとはまだ出会って四日しかたってないんだよね……………。ならそこまで気にする必要もないか……………?)

実際もつと考えなければならぬこともあったので、この思考はそこで打ち切った。

智宏は顔を洗い終わると、ハクレンの家には戻らず、昨日夕食を食べた広場の隅にある石の上に腰かけた。せつかく早く起きたのでもつと考えなければならぬことである、魔術や気功術についての検証を試してみようと考えたからだ。

きっかけは昨日のブホウとの会話だ。流石は戦士長を務めているだけあって、その言葉は力強く、智宏もガラにもなく感化されてしまった。

しかし同時に危機感も覚えた。この世界は男女役割分担による住み分けが強く、男らしい男、女らしい女が求められる傾向がある。レンドは弱い人間を無理に危険な仕事に向かわせることはしないと書いていたが、そうだとしても役に立たないままでいては肩身の狭い思いをすることは確実だ。そこで智宏も自分の立ち位置を確立するために知恵を絞ることにしたのである。

(……まずは魔術、いや気功術かな)

昨日レンドのおかげで使えることが確認された魔術、同じく昨晩ブホウの指導によって使えることが発覚した気功術。どちらもなぜ使えるのかは分からないが、使えるのならばどれくらい使えるのか試すのも悪くないだろう。魔術は知識に頼るところがあるためレンドに魔方陣を教わらないと使えないが、気功術は個人でも検証可能だ。

(気功術は……、昨日使ったのは『爪』ってやつだから……。まずはわかりやすそうな『筋』や『感』ってのを試してみるか)

そう考えて石の上から立ち上がる。自分の中にある魔力を感じ取

り、それを動かすことで智宏は検証を開始した。

三十分ほど過ぎただろうか、いくつかの検証の結果、そこそこの持つ能力が見えてきた。同時に気功術の特徴も。

まず気功術は予想以上に難しいことが分かった。もつとも、これに關しては昨日の串の強化のとき薄々感づいてはいたのだ。

気功術は恐ろしく集中力を使う。特に肉体強化になると深刻で、強化したはいいが動こうとすると解けてしまうという状況が先ほどか
らずと続いている。途中から動くのを諦めて、感覚だけ強化する
という方法に切り替えたらうまくいったが、それも動こうとすると
集中力が切れてしまうのだ。

ただし、二つの収穫があった。一つは感覚強化によって魔力を感じ
取る感覚も強化できたことだ。これによって、途中から水汲みを始
めていた子供たちの気功術の様子を感じ取ることに成功した。これ
は重要な発見だった。何しろ気功術は魔術と違い肉体の中で行われ
ていると非常にわかり辛い。それをはつきりと感じられるようにな
らなければ他人のまねもできないため、これから先も気功術の習得
はあきらめなければならなかつただろう。

そしてもう一つ、これは試してみてできたからこそ判った、智宏に
とって非常に重大なことだった。それは、

「やっぱり気功術が使えるようになったのはこの世界に来てからだ
（・・・・・・・・・・・・・・・・）」

そもそも簡単すぎる（・・・・・・・・）のだ。動きながらの維持はと
もかく、発動だけなら（・・・・・・・・）この短時間で出来てしまう。

そうなつてくると、こんなに簡単なもの（・・・）になぜ今まで気付かなかつたのかという疑問が湧いてくる。魔術の使い方とまではいかなくとも、空中に文字が書けるという能力には気付けていたのだ。気功術が使えるならその片鱗にくらい触れていてもおかしくはない。

それなのに智宏には心あたりというものがまるでなかった。元の世界にいたときも、自分の体の中の魔力を感じたこともなければ、それを意識して動かせたこともない。そうになると、この世界に来たことで出来るようになったと考えなければ納得できない。

何より肉体の変化に他にも心当たりがあつたのも大きい。

智宏はハクレンの家にある自分達が借りている一室を思い出す。そこにあるのは自分の世界から持ってきた荷物だ、その荷物の中にはここに来るまで掛けていたメガネがある。もともと智宏の視力は非常に悪く、眼鏡が無ければろくに本も読めないくらいだったのだ。それなのにこの世界に来てからはメガネをかけていない。どういう訳か、この世界に来てから視力が上がってしまい掛けていられなくなつてしまつたのだ。悪くなつていくわけではないし、理由も分からないのですっかり棚上げにしていたが、こうなつてくると俄然気になつてくる。

（視力に気功術の使用、いや、ここまで来ると他にもあるかもしれないな。……もしかして運動能力も上がっているのか？ ……くそ、昨日走つた時に少しでも気にしていれば分かつたんだがな……）

智宏はもともと頻繁に運動する人間ではない。そのため普段の自分の運動能力を正確に把握しているわけではないのだ。だが、他がそうであるように、もし運動能力に劇的な変化が起きていれば、少し調べればわかるだろう。

「ああ……、でもそろそろ戻つた方がいいか。検証はまた後でかな」

周りで村人たちが活動を開始しているのを見て、智宏はこの検証をいったん打ち切ることを決める。いい加減戻って仕事を探さねばなるまい。レンドやハクレンにここまでの結果を報告して意見を求める必要もあるだろう。

と、そう考えながら立ち上がるうとした智宏の感覚に、一つの異変が起きた。

(ん?)

不審に思い座りなおし、気功術を使って感覚を強化してみる。すると、今まで使っていた五感のどれとも違う、覚えたばかりの魔力の感覚に奇妙に引つかかる存在があった。

(なんだこれ?)

村のなかではない。方角から察するに森の方向だろう。その方向に魔術とも気功術とも違う、奇妙な感覚が幽かながら存在している。

(だんだん感覚が強くなって。これは……、近づいている? 大きくなってるのか? どっちだ……?)

智宏が魔力を感じられるようになったのはこの世界に来てからだ。そのため智宏は魔力こそ感じられてもそこから細かい状況を分析することができない。森から感じる感覚が強くなっているのは分かるが、それが何を意味するのかまでは分からなかった。

(ってそう言えばこの魔力の感覚もこの世界に来て生まれた変化だな)

と、智宏の思考が横道にそれたまさにその瞬間、森の方角から巨大な地響きが村へと響き渡った。

12：驚異の落下物

「おう、智宏も来たか」

智宏が音のした方向、村の出入り口もある絶壁の前にたどり着いたときには、すでにかなりの村人が集まっていた。よく見るとその中にはレンドやミシオの姿も見受けられる。どうやら人ゴミにのなかにいても異世界人はかなり目立つようだ。

「おはよう。トモヒロ」

「あ、ああ。おはようミシオ。じゃなくて、さっきの音はなんだ？
ずいぶん人が集まっているみたいだけど？」

「んー、それはほら、あれだよ。見た方が早い」

そう言っつてレンドが指差した方を、智宏もミシオと共に眺める。
レンドの指さす先、村からかなり離れた森の中には、なにやら派手な粉塵が立っていた。

「なんだ？」

「さっきまではもう少し見えてたんだけど……。流石にあれじゃあ視界が悪いか」

そう言っつとレンドの右目の前に突然魔方陣が展開された。慣れた感覚で魔力を操ると、魔術を起動させて再び森に眼を向ける。

「……うん。これなら見えそうだ。ついでだ。簡単だし、智宏にも

この術式を覚えてもらおう」

「っていつか、手のひら以外の場所でもマーキングってできたんだな」

「ん？ 知らなかったのか？ やろつと思えば背中だろつが足の裏だろつがどこでもできるぜ」

「え？ うそお！？」

驚いて足の裏に適当な図形をイメージすると、確かに靴の下にイメージした図形が現れた。ただどついう訳かイメージしたものより縦に潰れたような形になっている。

「……難しいな」

「まあ、俺たちの世界でも手が一番簡単で、背中みたいな見えない場所は出来る人はできるって感じのもんだからな。術式によっては背中で発動するのが必須の術式とかもあるんだけど」

「今レンドが文字どおり目の前で展開してるのもその類か？」

「別にそついう訳ではないんだが、ちなみに顔の前ならできるか？」

言われて、返事をする代わりに智宏は目の前に魔方陣を展開する。展開するのは目の前でレンドが展開しているのと同じ魔方陣だ。だが、

「曲がってる……」

そんなミシオの言葉を聞くまでもなく、智宏の魔法陣は見事なまでにぐちゃぐちゃだった。目の前で展開するので見える分やりやすいかとも思ったのだが、眼球に近い位置で展開するため、近すぎて逆に全体が見えないのだ。結果として出来たのは外側に行くほど崩れていくような魔法陣だった。

「まあ、この魔方陣の場合、目の前に展開した方が使いやすいってだけで、手で展開して目の前に持っていても問題ないから、智宏はそれでやってもらおう。ミシオちゃんの方はこっちで展開するかそれで見てくれ」

そう言うとレンドは手のひらにもう一つ魔方陣を展開し、それをミシオの目の前に持って行った。ミシオは少しだけビクリとしたものの、すぐにその魔方陣の中を覗き込む。

そこまで見て智宏は、魔方陣を手の平に展開してそれに今見たばかりの手順で魔力を流し込んだ。

発動した魔法陣の中をのぞくと、はるか向こうにあった粉塵の上があった地点が、はつきりと見える。

「遠くを見るための【望遠眼】^{スコープ}って魔術さ。二人とも見えてるかい？」

「あ、ああ」

返事をしながらも智宏は粉塵の中に注目する。朦々と立ち込めるその中で、大きな影が動いていたのがその原因だった。

「おつきい……」

徐々に姿が見えてきたそれを見てミシオが呟くのを、智宏は呆然

としながら聞いた。

粉塵の中にいた者、それは巨大なカメだった。巨大な甲羅を背負い、首を伸ばした陸ガメが、木と木の間でゆっくりと移動しているのが見えた。

「大型に分類される甲殻竜だ。地響きを聞いて駆け付けたときにはもういた」

竜という呼び方には少なからず違和感を覚えたものの、見た目の凶悪さにその呼称も頷けると智宏は思った。甲羅は通常のカメと違いごつごつと尖って攻撃的な形をしているし、体の形も亀よりもはるかに細長い。顔つきも穏やかなものではなく、牙のようなものがぞく肉食的なものだ。良くて雑食といったところだろう。

「……あの亀、この辺の生き物じゃない？」

「お、わかるかい？ ミシオちゃん？」

「……うん。すごく木を踏み倒してる。森の生き物だったら、ああいうふうにはならない」

「えっと、森の環境に適応できてないって言いたいのか？」

「……うん。それに、あんな風に木を倒さなきゃ歩けないなら、もつと、木が倒れてる」

「なるほどな」

確かに言われてみればその通りだった。巨大な亀は明らかに周辺の木をなぎ倒しながら進んでいる。それだけみれば亀自身の危険性

だけが目につくが、亀にとっても明らかに動きにくいのだ。森で生活することを選んだ生物ならもっと適したサイズに進化していそうなものである。

「まあ、ミシオちゃんの想像どおり、たしかに甲殻竜はこの辺の生き物じゃないよ。本来ならここからだとは歩いて一日くらいかかる距離、森を出た先の草原に存在しているような生き物さ」

「そんな生き物が何でこんなところにいるんだよ？」

「さあ、それは分からない。たぶんさっきの地響きのときに現れたんだろうけど、誰かが見てでもない限り」

「オレが見た」

「へ？」

足元から聞こえてきた声に思わずそちらを見降ろすと、そこにいたのは小さな少年だった。年は七歳くらいだろう。利発そうな顔立ちで驚く智宏達を見上げている。

「オレ見てたんだ。あのでかいのが飛んできて森に落ちるの」

「飛んできた!？」

レンドや周りにいる村人たちが驚きと疑いの声を上げる。当然だろう。遠くにいる亀を見てもその巨体はとも飛びそうには思えない。

そもそも生物の体と言うのは大きくなればなるほど重くなっていくようにできている。これは主に筋肉の問題で、大きくなった体を

支えるだけの筋肉をつけると、その筋肉の重みが体重を増やすことになってしまうのだ。筋肉が増えれば力も強くなるように思えるが、筋肉の増加によって増えた力を、筋肉の重みを支えるのにほとんど使い切ってしまうため、大きな生き物ほど動きは鈍く、重くなるといふ性質がある。

今森を闊歩している巨大亀は明らかに飛ぶなどと言つことができような体重ではなかった。仮に『飛ぶ』ではなく『跳ぶ』だったとしてもあの巨体で跳び回ること自体があり得ない。

「どついつことだ？」

あまりの証言に、智宏も思わず疑問を口にする。目の前の少年の言うことを嘘と考えることもできるが、それを疑うのはさすがに性急すぎる。

それになにより、智宏には一つ気にかかっていることがあった。

(さっきの魔力、あれが何か関係しているのか?)

先ほど気功術の検証中に感じた魔力。もしそれが森に見える巨大な陸ガメを飛ばした要因だとしたらどうだろうか？ そんな思考が智宏の中で芽生える。

(もしそうだとしたらあのカメはなんだ？ 誰かが意図的に送り込んで来たってことか?)

智宏の心中を何とも言えない嫌な予感が襲ってくる。それがもし本当だとしたら誰が、どうやって、何のためにやったのか。そのどれもがわからないという事態が余計に智宏の不安を掻きたてた。

だがそんな不安は、直後に響いた汽笛のような音にかき消される。

「な、なんだ？」

「甲殻竜の鳴き声だよ」

驚く智宏に、レンドは冷静にそんなことを伝えてくる。それと同じに一度消していた魔方陣をもう一度展開し直し、ミシオに差し出しながらさらに言う。

「村の戦士たちが甲殻竜への攻撃を開始したようだ」

「攻撃!？」

「ああ。あんなのに居座られちゃおちおち狩りにも行けないしな。それに遠征しなくてもあいつを狩れるチャンスなんてめったにないから。そんなことより見てみるよ」

慌てて智宏も魔方陣を展開し、先ほどの場所を見直す。すると、先ほどより若干視界が良くなった森の中で、先ほど見た甲殻竜が再び雄叫びを上げるのを見てとった。

再び汽笛のような音が響く。

「うわっ! ……いったい向こうではどうなってるんだ? 村の戦士ってブホウさん達のことだよな?」

「ああ。村の男はほとんど総出で向かってるからな。とは言ってもここからじゃ見えないが」

「何、してるの?」

「ん? ああ、戦士たちがかい? 彼らは今、足元で甲殻竜にちよ

つかいを出してるのね」

「は？」

言われて、しばし智宏は意味がわからずポカンとする。たしかに言われてみれば甲殻竜はしきりに足元を気にしているようにも見える。

だが、甲殻竜相手にそんなことをしていったい何の意味があるというのか。むしろ甲殻竜の怒りを買って攻撃されるだけなのではないか。智宏のそんな疑問はしかし、直後には解答を導き出した。

「そうか、罠か」

「そう、そのとおり」

恐らく戦士たちは、巨大な甲殻竜の気を引こうとしているのだろう。何しろあの巨体だ。正面から立ち向かって勝ちはない。

「大体、大型を狩るときの基本戦術ってのは、足の速い戦士たちによる攪乱と、その後の必殺の技を持つとどめ役の戦士による一撃なんだよ。足の速い戦士が引きついたり、動きを止めたりしている間に、とどめ役が必殺の一撃を叩き込む準備を整え、隙を見て死角から走り寄って、急所に一撃打ち込んで仕留める」

「なるほど。確かにあんなのでも生物である以上急所はある訳だ」

「でも、それって、危険なんじゃ……？」

確かに、正面から戦わないだけましかもしれないが、それでも罠など危険が付きまとう。流石に一人でやっているわけではないだろ

うから互いにフォローし合えば一人だけ狙われるような事態は避けられるかもしれないが、それでも危険なことには変わらない。

「実際危険だよ。村でも年に何度かああいう大物を狩りに遠征するんだけど、どんな獲物を狙っても必ず怪我人は出る。それも戦士として再起不能になるほどの怪我也珍しくないし、悪ければ死人が出ることもよくある話だ」

「死人つて……！！ そんな危険を冒してまであんな獲物を狙わなくちゃいけないのか？」

「むしろああいう大型の方が危険が少ないんだよ。図体が大きい分一回の狩りで得られる肉なんかの資源が多いから、ほかの獲物を狙うよりも相対的な死亡率は低いのだ。昨日の竜^{ダイノロイド}人を百匹狩るとあれ一匹で済みますの、どっちが安全かって話なのさ」

レンドの話に智宏は絶句する。見れば、ミシオも同じような顔をしていた。流石にミシオにもこの話はショッキングな話だったらしい。

「まあ、だからと言って今回怪我人が出るとは限らない。何しろ今回は普通大型が現れないこの森での狩りだ。木が邪魔して甲殻竜の動きを制限している。まあ、走りにくいって点ではこっちも同じだろうが、地の利はこっちにあるだろう。それに……」

言いかけ、レンドはふと怪訝な表情を見せた。だが、智宏がそれについて質問する前に再び口を開く。

「それにあの甲殻竜。ずいぶん動きが悪いみたいだしな」

「え……？」

言われて魔方阵越しに再び甲殻竜を観察し、レンドの言うことを何となしに理解する。確かに視界の中にいる甲殻竜は動きが悪い。あの巨体であることを差し引いても先ほどからほとんど動いていないのだ。と言うよりも、

「あのカメ、右後ろ足を引きずってる……！」

ミシオの言うとおり、甲殻竜は明らかに足を引きずっていた。村の戦士たちが傷付けたのかとも思ったが、それにしても随分と早すぎる。そもそもそんなことができるのなら、ほかの足や首などの急所を狙ってもいいのではないか？

（まさか、飛んで来た時に痛めたんじゃないだろうな……？）

ふと頭をよぎった可能性に、智宏は再び不安を覚える。だが、もし本当に飛んできたのだとしたら、はたしてあの巨体で足を傷めるだけで済むだろうか。むしろ本当に飛んできたのなら、着地できずに死んでしまう可能性の方が高いのではないだろうか？

（いや、待て。もし木がクッションになってたら……？ それにあいつには甲羅があるし、まさかな……？）

と、智宏が甲殻竜の甲羅に注目したとき、その甲羅の上に誰かの人影が現れた。

「……え？」

智宏はその見覚えの姿に絶句する。そこにいたのは鱗だらけの鎧

をまとい、大剣を背負ったブホウの姿だった。

「早いな。もう止めにかかるか」

レンドの発言に、智宏はようやくそれが止めを刺すための行動なのだと悟る。どうやらブホウは動かない右後ろ足から甲羅によじ登ったらしい。

「流石だな。あの場所なら気付かれにくい上に気づかれても踏みつぶされる心配がない」

「でも、振り落とされたりしないのか？ あんな場所、甲殻竜が身震いしただけで落ちかねないぞ？」

「いや、甲羅がごつごつしてるから振り落とされにくいんだよ。振り落とされそうになっても捕まる場所がたくさんあるからな。……それに、あの人なら揺れようがひっくり返ろうが関係ない」

「え？」

智宏がレンドの言葉に疑問を訴える直前、まさにそれを証明するような事態が起きた。甲羅の上で背の大剣を引き抜いたブホウの体が、瞬く間に視界から消え去ったのだ。

「あれ!？」

「もっと首の方だ智宏!! もう動いてる!!」

「え?」

レンドに言われて慌てて視界を動かすと、ようやく何が起こったのかが分かった。ゴツゴツとした甲羅の上を、ブホウが剣を片手に猛スピードで走っているのだ。

「速い！！」

恐らくは気功術によるものなのだろう。その速さは明らかに人のそれではなく、以前遠目に見た馬のそれに匹敵するほどだった。

「でも、あんな場所を、あんなに速く走ったら……！！」

ミシオが心配そうな声を上げるのを聞き終わる前に、再びブホウの姿が消え去る。見失ったのかと慌ててその姿を探そうとした智宏は、しかしその直後に甲殻竜の甲羅が激しく揺れるのを見てとった。

「まさか落ちたのか！？」

「いや、ちょっと上を見てごらん」

言われて視線を甲羅から上にずらすと、そこには先ほどとなんら変わらぬブホウの姿があった。どうやら上に跳ぶことで甲羅の揺れから逃れていたらしい。

「この世界の戦士たちはね、この世界に住む生物の動きというものを知り尽くしているのさ。どんな生き物にはどういう動きができるか、どういう時にどういう反応をするか。特に戦士長であるブホウさんなんかは、それを直前の動きで予測できるくらいにまで理解している」

レンドの言葉を聞くなかでも、ブホウはみるみる首へと迫りその

走りを加速させていく。甲羅の全面の傾斜にさしかかると、その走りは半ば落ちてきているようなものに変化した。

それを合図にするように、ブホウは落ちながらも甲殻竜の首筋へと何かを投げつけた。それが何かまでは分からなかったが、それをもたらした効果は絶大だった。首筋を突然刺激された甲殻竜は、驚きのあまり反射的首を甲羅の中に引っ込めようとする。

だが、その動きはまさにブホウの思惑通りだった。頭を引っこめようと縮められた首は、その動きによってちょうどブホウが落ちようという位置に頭を運んでいく。まるで自ら頭を差し出すように。そして、それに対するブホウの動きには一瞬の停止もない。ただ無慈悲に、右手に持っていた剣を振りかぶり、頭の上で左手と交差するように構えて落ちていく。

次の瞬間、ふり降ろされたブホウの大剣が、甲殻竜の頭蓋を叩き割った。

「うわっ!!」

魔方陣越しに目に飛び込んできた凄惨な映像に、思わず智宏は魔方陣を構える手を外す。返り血と脳漿にまみれた人間の姿など、あまり直視したい光景ではない。

「さすがブホウさん。決して柔らかくはない甲殻竜の頭も【頭蓋割】すがいわりで一発か」

「【頭蓋割】すがいわり?」

「ブホウさんが習得してる技の一つさ。上段から振り下ろす動きで、相手の頭を狙うから【頭蓋割】すがいわりって訳。何でも振り下ろす動きにおける最大威力を目指した技らしいよ」

「な、なるほど」

「……………？ ……待って！」

しかし感心するのもつかの間、レンドの魔方陣越しに森を見ていたミシオが声を上げる。智宏としてはあの光景を見て目をそらしていないことに驚いたが、ミシオの表情はそれどころではない異常事態を伝えていた。

「様子が、おかしい！！」

言われて智宏ももう一度魔方陣を目の前に構えて先ほどの場所に焦点を合わせる。そこにいたのは血にまみれたあまり見たくはないブホウの姿だった。ただし、その表情には焦りの色が浮かび、地面にうずくまって息絶える甲殻竜の下に向かってなにやら指示を飛ばしている。

「まずいな。あの様子じゃ誰か怪我人が出たのかもしれない……………！」

同じように魔方陣を除いていたレンドが、焦りを押し殺したようにそう呟いた。

13：悪意の足跡

死亡者なし。負傷者三名。うち一人は再起不能。それが甲殻竜との戦いで出た被害の内訳だった。

負傷したのは、囀役の若者二人と、ベテランが一人。そのうち再起不能になったのは若者の内の一人だった。右足がつぶされて使い物にならなくなったらしい。

「……くそ、マジかよ……、この世界は……!!」

先ほどまで検証に使っていた広場で石に座り、目の前で昨日と同じように訓練に励む少年たちを眺めながら智宏は思わず悪態をつく。思い出しただけでも寒気がする。運ばれてきた名前も知らない怪我人の蒼白な顔色。それを見守る周囲の人々の沈痛な顔。そして、つぶされて血にまみれ、骨らしきものが飛び出した右足。

それでも、この被害はまだ軽い方らしい。聞くところによるとこの村では獲物が少ないときなどに森の向こうまで大型を狩りに遠征に行くそうだが、そのときはこんなものでは済まないそうだ。負傷者が出ることなど当たり前だし、死者が出ることも珍しくない。今回は死者が出なかったうえ、村から近かったためすぐに治療ができたぶん状況としてはむしろ良かったらしい。

「ああ、本当にここは僕の世界とは違う……!!」

ここが異世界なのだということは一昨日までで飲み込んだ。危険な世界なのだという事は昨日のうちに実感した。だから、智宏が今シヨックを受けているのはまったく別のことがらだ。

智宏がシヨックだったのは、これだけ危険の多い世界を、死傷者が当然のように生まれるという日常を、この世界の人間が当然のも

のとして受け入れているという事実だった。話には聞いていたその事実は実感として得られるとまた一段と重くのしかかってくる。

智宏の世界ならば大きな悲劇として語られるような事象を、この世界の人々は当然のものとして受け入れる。悲しまないわけではない。ただこの世界では珍しいことではないというそれ自体が悲劇のような現象を、まるで普通のことのように受け入れているというだけだ。

「僕は、本当に恵まれてたんだな……」

自分がいかに恵まれた環境で、様々な物に守られていたのかを痛感する。知識として知らなかった訳ではない。地球でも国によっては紛争で日常的にテロや紛争が起きているような国があるのも知っているし、そうでなくても飢餓や災害、地雷などによって日常的に人が死傷する場所についても知識としては知っていた。

だが、それは所詮ただの知識であり、遠く離れた場所の自分には関係ない出来事としての知識だ。ただの知識として知ると、生でそういった世界と接するのでは感じる衝撃がまるで違う。

と、智宏が世界の違いによるショックに打ちのめされていると、すぐ目の前で誰かが立ち止まるのを感じた。

どことなく気品のある、見覚えのある細見の女性、ハクレンの妻のリンファが大小二つの籠を重ねて抱えて立っていた。

「リンファさん……！！ どうしてこんなところに？」

「いえ、洗濯物を干しに行こうと思ったたら貴方がいたので。そういうあなたは？」

「いえ、ちょっと考え事を」

「そうですか。噂通り辛気臭いんですね。男が廃りますよ」

「……」

智宏自身は、リンファとはあまり会話したことが無かったのだが、どうやらリンファはハクレンと似た者夫婦らしかった。

そんなことを考えていると、ふとリンファが抱える洗濯物と思われる籠の中に目が行く。そうして初めて智宏は、その中身が見覚えのあるものであることに気がついた。

「あの……、もしかしてそれは……」

「ああ、これは昨日あなた方が着ていた服です。一晩では乾かなかったので今から干します」

「ああ、やっぱり……」

予感の的中に智宏は頭を抱えなくなった。見ず知らずの人間に自分の服を洗濯させて、それをすっぱり忘れていたのだ。自分の甘えを自覚して羞恥心で内心悶絶する。

「……手伝わせてください」

「え？ ……でも別に手伝っていただくことではないのですが？」

「いえ、何から何までやってもらっては申し訳ないので」

そう言っただけで智宏は上に乗っている籠をリンファの腕から取り上げる。必然的に小さいほうの籠しかとることができなかったが、本人が渡してくれなかったので仕方がない。

「……そうですね。では、少しお願いしましょうか」

智宏に籠を持って行かれたせい、しばしの間考え込むような仕事をさせていたリンファが、仕方がないとばかりに嘆息して歩きだす。手伝うとは言ったものの、この村の仕事のやり方など智宏は知らないのについていくしかない。智宏自身、ふがないと思うがそれでもなにもしないよりはましだった。

「……あの、さっきの人の手当では、もう終わっただんですか？」

「え？ ええ。幸い二人は怪我也軽かったですし、一番怪我の重かった方に関しては、できることが限られていましたから」

「……そう、ですか」

手当の仕方については、レンドや周りの人々の話でだいたい察しがついている。恐らくではあるが、使いものにならなくなった右足を切断することで彼は生存することだろう。そんな大仕事をするには随分と早い気もしたが、この世界の医療技術には気功術という未知の要素もある。これに関しては智宏が気にすることではあるまい。

「やはり、堪えていますか？」

「え？」

「以前にも異世界の方が、そんな表情をしているのを見たことがあります。どうやら異世界の方にはこの世界は随分と暮らしくいよ
うで……」

「ええ。そうですね」

特に感情を込めるでもなく、淡々と述べるリンファに、智宏は距離を感じながらも小さくうなずく。思えば、この四日間の中でもここまで住む世界の違いを感じたことはなかった。

「あなたたちにとっては滅多にないことかもしれませんが、この世界では珍しくもないんですよ。特に男の方はこんなことしょっちゅうです。特にこの歳にまで生きているともう慣れてしまえますね。同い年の方々はもうほとんどいなくなっていますから」

「それって……」

リンファの話の意味を悟り、智宏は再び絶句する。考えてみれば当たり前の話だ。こんな世界の人間の平均寿命が日本ほど長いはずがない。実際、思い出して見てもリンファ達と同じ世代など、ハクレンやブホウを加えても数人しか見かけなかった。

「私達にとってはそれが当然です。正直、異世界の方々と出会うまではそうでないことがあるのだとは考えもしなかった。でも、一つだけ勘違いしないでください。私たちは人が傷付き、死ぬことに慣れていますが、決してそれを容認しているわけではない。少しでも被害を減らそうと皆が努力しています。より良い形で生きていく。そういう戦いはどこの世界でも同じでしょう？」

「……はい」

投げかけられたリンファの言葉をかみしめながら智宏はその後を歩く。

「どうやら自分が気を使わってしまったらしいと気がついたのは、洗濯物を干し始めた後だった。」

「取りあえずこんなものでいいでしょう」

そう言っただけでリンファは仕事の終了を告げた。

時間的には一時間はたっていない。村はすでに起床時間に入っており、村の中ではすでに男たちが訓練を始めている。どうやらこの村では洗濯物を干すスペースが一か所に集中しているらしく、周りを見渡しても同じように洗濯物を干しにきた女性たちが何人もおり、時折こちらをチラチラと見ていた。

「皆さんの目が気になりますか？」

「……ええ、まあ」

「肝っ玉の小さい男ですねえ」

「……」

悪気の全く無さそうな笑顔で酷いことを言うのはやめてほしいと思った。だが、ひよっとするとハクレンと同じく本当に悪気が無いのかもしれない。

「まあ皆さんが気にするのはわかります。あなたたちは異世界人という時点で珍しいですし、男性がこういった仕事をするのも珍しい

ですから」

「……珍しいんですか？ 男がこういう仕事をしてるのって？」

「ええ。男の方でこういう仕事をする者はまずいません。いれば腑抜けと思われませう」

「ふ、腑抜けですか？」

智宏が内心先ほどから向けられている視線が好奇ではなく、蔑みだったのではないかと恐れていると、リンファが「安心なさってください」と声をかけてきた。

「昔ならともかく、今はレンドさん達との交流もあつて異世界の方には異世界の方の習慣があることは判っていますから。同じ異世界人のダインさんなど元の世界で物作りをなさっていた方のように、この村の女性に交じって異世界の品を作っているくらいです」

「ああ、そう言えばこの世界では物作りは女性の仕事、でしたっけ」
言われて智宏は昨日レンドが言っていたことを思い出す。確かダインは魔力を流すだけで魔術を使える道具、『魔石』の職人だったはずだ。

「ええ。今でこそダインさんが作る異世界の品々は村の者の間で人氣が高いですけど。昔は男が物を作るなど考えられませんでした」

「神の意志に反すると？」

「ええ。神ではなく天ですけど。……ですがわたくしたちはすでに

受け入れました。なにぶん異世界の（……）事情ですので」

そう言ってリンファは穏やかに微笑む。確か異世界の（……）事情であるというのは宗教上の対立を回避するいい要素かもしれない。自分の世界とは成り立ちも存在する神も違うという考え方をすればある程度の宗教的な差異は飲み込めるかもしれない。

しかしながら智宏はそれが口で言うほど簡単だとは思わなかった。人間というものは自分と違う文化や風習に対してお世辞にも寛容とは言えない生き物だ。ましてやそれが宗教に基づく物ならなおさらだ。それが、解決しているというのはにわかには信じがたいくらいの話だ。

（それでもこうして異世界人がこの世界に溶け込んでるってことは、解決はしてるってことなのかな。それができた二つの世界の人間がすごいのか、はたまたそのダインって人の技術がすごいのか、あるいは魔術のおかげか……）

人間を寛容にする一つの要素は、その人間が寛容になることで得られる利益だ。異世界でもそれが当てはまるなら、異世界人の人格以外にもそう言う要素が重要になってくる。

そんなことを考えながらも一度こちらを見る人々の様子を観察して見る。確かに彼女らの反応は単純な好奇心から来るものようだ。

「……あれ？」

ふと、この世界に来て何回目になるか分からない違和感を感じた。しかし、今回の違和感は今までと少し違う。

（なんだ？ このなにかが欠けているような感覚は？）

しかもその違和感の根幹には何となく覚えがある。つい最近、同じようなことを考えたような気がするのだ。

湧き上がる違和感の正体を必死で考える。ここでだけではない。他の場所でもこの違和感があったような気がするのだ。

「また考え事ですか？ 異世界人というのは女々しいですね」

「……」

智宏の中に異世界人の寛容さに対する疑問が間欠泉のように噴出しているのをしり目に、リンファは籠を拾って抱える。

「さて、それでは戻りましょうか。家にまだ怪我人がいますし」

「そういえば、僕らが寝起きしている場所って病室ですよ。先ほどの三人は今そこに？」

「そうですね。そう言えばあなたたちがすでに起きていてくれました。かかりました。特にレンドさんなど、あの方が早起きするなどほとんど奇蹟です」

「そこまでですか……」

レンドへの信用のなさに智宏は呆れかえる。どうやら彼の寝坊グセはかなり前からの物らしい。ここまで来ると彼が早く起きたから甲殻獣が降ったのではないかとすら思えてくる。

「さて、それでは行きましょう。すいませんがそちらの籠を持ってきていただけますか？」

「あ、はい」

籠を抱えるリンファに従い、智宏もすぐそばにある籠に手を伸ばす。と、そうしたところでふと先ほど干したばかりの洗濯物が目に入った。そこには自分のだけでなくレンドやハクレン、ミシオやリンファの物も当然ある。智宏の物に関しては肩の布地が切り裂かれたはずだが、先ほど干した時には、すでにその部分は繕われていた。

「……あれ？ これ昨日ミシオが来ていた服ですよな？」

「はい？ ああ、そうですね」

袖がちぎられて半袖になったような奇妙な形のワンピース。スカートの部分も両側にスリットが入ったように裂け、腰の両側に奇妙な形の袋、加えて何に使うのかわからないベルトがあちこちについている。

先ほどは自分やレンドなどの男ものの服を中心に干していたため、じっくり見ることもなかったが、改めてみてみると変な服だった。

（まあ、変なのは着ていた本人も同じか……。それとも異世界人はあれが普通なのかな？）

実際ミシオという少女は智宏の価値観からすればかなり変な人間だ。そして、かなり芯が強い。異世界に来るといふ異常事態を智宏より過酷な状況にありながらあっさりと受け入れているあたり相当な芯の強さといえる。

だが同時にどこかずれた印象もあちこちで見かける。世界の違いによるずれなのかとも思うので実際はたいしたものでもないのかもしれないが、それでも何となく異世界においてもずれた人間なのではないかと思えてならない。

そんなことを考えながらハンガーにかかった服を何となしに観察
していて、

不意にこの服の正体に気付いた。

「……え？」

同時に氷の塊を飲み込んだような重い悪寒に襲われる。身を襲う
圧倒的な不安感。信じられないというより信じたくない可能性。

(まさか……!!)

自分の中に芽生えた心あたりを否定するように震える手で服をつ
かみ、観察し直す。智宏の心は何かの間違いであることを底の底か
ら望んでいた。

だが間違いない。解ってしまえばこれほど納得のいく回答もない
し、そう見えてしまえばもう他の物には見えない。

「……？　どうかしましたかトモヒロさん？」

「……これ、拘束衣じゃないか!？」

智宏とて実際に見た経験がある訳ではない。記憶にあるのは外国
の犯罪映画で見たものだ。着せることで着た人間の自由を奪う衣服。
眼の前のそれは人を拘束する機能の大半が破壊されていたが、それ
でももし復元したらその機能を存分に果たせるだろう。

例えば袖、服がちぎれて半袖になっているが、もしもこの袖の部
分が腰の袋　だ(・)と(・)思っ(・)て(・)い(・)た(・)
(袖の(・)先と繋がっていたら、腕などとても動かせない。無く
なった部分にベルトがついていれば完璧だ。

スカートのような部分だってスリットのような裂け目が無ければさぞ動きにくいだろうし、ベルトを締めれば立ち上がることもすらできないだろう。

丈夫で着心地の悪そうな生地とてそうだ。これを着せた人物は着る人間の着心地など端から考えていないのだ。ただ破れない強さだけを求めている。

人を拘束すること、人を動けなくすこと、人の自由を奪うこと、何より人の尊厳を奪うこと。それを突き詰めた一つの結果が目の前にあった。

(……ちよつと待て、落ち着け、冷静になれ、考えろ、思考をやめるな……。こいつが意味することはなんだ?)

必死に自分に言い聞かせて思考する。先ほどから不気味な高鳴りを続ける自分の心臓を鎮めるべく深呼吸を繰り返す。

なぜハマシマシオがこんなものを着ているのか？ いつから着ているのか？ この世界に来てからか？ 自分の世界にいたときからなのか？

昨日話したとき、レンドへの警戒をミシオ自身が「過剰反応だった」と言っていた。だがそもそもいったい何に対して過剰に反応していたのか？ いや、もつと言えどもそもなぜミシオは出会ったばかりの人間の心を読もうとしたのか？

それは警戒し(・)な(・)く(・)て(・)は(・)い(・)け(・)な(・)い(・)か？
(・)な(・)い(・)相手がいたからではないか？

そしてその異常事態はまだ続いている。それは異世界に来ている智宏やレンドとて同じだが、ミシオのそれは他の異世界人とはレベルが違う。

明確に警戒すべき対象が、もつと言えれば敵がいる。だからこそ初

対面の人間をテレパシーで調べて味方がどうかを判断したり、レンドの内容の分からない隠し事に過剰反応したりしたのだろう。そんな人間が簡単に警戒を解いたりするものだろうか？

「……モヒロさん、トモヒロさん！！ どうしたというのですか？
コウソクイとは何です？」

「え、あ……！！」

リンファの声に、智宏はようやく我に帰る。だが、それでもどうしても落ち着いていることなどできなかつた。

現在のミシオの心境を考えれば、ほとんど疑心暗鬼になっていてもおかしくない。考えようによってはテレパシーがあるとは言え良く智宏だけでも信用できたと思うくらいだ。

ここにきて再び自身の認識の甘さを思い知る。ミシオの抱える事情を甘く見ていた。なぜ別の世界の人間が自分とおなじような危機感しか抱いていないなどと思ってしまったのかという後悔が押し寄せてくる。

事と次第によっては、ミシオがまだ狙われている可能性も、それを警戒したミシオが誰かと衝突する可能性もあるのだ。

「すみません！！ 急用ができました。急いで家に戻ります」

「えっ！？ トモヒロさん？ 一体どうしたと」

悪いと思いつつもリンファに籠を押し付け、智宏は大急ぎでハクレンの家へと走り出す。すれ違った村の女性たちがこちらを見てその表情を驚愕に染めるがそれすら気にする余裕はない。どういつ訳かどうしようもないいやな予感が智宏の中で渦巻いていた。そして智宏が広場にさしかかったあたりでその予感は的中した。

「……っ！！　なんだこの魔力！？」

ハクレンの家のほうから気功術のものとも魔術のものとも違う異質な魔力を感じる。周りを見れば村の女性たちも、洞窟付近に集まっている武装した男たちも、訓練をしていた子供ですらそれに気付いたらしく、皆がハクレンの家に注目し始めていた。

次の瞬間。

「なっ！！」

ハクレンの家から勢いよく黒い影が飛び出して、智宏のいる方向に猛烈なスピードで突っ込んできた。

否、智宏のいる方向とは若干ずれてその背後にある村の入り口を目指しているように見える。

「なんだあれっ！？」

智宏が想像すらできていなかった異変に呆然としてみると、不意に影と目があったような気がした。

すると、いきなり影が方向を変え、今度こそ本当に智宏めがけて突進してくる。

「う」

智宏が悲鳴を上げる間もなく、影は智宏に激突する。しかし智宏が覚悟したほどの衝撃はなく、代わりに目の前の景色が急激に遠ざかった。

「ええ！？」

数秒かかって智宏はようやく状況を理解する。影は智宏を抱きかかえて走っているのだ。それもほとんどスピードを落とさずに。

「な……、え……、あ……？」

あまりに急な展開に混乱する智宏は自分を抱える腕を見て絶句した。黒い影のように見えた原因は黒い煙だった。それもただの煙ではなく魔力の煙らしく、半透明で煙の向こうが透けて見える。そしてそれだけでも十分異質な煙の向こうにあったのは見覚えのある腕だった。

それは人一人を抱えるには余りに細い、華奢な少女の腕。

影の正体はハマシマミシオだった。

次の瞬間、智宏の危機感は予想を圧倒的に超える速度と規模で的中し、それと同時に二人は村を飛び出した。

14：盡く存在

「……………うっ……………、ハア……………ハア……………ハア……………」

苦しそうな呼吸の音と共に智宏は我に帰った。どうやらここは森の中らしく、目の前には背の高い木が視界いっぱい広がっているし、尻もちをつくような姿勢の智宏の手には森の湿った土や葉っぱの感触がある。

混乱した頭でどうにか状況を整理する。記憶をたどり、どうにか思い出せたのは、村を飛び出して絶壁の細道を後ろ向きに抱えられたまま駆け降りたことまでだった。思いだすだけでゾツとする、安全装置のないジェットコースターのような記憶だったのでそこから先は気絶していたのかもしれない。

「……………ハア、……………ハア、……………っ、ゴホッ、ゴホッ、ウッ……………」

漠然とした思考が、隣で咳きこむ声によって完全に現実に取り戻される。苦しそうな少女を見て智宏は慌ててその背中をさすった。正直に言えば他にどうしていいのか分からないほど混乱していた。

『……………ありがとう、とっ』

「え？ あ、ああ」

流石にこの状態では話すことが難しかったのだろう。ミシオは言葉ではなく通念能力^{テレパシー}、おそらくは【伝心】と呼ばれる力によって意思を伝えてきた。それ自体に他意はないのだろうが、智宏には世界の違いを思い知らされたように感じられる。

「……大丈夫か？ ずいぶん苦しそうだけど……」

『うん。少し息切れした、だけ』

確かに息切れのようだが、智宏にはそれだけには思えなかった。先ほどミシオの体を覆っていた黒い煙のような魔力がそう感じさせるのかもしれない。

「……あの煙みたいなのはなんだ？ あれものそっちの世界の超能力なのか？」

『能力……、ではない、たぶん。能力は基本的に、一人一系統のものしか使えないから』

「じゃあ、あれは……？」

『わかんない』

「わからないって……」

『あそこから逃げて森に出るとき、偶然気が付いたから』

その言葉に智宏は反射的にミシオの背から手を離した。今ミシオは確かに『あそこから逃げて』と言ったのだ。『あそこ』というのがどこのどのような場所かは推測するしかないが、ミシオが警戒していた相手であることは明らかだ。それはつまり、

(こんな娘にあんな服を着せていた場所……！！)

今も村に干してある拘束衣を思い出して智宏は唾を飲み込む。自

分の予想が当たっていたことを喜ぶ気にはとてもなれない。間違いなくいま直面しているのは智宏の人生の中でもかつてない最大級の悪意、その足跡だ。その事実が智宏の思考をさらに混乱させる。

「少し……、落ち着いた。……そろそろ、行こ」

「行こうって……」

ミシオは言いながら立ち上がりはしたが、まだ明らかにふらついている。それにどこに行こうというのか。とても他に行く場所があるようには思えない。

(いや、違う……!!)

行くあてなど本当にないのだ。何か考えがある訳でもなければ、打開策がある訳でもない。ただひたすら逃げないと安心できない。もっと言えば一つのところに止まることが怖いのもかもしれない。ただ恐怖に駆られて動こうとしている。それも間違いなく危険な森を。

(……追い詰め、られている)

考えてみれば当たり前の話だ。智宏より一つ年下の少女が危険な異世界で明らかに非人道的な何か(・・)をされていたのだから。むしろ良くここまで平静を装えたと感心するべきかもしれない。

「待てよ！　こんな森に行くあてもなくさまようなんてそれこそ自殺行為だぞ」

慌ててミシオの腕を掴み、森の奥へと進む少女を引きとめる。だがそうしてみても初めて目の前の少女が小さく震えているのがわかっ

た。

「……でも、あの村は……、あの村にはあの人が……」

「あの人って……、レンドのことか？ レンドと何かあったのか？」

混乱した頭で、少女が警戒していた唯一の心あたりであるレンドの名前を出す。案の定ミシオは小さくうなずいた。

「さつき……、あの人と話したの。……そのときちょうど……その、握手する機会があつて、……だから」

「心を読んだのか？」

やはりミシオの中でのレンドに対する疑いは払拭できていなかったらしい。またもミシオは小さくうなずいた。

「あいつ何を考えてたんだ？ 内容によってはただの」

『 本国に報告しなければ) () 』

「……え？ ……本、国？」

【伝心】によって伝えられたレンドのセリフ。智宏には最初、それが何を意味するのか分からなかった。

ここはレンドにとっても異世界だ。それなのにレンドの本国に報告するというのはどうということなのか。

「なんだ……、それ……、どういう意味だよ……？」

吐き出した言葉とは裏腹に、智宏の頭が言葉の意味を理解し始める。もし本当にそんなことを考えていたとしたらそれが何を意味するのかも。

思わず掴んでいたミシオの腕を離す。もし異世界に報告という名の連絡ができるのならなぜそれを教えなかったのか？ 連絡ができるのなら行き来もできるのではないか？ いや、そもそも、

レンドは異世界に帰る方法を知っていて、それを意図的に隠しているのではないか？

「……………まさか」

智宏の中に次々に疑念が浮かんでくる。しかもそればかりで一向に答えの方は出て来ない。確かだと思っていたものが崩れ去ったような、地面だと思っていたものがいきなり水面に変わり、何も無い海に投げ出されたような感覚。

「待て、待ってくれ。それにしただってレンドを疑うのは性急すぎる。何かの勘違いって可能性もあるんだぞ」

「……………そう、かもしれない」

「だったら」

「でも、だめなの……！」

ここに来て、初めてミシオが叫ぶ。声を震わせ、抑えられない言葉を吐き出すように。

「ダメ、なの……！！ 勘違いかもしれないのは、分かっている。で

も、そうじゃないかもしれない!!」

「そうじゃないかもって……!!」

「どうしてもそう思っちゃう……!! 信じたかって思ってるのに……、疑いたくないって思ってるのに……、どうしてもあの白衣の人たちのことが頭から離れない。もしかしたら親切にするふりをしてあの魔方陣の部屋に連れて行こうとしてるんじゃないかって!!」

「……なん、だって……?」

ミシオの発した白衣と魔方陣という言葉に、智宏の心臓が跳ね上がる。

思い出されるのは、今朝方目覚める直前まで見ていた夢。夢にしては生々しい感情を伴ったその悪夢の内容は、いまミシオが言っていることと明らかに合致している。

白衣の男たち、魔方陣のある部屋、そしてミシオが来ていた拘束衣と先ほど使った黒い霧のような魔力。

(まさか……!! あの夢は……!!)

ことここに到り、ようやく智宏は朝の夢の正体を理解する。目の前の少女にはあるのだ。自身が見ていることや感情を他人に見せることのできる能力が。

(あれが、敵か……?)

結論はあまりにも簡単だった。むしろ今までどうして気がつかなかったのか不思議なほどに。

(あいつ等がこの娘の敵なのか……!?)

気付けば掌が冷や汗でびっしょりと濡れている。周りの音がやけに大きく聞こえてくる。その中には自分の心臓の物らしき鼓動も交じっている。

頭はほとんど真っ白になっているというのに、ただ漠然とした危機感だけが大きくなっている。

そしてだからかもしれない。それ(・・)が危険なものだと認識できたのは。

「え?」

唐突に後ろから発せられた魔力を操作する感覚に、智宏は思わず後ろを振り向く。すると森の向こうに魔方陣らしき光が見えた。

「なんだ? ……っ!」

次の瞬間、智宏はミシオに覆いかぶさるように地面に倒れこみ、同時に自分の判断が当たっていたことを知った。なぜなら直前まで二人がいた位置を野球ボール大の火の玉が通り過ぎ、背後にあった木にあたって猛烈な破裂音を立てて爆発したからだ。

(なっ!! 今の!?)

攻撃魔術という言葉が頭をよぎる。それと同時に反射的に倒れていなければ二人の頭が吹き飛んでいたかもしれないと知ってゾツとする。

そしてそれで終わるはずもなかった。魔術が放たれた方向から二人の男が歩いてくる。

「あれ？ はずしちまったかあ？」

「おい、アルダス。今の、他の術式だったら確実に殺せていたんじゃないか？なぜあんなチンピラが使うような初級術を使った？」

「……相変わらずうるせえなウンベルト。いいじゃねえかたまには遊んでも。こちらら、こんな未開世界まで来させられて、ヤバげな森を探しまわってでうんざりしてるんだ。お前がそう言うと思つて当たれば死ぬように撃つてやったんだから、それでいいにしがれ」

「……ならせめて取り逃がすなよ。せつかく諦めかけていたところを村から出て来てくれたんだ。ここで取り逃がしたらいい笑いものだ」

そんな会話をしながら二人の男が森から現われる。一人はアルダスと呼ばれた金髪を刈り込み、にやにやと笑う若い男。もう一人はウンベルトと呼ばれた黒い髪をドレットヘアにセットした大柄な男。そして何より重要なのは二人とも耳が長く、尖っていたことだ。

「んじゃあ、相方のお赦しも出たことだし、二人とも、せいぜい楽しませてくれや。一人はどうやら同じオズ出身のようだし、そのよしみで足？くのくくらいは許してやるぜ？」

何も分からなかった。目の前の二人がなんであるかも、レンド達の意図も、それ以外のすべても。頭の中で浮かぶのは疑問符ばかりで、確かなことは何一つない。

だがそんな中でも智宏は一瞬で一つの判断を下した。

(とにかく、今は!!！)

智宏は飛び起きると同時にミシオの体を抱えて逃げだしたのだ。

「へえ……、意外に早いじゃん」

後ろからバカにしたような、感心したような声が聞こえてくるのを全力で無視する。

ミシオの体制をいわゆるお姫様だっこの姿勢に抱き直して安定させると、逃げながら必死に頭を回転させた。

（考える、思考をやめるな。疑問の答えを教えてもらおうとするからだめなんだ！！）

昨日と同じ逃走。ただし昨日と違い、半ば開き直りに近い思考能力が残っていた。あるいは昨日の反省がギリギリのところまで生きてきたのかもしれない。

（思考を続ける、自分の頭で考える！ 今すべきことはなんだ？ 何より ！）

智宏は自分の腕の中の少女を見る。抱えられた少女は智宏を驚愕したような表情で見つめていた。

（今守りたいのはなんだ！！）

その瞬間、智宏のなかで何かが吹っ切れた。体と思考が全力で逃げるために働き始める。

（相手は攻撃魔術を使える魔術師が二人。戦うという選択肢はありえない！）

背後で魔力を操作する気配を感じる。恐らくは先ほどの魔術だろう。恐怖で悲鳴を上げそうになるのをこらえて必死に思考する。

直後、思いつきに近いアイデアで、逃走する自分と追う魔術師の間に木をはさむように斜め前に飛び込んだ。

直後に爆発。だがそれは間の木にぶつかり、智宏達に危害を及ぼすことはなかった。

（うっ、くそ！ びびるなちくしょう！ ここなら、森の中なら木を盾にできる。冷静でいさえすれば！！）

無理やり自分たちにとって有利な条件を思考する。さっきまで智宏達がいた場所は森が若干開けて遮蔽物に乏しかった。だが遮蔽物の多い森の中なら相手の術式操作の気配を読んで隠れることができる。

『右！』

「っ！」

頭の中に突然響いた声と、浮かんだ魔術師の映像に反応し、とっさに右に跳ぶ。すると、直前まで智宏達がいた場所を炎弾が通り過ぎた。

（あの魔術、一度術式を展開したら魔力を込めるだけで連続で撃てるのか！？ いや、でも！）

自分の策があっさりと崩れたことに動揺しかけるがすぐに思い直す。見ると、腕の中に抱えているミシオが背後をじっと見つめていた。

どうやら先ほどの声と映像は背後を見ていたミシオが通念能力で危機を察知して知らせて来たものらしい。昨日の話から察すると【伝

心】と【感覚投影】だろう。同時に内心の激しい動揺が伝わってくるが、おかげで予定とは違うが対処はできている。

「いいじゃねえか！ 予想以上の獲物だ！！ なかなか面白いぜ！！」

「予想以上ならそろそろ仕留める。逃げきられたらシャレにならないぞ」

そこでさらに智宏は活路を見出した。それは相手がこちらを舐めきっているということだ。

だからこそこうしてこちらの逃走を許し、魔術も一種類しか使っていない。これは油断と言ってもいい。

しかもその油断はアルダスと呼ばれる男のものだけではない。

もう一人のウンベルトと呼ばれる男も、アルダスを諫めてはいるものの本気で逃げられる可能性を考えていると言うより、油断しがちなアルダス自身に不安を抱いている節がある。

ならば、その油断は付け入る隙だ。

「うお！！」

背後から何かに驚く声が聞こえると共に、ミシオから背後の映像が送られて来る。どうやら魔術に驚いて一メートル近い巨大なトカゲが飛び出したらしく、二人ともそちらに気を取られている。こんな森だ、今まで生物に合わなかった方がおかしい。

（相手が油断しているなら、その油断を引き伸ばし！）

足に魔力を集める。最悪すぐに解けても構わない。

(チャンスがあればその油断を上回る力で、)

腕の中のミシオがこちらにしがみつく。こちらがすることを讀んだのだろう。

(ぶつちぎる!!)

加減無し、気功術使用の全速力で疾走する。途端に智宏が生身では体験したことがない速度を叩き出した。

「なっ!!」

「速い!!」

背後で驚く男たちの声を置き去りにして森の中を疾走する。案の定、気功術はすぐに解けてしまったが、それでも智宏の身体能力ではあり得ない速さだった。

(やっぱり! 思った通り身体能力が上がってる!)

昨日走ったときは混乱していて気がつかなかったが、村で予想していたよりもその違いは劇的だ。今の智宏ならオリンピックを狙える。

『トモヒロ! さっきの気功術、サポートするからもう一度やって
』!

「え!?!」

反射的に疑問の声を挙げると、それに答えるように智宏の中に魔力を操るイメージが流れ込んで来る。自分が二つのことを同時に考え

ているように錯覚するがすぐにそうでないことは分かった。どうやらミシオが気功術のイメージをして【伝心】でこちらに伝えているらしい。

(っ！ そうか！！)

ミシオの意図を察して、智宏はそれを実行に移す。ミシオから送られてきた気功術使用のイメージを自分の中でまねする形で気功術を使用する。

確かに気功術は一から自分でやると動きと両立できない。だが一からではなく他人のまねをすることで手抜きをするなら負担は少ないのだ。

次の瞬間、打ち出された炎弾を、さらなる加速によって着弾地点を置き去りにして回避し、背後からの爆風も利用してさらに加速する。続く四発目の炎弾は木を盾にして、五発目を前方に飛び込むように回避し、ミシオのサポートによる気功術で全身を強化することで崩れた体制を走りながら元に戻す。

「っ！ アルダス、遊びは終わりだ！」

ファイア・バレット 【銃炎弾】じゃ当たらん。

【火炎鳥襲撃】を使え、もたもたしていると本当に取り逃がすぞ！！」

「くそつたれ！！」

『トモヒロ！ 魔方陣が変わった！ 何か来る！！』

『くそつ！！ やっぱりこのまま逃がしてくれないか。引き続き気功術のサポート頼む。気を抜くと解けそうだ！！』

智宏とて逃げるのが最善と考えてはいたものの、逃げてからどうするかについてまでは考え切れていない。このままスピードに任

せて振り切るか、どこかに隠れてやり過ぎすが妥当だろうが、どちらも実現するにはもっと相手と距離を開けなければいけない。どいう訳か上昇している智宏の身体能力や、予想外にうまく気功術を使えていること、そして何より感覚的なものまで伝えられるミシオのテレパシーは確かに計算以上だったが、結局のところこの判断は苦肉の策でしかないのだ。

(あいつ等もさすがに本気になっている。何とか振り切らないと！)

厄介なことに普段から走ることに慣れているのか、相手の足が予想以上に速い。加えてこちらは相手の魔術からも逃れなければならぬ。いくら足が速くなっても、あの炎弾から逃げ切れるわけではない。後ろで爆発していた二発にしても、相手の予想した着弾地点からスピードで上回って逃れただけで、炎弾より早く走っているわけではないのだ。

(どつちにしろこのままじゃジリ貧だ。どつする!?)

『っ!! トモヒロ!! 来た! 火の鳥が四羽!! 木をよけながらどつちに向かってくる!!』

「くそっ!!」

背後で行われていた魔力を操作する気配と、その後テレパシーで送られてきた魔術の発動を告げる言葉と映像に智宏の焦りは加速する。

映像では真ん中に四つの穴が空いたような魔方陣から、四羽の赤い鳥が飛び出して来て四方向に分かれてこちらに向かってきている。その動きは明らかに今までと違い、スピードこそ若干遅いが、厄介

なことに遮蔽物をよけながら飛んできている。

『あのアルダスって男が軌道进行操作してるのか!?!』

『トモヒロ! こっちの言う通りに走って!?!』

『わかった!?!』

ミシオの言葉に智宏はそう応じると、引き続き前だけを見て走る。正直に言えば緊張状態で走り続けているため、息が乱れ、油断していると地面の凹凸に足を取られそうになり始めている。炎鳥を見切つて回避するための判断を下す余裕はもうなかった。

(できるだけ遮蔽物の密度の濃い場所を選んで、あとはミシオに任せられない)

『左!?!』

「っああ!?!」

指示に従い思いきり左に方向転換すると、背後から迫っていた炎鳥がさつきまで走っていたコースを通って地面に激突した。だが、二人にとって予想外だったのはその威力だ。その威力は先ほどの炎弾が遊ぶためのものだったことを表すように強い爆発を引き起こし、二人をまとめて吹き飛ばしたことだ。

「っっ!?!」

「ああっ!?!」

吹き飛ばされて地面に叩きつけられ、その痛みに呻く。

(まずい！)

考え方によつては至近距離で爆発してこの程度で済んだことを喜ぶべきかもしれないが、そんな余裕はない。最初の一発で動きを止められたという事実には危険を感じて無理やり体制を起こすが、背後には既に二羽目の炎鳥が迫り、そして別方向にも三羽目と四羽目がそれぞれ控えている。さらにその向こうにはウンベルトも迫ってきている。術式の操作に意識を割いているアルダスを置いて、距離を詰めて来ていたらしい。

それでも再度逃亡を図ろうと近く飛ばされたミシオに駆け寄ると、ミシオ身を起してアルダスのいる方向をにらみつけた。

直後、背後で再び何かに驚く声が出て、二羽目の炎鳥が軌道を変え、木にあたって爆発する。その爆風は迫っていた三羽目にも影響し、三羽目も爆発。

「何をしているアルダス！！」

「今、なにか視界が」

「構うな、^{テレバシー}通念能力によるかく乱だ！！」

どうやらミシオが^{テレバシー}通念能力で相手に何かしたらしい。様子からすると【感覚投影】で自分の見ている視界を相手に送りつけたのかもしれない。普段ならそんなこともできるのかと感心するところだが、今そんな余裕はない。

「四発目は外すな！！」

「くそ!!」

智宏は最後の悪あがきとばかりに、目前まで迫っていた炎鳥の回避を諦め、足元にあった石ころを拾って投げつけ、ミシオを抱き寄せる。危険なかけだが、直撃するよりはましだ。

「ぐっ!!」

「ああ!!」

再び爆発。どうやら予想どおりこの炎鳥は何かにつかると爆発するものだったらしく、直撃は避けることができた。だが至近距離で発生した爆風によって二人とも軽々と吹き飛ばされる。

「ぐっ!!」

ミシオを抱えたまま地面に叩きつけられ、それでもミシオを抱きしめたまま無理やり立ち上がり、気付いた。

「遮蔽物が……!!」

どうやら再び森の中で開けた場所に出てしまったらしい。周りに樹木が無く、身を隠せる場所まで十メートル以上ある。

「どうやら追いかけてここは終わりのようだな」

声に驚き振り向くと、そこに拳を振りかぶったウンベルトがいた。その拳は肘まで魔力で覆われて輝いている。

「がっ……!!」

何とかかわそうと身を擦るが効果はなく、鉄のような、否、鉄そのものの拳でこめかみを殴られ、智宏の体が宙に浮く。腕からミシオの感覚が失われ、代わりに地面に叩きつけられる痛みが襲ってきた。

「トモヒ　ぐっ……！」

「手間を取らせるな」

言葉とともにミシオの腹にも拳が叩き込まれ、ミシオは体をくの字に曲げて倒れた。

(……ミ……シオ！)

殴られた影響か、体がまともに動かない。どうやら脳震盪を起しているらしい。

(く、そ。考……えろ、も、っと、守り……たいなら……！)

薄れゆく意識のなかで、智宏は必死に自分を叱咤する。だが、それをあざ笑うように智宏の思考能力はどんどん薄れていく。そのことに智宏は深い絶望と怒りを覚えた。

(……ちくしょう……！)

薄れゆく意識のなかで一つのものを渴望する。この状況に光を見出すための『それ』。今の智宏は心の底から『それ』が欲しいと願っていた。

そしてそれに呼応するようには智宏のなかで何かが蠢いた。

15：発現

「ハア……ハア……、なんだあ？ 仕留めちまったのかウンベルト？」

ようやく追いついてきたアルダスは、追いついて早々そんなことを言った。どうやらまだ遊ぶつもりを失っていなかったらしい。

「生憎とまだだ。娘のほうは回収できそうなので連れていく」

「ああ？ 殺すんじゃないの？」

「研究班の連中は回収を望んでるんだよ。まあ、それでも生かして捕らえるなどという面倒なまねをするつもりはなかったんだが、こうして捕まえることができてしまった以上、どちらでも大差ない。どちらでも変わらないのなら売れるときに恩を売っておくべきだ」

そう言って、腕の魔術を解除すると、ウンベルトは手錠のようなものを取り出してミシオの両手にかかる。隣ではアルダスが思い切り不快な顔をした。

「うわ、めんどくせえ」

「愚痴を言うな。かけなくてもいい時に余計な手間をかけるくせに、こつこつ手間は惜しむのか？」

「うるせえなあ。いいじゃないかよ少しは遊んでも」

こつこつ点でアルダスとウンベルトの価値観は決定的に合わない。

それでもウンベルトとしては任務にそんな私情をはさむわけにもいかない。唯一の共通の価値観を利用する。

「言うておくが、力を手に入れて、それを試したがっているのが自分だけだと思ふな。あまり手間取っていると奴がしゃしゃり出てくるぞ」

「奴う？ 奴つて……、まさかあの化け物か！？ 冗談じゃねえ。あいつの周りにいたら命がもたねえ。今朝だつてあいつの悪ふざけで死ぬかと思つたぞ！！」

「そう思うならとつと仕事を済ませることだな。これ以上手間取ると本当に奴が出てきかねん。あいつほど暴れたがつている者を他に知らんぞ」

何しろあの男の手にした力はアルダスの覚えたての魔術とは訳が違ふ。より危険で厄介な代物だ。さすがのアルダスもその危険性を認識したらしい。

「んでえ？ このガキはどうするんだ？」

アルダスは渋々納得すると、初めてそばに倒れる少年に向きなおつた。その表情には少年をあざ笑うような悪意が見て取れる。

「どうやらこつちの下等種族の娘と違って、俺らと同じオズの人間のようにだし、仲間にもするるか？」

本気とも取れない発言を半ば無視して報告のために通信用の魔石を取り出す。報告の相手である研究者達はあまり会話していたい相手ではないので、事務的な連絡だけを一方的に行つて手早く済ませ

る。相手は下手に話を聞いていると注文ばかりうるさいのだ。

「おいウンベルト！　すごいぜこいつ。立ち上がったよ！」

「……………なに？」

見ればアルダスの指さす先、先ほど殴り飛ばした少年がフラフラと立ちあがっている。

(……………チツ、あのまま気絶していればいいものを)

再びアルダスが悪趣味の対象を見つけてしまったことに内心げんなりする。あの調子では立っていることすら難しいだろうし、それもしばらくは回復は見込めない。アルダスにとっては絶好のおもちやだ。

「……………をした……………」

「あん？」

「お前たち……………、その娘に何をしたんだ!!」

そう叫び、少年は明確に怒りの表情を顕にする。どうやらこの少年、完全に意識を失うことなく話を聞いていたらしい。こんな状態でも怯えず、怒れることに内心ウンベルトは舌を巻いた。だからと言って少年の運命を変えるつもりは毛頭ないが。

「何って実験だよ。それも親切な」

「……………親、切？」

「ああ。魔力の使えない下等なアイデア人に、少しでも魔力を使えるようになって貰おうっていう親切な実験だよ」

「……魔力を、使えるように？ ……まさか、さっきの黒い霧は！」

「ほう？ すでに使いこなしていたとは驚きだな。まあそうでもなければこんな森で五日も生き延びられないか」

そう言うと少年の顔に驚愕の表情が浮かんだ。どうやら森にいた期間までは知らなかったらしい。こんな森で五日も生き延びたと言われれば確かにそれは驚くべきだろう。実際ウンベルト達もとうに死んでいると思っていたくらいだ。

「まったくこいつもよお、俺たちが生き延びるのに役立つ力をくれてやったんだから、俺たちに少しは感謝してもいいだろうに。なのにこいつ、よりにも寄ってその実験で被った苦痛を施設の奴ら全員にテレパシーで送りつけて我慢比べを敢行しやがった。そのうえ施設の奴らが気絶してる隙に、実験の成功で得た力使って施設逃げたもんだから、俺たちまでこんな未開世界に引っ張り出されたんだぜ。どんだけ人様に迷惑かけりゃ気が済むんだってえの」

それについてはウンベルトも同意見だった。ただしその不満は研究班のメンバーにも向けられている。言ってみれば今のウンベルト達は研究班の不始末の尻拭いだ。不満が無いわけが無い。

そう思う一方で、ウンベルトはそれでもまだ運は良かったと考えていた。ようやく見つけた少女が村人に保護されていたときは正直諦めかけていたくらいだ。もしも少女が自分から村を飛び出していなければこうして取り戻すこともできなかった。

そこまで考えて、そろそろアルダスを止めるときだろうと判断し

た。あまり時間をかけ過ぎても面倒だ。

「アルダス、無駄話はそこまでだ。研究班の連中がお待ちかねだ。自分たちの研究成果が見たいんだとさ」

「けっ、懲りない連中だねえ。で？ こいつはどうする？」

「決まっている。俺たちの仕事は証拠の隠滅だ。あれほど情報をペラペラ喋っているのだ、万が一にも殺しそこなうな」

「……チツ、止めてこなかったのはそう言う訳か。はいはい、了解」

「……待て」

渋々アルダスが魔方陣を展開しようとするのを、智宏の声が阻んだ。

「悪いな兄ちゃん。命乞いなら」

「その娘を置いていけ」

「あぁん……？」

その声には今までよりさらに強い感情が宿っていた。どうやら先ほどの会話で少年の怒りに火がついてしまったらしい。同じ弱者でも、怒れる弱者と怯える弱者では前者のほうが面倒だ。そこまで考えて

「連れて行かせないって言ってるんだ！！」

それまでに無い嫌な予感に襲われた。

ウンベルトがその予感の正体を理解しようとした瞬間、彼自身の感覚が、まるで何か巨大なものの鼓動のようなものを感じとる。

「えっ？」

「なっ!？」

その鼓動の正体を知って驚愕する。その正体はあまりにも慣れ親しんだ魔力の感覚。しかしほとんど接することのないほどの大きさを伴っていた。そしてその魔力が徐々に少年の額に集まって何かの文様を描き始めている。アルダスもウンベルトも魔力のこのような反応は初めてだった。

(…………いや、ある。この感覚に覚えがある。あの化け物の【刻印】がまさにこんな感覚だった…………!!)

「…………おい、なんだよこれ…………!!」

「ばかな…………!! こいつはオズの人間のはずだ! 発現するわけが無い!!」

少年の額に魔力で出来た【刻印】が浮かび上がる。ウンベルトが知る限り、それは明らかに願いをかなえた者の証だ。先ほどまで自分から逃げていた少年は、今明らかに二人にとって脅威となりうる存在となり始めている。

「…………なんで!! こいつアースの人間じゃないのに」

「つううー！ 構えろアルダス！ 手加減抜きで仕留めるぞー！」

ギリギリで立ち直ったウンベルトが前に出て拳の前に魔方陣を展開する。すでに余裕は消失し、その心情を代弁するようにウンベルトは決定的な一言を叫んだ。

「こいつ、【刻印使い】だー！」

その額に、幾つもの線とその中心にある正方形の印が刻まれる。莫大な魔力が終息し、代わりに一人の危険な存在が生まれおちる。目の前のそれは、たった数分で自分たちの存在を脅かす化け物へと変貌していた。

劇的なそ（・）の（・）変化にしかし智宏は驚かなかった。否、驚いてはいるのだ。だがすぐに変化の正体を理解して納得してしま

う。そう。できてしまう。それが今起こっていることすべてだった。この世界に来てからの記憶から【刻印】という言葉を引き張りだす。「願いが叶う」「ブホウの言葉、確かに願いが叶うというのならまさしくこの【刻印】は願いの形だ。

（さあ、頭を使え。考えろ、思考しろ。こいつらをどうしたらいい？）

思考が加速するのを感じる。冷静になってはいない。心臓はまだ激しく脈打っているし、手には汗がにじんでいる。

しかしそれ以上に心に浮かぶ怒りは絶大だ。目の前の二人が話した内容は明らかに人道を無視した人体実験のものだ。生まれて初めて抱くような規模の、焼けつくような怒りの中でそれでも思考はそれまでにないくらい澄み切っていた。

「　　つつあああああああ！！」

一瞬で額の【刻印】の使い方と効果を理解する。否、これは理解ではなく確認だ。智宏の考えが正しければこれは智宏がさつき願ったことを叶えているのだから。

「刻印は使わせん！！！」

まず動いたのはウンベルトだった。両手の魔方陣を起動させ、肘から拳にかけてを鉄の魔力で包みこみ、智宏に向かって突進する。ボクシングに似た構えで突進し、鋼鉄を纏った拳を智宏めがけて突き出してくる。

（狙いは顔面、ストレート！！！）

ウンベルトの拳の構え方と視線、先ほど殴られた時の狙いなどから狙われる場所を予想して紙一重で避ける。顔の横を通り過ぎる鉄の拳に智宏の精神状態は乱れに乱れているがそれでも着実に思考する。

「なに！？？」

ウンベルトの表情が驚愕に満たされる。それはそうだろう。先ほ

どまで素人だった智宏が攻撃を紙一重でよけるなどという格闘家じみた真似をして見せたのだから。それでもすぐに体制を立て直し、再び智宏殴りかかって来たのは流石だった。

(また顔面……、いや違う!!)

今度はフェイントを混ぜて二発、フェイントの知識など無い智宏はもろにそのフェイントに引っ掛かり、二発目の本命が智宏の胸を打つ。

「ぐっ、っう!!」

「チイイツ!!」

お互いに同時に舌打ちする。智宏は対応し切れなかったという事実に、ウンベルトは入った攻撃の浅さにだ。

フェイントだと気付いた時点でバックステップに切り替えたため、智宏は衝撃のほとんどを殺すことに成功していた。そして、それと同時に先ほど相手が放った一言で一つの確信を得る。

(やっぱり、こいつ僕が【刻印】をとこの昔に発動させている)・・・
(……)ことに気付いていない!!)

(なんだこの動きの良さは……!! 動きはまるで素人なのに的確に対応してくる!!)

素人であるはずの刻印使いが自分攻撃を二回もやり過ぎたという事実寒気を覚える。いくら脅威と言える刻印使いでも、目覚めただけならただの素人だ。刻印の使い方を覚える前に潰せばいいと攻めかかったのに、結果はこれだ。それも刻印を使ったのならまだ分かる。だが相手は刻印の効力らしきものをまるで使わずにこちらの攻撃をかわしているのだ。

時間が来たからだ。

バックステップで相手とさらに距離を取る。着地とともに足元に巨大な魔方陣を展開し、操作する。

「っ！！」

刻印使いも事態に気付いたらしく背後を振り返る。そこには今まで以上の破壊力を持つ魔方陣を展開し、その顔を殺意の笑みで歪めたアルダスがいた。

「死ねえ！！ クソガキイイイツ！！」

次の瞬間、ウンベルトの足元から半透明な岩壁状の防御壁が出現する。前方を扇上に防御する防御術式【岩壁城塞^{ロックシエル}】だ。それと同時にアルダスの魔方陣から巨大の火の玉が放たれ、すぐに拡散して刻印使いのいた場所一体を吹き飛ばした。

16：集積演算

「ハア……、ハア……、ハ、ハハ、ハハハハハ。やった。やったぞ
！！ 驚かしやがってえ。何だよ全つ然、大したことねえじゃん！
！」

自分の放った魔術が、少年のいた空間を丸ごと吹き飛ばし、一帯を煙が立ち込めているのを見てアルダスはそう哄笑した。その笑いには多分に刻印使いを仕留めたことに対する安堵が含まれていたが、それを認めるのは癪なので吠えるように笑う。

すると煙の上がる一帯の、アルダスから見て左側からウンベルトが出て来た。さすがのウンベルトも、刻印使いが本領を發揮する前に仕留められたことに安堵の表情を見せている。

「まだ仕事は終わっていない。死体を確認してすぐに撤収するぞ。
場合が場合とはいえ【集束爆炎弾^{クラスター・ファイア}】など使ったからな。村の奴らには気付かれたと見ていい。【空圧砲^{エア・バスター}】で煙を吹き飛ばせ」

「チツ、わかったよ」

煙から出て早々命令を下されるのも、粉々になった死体を確認するのも激しく不満だったが、急いだ方がいいのはアルダスにも分かったので渋々従う。煙の昇る一帯に向け魔方陣を展開したそのとき、煙の中からいきなり何かが飛び出した。

「な、なにいいいい！！」

信じがたいことに先ほど粉々に吹き飛ばしたはずの刻印使いの少年が恐ろしいスピードでこちらに向かって来ていたのだ。

煙から飛び出し、真っ直ぐに走りだす。声ですでに二人の立ち位置は確認済みだ。気功術で身体能力を底上げし、まずはアルダスに狙いを定める。

「くそつたれえええつ!!」

恐怖を打ち消すように叫び、先ほどまで煙に向けていた魔方陣をこちらに向け直す。【空圧砲^{エア・バスター}】というネーミングや会話の内容から察するに恐らくは空気で前方を吹き飛ばす魔術だろう。既にかなり接近することが出来ているが、それでもアルダスの魔術は既に操作も終わっている。照準をつけ発射するまでの時間では精々腕の先くらいまでしか近づけない。

(だが十分だ。魔方陣に触れられる位置まで近づけるのなら)・・・
.....(!!)

「喰らいやがれえええ!!」

叫びとともに魔方陣の魔力が膨れ上がる、一瞬後には至近距離まで迫った智宏を吹き飛ばすだろう決定的な魔術。だがその寸前、トモヒコの右手がふりあげられ、軌道上にある魔法陣を塗り(・)(つ)(・)(ぶ)(・)(す)(・)。

「なにいいいいい!!」

智宏の目論見通り、魔術が一瞬でエラーを起こし、ただの意味のない魔力の塊へと変わる。魔術というのは魔法陣によって魔力に形を与える技術だ。その魔方陣自体が意味のない落書きに変わってしまったら、魔力はただの魔力でしかない。

智宏は自分の予想が当たっていたことを確認すると、間髪入れずに驚愕に歪んだアルダスの顔面に、今度は振り上げた右手をそのまま拳に変えて叩き込んだ。

「うごおっ!!」

拳に伝わる、初めての、しかし確かな手ごたえを感じ取る。攻撃意思を持って人を殴ったのは初めての経験だ。そんなことを一瞬考えてしかし、すぐに思考を別に使う。

(まずは……!!)

二メートルほど先に横たわるミシオを拾い、引き続き気功術を使って殴り倒したばかりのアルダスから素早く距離をとる。ミシオは手錠で後ろ手に拘束されてはいるものの、智宏に抱えられると目を開け、小さく反応して見せた。どうやらギリギリで意識は残っていたらしい。今なら自力で走ることも可能だろう。

(ミシオさえ奪い返せば無理に戦う必要もない。手錠は後で破壊すればいい。何より、逃げる場所はもう決まっている)……………
……………(!!)

『トモ、ヒロ……?』

テレパシー
通念能力はかるうじて送ってくるものの、いまだ呆然とするミシオを立ち上がらせる。すると背後に二人の気配が揃った。見れば、

まさに立ち上がるうとするアルダスと、その前で身構えるウンベルトが正体不明の物に対する隠しきれない恐怖を露わにしていた。

「……ふざけやがって」

その恐怖からいち早く脱したのはアルダスだった。その表情は殴られたことによる怒りに変わっている。

「……殺してやる！！ 跡形もなく吹き飛ばしてやるぞクソガキイー！！」

叫び、右手の先に魔方陣を展開する。現れたのは大円の中、外周部にさらに六つの小円を配置した魔方陣。

『っ！！ トモヒロ！！』

テレパシーによって伝わってくる焦りの声と感情。だが智宏はその声に対し冷静そのものの声で答えた。

『……魔術って言うのは要するに知識だ。魔方陣とその使い方さえ覚えれば誰でも使える』

危機を伝えるミシオの意志に応えながら、智宏は足元に意識を集中する。イメージするのは一つの魔方陣。

『ならば、もし一度見ただけの魔術を、その魔方陣から使い方まで正確に思い出し出すところとかができるとどうなると思っ？』

そうメッセージを送り、足元の魔法陣を先ほど見た通りに（・・・）
手早く操作した。

「なに！？」

「死ねえええええ！！」

叫びとともに大円の中を小円が回転し大量の炎弾を吐き出す。一発一発が致命傷をおわせるほどの威力をもったそれはしかし、智宏を粉々にすることなく、智宏が足元に展開した魔方陣とそこから出現した半透明の岩壁によって阻まれた。

「な……！ 【岩壁城塞】だとお！？」

ロックシェル

それは間違いなく、先ほどウンベルトが使ったのと同じ魔術だった。大量の炎弾が現れた岩壁にぶつかり次々に爆発する。だが、それでも岩壁はわずかな焦げ跡を残すのみで破壊にまでは至らない。元よりかなり高位の術にも耐えられるように設計された術式らしく、先ほどの絨毯爆撃でもびくともしなかつたくらいなのだ。

『トモヒロ……、これ……？』

『頭が良くなる能力』

『え？』

『お世辞にもいいと言えなかつた記憶力が、一目見ただけの魔術を寸分たがわず思い出せるくらいまで上がってる。恐怖で心臓が飛び出しそんな精神状態なのに、思考は普段以上の速さで回転してる。』

声も表情も体も考えている通りに、思い通りに動かせる』

脳の機能、特に記憶力、思考力、運動制御力。それらの性能が飛躍的に上昇している。頭が良くなっている、もつと言えば『脳が強化されている』。その現象こそが先ほど魔力が額に集まった瞬間から起きた巨大な異変だった。

『たぶんこいつが【刻印】というやつなんだろう。名前を付けるなら【集積演算】スマートブレインといったところかな……。さつき僕は守るための力じゃなくて、守る方法を見つける知能を欲したんだ』

『……集積、演算』

先ほどから攻撃に的確に対応できているのも思考力が強化されたことによる恩恵だ。現在の智宏の思考は通常の何倍、何十倍にも加速したような状態となっている。そうなると戦闘中、一瞬で判断しなければならぬ状況でも時間をかけて熟考したのと同じレベルの答えを出せるのだ。その答えは通常の判断に比べれば最善に限りなく近いものとなる。

そしてもう一つ。普通だったときには気付けなかったことに気づけるのもこの【刻印】の強みだ。

『ミシオ、レキ八村に帰ろう』

『っ……っ……っ……っ……』

テレパシー 通念能力でなにやら驚愕を伝えていたミシオの心が、一瞬で恐怖の色に変わるのが伝わってくる。

それはそうだ。ミシオの警戒心はまだ解けていない。そしてレンド達が何かを隠しているのは確かだ。

『だがこいつらとレンド達の間に関わりはない。情報の共有ができてないし、こいつらが今しようとしている事はあの村にいる間ならもっと簡単に出て来たはずのことだ。何よりこいつらが村の人間を警戒してる』

『それは……、確かに……』

『それに隠し事の内容についても見当が付いてきている。たぶんあいつ等が隠しているのは自分たちと異世界の関わりだ』

『関わり？』

『ああ。たぶんあの村は僕たちが思ってる以上に異世界と強い関わりがあるんだよ』

智宏の頭に再び驚愕の思念が送られてくる。だが魔術師二人の攻撃をかわしながら働いていた別の思考はすでに明確な根拠をはじめ出していた。どうやら【集積演算^{スマートブレイン}】によって強化された脳は、二つ以上のことを同時に考えることもできるらしい。

『そう考えれば納得がいく。レンドやハクレンさんとの会話の中で何度か僕の世界とのつながりを感じさせる言葉が出てきたこともあるし、ブホウさんがこの【刻印】ってやつのことを知っていた時点で僕の世界の人間と接触したのは明らかだ』

アルダスとウンベルトの言葉から察するに、刻印はアースの人間しか発現しないらしい。ならば智宏が刻印に発現した時点で智宏の世界がアースである可能性が高い。そうなってくると村の人間が刻印について知るためには、智宏と同じ世界の人間と接触しなければ

ならないことになる。

そこまで思考を伝えたところで、今まで壁にぶつかっていた炎弾の雨が急に止み、それと同時に二つの魔方陣が展開されるのを感じ取った。

「いつまでも籠城決め込めると思ってんじゃねえぞお!!」

すぐさまミシオを抱えて飛び退く。すると魔力の供給が途切れたことで【岩壁城塞^{ロックンエル}】が消滅し、同時に今まで智宏達がいた場所に四羽の炎鳥が殺到し、爆発した。

(術式展開 !!)

さらに追撃をかけるべく、爆発がおさまると同時に、拳を魔力で包んで煙の中から飛び出してきたウンベルトにトモヒロも魔方陣を突きつける。展開するのは先ほどからアルダスが乱射していた大円の中にさらに六つの小円を配置した魔方陣だ。

「くおっ!! そうかこいつ!!」

容赦なくばら撒いた炎弾をウンベルトが足元に展開した【岩壁城^{ロックンエル}塞】が受け止める。着弾するギリギリのタイミング。

「ならば!!」

岩壁を張ったウンベルトから、新たに攻撃魔術を展開しようとしたアルダスに腕を向ける。するとその動きに合わせて魔法陣も動き、今度はアルダスに炎弾をばらまく。

「くそ！！　なんで【バルカン・ファイア回転機関砲】まで！？」

「名前教えてくれてありがとよ！」

慌ててウンベルトの岩壁の影に逃げ込むアルダスを大量の炎弾が追い立てる。そして岩壁の向こうに逃げ込むことは智宏も織り込み済みだ。

(術式展開

ファイヤーバードストライク
【**火炎鳥襲撃**】！！)

森の中でミシオの通念能力テレパシー越しに見た操作法を真似て魔法陣を展開し、魔方陣の中にある四つの円に線を書き込む。すると予想通り、炎鳥はその線の通りの軌道を通って壁の向こうに殺到した。

壁のすぐ向こうと、その先で同時に爆発。

それと同時に再開されるのは先ほどの続きとなる、帰るための会話だ。

『……おかしいとは思ってたんだ。あの村はあっさり異世界人を受け入れすぎている。異世界人に(・)慣れ(・)過ぎ(・)て(・)い(・)る(・)。たぶんあの村は異世界と交流があるんだ。世界間の行き来も行ってるかもしれない。そう考えれば本国なんて言葉が出てくることにも納得がいく。どういう訳で隠しているのかは分からないけど』

『それじゃあ……』

『でもあの村の人たちは僕たちに悪意があるようには感じなかった』

それが智宏が村に帰る決断をした最大の要素だ。右も左も分からない二人に情報を与え、食事を与えて世話を焼く。悪意を持ってい

たなら普通ここまでのはしはない。

『たぶん何か事情があるんだと思う。そして事情はあっても悪意がないなら、あそこは僕らの帰る場所だ』

『帰る……、場所……』

『帰ろう。村に、そして自分たちの世界に！』

『……帰れる、かな……？ 私、あの村から逃げて』

『大丈夫だ。今ならなんとかできる。僕を信てくれ』

答えながら抱きかかえた少女と正面から向き合っ。わずかな迷い。だが次の瞬間には少女は小さくうなずいてみせた。それを確認し、すぐさま手錠が掛かったままのミシオを地面に下ろす。

『よし、ならまずここから離れよう。あの二人がこの程度で諦めるとも思えな　！！』

直後、バチツツという音と共に少女の体が跳ね上がる。智宏が驚く間もなく、少女の体が地面に崩れ落ちた。

よく見ればミシオを拘束している手錠には魔方陣が一つ灯り、ミシオの体がわずかに痙攣している。

（これは……、魔石てやつか！？　……っ、まさかあいつら手錠に仕掛けを！！）

そう思い至った瞬間、ウンベルトの張っていた岩壁が爆発した。

その破片は智宏達のほうに飛んでくるが、智宏のいる場所まで届く前に霧散して消えていく。

そしてその向こう、霧散する岩壁の魔力と、立ち込める砂煙のなかに、先ほどまでとは明らかに違うシルエットがあった。

「……逃がすわけにはいかない。ここで逃がしたら我々まで始末されてしまう」

シルエットが変わっていたのはウンベルトの方だった。右肩に円盤が突き刺さったような形で巨大な魔方陣が展開され、そこから肘までが岩状の鎧で覆われている。肘から先の変化はもつと劇的で、ドラム缶ほどの太さの巨腕に包まれており、止めとばかりに手の甲から肘にかけて鉄製の巨大な金属のプレートが接続されている。接続されているのは肘までだが、プレートの長さから考えると、腕を伸ばせば肩まで覆うことができるだろう。

(くそ!! あの腕で炎鳥をガードしたのか!!)

見れば、ウンベルトは煤だらけではあるが火傷などの怪我は追っていない。それはその近くにうずくまるアルダスも同様だった。

智宏がそれを確認すると同時に、ウンベルトはまだ普通の大きさを保つ左手をこちらに示す。手のひらの上に乗っていたのは小さな鍵。

「その手錠は特別製だな。鍵を持つ者が遠隔操作で手錠をかけている人間に電撃を浴びせることができる。まさか貴様も、俺達がそいつを逃がさないための手を打っていないとは思ってまいな?」

その言葉は今のミシオの状態全てを物語っていた。そしてそれによって智宏のなかにさらなる怒りが燃え上がる。

「……じゃあその鍵を渡せ。今すぐだ!!」

「欲しければ力づくで奪え。我々も貴様の命を、力づくで奪う!!」

言いながら鍵をアルダスに投げ渡すと、左型にも同じ魔方陣を展開した。魔力を操作して造りだすのもう一つの巨腕だ。肩から徐々に鎧に覆われていき、肘から下が巨腕に変貌し、最後にプレートが展開される。プレートの展開を確認する表情にすでに恐れのようなものは感じられない。ただ敵意だけが存在している。

「アルダス、お前は援護だ。接近戦でかたをつける」

「なっ、ウンベル」

「これ以上新しい術式を使うな。今まで使っていた魔術、できればファイアバード炎鳥あたりを基本に使いえ。やつはこちらが使った術式を真似して使ってくるぞ」

「なに!? まさか!?!」

驚くアルダスをしり目に智宏は相手の判断の的確さに内心で舌打ちする。遠距離戦ではなく接近戦を選んだことといい、こちらが相手の魔術を真似して使っていることを見破ったことといい見事な判断というほかない。

「大方それが奴の【刻印】の力なのだろう。だが、例え魔術が真似られても、それで接近戦ができるかといえば話は別だ。この【土人形ゴレム・アームの鉄腕】による格闘戦ならば真似られても競り勝てる!!」

その読みはあまりにも的確だ。たとえ戦う力を手に入れても使用
方が分からなくてはとうしようもない。いくら【集積演算】スマートブレインがある
とは言っても、知らない技術は思い出して使うことができない。格
闘技の心得もない智宏にとって、接近戦は鬼門なのだ。

「さあ、始めようじゃないか刻印使い！！」

叫び、ウンベルトは疾走する。巨大な両腕を盾にした、真っ向か
らの突進。

（あれじゃ攻撃しても腕に阻まれて意味をなさない。……ならば！
！）

相手が前方に盾を張っているなら。側面から攻撃すればいいと判断
し、【ファイヤーバードストライク火炎鳥襲撃】を発動させる。

しかしその攻撃はウンベルトめがけて飛び立った炎鳥は、ウンベル
トの背後から現われた炎鳥によって相殺された。智宏の延長とアル
ダスのはなつた炎鳥が衝突し、ウンベルトのいる位置より手前で爆
発する。

（なんだかんだ言っけしっかり援護してくるか！）

案の定すぐに煙の中から腕で体を守ったままのウンベルトが姿を
現す。すでに爆撃系の術式では智宏にも被害が及ぶ距離だ。やむな
く智宏も先ほどウンベルトが使っていた拳から肘にかけての強化を
行う術で接近戦に備える。同じ魔術で対抗するより、身軽さを意識
した判断だ。

「ほう、【土人形の鉄腕】ゴレム・アームではなく【鉄甲】アイアン・ガントを使うか、同じ術での
勝負は避けるか？」

言いながら、右の巨腕を上には振りかぶる、そのあまりに歴然としたリーチの差をすぐさま危険と判断し、瞬間的に回避を選択する。背後に跳躍した直後、それまで智宏のいた場所に巨腕が叩きつけられ、目の前の地面が深々と凹んだ。

「うおおおおお!!」

その危険性に思わず絶叫し、精神が悲鳴を上げるのをそれでも無視して思考する。

(リーチも攻撃力もある巨大な鈍器を軽々振り回しやがって!)

もし、まともに頭にでも食らおうものなら頭蓋骨ごと脳を砕かれてしまう。智宏は一瞬自分が脳漿をまき散らすさまを想像し身震いする。さぞかし汚い死体が出来上がることだろう

(ついていけないほどのスピードじゃないのが唯一の救いか。それなら なっ!?)

智宏の思考をあざ笑うようにウンベルトが素早く距離を詰めて来る。見れば最初に振り下ろした巨腕の指を地面に食い込ませ、腕の力で強引に出たらしい。そしてもう左の腕はすでに横に振りかぶられている。

「くっ、おおおおおおお!!」

攻撃範囲から逃げ切るのは無理と判断し、智宏はとっさにウンベルトの右腕側に飛び込んだ。ウンベルトの右腕が左腕の動きを阻害し振り切られた巨腕が空振りする。

ウンベルトは地面に突き刺さった右腕と、振り回された左腕の重量に身をまかせ、うまく体をコントロールして智宏の間合いから逃れる。それでも今なら距離を詰められると目論んだ智宏の思考は、直後に感じた魔力によって阻まれた。とっさに飛び退くとその場所に炎鳥が飛び込み爆発する。

(っ！！　そこまで仲良くなさそうなくせにコンビネーションはしっかりしてやがる)

見ればアルダスが空中に三羽の炎鳥を浮かべて待機している。すべてを一気に打ち出すのではなく、あくまでサポートとして使う腹積もりのようだ。魔方陣の円のなかにはクルクルと円が描かれては消え、三羽の炎鳥もそれと同じ軌道を上空で旋回している。

智宏の頭の中で先にアルダスを攻撃するというプランが浮かんだが、すぐに無理だと理解させられた。見ればウンベルトが既にこちらに向かって走り出している。他を攻撃している隙にこちらが粉々にされては元も子もない。

「先ほどの判断は褒めてやる。だが　　！！」

「　　てめえはいい加減消し飛びやがれ！！」

ウンベルトが左腕を再び横なぎに振りかぶり、さらにその腕の後ろに炎鳥が回りこんだ。

(薙ぎ払いの後に炎鳥による追撃！？　……いや、まさか！！)

「これが貴様に真似られるかああああ！！」

狙いに気付き、対応を決めて、全力で左側に飛ぶ。同時に背後か

ら迫っていた炎鳥が振り（・）か（・）ぶ（・）ら（・）れ（・）
た（・）巨腕のプレート部に（・）（・）（・）（・）（・）（・）（・）（着弾し、その
爆発によって加速した薙ぎ払いが智宏に炸裂した。

「ぐわっぐわっ！！」

とっさに盾にした両腕の【鉄甲】アイアン・ガントが粉々に碎け散る。だが、思っ
たより強度のある術式だったらしく、幸運にも腕は痺れただけで済
んだ。

（都合だ！！ こっちは最悪腕を折られることも覚悟していたん
だから！！）

空中で体制を立て直し、吹き飛ばされる勢いをそのまま利用して
着地と同時に走りだす。向かう先にはたった一人、孤立したアルダ
スが立ち尽くしている。

「しまった！！」

背後でウンベルトが声を上げるがもう遅い。今の智宏は気功術も使
っているのだ。遠距離攻撃を行えないウンベルトに邪魔する手立て
はない。

先ほどの攻撃を受けたときに背後ではなく左側に飛んだのはこのた
めだ。あの瞬間、背後に下がっても回避することは不可能と判断し
た智宏は、腕を折られる覚悟でアルダスへの接近を選択したのだ。
狙い通り、腕の力に逆らわずに飛んだため余計なダメージを受ける
ことなく、アルダスにも接近することができた。

「これでお前と一対一だ！！」

「チツイイイイ！！」

舌打ちとともにアルダスは残る二羽の炎鳥を智宏にさし向ける。それに對して智宏も左手で【ファイヤーバードストライク火炎鳥襲撃】を展開して二羽の炎鳥で相殺した。

(さらに！ 術式展開 ！！)

「くそおおっ！ ウンベルト！ おいウンベルト！！ なんとかしろおおー！！」

叫び、背後に逃げようとするアルダスを、炎鳥を進行方向上の地面に落として爆発させ、こちらの方角へと吹き飛ばす。迎え撃つのは右腕の変貌した巨腕の掌。

(【土人形の鉄腕】ゴレム・アーム！！)

横なぎの一撃がアルダスの胴体に叩き込まれる。かろうじて体を守るべく構えられた右腕と、その向こうのあばら骨をへし折り、そのままの勢いで吹き飛ばす。吹き飛ばされた先、地面に叩きつけられたアルダスはわずかに痙攣した後、そのまま動かなくなった。

(まずは一人！ ……！！)

「やってくれたな刻印使い！！」

気配に振り返ると、背後に右腕を振りかぶったウンベルトが迫っていた。どうやら仲間を助けるよりも、仲間がやられた後にできる智宏の隙を狙うことを優先したらしい。あっさりと仲間を見限った

ことには不快な感情を抱いたが、

(だがそれも計算のうちだ!!)

振り下ろされるウンベルトの巨腕に智宏も巨腕で応じる。だがその動きは圧倒的にウンベルトのほうが早い。智宏の巨腕では反撃はおろか防御にも間に合わないだろう。

「だがこつちにはまだ四羽目がいるんだよ!」

「な!」

次の瞬間、待機させていた四羽目の炎鳥が智宏の巨腕のプレート部に激突し爆発する。文字通り爆発的な加速を得た巨腕は、振り下ろされたウンベルトの巨腕を弾き飛ばした。

「なんだとおおおお!」

ウンベルトにとってこの展開は完全に予想外だったのだろう。そもそもこの合わせ技は巨腕を振るいながら炎鳥を精密に操作しなければ成り立たない。しかしそれをやるうと思ったら人間一人では足りないのだ。左右の手で別々の作文を同時に書けと言っているようなものである。

だが【スマートフレイム集積演算】があるなら話は別だ。同時に複数のことが考えられるのなら、同時に二つの魔術の操作をイメージすることなど簡単なことだ。そしてそこがただのコピー能力との違いでもある。

「畜生おおお!」

怒りと焦りに任せてウンベルトは左の【土人形の鉄腕】ゴレム・アームにさらな

る魔術を上書きする。魔方陣の外周部にさらなる術式を書き加え、さらに肘の部分にも新たな魔方陣を展開して元の魔術に接続する。魔力を操作し魔術が完成した次の瞬間生まれるのは電車の車両一つ分に匹敵するほどの巨腕を超える特大の剛腕だ。先ほどまで腕に接続されていたプレートは無くなり、代わりに五本の指にそれぞれ爪のようなプレートが接続されている。

「くたばれ小僧おおおおお!!」

人間一人をたやすく肉塊に変える拳が付き出される。だが、振り下ろされた剛腕は、智宏の発動させた同じ剛腕に受け止められた。

「な、くつ、【土神の剛腕】タイタン・クロウまでもお!!」

叫びと共に右腕にも同じ術式を展開するがそのスピードは圧倒的に遅い。智宏の加速した思考は魔術の展開と思考による操作を一瞬で終わらせる。

そもそも智宏の刻印の力をただのコピー能力だと思っている時点で勝ち目はないのだ。智宏の加速した思考による魔術展開のイメージ速度は、一度見た術式なら相手より早くそれを発動させることができるのだから。

「おおおおおおおおお!!」

「くそおおおおお!!」

咆哮と共に叩き込まれる剛腕に、右腕の術式を諦めて悪あがきのように【岩壁城塞】ロックンユールを展開するがそれでも足りない。次の瞬間には突きこまれた【土神の剛腕】タイタン・クロウによって岩壁は跡形もなく破壊され、ガードに使った巨腕ごとウンベルトの体が宙に浮いた。

電の影響で動けず、木の幹にもたれかかるような形で休ませていた。

「……気分はどうだ？」

「……うん。まだ目眩がするけど、少し良くなった」

「……ごめん」

いくら状況が状況だったとはいえ手錠に仕掛けがしてあったことを見破れず、その仕掛けを発動させるのを許してしまったのだ。先ほどから発動しっぱなしの【集積演算^{スマートフレイク}】が、手錠の仕掛けを見抜けたであろう要素を脳内でまとめ続けている。智宏としては責められなくても文句は言えない。

「謝らなくても、私は、守ってもらえて、うれしかった」

それでもミシオはそんなことを言う。ならばこれ以上するべき会話は一つしかない。

「……ありがとう。守って、くれて」

「どう、いたしまして」

まっすぐな感謝の言葉に智宏の顔が熱くなる。そんな内面を隠すため、智宏は別の話題を振ることにした。

「え、えつと、これからのことなんだけど……」

言い掛けてふと思いつく。ほとんど勘といってもいいような考えだが、ためしにと視線をミシオから村の方角、正確には村の方角にあ

る茂みに向け声をかけてみた。

「いい加減出て来いよ、レンド」

視線の外でミシオの驚く気配が伝わってくる。これで外れていたから格好悪いことこの上ないが、不思議といえるのではないかという確信があった。

その確信を証明するように周囲の茂みの中から人が現れる。ただ予想外だったのはその人数だ。予想していたような一人や二人ではない。見えるだけで二十六人。そのうち四人は長い耳を持つ異世界人だ。中にはブラインの姿も見え、村の人間の中にも大剣を担いだブホウや槍をもったハクレンの姿があった。

「いやあ、助かったよ。いつ出ていけばいいかと迷ってたんだ」

そして、その四人の中の一人、レンブランド・リードがいつもと同じ軽い調子では歩み出た。

「でも、なんで隠れてるって分かったの？」

それは、『適当に言ったら本当に引っかけただけ』などとは到底言える空気ではなかった。

言いだせる空気ではなかった。

16：集積演算（後書き）

とりあえずようやく主人公が活躍できました。

これ以降はしばらく週一くらいの更新を目指していきます。

17：交錯する世界（前書き）

長いです。

本当は五千から一万字くらいの間には抑えたかったのですが、うまく切れる場所がありませんでした。

17：交錯する世界

「いやあ、助かったよ。正直出るタイミング逃しちゃって困ってたんだ」

森の中のわずかに開けた場所、それもあちこちにクレーターの空いた地面を歩きながら、レンドはいつも通りの調子でそう言った。

「見てたんなら早めに出て来いよ。こっちは死にそうな目にあってたんだぞ」

「いやあ、俺とハクレンさんが来たのってトモヒロが刻印に目覚める直前だったんだよね。他のメンバーに関しては村を出たのが俺たちより遅かったのもあって、ここに来たのはついさっきだったし。だからタイミングを逃しちゃって……」

「……そうかい」

レンドと適当な会話を交わしながら智宏は周りを盗み見る。周りにいるレンドを除いた二十五人は全員がそれなりの武装をした物々しい集団だ。敵意のようなものこそ感じないが、一応警戒しない訳にはいかない。

どうやら智宏の予想通り、レンド達は知らされていた以上に異世界についての知識を持っているようだ。それだけで敵と判断する根拠にはならない。だが、だからと言って彼らが何を目的にしているかわからず状態スマートブレインで信用し過ぎるのも危険だ。

智宏は【集積演算】を用いてさらに思考を加速する。まずは彼らの目的をはっきりさせなくてはいけない。

「お前らはここに何しに来たんだ？ まさかこんな大勢でピクニックってわけじゃないだろう？」

「俺とハクレンさんは君らを連れ戻しに来たのさ。このレキハの森はデートには向かないからね」

『……………デ、デート!?!』

『……………反応するなよ。今そこは重要じゃないだろう』

デートという言葉に巨大な動揺を伝えてきたミシオに心の中で突っ込む。流石にこの局面で軽口から話題を広げられても反応に困る。

「二人は僕らを連れ戻しに来たつてのはいいとするけど、それじゃあ他の人たちは何しに来たのさ？ ただの狩りにしては見慣れない人たちが混じってるけど？」

「なあに、狩りは狩りだよ。ただし」

そのとき、急にレンドの顔が真剣なものに変わった。

「狩る相手は今君の隣に転がってる犯罪者だけだね」

「……………犯罪者、ね」

そう言っつて今度は近くの地面を盗み見る。そこには先ほど派手に（・）殴つて気絶させた二人が転がっていた。たしかに彼らがしていたという所業を考えれば犯罪者というのは認識として妥当なところだろう。

それと同時にもう一つ気付くことがあった。

「……そうか。お前ら、僕達がこいつらの仲間なんじゃないかと疑ってた（……………）（の）（か）（）」

「……………え？」

智宏の言葉にミシオが驚きの声を上げる。いや、驚いたのはミシオだけではなかった。見なくても分かるほど周囲から驚きの声が聞こえてくる。

「……………う、疑ってたって……………、どういう、こと？」

「そのままの意味さ。僕らがこいつらのことを疑っていたように……………（僕らのことを疑ってたんだよ）……………（こいつらも）……………（たぶん僕の場合は身体的特徴と住んでいた世界が）……………（食い違っていたから）……………（ミシオの場合は……………）」

「言動や服装、順応性の異常な高さ。その他いろいろな点があったの遭難者とは思えなかったからさ」

智宏の言葉に応じるようにレンドが答える。その口調には呆れとも関心ともつかないような感情が込められていた。

「ただ、誤解を避けるために言わせてもらつと、そこまで真剣に疑っていたわけじゃない。五日ほど前に森にいた人間が一齐に昏倒する事件があつて、森の中にこいつらみたいないな異世界人がいるんじゃないかつて話になつてたのさ。異世界で非人道的な行為を行つてい

る奴らがいるって話は前からあったからね。そしたらたまたま常識はずれの異世界遭難者が来たんで、一応警戒して探っていたってわけ」

「……まあ、そうだろうな。真剣に疑ってたんならこんな回りくどいことはせずに、とっととぶん縛って取り調べればいい」

そう言いながら智宏は一斉に昏倒する事件とやらについても同時に思考する。実は身近に心当たりがあった。

『……もしかしてミシオか？』

『……うん。五日前ならたぶん。私のテレパシーって人間にしか効かないけど、範囲は結構広いから……』

アルダスの話によれば、彼らの元から逃げだすとき、ミシオは【感覚投影】で自分の感じている痛覚を周りの人間に送りつけることで昏倒させたらしい。レンド達の話は恐らくそのとばかりだろう。

「……しかし驚きだ。頭のいいやつだとは思ってたけど、見破られるとは思っていなかったよ」

流石のレンドも智宏の刻印の効力にまでは気がついていないらしい。考えてみればミシオに教えたときも声には出さずに通念能力テレパシーで教えたのだ。眼に見える効果がある訳でもないので推測も難しいだろう

智宏はとりあえず刻印の効力は隠したまま会話を続けることにした。

「まあ、もともとお前らが世界を行き来してるんじゃないかとは考

えてたからな。ならなんで隠してるのかって考えれば答えは限られる。それに、お前僕に力マをかけてただろ？」

「……ばれた？」

「そりゃばれるよ……」

昨日のレンドが振って来た不自然なネタ会話などその最たるものだろう。よく思い出してみれば他にもこちらを観察するような素振りもよく見せていたように思う。

「そもそもお前が『五分』なんて言う時間の単位を使っていたこと自体がおかしかったんだ。いくら言葉が同じでも単位まで同じじゃないことは確認済みなのにな」

『おい、起きろレンド。朝だ！』

『うっ、あと5分』

何気なくかわしていたお約束の会話だったが、考えてみれば言葉が同じだからと言って時間の単位まで同じだという保証はどこにもないのだ。現に長さの単位はギーマなどという別の単位が使われていたし、一日や一年のように太陽や気候のようなわかりやすい目安があるわけでもない。

恐らくレンドはそうやってアースの世界の人間にしか通じない言葉をつづけることで智宏の出身世界の確認をしていたのだろう。思い返せばそれらしい会話がいくつも思い出せる。

「結構苦労したんだぜ。俺たちと他の世界とのつながりを隠すの。智宏の手前、異世界人が現れたり消えたりしたら不自然だから、他

の世界からの連絡員が智宏達に見つからないようにしたし、俺が異世界に向かうのも、いなくなってるのに気付かれないように智宏が寝静まった後にこっそりやってたんだ。おかげで今日なんて貫徹だぜ？ 正直ばらせてホッとしてるよ」

ため息をつきながらそう語るレンドに、智宏は内心で少し納得する。彼が毎日寝坊していたのは、どうやら本当に睡眠不足で眠かったかららしい。今朝起きたときベットに寝た跡すらなかったのも、本当に寝ていなかったのだ。

と、同時に智宏は一つの事実に気付く。智宏は昨日ミシオを見つけたとき、初めて知らされていない異世界人が他に三人もいることを知らされたわけだが、それもレンド達が意図的に行っていた措置だったかもしれない。全体で何人いるか知らされていないければ、例え連絡のためにこの世界に訪れた人間と鉢合わせしても誤魔化しがきく。恐らくこの四日間の間、智宏の知らないところで知らない異世界人が何人もこの世界を訪れていたのだろう。

そう考えると、もしかしたら智宏だけなら昨日にも真相を知らされて、元の世界に返されていた可能性もある。というのも、智宏は昨日の昼間の時点でこの世界にいる異世界人の人数を知らされているのだ。そのときは目の前にミシオもいたので微妙な線ではあるが、ひよっとすると昨日の時点でレンドは智宏に対して抱いていた疑いを捨てていたのかもしれない。

「……？ トモヒロ？ どうしたの？ だまりこんで」

「え？ ああ、いや、そう言えばハクレンさんもうちの世界のことわざを使ったりしてましたけど、あれもカマ掛けですか？」

ミシオに疑問を向けられ、智宏は慌てて先ほどの話題に沿った形で誤魔化しをかける。もし考えが正しければ、ミシオがいなければ

智宏はもつと早く元の世界に帰っていたことになる。智宏自身は今更気にするつもりはないが、本人が知って気分が良くなる話でもない。

そんな智宏の内面を知ってか知らずか、ハクレン本人がその疑問に答えた。

「いや、あれは君の前にこの世界に来た人間が使っていたのを真似しているだけだよ。気にいっていいね」

「そうなんですか」

「っていうか、あれはハクレンさんだけじゃないんだよ。今村で流行語になってるんだ」

「働かざる者食うべからずか？」

「っていうか異世界のもの全般だな。眼に見える形ではあんまり無いけど、それでもこういう言葉なんかは探せば結構あると思うよ。……それにしても、なんか察しが良すぎて拍子抜けするな。こっちは何から話せばいいのか結構悩んでたのに」

「全部が全部分かってるって訳でもないんだけどね。例えばレンド達が何しにこの世界に来てるのか、とかはぜひとも聞いておきたい」

そう言って再び智宏は気を引き締める。いくら何でも彼らが犯罪者を捕まえるだけのために異世界に来たとは思えない。むしろさっきの話から察するにその前に何らかの目的があつたように思う。それが何か予想できないわけではないが、できれば本人から聞いておきたい。

「……そうだな」

こちらの意図を察したらしくレンドはゆっくり頷いた。どうやら隠すつもりもないようで智宏は少しほっとする。正直隠さなくてはならないようなことならどうしようかと思っていたところだった。

「いろいろ複雑だし初めから話していこう。その前にその二人だけ拘束させてもらっていいかい？　なにぶん長い話になりそうだからね」

「わかった」

レンドの申し出に、トモヒロもとりあえず合意した。どの道、この二人をいつまでも手元に置くのは何かと不都合が生じる危険がある。そう考え、やってきた二人の村の戦士に拘束されたままの二人を明け渡した。

引きずるようにしょっ引かれていく二人をしり目に、レンドが再び口を開く。

「事の発端は三年前。俺の故郷、オズのフラリア共和国で妙な転移魔法陣が発見されたことから始まるんだ」

「転移魔法陣？　そういえば昨日もちらつと話に出てきたな」

「文字通り、遠く離れた場所に一瞬で移動できる魔術でね。その性質上かなりあちこちで重宝されてる魔方陣んだけど、違法な物品の密輸やら、犯罪者の密入国やらにもよく使われる魔術なんだ。実際、最初は発見された魔法陣はそう言った違法使用の魔方陣だと思われてた」

「違ったのか？」

「いや、無許可で設置されてたから、違法には違いないんだが、使われてた文字なんかが見たことのないものが多い上に、あちこちから同じ魔方陣が大量に発見されるんで結構な問題になったんだ。んで、調べてみたらその魔方陣が同じ世界の別の都市ではなく、異世界のレキハに繋がってるってことがわかったのさ」

それを聞いて、智宏は内心少し驚く。どうやら異世界にわたる技術は彼らが公に研究して確立したものではないらしい。

「発見された世界は全部で五つ。今俺たちがいる世界、第一世界エデン。超能力者の存在する世界、第二世界アイデア。トモヒロがいた世界、第三世界アース。最も高い機械文明を持つ世界、第四世界ウートガルズ。そして俺のいた魔術の世界、第五世界オズだ」

「ウートガルズ……。五つもあったのか」

「ああ。ついでに聞いておきたいんだけど、ミシオちゃんの出身世界はもしかしてアイデアかい？ 能力者がいる世界の？」

「……はい」

レンドの質問にミシオは割とすぐに答えた。どうやら最初よりも警戒心を解き始めているらしい。

「っていつか気がついてたのか。僕らが別々の世界の出身だって」

「ああ、可能性って意味でなら最初にミシオちゃんを見つけたときにね。あのときは智宏の手前言わなかったけど、外見的特徴である

程度見分けはつけられるんだよ。見ての通りエデンとオズは特徴が他の三つの世界の間と違うし、ウートガルズは種族的特徴はイデアやアースと変わらないけど、レキハの住人のほとんどが白人のさ。だから消去法的に智宏と同じアース人か、外見の良く似たイデア人の二択だったんだよ」

「最初から違う世界出身の可能性を考えてたって訳だ」

「そう言うこと。まあどっちの出身かは今朝の段階までわからなかったんだけど、二回も触れた後で態度を変えられたらさすがにね」

「どうやらミシオの能力についても多少察しているらしい。ミシオも何となく申し訳なさそうに俯いている。」

「まあいいや。話の続きをしよう。さっきも言ったように発見された世界は五つ。そしてその世界全てで同じ転移魔法陣が発見された」

「……やっぱりそうか」

「思えば智宏がこの世界に来る直前、足元で何かが光っており、それを認識した直後に意識を失った。今思いたすとその光は魔方陣のものに酷似していたように思える。」

「この転移魔術において重要なポイントは二つ。一つは転移先が条件指定だったことだ」

「条件指定？」

「特定の条件を満たした土地に転移するってことさ。具体的にはレキハという地名、土地の魔力の流れ、そして使用言語」

「……使用、言語？」

「……それって、もしかして！」

「そう。俺達が今使ってる言語のことさ。別に俺達は君達に分かる言語を話していた訳じゃない。最初から同じ言語を使う土地同士が繋がってるんだよ。それぞれの世界で呼び名が違うから、俺たちは混乱を避けるためにレキ八語なんて呼んでるけどね。だから正確にはこの魔方陣は異世界に行く魔方陣じゃなくて、世界に限らずレキ八語を使うレキ八という都市に行く魔方陣であるとも言えるんだ」

「この世界に来てからずっと抱いていた疑問のそれが答えだった。だがそうなると新たに疑問が生まれる。」

「そんな偶然あり得るのか？ 都市の名前だけならともかく、使用言語まで同じなんて、それこそどんな確率になるか分かったもんじやないぞ？」

「さあな。最初から同じ条件があると知って条件を指定したのか、本当にただの偶然なのかはわからない。ひょっとすると本当は世界が星の数ほど有って、条件を満たせたのが五つだけだったって可能性もある」

「確かに……」

たとえどんなに小さな確立だったとしても、百の内の一パーセントと五百の内の一パーセントでは出てくる数も変わってくる。天文学的な可能性と考えるよりもそちらのほうが正解に近いかもしれない。

「まあ、でも、そんなことよりも重要なポイントだったのがそれらの世界を繋ぐ魔法陣そのものが勝手に増える構造になっていたことだ」

「かつ……！」

「勝手に増える!？」

あまりの話に二人揃って驚きを露わにする。今までの話を聞いていて誰かが転移魔法というものを乱用しているのは予測していたが、勝手に増えるというのは予想外だ。

「より正確に言うなら、構造って言うより構造的欠陥って言った方が良いかも知れないな。転移魔法で世界を超える方法を分かりやすく説明すると、世界の壁みたいなものに穴をあけて世界の外に出てその後別の世界の壁にも穴をあけてその中に入ると感じてなんだ。ところがこの後が問題だね。厄介なことにこの時開けた穴がふさがらないまま残ってしまうんだよ」

「……うわ」

その意味を理解して思わず絶句する。それが本当なら異世界に人が行く度にその世界の外に出る穴が増えていくことになる。それは智宏のように何かの偶然で異世界に渡っても同様だ。むしろ偶然が次の偶然の火種になっているとも言える。

「まあ、正確に言うと出口となった場所に入ると同じ魔方陣が刻まれて、それがそのままその場所に残ってしまうだけだね。それでも異世界行きの落とし穴があちこちに出ていくって構造にはなる

のさ」

「あれは落とし穴だったのか……。って待て。昨日僕が最初に見つかった場所つてのに案内してもらったけど、それらしいものは見つからなかったぞ？ それとも本当は別の場所だったのか？」

「いや、それは単純な話、もうこっちで処理しちゃった後だったんだよ。あんなもんあちこちにあったら危なくてしょうがないからね。他の生き物は勘が鋭いせいかな近づいてこないみたいだけど、それでも異世界にいきなり^{ダイノロイド}竜猿人が現れたりしたら危ないだろう」

「そりゃそうだ」

確かにあんな生き物がいきなり町中に現れでもしたら、それこそパニック映画のような大参事になる。体がそこまで大きくないのがせめてもの救いだ、それでも襲われる人間が出かねない。

そんなことを考えていると、今度は隣でミシオが口を開いた。

「だったら、いきなり町の大通りに、異世界人が現れるってこともあるの？」

「それはないな。発見された魔法陣にはさっき言った到着場所の条件指定の他に、実際に出る場所の条件もある程度指定されているから」

「実際に出る場所の条件って言うと、『安全な場所』とかか？」

「まあそこまで抽象的なものじゃないけどそんな感じだ。具体的に言うと人気のない場所で地上つてのが条件だよ。まあおかげでこっちも魔方陣の発見が遅れて落とし穴の埋め直しが進まないんだが…

…」

「たしかに……」

考えてみれば智宏が魔法陣に引つ掛かったのは人気のない場所だった。つまり人通りの多いところを通っていれば異世界に来ることはなかったわけだ。

そう考えると、智宏はあの日近道しようなどと考えた自分が恨めしく思えた。『急がば回れ』とはよく言ったものだ。近道するつもりが、四日たった今でもいまだに家に帰りつけなくなっているのだから。

「それじゃあ最後に俺たちについて。結論から言えば俺たちはフリア共和国から派遣された、異世界の調査及び異世界との正式な国交を結ぶための運動を行う大統領直轄機関だ。正式名称は異世界国交対策室。まあ、俺たちは通称のチーム クロス・ワールドって方を使ってるがね。」

「……え？ それって？」

「つまりお前らは異世界から正式に派遣されたエージェントってことか？」

ミシオに助け船を出しながら智宏も言われたことを吟味する。智宏の仮説でもレンドが「本国」と呼ぶ場所と連絡を取り合っているという情報から、属する組織は国レベルなのではないかと予想していた。だからこそ彼らが何の目的で来ているかが重要だったのだ。

「異世界の発見はすぐに政府やそのトップの大統領まで伝わり、しかしすぐに極秘事項として扱われた。理由は異世界の実情が分から

ない状態で国民や世界にその情報を公開することは大きな混乱を生む可能性があったから。まあ、他にも思惑はあるんだが、まずは政府でしっかりと調査をして、その後公開しようってことでまずは各世界の調査が行われることになった」

「ずいぶん慎重なんだな」

「そりゃあ慎重にもなるさ。何しろ相手は異世界だ。未知の危険もあるだろうし、異世界人がいる以上、付き合い方を誤れば世界間の衝突もあり得る。何よりいきなり異世界を発見しましたなんて言ったら国民から変になったと思われるしな」

「……たしかに」

もし、一国のトップがいきなり異世界を発見しましたなどと言い出したら、下手をすればその座を追われてしまう。たえそう思われなかったとしても社会は多めに混乱する。

「しかしながら異世界に送った調査員の報告や、保護した異世界人からもたらされた情報によって、異世界にも俺たちと同じような人間が住み、まったく違う文明を築きながらも、俺たちと同じような社会を形成していることがわかった。そしてそのことで政府は異世界に大きな可能性を見出した。すなわち『異世界の技術や文化は我が国にさらなる発展をもたらすのではないか』とね」

「……さらなる、発展？」

「ああ。特にアイデア、アース、ウートガルズの科学文明はとんでもなく魅力的だった。魔術文明とは全く違う物質に依存した文明で、一部では魔術ではできないことを易々とやってのける。しかも逆に

魔術でなければできないこともあるっていうのも魅力だ。お互いに自分にはない技術を持っている。もしも魔術製品を売り科学製品を買うという形での世界間貿易が実現すれば、技術的にも経済的にも想像もつかないような途方もない利益を生むことになる」

「…………それは分かる気がする」

もともと貿易というものは自国にないものを他の国から買うという性質上大きな利益を生むものだ。必然的に珍しい品や貴重な品、高い技術の産物や自国の気候では取れない農産物。そう言った品々はどれも必然的に価値が高くなり、やりようによっては安く買って高く売れることもできる。

ただの貿易でさえそうなのだ。ましてやそれが全く文明形態の違う異世界ともなればなおさらだ。品物だけではない。この世界で見た気功術、魔術、果てはミシオの超能力ですら、別世界に行くだけでその価値はとんでもないレベルまで跳ね上がる。

「じゃあ、さっき言ってた異世界と国交を結ぶって言うのは…………」

「そう。国交を結ぶことで世界間貿易を実現させたいのさ。現にこの世界のレキハ村はすでに俺たちの世界のフラリア共和国と国交を結んで技術や人材の交換が始まっている」

「…………ひょっとしてダインさんはそのための人材なのか？」

智宏の中に浮かび上がるのは朝方のリンファとの会話だ。会話の中で出てきたダインという男性が作る品々はこの世界でも人気が高いという。案の定レンドは簡単に頷いた。

「昨日話したオズの人間の内、ダインさんは技術交換の一環で派遣

された技術者なんだ。まあ、本業は別にあるんだけど……、それはいいや。あともう一人、俺たちのリーダーだつて伝えたゴードンさん。彼も重要な役割を持ってこの世界に来ている」

「……役、割？」

「ああ、ゴードンさんはこの世界に駐留する外交大使なのさ。それも結構ベテランのな。あいにくの人手不足でいくつもの役を一人で行なしてるけど、立場的にはこの世界での俺たちの上司にあたる」

智宏は納得すると同時にレンドやブラインの役割についても多少の想像ができた。特にブラインは軍人であるという情報も考えるとゴードンの護衛役という線が強い。人数が少ないのが若干気にはなつたが、考えてみればこの村は百人ほどしか人がいないのだ。ならば少人数だけでも十分に回せるかもしれない。それと同時に別のことにも気づく。この世界に来てから何となく感じていた違和感の正体だ。

「さつき人材の交換って言ったよな。ってことはもしかしてこの村に僕らと（・・・）同じ年代の人間がない（……………）
（・・・）のはそのせいかな？」

「…………え？ どういう、こと…………？」

今朝がた村の様子を見ていて気になったのがそれだった。いや、それ以前からいつ気付いていても良かったのかもしれない。今朝見たときに限らず、智宏はこの世界に来てから人々のなかに自分と同じ年代の少年少女を一人も見かけていないのだ。見かけた若者は大抵二十代といった様子だったし、少年少女と言える年代は大体十代前半に偏っている。あの村にはこの世界における成人年齢の十五歳

から、大体の目測で十八歳くらいまでの世代がスツポリ抜け落ちて
いるのだ。

「……おいおいそこにも気づいてたのかよ。確かにその通り。半年
くらい前から村の若い世代、具体的に言えば十五歳から十八歳まで
の成人したての若いのが二十名ほど他の世界へ留学も兼ねて出払っ
てる。何しろこの世界は他の世界に比べて文明や価値観がかなり離
れてるからな。本格的に他の世界と交渉するにはその辺の知識を身
につけなきゃまずいだろうって訳だ」

「他の世界と交渉？」

「ああ。俺たちの最終目標はすべての異世界との国交樹立。そして
そのための手段として五世界同時会談を目指している。うちの世界
のことだけを考えるなら四つの世界とそれぞれ交渉するだけでいい
が、下手に異世界同士の関係がこじれると、それによる争いに巻き
込まれかねないからな。だったら、すべての世界を一か所に集めて
共通、対等な関係性の世界間体制を築き上げたい、つてのが政府の
意向なのさ」

「そのためなら他の世界にも手を貸すと？」

「ああ。うちの世界じゃあ既に、弱みや無知に付け込むような外交
は国際社会が認めないからな。できるだけフェアな関係を築かなく
ちゃいけないんだよ」

歴史上たびたび行われてきた不平等条約の押し付けや、植民地支
配のような一方的な国際関係を積極的に避けようということらしい。
それが本当ならかなり国際感覚が進んだ世界だ。争いを不利益とし
て考えている。

「ひょっとして、だからこそあの二人を捕まえに来たのか？」

そう言いながら地面に転がるアルダスとウンベルトを指差すと、レンドはすぐに頷いた。

「そいつらは異世界の存在を知っちゃまった犯罪者でね、俺達としても異世界人に対する不当な人権侵害やら、武力行為やらを黙って見過ごすわけにもいかないし、国としてもそういった非人道的な行為に走って異世界人に対する認識を悪くされたり、争いの火種をばらまかれるのは非常に都合が悪いんだ。だからこそ俺らはそいつらの摘発に全力を挙げている。今日だって本当ならこの森を搜索して、見つかりしだいこいつらの仲間を摘発する予定だったんだ」

そう言ってレンドは先ほど引き渡した二人を見た。そこにはブラインの持っていた手錠で拘束し直された二人が村の若者によって見張られている。

ただ見張っている若者たちがちらちらこちらを覗いているのが若干気になった。先ほどから基本的にレンドが説明を担当しているため他の人たちは周辺の警戒や二人の見張りを行う形になっているのだが、やはりこちらが気になるらしくさつきから良く視線を感じる。智宏としては、できれば見張りに集中してほしいところだ。

「……………私たちはこれから、どうなるの？」

彼らの様子を見ていて不安を思い出したのか、ミシオがそんな質問をする。智宏とて流石にあの二人と同じ扱いを受けるとは思っていないが、この後どうするのかは聞かなければならないと思っていた。自分たちがちゃんと自分の世界に帰れるのかもわからないのではさすがに不安だ。

「安心していいよ。君たちは村に帰ったらすぐにでも元の世界に送るつもりだ。元から帰る方法の存在を教えずにここに留めていたのが例外だったんだしね。ただ、元の世界に帰した後こちらの人間から協力を要請するかもしれないけどね」

「……協、力？」

「内容としてはそれぞれの世界での常識や文化文明のレクチャー、人によっては有力者への橋渡しなんかだね」

「橋渡し？」

「俺たちが異世界との国交樹立を目指してるってのはさっき言ったけど、これが結構大変だね。何しろ政府関係施設に押し掛けて『我々は異世界人だ。国交を樹立して貿易しよう』なんて言っても病院に送られてしまう」

「まあ、確かに」

「だから、その世界の有力者に異世界の存在を浸透させて行って、少しずつ異世界の存在を認めさせたり、国へ橋渡しを頼んだりしてるのさ。そのためにはまず、その世界の人間の橋渡しが必要なんだよ」

「……なるほど」

かなり地道な作業だが無難ではある。異世界人だと証明するなら目の前で魔術を使うという手が最も手っ取り早いが、それを大勢の人々がすぐに信じられるとも限らない。あまり急激に異世界の存在

をアピールし過ぎると混乱や騒動にもつながりかねない。もともと慎重に事を運んでいる彼らには、それは避けたい問題なのだろう。

「まあ、俺たちが教えられることって言ったらこれくらいかな……」

「……ん？ ちょっとまって」

レンドの言葉に思わず待ったをかける。智宏としてはまだ一番重要なことを聞いていない。

「この【刻印】って言うのは何なんだ？」

額に浮かぶ刻印を指差しながら質問する。一応智宏も【集積演算】スマートプレイで加速した思考で予測は立てていたが、自分の願ったことが叶う形のことであることや、他にも同じような刻印を持つ者がいたであろうこと、そして願いをかなえる形であることなどから性質が人によって異なるであろうことなどのことしか分からなかった。

「なんだ？ その辺は一番分かっているとってたんだがな。【刻印】ってのは異世界に渡ったアースの人間にたまに発現する能力の一種で、異世界に移動して最初に強く願ったことが叶ったような能力に目覚めるって代物だ」

「それは分かるんだが、どういう理屈なんだ？ 身体能力なんかも上がってるんだけど……？」

「理屈としては、世界から世界に渡るときに必然的に通ることになる世界の外側、最近の調べでそこに広がっているとされている高濃度の魔力の海が原因なんだ」

いきなり話に『世界の外』などと言う単語が出てきたことに、智宏はわずかに困惑する。だが、先ほどの世界移動の話を思い出せば、むしろそういった物もあるだろうと思いなおした。

「この魔力つてのは何者にも影響されていない、そしてそれゆえに影響されやすい【全属性】の魔力だね。そしてそれゆえ、人間が入り込むとその人間の体の魔力を取り込む動きに影響されて、魔力が流れ込んでしまうことがあるんだ。この動き自体は呼吸と同じで生物が無意識にやっているものなんだが、そのとき流れ込んだ魔力の影響をもろに受けたアース人、中でも影響を受けやすい体質の持ち主が刻印使いになることがある」

「影響を受けやすい体質？」

「ああ。詳しく調べたわけじゃないが、どうもこの【刻印使い】になるアース人つてのが、前に話した体内の魔力変換ができない人間なんだ」

「どういうことだ？」

人間が体内に取り込んだ魔力を自身の中で使いやすい属性に変化させているというのは昨日聞いている。だが、それができないというところがなぜ繋がってくるのだろうか。

「前にも教えたと思うんだけど、人間の体つてのは魔力を人体に取り込んだ時に体質に合わせてその属性を変換している。その変換が正常に行われている人間なら、さっき言った世界の外側に入っても魔力が流れ込んで、その魔力が普通にその人間の属性に変換されて、魔力が回復するくらいの影響しかないんだ。ここまではいいか？」

「大丈夫だ」

「じゃあここからはお前らの場合な。さっきも言ったように刻印使いになる人間ってのは魔力の属性を体の中で変換できない。これは、アース人の中でもごく稀に見られる体質なんだが、そういう体質の人間の体に【全属性】の魔力が入り込むと、その影響をもろに受けることになる」

「影響？」

「体何に侵入した魔力がさまざまな形で効果を発揮するのさ。気功術で身体能力が上がるのと同じ理屈で身体能力が上がるし、さらには気功術でも強化できない魔力の保有量やら、体内での魔力操作能力やらまでが上昇したりする。効果が永続的で、強化のバリエーションが豊富な気功術を思いきりかけられたと思えばいい」

「……具体的にどれくらい強化されるんだ？」

「身体能力その他は元の倍くらい。でも魔力量に至ってはオズ人の百倍以上は確認できているな。魔力が体内に入り込むとき、その人間の魔力の器みたいなものが強化されるんだけど、強化されて広がった分の容量を埋めようとさらに魔力が流れ込んで、それによってさらに器の容量が拡大するって事態になるから」

「……うわぁ」

自分の体が予想以上に変化していることにげんなりとする。特に弱っているわけでもないのに喜ぶべきかもしれないが、イメージが放射能を浴びて生まれた怪獣とかぶってしまっても喜べない。

「じゃあ気功術が使えるようになったのもその影響の一部なのか？」

「まあそうだな。それについても諸説あるが、有力なのはアース人がもとも持っていた微弱な魔力操作力が強化されたんじゃないかって説だ。魔力感覚もまた同様」

「しかもそれに加えてこの【刻印】、か……。この【刻印】ってのはどういう理屈なんだ？」

「さつきも言ったけど、【全属性】の魔力ってのは特定の方向性を持たないゆえに、他の物に影響されやすい。特に感情のようなものに反応する性質があるってのはかなり前から提唱されている学説だな。些細な量なら特に問題はないんだが、そんな魔力が体内に大量にある状態で強い感情をその体の主が抱いたりすると、魔力はもろに影響を受ける」

そう言われて、智宏は先ほど刻印に発現した時のことを思い出す。確かにあのときは、人生の中でも一・二を争うほど激しい感情を持っていたと言いきれる。

「それじゃあ、願いがかなうって言うよりも感情の問題なのか？」

「いや、そうじゃない。たとえ強い感情をいただいても、その感情に具体的なイメージが伴っていないから、魔力は刻印にはならないんだ。願いと言う具体性を持ったイメージに引きずられて、その欲求をかなえるべく魔力が体の中に作り上げる種の回路。それが【刻印使い】の【刻印】なんだよ。体に直接魔方阵が作られるって言うてもいいかな」

「……なるほど。副作用みたいなものはないのか？」

できるだけ軽く言っつて、一番気になつていたことを訪ねてみる。せつかく刻印のおかげで助かったのに、それによつて生まれた副作用で死んでしまったのでは流石にあんまりだ。

「今のところ健康上の問題は報告されていない。もつとも今までこちらが確認できている【刻印使用】は三人しかいないから何とも言えないけどね。後は能力自体の副作用だけど、これも意外に少ない。副作用を望む人間がいらないからじゃないかつて話もあるけど、これはただの推測だな」

「……そうか」

レンドの答えにとりあえず安心し、ひとまず【集積演算】^{スマートブレイン}を止めることにする。聞くべきものはあらかた聞くことができたし、いい加減効果のわからない異能をチラつかすのも、相手にとっては不安要素だろう。後で効果を教えておくべきかもしれない。

どうやらこの【集積演算】^{スマートブレイン}は魔力を消費するものらしく、今も智宏の体からは魔力が抜け続けている。まだまだ余裕はたつぷりとあるが、流石にこのまま使い続けるといつ魔力が枯渇してしまうか分からない。昨日聞いた話では魔力が枯渇すると倦怠感を感じるらしいので、いい加減止めなければまずいだろう。幸い自分の体を動かすのと同じ感覚で止められるだろうという確信はあるので、感覚に従つて止めることにし、

だが、直後に響いた声によつて、再び高速の思考を余儀なくされた。

『話は終わったかい弱者どもお？』

どこからともなくスピーカー越しのような音質の、しかし間違いなく悪意に満ちた声が響く。

声の発生源はその場にいた全員がすぐに気が付いた。先ほど捕まえたばかりの二人組。その内既に取り上げられているアルダスがその発生源だった。ただし、アルダス本人が喋っているわけではない。

「っ!! 貴様ア!!」

すぐに真実に気が付いたブラインがアルダスに近づき、隠し持っていた小さな物体を取り上げる。見慣れない形ではあったがそれが何かはすぐに察しがついた。

魔力を用いた通信機だ。

『どおでもいいけどよう、捕虜の持ち物ってのはすぐに確認するべきなんじゃないの？ おかげでさっきからの会話は筒抜けだったぜえ？ こっちの人間がそっちに捕まっちゃってるってのもさあ、丸わかりだぜえ？』

「っ!!」

それを聞いて周りにいた村の若者たちが動揺する。原因は明らかだ。監視を任されていた村の若者たちが通信機が存在に気が付かなかったのだ。恐らくこの世界には通信機という概念すらなかったのだろう。

異世界の人間との認識のずれから起きる単純なミス。この一団の指揮をとっているらしきブラインが異世界人との認識の齟齬を理解しきれていなかったのだ。

「……なるほど確かに失態だな。これでお前たちは俺たちをあざ笑

いながらまんまと逃げきる訳か」

言いながらブラインの表情にも苦いものが浮かぶ。だが、彼の考えはすぐに裏切られることになった。

『逃げるう？ 青つ白い研究班の連中ならともかく、何でこの俺がお前らみたいな弱い奴から逃げなくちゃいけないんだよお？ こっちは通信機こいつのおかげでそっちの場所までわかってるんだぜえ？』

「……なに？」

通信機の向こうのから響く声に対してブラインは怪訝な表情を作る。普通であればここは引くべきところだ。いくらアルダスとウンベルトを捕まえているとはいえ、二人は恐らく末端の人員。重要な情報などほとんど持ってはいないだろう。

相手は通信機が発信機の役割でもはたしているのか、どうやらこちらの場所は分かっているようだが、本来追う立場であるこちらはまだ相手の位置を判っていないのだ。引いてしまえば余計な手がかりも残すことはないし、この期に及んで戦うメリットなどどこにもない。

だが、この相手はそんな計算をあっさりと裏切って見せる。

『そんじゃあ、だらしくも捕まっちゃまった弱者どもの尻拭いをして、張り切って行きますかあ！ すぐ行くから、それまで先に行かせたプレゼントの相手でもして待ってるお!!』

凶暴ながらも楽しそうな叫びと共に通信機が切られる。それと入れ替わるように狂ったような笑いが響いてきた。通信機を奪われ、地面に転がるアルダスだ。

「……クツハハハハアツ！ ハアツハツハツハハア！！ ざまあ
みるお！ これでお前らはおしまいだあ！！ 俺をこんな目にあわ
せた報いを受けるお！！！」

笑い続けるアルダスにその場の全員が不気味なものを感じている
と、アルダスのすぐそばでウンベルトが身を起こした。

「……アル、ダス」

だが、こちらの表情にはアルダスとは別のものが浮かんでいる。
それはまぎれもなく恐怖の表情だった。

「おい、アルダス……。今のはどういうことだ？」

「どういうことって決まってるじゃねえかあ！ 助けを呼んだんだ
よお。こんなところでとっ捕まるなんてまっぴら」

「バカか貴様あああ！！！」

恐ろしい形相で叫ぶウンベルトの声にアルダスも絶句する。周
りで警戒を始めていた村の戦士たちが一斉に振り返るほどの声だった。

「あいつが！ あいつが俺たちのことに構いながら戦えりとも思
っているのか！！ 命が持たないと言ったのはお前だろうがああ
あ！！！」

裏返った声で喚き散らし、ウンベルトは怪我をし、拘束された体
にも構わずもがき始める。周りの戦士二人が取り押さえにかかると、
今度は恐ろしい形相で叫び始めた。

「逃げろお！！ 俺を連れて行ってくれえ！！ あいつが来たら殺される！！ 何でも話す！ だからここから　　！！」

「何か来るぞお！！」

ウンベルトの恐怖に応えるように、村の戦士の一人が声を上げる。その声に反応し、その場にいた全員がその戦士の指さす方を見た。その先にあつたのは空だった。ただし空自体は重要ではない。重要なのはその空に黒い影がぼつりと存在していたことだ。

「……なんだ、あれは？」

智宏の目からでもそれが何かは分からなかった。細長い形をしたシルエットを【集積演算】スマートフレイクで記憶にあるものと比べてみるが同じ形状のものはない。

(……ん？　なんだ？　あの影、だんだん大きく　　！！)

影を見ていた智宏がその事実気が付く。加速した思考はすぐに起きるであろう事態を導き出し、それを防ぐために呼びかける言葉を選んだ。

「っ！　レンドォ！！　すぐに全員を退避させろ！！　あれは」

叫びきる前にその場にいた人間の半分以上が気が付いた。影の正体はワニに似たこの世界の爬虫類。ただしその体は智宏の知るワニとは比較にならないほど

「　大きい！！」

その巨体を認識し、周りにいた誰かが叫ぶ。
そして次の瞬間、体長およそ十メートル以上。巨大な顎と牙を持つ
巨大生物が、智宏達のいた場所を直撃した。

17：交錯する世界（後書き）

感想や評価、批評や表示形式への文句などお待ちしております。

18：強者襲来

「全員無事か!? けが人の有無を報告しろ!」

あたりに響くブホウの声を聞き、智宏も身を起こした。とっさに庇ったミシオに怪我がないことを確認してから周りを見渡す。するとすぐ近くで、どうやら無事だったらしいレンドが起き上がっていた。

「……あああ!! なんだってんだよ、くそ!」

レンドが悪態をついた先を見て智宏もその気持ちがあった。先ほどまでたっていた木々がなぎ倒され、十メートルを超える巨大なワニが横たわっているのだ。ただ智宏のワニとは体型が若干異なっており、普通のワニが平べったい体型をしているのに対し、このワニは大分立体的な体型をしていた。

どうやらワニは智宏達のいた場所に直撃したわけではなく、その直前に落ちて、その勢いのまま突っ込んできたらしい。狙いもど真ん中に直撃した訳ではなく、智宏から見て左に大きくそれていた。おかげでワニの直撃を受けるものもおらず、ワニ自体もすでに絶命していた。通信機の男は「相手をしている」と言っていたが、流石にこの大きさの生き物があの勢いで地面に叩きつけられたらひとたまりもなかったらしい。

(この状況……。朝方の甲殻竜もこいつの仕業か……。!!)

今朝の騒ぎを思い出し、智宏は内心で戦慄を覚える。どうやったか知らないが、相手はどう考えても数トンはありそうな恐竜を飛ばしてくることができるらしい。

「君たちは無事か？」

こちらに駆け寄ってきたハクレンに全員で返事をする。どうやら彼も無事だったようだ。

「向こうで三人ほど怪我人が出た。まったく異世界というのは常識だな」

「うちの世界でもこんなの常識にはありませんよ。捕虜の方は？」

「そちらも無事だ」

「なら撤退になるかもしれませんがね。相手は得体が知れないし、今なら場所は通信機を始末すれば誤魔化せる」

「いや、どうやらそうはいかないみたいですよ」

「なに？」

智宏の声に、レンドとハクレンが同時に振り返り、智宏が見ている方向に視線を向けて絶句した。

「ミシオ、この場にいる全員にあれの存在を伝えて！ 大至急！」

智宏の指示に返事を返す代わりに全員の脳裏に【感覚投影】で一つの光景が送られる。空に浮かぶ巨大な影、次なる飛来物の光景だった。

「樹だあああっ！！！」

誰かの叫びでようやくその正体がわかる。それは大木だった。根っこの上からへし折られたような樹が、こちらに向かって重力を小馬鹿にしながら飛んで来る。

「うお！」 「ぐう！」 「ぬう！」 「うっ！」

地響きを上げて大木が森に落ちる。しかしそれは智宏達がいた場所からは大きく外れ、五十メートルは離れた場所に着弾した。

だがそれで終わりではない。飛んで来る大木は一本だけではなかった。

「っ！ もう一本、いや、もっとたくさんこっちに飛んでくるぞお！！」

智宏の視界に移る大木は十二本、そしてそのうちの一本がこちらに真っ直ぐに跳んできていた。

（術式展開 【土神の剛腕】タイタン・クロウ！！）

高速で魔方陣を展開し、飛んでくる大木を魔術の剛腕で受け止める。

「 うおっ！！！」

だがすぐにその重さと勢いが受け止められるものでないことを悟り、人のいない右側に払いのけた。

同時に十二本の大木が次々と轟音を上げて着弾する。

「っうううう！！ くそ！ あんなの一本でもまともに食らったら

ペシャンコだぞー!!」

「おいレンド！ こいつも僕の額にあるのとおなじ刻印の力なのか？ 魔術や気功術って感じじゃないけど。それともミシオの世界の超能力か？」

「たぶん刻印の方だな。いくらアイデアの能力者でも、こんな規模で力をふるうのは流石に不可能だ」

「ウートガルズってのはどうだ？ その世界の何かじゃないのか？」

「ウートガルズは君の世界よりはるかに進んだ科学文明の世界だ。そもそもこの攻撃が技術によるものなら、砲弾とかミサイルとかもつと命中しやすくして殺傷力のあるものを飛ばす!!」

「くそっ！ 相手はオズの犯罪者だけじゃなかったのかよ!!」

会話しながらも【土神の剛腕^{タイタン・クロウ}】を解除して気功術の【感】を用いて周囲を警戒しながら他の戦士たちと合流する。どうやら攻撃はおさまったようで、周りでも戦士たちが集まり始めている。智宏もミシオに肩を貸しながらそれに合流した。

「どうするんだブライン。なんか逃げ切れそうもないぞ？」

「もとより逃げる気もないわ！ 相手が逃げるのならともかく、こんなやつを野放しにしては村が滅んでしまっ」

「儂らとしてもそれは困る。しかしどうするのじゃ？ 相手の位置も分からんのに」

「戦士長!!」

レンド、ブライン、ブハウの会話に村の若者が加わってきた。よく見ると昨日智宏達を助けに来た二人の内の一人だった。

「かなり遠くから爆音のようなものが近付いてきます」

「爆音だと!?!」

「こつちも微かに魔力を感じてるよ。たぶんこいつだ」

「トモヒロ?」

「数は一、どんどん感覚が強くなってる。これは……、近づいてるからか?」

智宏にとって魔力の感覚は最近覚えたばかりの感覚だ。魔力自体は感じられてもそれがどういふ変化をしてそう感じているかは分からない。だが次に起きた変化はすぐに分かった。

「なっ!!」

「えっ!?!」

それは音の方も同じだったらしく、音と魔力、それぞれの感覚で敵を察知していた二人が同時に声を上げる。

「どうした?」

「魔力の気配が……、消えた」

「音も止んでます……、まだ鳥の声なんかはすいいでですけど」

「消えた？」

「トモヒロ、エンロンもどういうことだ？」

レンドやブホウが困惑するなか智宏は気功術を強めて必死に魔力の感覚を探る。周りの感覚と探している感覚を【集積演算^{スマートブレイン}】で整理し、探している感覚を選び出す。

「見つけた！ ……でも何だ？ さっきより明らかに感覚が弱い」

「こっちはさっきみたいな派手な音は聞こえません」

「少年、そいつはまだ近づいてきているか？」

「たぶん。またどんどん感覚が強くなってますし……」

だがそれもまた妙な感覚だった。さっきより感覚の変化が緩やかなのだ。今感じる気配もさっきまで感じていたのと比べると見る影もない。距離は近づいているはずなのにだ。

「スピードもさっきより遅い。だからか？ いや、でも……」

「どちらにしろ近づいているということは戦意はあると考えるべきだろう。迎撃する」

「捕虜やトモヒロ達はどっする？」

「僕はここに残るよ。今のところこいつの魔力を感じることができないのは僕だけみたいだし。それにさっきの攻撃、相手がノーコンなのか無差別なのか分かんないけど、どこにいても危険なことには変わりない。だったらここで協力した方がましだ」

「私も……、残る。私も^{テレパシー}通念能力があるから。役に、立てるから」

「しかし、関係のない人間をまきこむ訳には……」

「そんなこと言ってる場合でもないぞブライン？ それにもう巻き込んでしまってるよ。この状況で俺たちから離れる方が危険だ」

「……仕方が無い。まずは少年の刻印について教えてくれ。それから作戦を立てる。言っておくが仕留めるぞ。生かして捕らえられるとは思っていないからそう思ってくれ」

苦いものの混じった判断に、智宏はすぐさま自身の刻印について話し始める。

遠くの方でどんどん強くなる魔力の感覚について考えながら。

迎撃態勢はオズ人の軍人三人による魔術を基本に組まれることとなった。相手が得体の知れない相手であることから迂闊に近寄るよくなことはできる限り避け、相手が先ほどまで智宏達のいた広場に出てきたところを魔術による集中砲火によって仕留めるという計画だ。

森の中に隠れ、智宏と先ほどのエンロンという戦士の聴覚を頼り

に相手があるのを待つ。

『レンドさんが「どうでもいいけどこの敵来るの遅くない？」って
言ってます』

「……」

『ブラインさんが「それでもこんなあの大型が住んでいる場所から
ここまでこんな短時間で移動してくるのは驚異的だ」って言ってま
す』

「……」

敵を待つこと十分、ブラインは部隊を、智宏達を要する中央、捕
虜の二人を連れたブホウ達の左、けが人とその治療をするハクレン
のいる右の三つに分け、ミシオのテレパシーを無線の代わりにして
指揮をとっていた。ミシオを智宏が背負い、その両側にブラインと
レンドが来る形で潜んでいる。

オズにも通信技術は存在する。先ほどアルダスが仲間との通信に使
っていたのもオズの通信技術作られた通信機であり、当然のように
レンド達もそれを持っていたのだが、残念なことにその使い方はあ
まり簡単なものではなく、この世界の人間にはまだ教えられていな
い。唯一使えるのはオズの人間である四人だけなのだが、その四人
は敵の迎撃に集中しなければならない。そのため通信機の代用とし
てミシオのテレパシーが代用されることになったのだ。これならミ
シオから全体への一方通行ではあるが簡単に指示が出せる。

『レンドさんが「今俺も魔力が感じられるようになった」って言っ
てきます』

『ブラインさんが「自分も感じたって言ってきました」あと「大きい」とも』

『トモヒロから……あつ、これは私？ 誰からってのはいららない？
……うん、わかった』

流石に通信機代わりになることに慣れていないらしいミシオにアドバースしてから、近づいてきている敵に集中する。どうやらかなり近づいてきたせいか、レンドやブラインにもその存在を感じられるようになった魔力の感覚は、先ほど一度途切れてからまたどんどん強くなっている。それに比例するように爆発するような音もどんどん大きくなり、近づくスピードも上がっている。

『まったくでたらめな魔力を放出しながら来るやつだ。自分ならこんな魔力を垂れ流していたら瞬く間に干からびるぞ』

『でもそのおかげで位置は丸わかりだ。敵に時間を与えて、自分は存在感丸出しでやってくるなんて……、こいつは戦闘の基本も知らないのか？ 俺こいつバカなんじゃないかと思っただけ』

『確かにおかしな話だな。さっきみたいに大きなものを飛ばしてくる気配もないし……、ひょっとして僕たちが死んだと思ってるのか？』

『だとしたらチャンスだ。油断したところを一気に仕留める。……そろそろか、二人とも、術式展開だ。術式は【テラボルト極放雷】だ。一斉砲撃で仕留める』

そう言ってブラインは茂みに隠すように掌、手首、肘に三つの魔方陣を展開する。どうやらこれが【テラボルト極放雷】の魔方陣らしい。

エデンにおいて人とは天に作られたいわば使徒であり、そんな人同士が殺し合うのは天の意志に反すると考えられているからだ。

だがそれも相手が人を殺すものなら話は別だ。人が人を殺せばそれは人の道を外れ『魔獣』とおなじ獣に堕ちることを意味する。そうなればその者は人によって処断されるべきものとなり、人同士が殺し合うのではなく、人が獣を狩る行為とみなされ、殺しが許容されるのだ。人の道を踏み外したものは獣として処理される。それがこの世界の信仰だ。

だがしかし、例え獣に堕ちたものであってもその相手に同情することは許される。むしろそれができてこそその人だとさえ考えられている。ブホウもその思想のもと、いましがた雷光に焼かれた人影の冥福を祈ろうとし、

その巨大な『気』がまだ消えていないことに気が付いた。

「……おいおい、何してくれてんだよお？ おかげで俺の服が消し炭になちっちゃまったじゃねえか。……ったく、どうしてくれてるんだあ？」

雷光の落ちた場所から現われたのは一人の男だった。黒い長髪を後ろで束ね、細長く上がった顔つき。加えてその頬に傷があり相当人相が悪く見える。男の言う通りその服はほとんどが焦げて原形を留めなくなっており、上半身はかろうじて右肩から先の袖が残っているくらいだ。同じく異世界のものと思われるズボンも、ひざから上のみがどうにか形をなしていた。他の場所はほとんど裸同然で、筋肉のたっぷりと付いた体を晒している。

だが、何より重要だったのはその体に火傷のあと一つなかったことだ。

「……どういうことだ？ 確かに命中したはずだが？」

相手の様子を見ても命中したのは間違いない。それなのに相手の体は火傷一つ負っていないというのはどういうことか？　だがそれを考える時間はブハウ達にはなかった。

「待ってくれオチシロオオオツ！！　俺たちがまだここにいる！！」

「っ！！」

ブハウの後ろでとらえていたウンベルトが狂ったように叫ぶ。この場に身を隠すときも放置するわけにもいかず、連れて来たのが仇になった。騒ぎ立てるアルダスは気絶させたが、怯えるばかりで静かなウンベルトにはそうしなかったのだ。とっさに村の若者が止めにかかる。

「おいお前！！　おとなしくしている！！」

「俺もアルダスもまだ生きてる！！　きつとまた役に立つ！！　そのことを上に伝えて」

「　なあと、言ってんだよお？」

声に応じるようにオチシロと呼ばれた男がこちらに歩いてくる。その歩き方はなぜか安定せず、どことなく落ち着かないものだが、発している気の大きさが頼りなさを感じさせない。

「……俺初めて聞いたぜそんなセリフ。まさかこの世界で、って言うかこの業界で、そんなセリフが通じるなんて思ってるやつがいるなんざあ、思いもしなかった」

気だるそうにそう言った次の瞬間、男の足は一瞬でそばにあった木の根元を蹴り砕いた。

「んな!？」

「っ!！」

「ひい!！」

村一番の大男でも到底抱えられないような樹木が、一発でその根元を砕かれたことにその場にいた全員が凍りつく。それをあざ笑うように男は腕を振りかぶった。

「そおらあつ! 死にたくないなら自力で逃げなあ!！」

「っ、伏せろおおおお!！」

ブホウのとつさの叫びに全員が従う。そしてそれがギリギリのタイミングだった。倒れようとしていた樹木はつき出された男の掌によって凶器に様変わりし、伏せたブホウ達の頭上を通して逃げ遅れたウンベルトに直撃した。

悲鳴を上げることができず、その体が折れた樹木と一緒に飛んでいく。何かが潰れるような音が耳を汚し、そして数瞬後には樹木が地面に着弾する地響きの音。結果を確認する余裕はない。だが状況から考えてウンベルトの生存は絶望的だった。

「だめだろう? 俺達は鉄砲玉なんだからさあ。死にたくないけりやあもつと強い砲弾や俺のようにさらに強いミサイルにならないと」

「っ!！」

仲間であるはずの人間に自分の攻撃が当たったというのにそれを気にする様子もない男にブホウは怒りを覚える。今の攻撃を食らってウンベルトが生きているとは考えられない。だというのにこの男はそれを何でもないことのように言っているのだ。

「……貴、様。……貴様あ！！ 人間を、仲間を殺しておきながら言うことはそれだけかあ！！」

「……ああ？ 何言っただあ？ 弱い生き物が死ぬのなんてこの世界なら当たり前のことたるお？ それに足手まといになるようなら切り捨てた方がいいしなあ？」

「それ、は、獣のすることだああああ！！」

怒りに絶叫しながら、ブホウは男に向かって突進する。背中の大剣を抜いて後ろに振りかぶる。刀身と右腕、そして両足に気を大量に叩きこみ、腕全体で回転をかけながら放つのは、大型竜を殺すのに使われる必殺の突き。

「【骨貫き（ほねぬき）】！！」

ブホウは戦士の中でも一撃の威力を突き詰めたどどめ役だ。ひたすら一撃の威力を追求し、磨き抜かれたその技の威力はこの世界で最高のものであると言ってもいい。

だがその最高の威力を誇る突きは、左胸に食い込むことすらせず、に皮膚のところまで止まっていた。ブホウの右腕に強いしびれと、それ以上の驚愕が襲ってくる。

「……残念、獣の方が強そうだあ」

そうやって男は自分の胸筋に力を込める。たったそれだけでブホウの体は剣ごと後ろに跳ね飛ばされた。

「悪いなあ。俺ってばもう最強なんだよ。それこそどんなすごい技でも、虫が止まったほど感じないほどになあ」

言いながらブホウに向かって歩く男の袖が地面に落ちる。上半身に残っていた最後の布地が無くなった後に残るのは、右肩に刻まれた円筒状の【刻印】。智宏ならばミサイルのようにも見えるそれがオチシロの力の象徴だった。

「これが俺の最強の証しだ。わかるかあ？俺は間違いなく最強の力を手に入れたんだあ！！」

「　　そうか。やっぱり僕とおなじ【刻印使い】か」

言葉と共に茂みから智宏が飛び出す。ここに来るまでに展開していた魔方陣を起動させ、言葉にオチシロが反応するより早く、魔術で巨大化した拳を思いきり叩き込んだ。

19：力学崩壊（前書き）

予定を変更して、早めにこの章を完結させてしまうことにしました。

チェックが済んだものから投稿していこうと思います。

19：力学崩壊

（術式展開

【土人形の鉄腕】ゴレム・アーム！！）

茂みから飛び出し、目の前のオチシロと呼ばれていた男に右手の巨腕をたたきつける。

しかしその拳はオチシロの顔面に轟音を上げて直撃したところであつさりと止まってしまった。

（…………やはり効かないか。それなら

【土神の剛腕】タイタン・クロウ！！）

すぐさま左腕にも魔方陣を展開し、魔術を発動させる。複雑で文字数の多い魔方陣を一瞬で組み上げ。右手を引くと同時に左手で殴りつける。

再び轟音が森に響き渡る。音も威力も倍以上の大きさを誇る現状最高威力の攻撃。だが右手の巨腕よりはるかに大きな剛腕でもオチシロの体はびくともしなかつた。

「終わりかあ？」

とつさに両腕の魔術を解除し後ろに飛び退く。二つの腕が消え、智宏はオチシロと正面から向かい合うことになった。二人の視線が、同時に相手の刻印を捕らえる。

「へえ。魔術を使ってるからオズの人間かと思ったら、お前同類かあ？」

「……………そう言うあなたは日本人のくせにこんな犯罪組織に加担してるんだな」

「ああ。まあ、こんな力、こんな場所でもないと思えるえないからなあ。それに金をもらってんだ、仕事はしっかりしないとなあ？」

「金？ 雇われてあんな犯罪者に加担してるのか？」

「それはさっきおれが生ゴミにした奴も同じだよ。あの胡散臭い研究者どもはどうか知らないが、まあ興味もないしな。元々俺の本業は詮索無用の東京湾に生ゴミを捨てるお仕事だ」

「っ！！」

「どうやら犯罪組織か何かの人間らしい。とはいえ元より話し合う余地がない以上それに関しては関係ない。すでに相手はこちらを殺す気でいるのだから。」

それを表すようにオチシロは体勢を低く沈め、

「さあ、生々しく死ねえ、生ゴミイイ！！」

「やなこつた！！」

突進してきたオチシロに応じるように智宏は背中に展開していた（・・・・・・）魔方陣を発動させる。今朝の段階でこういつた場所でも【マーキング】が使えるのは確認済みだ。そのときは目で見ることができないため書いた文字がぐちゃぐちゃになってしまったが、

「【集積演算】^{スマートブレイン}のイメージに狂いはない！！」

背後から四羽の炎鳥が飛び出す。四羽とも高速でオチシロに向か

い、

「なに!?!」

オチシロの予想を外れ、すべて足元に着弾した。

「目くらましかあ!?!」

智宏の意思を理解したオチシロの声から、逃れるように横に飛び退く。すると間一髪、寸前まで智宏のいた場所を何かが砲弾のように通り過ぎて行った。直後その先の森の一带に爆弾が落ちたかのような轟音が響く。

「ぐうづづづ!?!」

発生した衝撃波に智宏の体が吹き飛ばされ、地面を転がる。それでも何とか通り過ぎた砲弾の正体を確認し一つの確信を得ることになった。

(やっぱりそういうことか!?!)

「無事か! 少年!?!」

どこから駆け寄ってきたブラインに体を持ち上げられ半ば強制的に立たされる。智宏自身も若干ふらついてしたがそれはすぐに回復した。

「ブラインさん、他の人たちは?」

「君がミシオ君を通じて指示していたと通り全員バラバラに退避さ

せた。だがどうする気だ。逃げても奴は倒せんし、そもそも足の速さがけた違いだぞ」

こちらに来る直前に出しておいた指示に一応はしたがってくれたらしいが、それでもブラインはその判断に迷いを覚えているらしい。それはそうだろう。いくら【集積演算】スマートブレインの特性を説明してあるとはいえ、指示したのは素人の少年だ。ブライン達プロから見れば心もとない相手だろう。

だからこそ智宏は強い口調で宣言する。

「ここで固まっていたら間違はなくやられてしまう。散らばることと身を隠すことに意味があるんです。とにかく今はいったん逃げましょう。それとミシオは？」

「レンドと一緒にいる。これが通信機だ。レンドに繋がっている」
そうやってブラインは智宏に卵のようなものを渡してくる。それには宝石のようなものがいくつか埋め込まれており、形態としては装飾品に近かった。

「もしもしトモヒロかい？」

その卵から突然声が発せられた。どうやら電話と違って耳に当てる必要はないらしい。そういう意味ではトランシーバーに近いのかもしれない。

「もしもしレンドか？ 今ミシオは？」

「俺が背負って走ってるよ。変わるかい？」

「ああ。頼む。テレパシーで放送してほしいことがあるんだ」

「了解！ せいぜい愛でも語りな」

最後に余計なことを言っただけでレンドの声が途切れる。変わって聞こえてくるのはミシオの声だ。

「……トモヒロ？」

「ミシオか？ 今から僕が話すことを、いや、僕と周りの会話をさつき集まっていた全員にテレパシーで放送してくれ。今からあいつの【刻印】とその対応法について説明する！」

通信機の向こうでミシオが息をのむのが分かった。

「……チイツ！ 外したかあ！！」

墜城雄也たふしゆうぢやはそう言いながらも楽しそうに起き上った。体当たりで木々をなぎ倒し、地面に突っ込んでクレーターを作ることになったが、墜城自身は痛くもかゆくもない。

結論から言ってしまうえば先ほど智宏をかすめた砲弾の正体は墜城自身だった。

威力もスピードも間違いなく下手な大砲より上であろうその攻撃の正体は、言ってみればただの体当たりなのだ。

逆に言えば、ただの体当たりでこの威力。

「……いい！ いいねえ！ 最高だあ！！ いいや違うなあ。最強だあ！！」

この世界は他の世界と比べても弱肉強食の色合いが強い。恐竜から進化した巨大生物もいるし、それに対抗するため研鑽を積んだ戦士もいる。だがどちらも墜城には敵わない。現に今も怪物と戦えるだろう村の戦士たちが蜘蛛の子を散らすように逃げていく。その事実のは彼の精神状態を最高に高揚させていた。

「すげえぜこれえ！！ 異世界に連れて来てくれたた奴に感謝だ！！ どんどん力が湧いてくる！」

どんなものも自分には敵わない。今の墜城は間違いなく頂点にいる。気にいらぬ相手がいれば殺して生ゴミに変えればいい。どんな兵器も魔術も既に自分には効かないのだ。どんなわがままでも許される力を自分には手に入れた。

「おまえも俺みたいない能力を持っていればいい思いができたのかもしれないのになあ？ ガキイ？」

墜城の視界が逃げていく者たちの一人、先ほど魔術で殴りかかってきた少年を捕らえる。自分と同じ【刻印使い】、それがどのような効果を持つ刻印の持ち主であるかまでは分からないが、逃げていくという事はどうにもならないのだろう。当たり前だ。墜城は最強なのだから。

「さあて、あんまり遊んでるのもあれだから一気にぶっ飛ばすしますかあ！！」

言いながら手近にあったつかめる程度の本をへし折ると、墜城は

逃げる少年に向かって突っ込んだ。

「伏せろお!!」

叫びと共に智宏の体がブラインに押し倒される。すると間一髪、地面に倒れた二人の頭上を一本の木が通り過ぎる。一瞬遅れてオチシロもその軌道を通り過ぎる。オチシロが木を振り回しながら突っ込んできたのだ。

「ヒツホオオオオ!!」

智宏達の上を通り過ぎたオチシロは、持っていた木を目の前の別の木に思い切り叩きつける。それによってオチシロの体はようやくスピードを落として着地することに成功するが、持っていた木は粉々になり、叩かれた木も派手にひしゃげてゆっくりと倒れ始めた。

「だめだなあ。武器使おうとしても武器の方がもろいや。ツハハ！ホント良いなあこれ！そのうちコンクリートとか鉄骨とかある町中で暴れてみえ！」

「くっ！」

一人で喋るオチシロを半ば無視して、智宏はブラインと共に立ち上がる。今オチシロに捕まる訳にはいかない。

だが走りだそうとした瞬間こちらに背を向けていたオチシロが振り返った。

「どこ行くんだよ？ 探すのめんどくさいんだから逃げんなあ！」

そう言っただけでオチシロは再び手近な木を蹴り碎く。それだけで木の根元は粉々に砕け、その破片が智宏達に襲いかかる。だがそれは彼にとっては攻撃ですらない。

「さあ！ もう一本行ってみようかあ！！」

再び折れた大木が飛んでくる。しかも今回は至近距離、よける暇など到底なかった。

(くっ……！！) 【土人形の鉄腕】！！(ゴレム・アーム)

故に智宏は再び受け流すという手段を選択した。

「ぐ、う、あああああああ！！」

魔術越しに腕に伝わる痺れを感じながらもどうにか軌道をそらす。だが判断に動きが間に合わなかったため、致命的なダメージを受けた巨腕は瞬く間に砕け散った。

「いい加減にしる貴様あ！！」

その隙を埋めるように今度はブラインが魔術を使う。手の先に展開した魔方陣から電撃の槍が放たれ、それがオチシロの胴体に直撃する。

一撃で竜猿人も葬る【雷槍】サンダーランス。だがその威力は先ほどの【極放電】テラボルトに比べあまりにも小さい。

「おいおいおい、それで攻撃のつもりかよ？ 弱々しすぎて涙を誘うぜ？」

体の焦げ跡一つつけず、オチシロはこちらに歩み寄る。その事実
にさしものブラインも思わずたじろぎ、後ずさった。

「攻撃つてのはさあ、こうやるんだよお！！」

そう言つてオチシロは今度は地面を蹴る。サッカーのボールをけるような良く見る動き。だがその力はたったそれだけで足元の地面を根こそぎ二人めがけて吹き飛ばした。

「つづう」

「つああー！」

襲いかかる土砂に、たまらず二人は飲み込まれ。ともに押し流されるように吹き飛ぶ。相手の力があまりにも大きすぎて自分が無力な虫にでもなつたような気分だった。

「アアツハツハツハアー！」

それでもさらにオチシロは智宏達のいたすぐ近くを砲弾のような速度でオチシロが通り過ぎた。とたんに衝撃波が襲いかかり、二人の体がさらに宙を舞う。

二人が地面に叩きつけられるのと、遠くで爆発音がなるのはほぼ同時だった。

「つうううう！ ……く、無事かあ……、少年！？」

「無事です」

言いはしたものの、正直二人ともあまり無事とは言えなかった。二人ともすでに全身傷だらけの泥だらけ。智宏自身は特に大きな怪我は追っていないかったが、全身が痛み悲鳴を上げている。ブラインに至っては顔中にびっしりと脂汗を流している。見たところ手足の動きに異常は見られないが、あばら骨くらいは折れているかもしれない。

だが智宏はそれらを意図的に無視して口の中の泥を吐き捨て、次の判断を下した。

「今のうちに走りましょう。まずはあいつから身を隠さなければ」

何とか立ち上がり、二人揃って走りだす。今は一瞬でも止まる訳にはいかなかった。

『トモヒロ!! 大丈夫!?!』

「大丈夫だ! それより奴の刻印の効力だ!!」

通信機に向かって叫び、智宏は頭の中でオチシロについての情報をまとめる。幸い今の一撃でオチシロはこちらを見失ったらしい。あるいは他の標的を見つけたのかもしれないが、話をするなら機会は今しかない。

「まずわかりやすいところから。あいつの刻印の効力の基本となっているのは、桁違いの肉体強化です。これについては見ていたほとんどの人が察してはいると思いますが」

「まあそうだろうな。見たところ奴は途方もないバカ力以外に得に

おかしな力は使っていない。恐竜を投げ飛ばせる規模となれば確かに驚異的だが、単純に身体能力をあげる刻印だと見ていいだろう」

「いえ、上がってるのは身体能力だけではないと思います」

『なに?』

智宏の言葉に、通信機の向こうからレンドの疑問の声が上がる。通信機はミシオが持っていることを考えると、どうやらこの通信機、かなり感度がいいらしい。

「身体能力や人体強度なんかが上がっているだけと考えるには、いくつか説明のつかないことがあるんですよ。さっきから体当たりでクレーターを作ったりするのなんかいい例です。いくら身体能力が上がって頑丈さや強度が上がっても、人間の重量であんな破壊ができるとは思えません。見たところ地面に体が沈むような事態にもなっていないですし、重さは人間のそのままと見ていいですから」

「では、一体何を強化しているというんだ?」

「強化しているものの中にはもつと単純でおおざっぱなもの、言ってしまうえば『攻撃力』や、『防御力』みたいなステータスじみたものもあると思うんです」

『すてーたす?』

『それって要するに能力値のことか? アースのゲームなんかである?』

「知ってるのなら話が早い。っていつか知ってるのかレンド？」

『ああ、俺は定期的にいろんな世界を行き来してるからな。アースの協力者に教えられたことがある。それよりそれってどういうことだ？』

「聞いた限りじゃ【刻印】ってのは人間の強い願いに反応して発現するんだろう？ なら必然的に願った人間の内面、価値観や道徳、それ以前から願望や本能的な意識なんかが反映されることになる。言ってしまうえば【刻印】の効果は恣意的なものになりやすいと思うんだ」

特に願いというものは人の価値観が如実に反映される。例えば大金が欲しいと一口に言っただってそれはあるものには百万円であるかもしれないし、あるものには一億円であるかもしれない。うまいものが食いたいと言っただって、その人間が肉が好きか魚が好きかで何がうまいものなのかは変わってきてしまう。

願いが反映される能力という事は、その能力は必然的に恣意的なものになるはずなのだ。

「たぶんあいつは自分の強さみたいなのを、筋力とかだけじゃなくて能力的なものとしてとらえてたんだと思う。まあ、重いものを軽々と投げているところから考えて身体能力も強化されてるんだらうけど、気功術と同じような強化はされてないだらうな。特に五感はずっと強化されてないっていい。聴覚が強化されてたらあんな爆音立てて動けないし、嗅覚が強化されてたらドレンナみたいな実があるこの森には入れない。回復力みたいなものは強化されてるかもしれませんがね」

ひょっとするとオチシロには刻印のイメージの雛型になるような

何かがあったのかもしれない。あんな男が非現実的な強さに憧れを抱くかどうかはわからないが、今の日本ではそう言ったイメージに触れない方が難しい。そもそも彼だって少年時代はあっただろう。

「話はわかった。だが、さっきの『真つ向からぶつかっても勝てない』というのはどういうことだ？ 確かに埒外の強さではあるが…」

「問題はここからなんですよ。あいつの刻印には、もっと厄介な側面があるんです」

『厄介な、側面？』

その側面の存在に気がついたとき、智宏は一瞬ではあるが絶望的な気分になった。だが、これを話さないことには自分たちに勝機はない。智宏はわずかに呼吸を整えると、この話の根幹とも言える部分に触れる。

「規模が大きくて逆にわかりにくいんですけど、さっきからあいつの攻撃による破壊の規模が、どんどん大きくなってますよ。あいつから感じる魔力に関しても同様です」

『そうなのか？ 正直俺にはよくわからんのだが。魔力感覚なんて大きな魔力に晒されすぎてとっくにバカになってるしな』

「いや、確かに言われてみればそうだ。魔力に関しては自分もわからんが、攻撃の音や規模は確かに拡大している」

走りながら背後を睨み、そこで起こる爆発をみてブラインがそう呟く。元よりこれは智宏自身が【集積演算】スマートブレインで強化した記憶力によ

つて、過去の破壊と現在の破壊を照合して出した結果だ。魔力に關しても同様に確かなものだと言える。

「こいつの魔力を一度見失って、再度発見した時からおかしいと思つてたんですけど。こちらとの距離やあいつの移動スピードに關わらず、あいつから漏れ出る魔力の感覚がずっと上昇し続けてるんですよ。それも加速度的に、これまでずっと」

「ひよつとして、奴は全力を出せるまでに時間がかかるのか？」

「そうかもしれませんが。でも僕は別の可能性を考えています」

『別の可能性？』

「ええ、僕はいつの刻印は『強く（・）な（・）る（・）刻印』ではなく、『強く（・）な（・）り（・）続け（・）る（・）刻印』ではないかと思ってるんですよ」

「な……、に……？」

智宏の言葉を受け、隣を走るラインの顔から表情が消える。言葉の意味を咀嚼しようとして数瞬沈黙した後、徐々にその顔を強張つたものに変え始めた。

「……待て、『強く（・）な（・）り（・）続け（・）る（・）刻印』だ……？ それは、つまり……！！」

「ええ。さっき言った攻撃力や防御力がどんどん上がってるってことです。特に防御力が上がってるのは致命的ですね。恐らく今のあいつにはほとんどの攻撃が効かない。たとえばダメージを与えられた

としても、少しの間逃げ回って時間を稼げば、それだけでその攻撃に耐えられる体になってしまう」

『待てよトモヒロ。だったら俺達こんな悠長に逃げてる場合か？それってつまり時間を与えれば与えるほど、あいつが手に負えない化け物になっていくってことだろ？』

「もうなってるから関係ないんだよ。最初に会った時点で、かなり威力の高い電撃とブ Houさんの技を食らって無傷だった奴だぞ？もしかするとほとんどの攻撃に耐えられる体になるように、時間を調節してここまで来たのかもしれない」

そんな中で無理に戦いを挑むなど無謀を通り越して自殺行為だ。相手は攻撃が効かない上に、ばかげたパワーで攻撃してくるのだ。恐らく魔術で防御しようとしても防御ごと破られてしまうだろうし、例え破られなかったとしても次に受けてそつだとは限らない。

「確かにその通りだが……、ならば我々はどうすればいいのだ？まさか奴自身の体が奴のパワーに耐えられなくなるまで待つのか？」

「いえ、そんなときは永遠に来ないでしょう。この刻印は体も頑丈にしていますし、そもそも望みがかなう能力にそんなわかりやすい欠陥があるとも思えません」

『なら魔力切れはどうだ？刻印使いは確かにばかげた魔力を持つてはいるが、だからと言って無限には持っていない。あいつの魔力が切れれば肉体も常人のそれに戻るはずだ』

「確かにその可能性もあります。ですが、あいつがさっきから垂れ流している魔力の量から考えて、そうなる可能性も薄いでしょう」

「なんだと？」

「さつきから垂れ流している魔力の総量は、同じ刻印使いの僕でも干からびかねないような莫大なものです。いくら刻印使いでもこんなバカげた放出量はありません。おそらく刻印自体の効力で保有する魔力の量まで底上げされているんでしょう。もしも消費する魔力よりも多い量の魔力を得ているとしたら、刻印の強化によって最大魔力量が上昇しているのなら、事実上魔力切れはありません」

「……バカな……！！」

智宏の告げる言葉に、我慢できなくなったように隣でブラインが悪態をつく。

「そんな相手に、一体どうやって勝てというんだ！！ 『強くなり続ける』どころか、ほとんど無限の強化ではないか！！」

「ええ、そうです。真の意味で限界も際限もなく、『無限に（・）強く（・）な（・）り（・）続（・）け（・）る（・）』という刻印。名づけるなら【力学崩壊^{バランスフレイカー}】と言ったところでしょうか。放っておけばあいつ、そのうち素手で地球を割れるようになりますよ！！」

智宏のその言葉は、森の中で響く破壊の轟音よりも強く聞く者達の内心に響いた。

20：付けた名の理由

「バ……、かな……!!」

通信機からの声に絶句し、ミシオを背負いながら走っていたレンドが立ち止まる。肩で呼吸してはいるが、立ち止まった理由はそれではあるまい。

「走ってレンド。今は逃げて」

「あ、ああ」

ミシオに声をかけられ、逃げるとい言葉に顔を歪めながら、レンドはどうにか走り出す。ミシオ自身、その反応を無理もないと感じていた。

『強くなり続ける』。そんなオチシロの刻印は間違いなく攻略できない。それこそ発動した直後、ミシオ達からはるか遠くにいたオチシロならば攻撃は効いたかもしれないが、もはや今のオチシロにはどんな攻撃も効きはしないのだ。

だが、ミシオはどうしてもその絶望に現実感がわかない。どう考えても勝てる要素が無い相手だというのに、ミシオにはその刻印というものがどうしても強く思えないのだ。

そしてもう一つ、ミシオが絶望的な気分になれない理由がある。

(絶望、してないよね。智宏の声……)

通信機の向こうから聞こえる智宏の声からは、まったくと言っていいほど絶望の色が感じられない。意図的に隠しているという可能性もあるし、彼が目覚めたという刻印は先ほども実際に感情を消し

て見せていたが、今回伝わってくる雰囲気は淡々と相手の手の内を暴きながらもどこか力に満ちたものがあつた。

何とかしてしまふのではないか、そうミシオには思えてならない。それは絶望的な状況で一度助けられたことによる信頼というのもあるかもしれないが、それでも通信機から響く声にはそう感じさせるだけのものがある。

そう考えていて、ふと、ミシオは先ほどから響いていた轟音が止んでいることに気がついた。

(……あれ?)

疑問に思い、振り返り、そして見た。

空中に何か巨大なものが、それも大量に浮かんでいる光景を。

『何か来る!! 上を見て!!』

脳裏で響いたテレパシーと、同時に送られてきたミシオの視界に、慌てて智宏は背後を振り向く。その光景を見たブラインが、隣で息を飲むのがわかった。

空中に浮かぶ、巨大なものの影、影、影。

そしてその影の群れの中にやけに小さい、しかし莫大な魔力をもった存在が飛び込むのを見て、その意味を理解した智宏は慌てて通信機に向けて叫んだ。

「とにかくもうしばらく逃げて生き延びてください!! そうしていれば必ずチャンスが巡ってくるはずです!!」

『追いかけてこは終わりだあ!!!』

智宏が叫ぶと同時に、影の群れの中からオチシロの声が響き渡る。人間にはほとんど不可能なはずの音量。刻印によって与えられたその声は、偶然なのか故意なのか、智宏達のいる場所に向けて放たれている。

『さあ!! 逃げ惑えっ、ゴミどもお!!!』

声と共に鋭い蹴りが手近な影に叩きこまれる。叩き込まれた影は恐るべき速度で宙を貫き、智宏達の三十メートルほど後方に着弾した。

視界にとらえたそれは先ほど飛んできたのと同じ樹木。しかしそれが着弾した場所は爆弾でも落ちたかのような音をあげ、辺りのものを粉碎し、なぎ倒す。

恐らく手近なものを片っ端から宙に放り投げ、それを手当たり次第に投げつけるつもりなのだろう。恐らくこちらの位置は分かっているはずだ。見失ったからこそこんな戦法に出たのだろう。

だが、こちらの位置がわからないからと言って安心できる状況では決していない。たとえ直撃しなくても、あの攻撃は近くに落ちるだけで危険だ。

『イイイイイツヤアツホオオオオオ!!!』

影の群れが四方に弾けた。オチシロに弾き飛ばされ、投げられ、蹴り飛ばされ、地面に向かっていた樹木が、岩が、砲弾となって森に降り注ぐ。

「うおおおおおおおおおおお!!!」

叫ぶブラインと共に智宏も走りだす。着弾地点を見極め、その場所からできるだけ離れようとするが間に合わない。巨大な樹木や岩が、ときにそのままの形で、ときに砕けて砲弾の雨となって二人の周りに降り注ぐ。

衝撃派が大地を薙ぎ払い、土砂を巻き上げ、樹木をなぎ倒し、そこに居合わせた二人に襲いかかる。

恐らく他の場所も同じように被害に遭っているだろう。現に四方に放たれた砲弾の雨が森を次々に破壊している。その中で逃げ切るかどうかは運の要素が強い。

そして智宏達はその運が弱かった。砕けた岩の一部が目前数メートル先に落ち、その爆風が智宏達めがけて襲いかかる。

(っ!!) 【岩壁城塞】ロックシエル!!)

慌てて足裏に展開していた魔方陣を地面に押し付け、魔力を込めて防壁を作りだす。だが、智宏達を守るはずのその防壁は、瞬く間にひび割れ、砕け散った。

「……が!!」

「うああっ!!」

砕けた壁の破片を全身に受け、二人の体が浮き上がる。本当にこみくずのように舞い上がった二人の体は、倒れた樹木の枝部分に落ちたことでどうにか死を免れた。

「みいつけたあ!!」

だが、攻撃は終わっていない。木々が倒れて丸裸になった大地は、

二人の姿を容易にオチシロに晒してしまう。
そしてオチシロが掴むのは、宙に放り投げた最後にして最大の砲弾。

「甲、 殻竜……！！」

智宏の視線の先、まるで巨大な飛行船のようなものが落ちてくる。それは今朝がたこの森に、恐らくは先ほどのワニと同じように投げ込まれ、村の男たちによって仕留められた巨竜だった。

「まずは二人死亡だあ！！」

次の瞬間、島一つが落ちたかのような衝撃と共に、レキハの森に巨大な竜が着弾した。

そのとき、巨竜が投げつけられるのを見たブラインは確かに死を覚悟した。

明らかに魔術でも防ぎきれない重量。逃げることもできない攻撃範囲。軍人として培った経験と判断力が、もしも自身が相手ならば確実に殺せるだろうと客観的に判断していた。

そしてだからこそ今自分が生きていることが信じられなかった。

「……外、れた？」

不思議に思いながら、振り返ると、自身のはるか後方。なぎ倒された木々のさらに先のまだ無事だったはずの森の中に、見逃しよう

のないほどの甲殻竜の巨体がクレーターを作っている。

「あれえ、外しちまったか？」

背後から聞こえたそんな声に、ブラインはようやくまだオチシロがそこにいることを思い出し、敵前で呆然自失するという失態に内心で舌打ちする。砲弾を使いきったオチシロは、甲殻竜を叩き落とした空中から通常と変わらぬスピードで落下してきている。普通ならこの高さから落ちれば怪我では済まないはずだが、オチシロはその程度では捻挫すらしないだろう。

そしてそれは同時に、さらなる防ぎようのない攻撃がブライン達を襲うことを意味している。

だが、

「ようやく限界か……。死ぬかと思ったぞ」

ブラインにしか聞こえないような小声でそう呟き、ブラインと同じようにポロポロになったトモヒロが歩み寄ってきた。明らかに死の一步手前であるはずなのに、その表情にはなにやら余裕すら見られる。

この状況で固まってはだめだ。

だが、この男相手に散開しても意味が無い。

何が限界だというのか？

歩み寄ってくる智宏に対して瞬間的にそんな三つの思考を果たしたブラインは、しかしそれを口にする前に背後で起きた爆発に反応を余儀なくされた。

「ぐ……、う……、む……？」

地面越しに骨を叩くような衝撃に身をすくめ、しかしその衝撃の

原因に不可解さを覚える。

今の爆発は明らかにオチシロの攻撃だろう。だが、着弾したのはブライン達のいるはるか背後。確認するまでもなく二人からは大きく外れている。

だが、この状況で外す意味がわからない。視界を隔てるものもなければ防ぐものもない。距離も外す方が難しいほどの距離なのだ。

「いったい、どうして……？」

よもや今の爆発がオチシロの物とは別の原因によるものなのかも考え、背後を振り返る。

だが、そこに既にオチシロの姿はなく、それどころかオチシロが着地したはずの場所から背後の爆発した場所の地面まで、それこそブライン達から五、六ギーまも離れた場所に、何かが高速で移動したような跡が残っていた。

確かにオチシロは突進したのだ。だがその方向はブライン達の間を大きく外れ、その右側に大きくずれて着弾したらしい。

そしてもう一つ、どういう訳か隣にいる少年は、それをまるで予測していたように右側に防御術式を展開し、突進によって発生した衝撃波を防いでいた。

「……あれ？ おつかしいなあ？ 確かに狙って突っ込んだはずなんだけど……」

オチシロが突っ込んだ先で身を起こし、自分に起きた状況を疑問に思っている。どうやらオチシロ本人が狙って外したわけではないらしい。

「まあ、いい、やあっ……！」

再びこちらに向けてオチシロが突進する。すでにその速度はブラインに反応できるものではない。

だがその後起きたのはブライン達の死ではなく、さっきよりもさらに狙いを外して森に突っ込んだオチシロだった。

同時に展開されたトモヒロの魔術が再び衝撃波を防ぐ。

「……な、に？」

「ミシオ、他の人たちに危ないからこっちに近づかないように放送してくれ。下手に近づくと巻き添えを食うから」

驚くブラインをよそにトモヒロは通信機越しに指示を出す。まるでこうなることを予測していたような口ぶりだ。

「くそっ！ おかしいな……。どうなってんだ、よお！！」

オチシロもおかしいと思いつめたのか苛立った声を上げて再び突進する。だがやはりその軌道は大きくずれ、今度は衝撃波すら届かない位置に飛んで行ってしまった。

「なんだ、あれは……？」

「『強くなり続ける』、完全に見えるこの能力にも、実はとんでもない欠点があるんですよ」

遠くで再び爆音が響く。どうやらこちらに突進するつもりだったらしい攻撃は、しかしやはり大きくずれて着弾した。おかしいことに命中精度は回を重ねるごとに目に見えて落ちている。もしも智宏がここに近寄らないように指示していなければ、近づいた人間が巻き込まれてしまう可能性もあった。

「『強くなり続ける（・・・・・・・・）』ってことは『常に自分の力が変動して（・・）いる（・・）』ってことです。でもそれだと必然的に起きてしまう弊害として、自分の（・・）力の（・・）全体像が（・・）自分で（・・）把握で（・・）き（・・）な（・・）い（・・）といふ事態に陥ってしまう。」

遠くで連続して爆音が響き、根元の砕けた樹が大量に飛んでいく。だがそれはどれもブライン達の上空を通り過ぎ、どことも知れない場所まで飛んで行ってしまった。

「そんな人間に手加減なんてもの（・・・・・・・・）が、もつと言えれば力の調節なんてもの（・・・・・・・・）ができるわけがないんだ」

「……………！ ……そうか。それが樹が飛んで行きすぎる理由なのか！」

ブラインがそのことを悟ると同時に再びオチシロがこちらに突進しようとして地面を蹴る。だがその軌道は逸れるだけでは済まず、地面から離れた空中に飛び上がってしまった。

「加えて言うなら人間の足には利き足というものがあります。さっきの様子からしてあの男は両足で地面を蹴って突進していたようですが、それだと必然的に、力の出しやすい利き足の方の力が強くなつて、思っているよりも利き足と逆の方に飛んでしまうんです」

「……………ああ！」

トモヒロの言葉を受けて、ブラインはようやく起きている状況を理解する。

例えば地面に一本線が引いてある状態で、その上に立った人間が目をつぶって歩くとする。すると本人は真つ直ぐに歩いているつもりでも、利き足の方の力が強いため、線の方向とは若干ずれた方向に歩くことになってしまうのだ。眼が見えていれば歩きながら調整することができるが、見えていないとずれても気付くことが無いため、その調整をせず、結果として目を開けたときに初めて外れていることに気が付くことになる。

オチシロの場合眼こそ見えてはいるが、しなければならぬ力の調整ができないとなれば話は同じだ。

そう考えれば生まれる弊害がそれだけでは済まないのも想像がつく。もしもただ立ち上がるだけの動作に、自分の体を支える以上の力を注ぎこんでしまったらどうなるか？

その予想はすぐ的中した。さっきまでこちらを狙っていたオチシロが爆音とともに真上に向かって放り出されたからだ。遠目に見ても分かるほど動揺し、地面に落ちた後も再び爆音を上げて飛び上がり始める。

「それどころか、奴の力はすでにわずかな筋肉の動きで自分の体をほこりのように飛ばしてしまうほどに強くなっている。恐らく奴は、強くはなっているけど重くはなっていないでしょう。たとえばさっきまでの突進を片足でやるとしても、望む方向に向かうために『力の調整』を行わなければいけない時点で起きる問題は変わらない」

人間は本来、自分の力を無意識のうちに、あるいは意識的に調節している。それはその人間がある程度自身の力を把握しているからだ。

だが、もしそれが把握できない状況になってしまったら？

もしも歩くのに必要な力を出そうとして、地面に爆薬を凌駕するような力をぶつけてしまったらどうなるか？

「……あー!! ああー!! そうかそれで!」

そう考えれば、よくぞ今まで自身の体を使いこなせていたとすら思える。

否、よく思い出してみれば使いこなせてなどいなかったのだ。オチシロの攻撃はすべて大雑把、歩き方も妙に浮付いているように見えたし、今までの攻撃でまともに狙って当てていたことなど最初にウンベルトを殺害した時しかない。下手をするとそれすらもまぐれだった可能性すらある。

「だから【力学崩壊】バランスブレイカーなんですよ。強くなりすぎて立つこともできない。調整力バランスが完全に失われる。だからあの【刻印】を【力学崩壊】バランスブレイカーと名付けたんです!」

最強の肉体が大地を跳ねる。しかしそれは決して優雅で自由なものではなく、自分の力に振り回される不自由なものだった。

20：付けた名の理由（後書き）

タグに「最強」を追加しました。

まあ、最強なのは敵なんですけど……。

21：強者の定義

『繰り返します。敵の刻印は本人の肉体を無限に強化し続けるといふもの、強化対象には本人の肉体の耐久性や魔力量も含まれており、現在敵に通用する攻撃はなく、スタミナ切れの可能性もないものと思われます』

レキハの森にミシオのテレパシーが響き渡る。それは森中に散らばった戦士たちに伝わり、その生存をサポートしていた。

『ただし、奴のこれまでの行動から察するに、この刻印は途中で解除すると元の身体能力に戻ってしまい、再び現在の力を取り戻すには、一から強化し直さなければいけないものと考えられます』

森の片隅、最初の攻撃で生じた怪我人を連れていたハクレンは、自分の役割をけが人の安全確保であると考え、それに徹していた。

『また、この刻印はその性質上力の微調整が時間と共に困難になり、現在のようにまとも立つこともできない状態に陥るという副作用もあります』

また、別の場所ではオズからの増援二人と合流したブホウが怒りに燃えながら反撃の機会を待っていた。

『以上のことから対処法は一つ。敵が自分の能力を手に余ると認識し、いったん刻印を解除するまで自分たちの命を守ること。そして敵が刻印解除を行った後』

彼らにとって強大な敵に立ち向かう事は恐ろしいことではない。

常に自分より強い生き物と闘い続けてきた戦士たちは、全員がそのタイミングを待って剣をに手をかけ、身を隠してそのときを待つ。時が来たときすぐに駆けつけ戦えるように。

『 敵が再び刻印を再起動、及びそれによって手に負えない力を取り戻す前に接触、無力化してください!! 』

最初の攻撃から時間にしてわずかに十分、それだけの時間ですでに状況は完全に逆転していた。

「グッ、アアアアアア!!」

立ち上がるうと手に力を込め、墜城の体は空中に勢いよく投げ出された。

回数にしてすでに七回目。この暴走はすでにわずかな筋肉の動きや反射運動ですら起きるようになっていた。

「クゾオツ!! こんな、こんなバカなあああ!!」

墜城もこの能力がだんだん扱いにくくなることは理解していた。現にここに来る途中も、それを感じたからこそ一から強化をし直したのだ。

だが、常にそこでやめることができたからこそ、今のようにやめられなかった時にどうなるかを分かっていなかった。

空中で体制を整えようとしても、必要以上の力によって異常な錐揉み回転を起こすばかりでまったく思い通りにならない。地面に落

ちても痛みはないが、それによって反射的な動きが生まれれば再び空へ投げ出される。墮城の最強の肉体はすでに泥沼の暴走状態に陥っていた。

「ぐ、ぞおおおおお！！」

墮城の中に焦りばかりが加速していく。このままでは下手をする、と、とんでもない場所に飛んで行ってしまふ可能性もある。何よりかつて強いものにもてあそばれた経験が、自分のものとはいえ力にもてあそばれているような現状を許せなかった。

（とにかくいったん刻印を解除しなくてはどうにもならない！ 地上に落ちたところを狙って刻印を再起動するしかない！！ その後は元の最強になるまで何とか時間を稼いで力をつけ直し、今度こそ皆殺しにしてやる！！）

実際これは荒の多い作戦だ。もし落ちた近くに敵がいれば瞬く間にやられてしまうし、だからと言ってそうでない場所を選んで落ちるようなまねは到底できない。ほとんどギャンブルに近い策だ。だがオチシロはその可能性をあえて見ないようにした。ただ、ただ、今はこの状態を脱したかった。

「待っている生ゴミどもおおおおお！！ オレはあ、もう一度最強になつてやる！！」

叫びと共に、墮城は轟音を上げて森に落下した。

レンドはミシオを背負って走りながら内心では二人の能力に驚嘆していた。

現在二人がいる場所は、戦闘の中心となっている場所から一番遠い。元より戦闘要員でないレンドは、初めから戦おうとせず、動きのとれないミシオを退避させるために村に向かっていった。

（役に立ちすぎでしょ……、この二人）

本来なら自分たちが守らなくてはいけない二人が、その能力を最大限に生かして自分たちを守っている。今まで数々の異世界遭難者を目にしてきたがこんなことは初めてだった。

特に刻印使いを相手取る上で一番重要と思われていた、その場の全員が相手の刻印の効力と把握し、その情報を共有するという作業が、二人によって瞬く間に済ませられてしまったのは大きい。

相手が個人であれ集団であれ、戦う上で最も重要なのは相手の戦力を図ることだ。相手の数、使う武器、戦術などを知らないまま戦いを挑めば、相手から手痛い反撃を受ける可能性に気付かず、それに対して対策をとることもできない。ところが刻印使いを相手取るに当たって最も困難なのが相手の戦力を図ることなのだ。特に武器、この場合刻印が厄介だ。

これが刻印使い以外が相手であれば武器というものの性質は大体決まっている。これは科学によって作られた銃であろうと、それとは違う魔術であろうと同じで、言ってしまうえばある程度のパターンや技術的な限界があるのだ。

強いて刻印に近いものとして背中の少女も使っている、イデア人の能力があるが、イデア人の能力はどんなことでも際限なくできるという訳ではなく、能力自体に一定の種類があり、さらにその中でも能力者本人に得手不得手がある。言ってしまうえば上限が決まっているのである。

それに対して刻印に上限はない。理論上願えばどんなことでもできるようになってしまうこの規格外の力は、強いて上限を上げるなら『人間の想像力の限界』というばかげたものだ。そしてだからこそ相手の持つ刻印の効力が分かりにくく、対応策も練りにくいのだ。それなのに智宏の【集積演算】スマートブレイクはどうだろう。戦闘に関してはプロであるはずのブラインですら分からなかった、相手の刻印の効力とそれに対応する術を瞬く間に割り出してしまった。

レンド達とて刻印使いとの戦闘経験がある訳ではない。接触し、そういう存在がいることを認識した時に、一定の対応策を練っただけだ。これはレンド達が出来得る限り異世界との衝突を避け、極めて平和的に異世界と付き合ってきた弊害とも言える。

だが、それを差し置いてもなお、智宏の対応力は驚異的と言えることだ。何しろ割り出した本人の戦闘経験がその前の魔術師二人との戦いだけなのだから。

（異世界に返しても絶対にこの二人には協力を取り付けよう……）

レンドとて今回のように特別なじじいでもない限り一般人を戦いに参加させようとは思わない。だがそもそもこの二人はそれ以外の場所でもかなり役に立つ。あっさりと手放すのにはあまりにも惜しい人材だった。

そしてだからこそレンドはオチシロから逃げる道を選択していた。現在連ドはミシオと二人きり、戦闘に巻き込まれたら目も当てられない。自分がいままするべきはできもしない増援ではなく、背中テレバシーのミシオを守ることだ。通念能力テレバシーによる放送が終わった今ここに居続けさせる意味もない。

（本当はトモヒロも退避させたいところだけど、流石にそうもいかないか……）

と、そこまで考えたところでレンドの思考は中断を余儀なくされた。

突然二人の目の前が爆発したことによって。

「ぐっつっ！！」

「っああー！！」

飛び散った土をもろにかぶりながら二人揃って吹き飛ばされ、叩きつけられた地面に悪態を浴びせて起き上がる。そして近くに転がっていた少女を助けようとして気が付いた。

「マジかよ……！！ どんだけ運がねえんだ俺ら！！」

目の前の爆心地、その中心に刻印を再起動させたオチシロが立っていた。

「お前らのところに堕ちて来ただとお！？」

その連絡を受けて智宏は思わず大声を上げてしまった。

『ああ、おまけに向こうもこっち見つけてすごい眼で睨んでる状態だ。予想通りさっきとは比べ物にならないくらい魔力は弱いけどどうしようっ…』

「逃げるに決まってるんだろバカ野郎！！ お前ら二人ともまとともに戦えないじゃないか！！」

『それがそもいかな　！！』

言いかけた声が急に途切れ、通信機の向こうで何か衝突するようなけたたましい音がする。先ほどまで響いていた爆音ほどではないが、それは明らかに何か暴れる音だった。

『トモヒロ！　だめ！　逃がす気が無いみたい！！』

「何？」

テレパシー
通念能力に切り替わって伝わってくるミシオの声に思わず疑問の声を上げる。相手にしてみればできる限り力が上がるまで敵との接触は避けたいはずだ。それなのに逃がそうとしないというのはどういうことか？

その答えは加速した思考によってすぐに弾き出された。

「っ！！　人質にする気か！！」

考えてみれば見るからに弱った少女とそれを背負った男など最も対処しやすい相手だ。レンドも他と違って武装しているわけではないし、うまく捕まえて別の者と接触した時に人質にすれば最高の時間稼ぎになる。オチシロが今もつとも欲しているのは時間だ。相手を躊躇させることができればその時間だけ自分は強くなれる。そうやってしまえばオチシロのいる場所にはほ全員が揃おうとしている今、一転して最悪の状態になりかねない。

後に来た人間なら逃げることもできるだろう。だが、そうなった

ら間違いなく人質は助からない。オチシロの力が手加減していても人質を殺すことになったときが、そのオチシロの望む無敵になれる瞬間だからだ。

「くそ、最悪だ！　なんでこうなることまで考えられなかったんだ！！」

確実にオチシロを捕らえる方法ばかり考えていて、対応できない者のところに落ちる可能性を考えていなかった自分が恨めしかった。
【集積演算スマートブレイン】によって作り出される克明すぎるその瞬間のイメージが頭をよぎる。それが現実になることなど到底耐えられそうにない。

「急ごう少年！　あの二人が捕まる前に何としてでも駆けつけて奴を倒さなければ！！」

「はい！！」

恐らく現在ミシオ達を除けば一番オチシロの近くに居るのは智宏達だ。それはオチシロの暴走が本格化してからというものであるだけ距離を離されないようにしていた結果なのだが、それでも距離としては随分と遠い。

（間に合ってくれ　！！）

手遅れにならないことを祈りながら智宏は両足を全力で森を駆け

「ぐあー!!」

地面に倒れたミシオの目の前で、盾の魔術を使う間もなくレンドは殴り倒された。

「ハアツ、ハアツ、貴重な時間を無駄にさせてんじゃねえよ生ゴミがあー!」

そう言っただけでオチシロはミシオに向かって歩き出す。どうやら人質には魔術を使う男よりも弱って見える少女の方を選んだらしい。だがその表情にはすでに先ほど見たような余裕は存在しない。どう見てもいつ来るかわからない敵におびえている。

だからこそミシオはここで捕まる訳にはいかない。

「う、あ、あああー!!」

ふらついた体を無理やり立たせ、全身に力を込める。すると体から黒い煙が噴き出し、体が急激に軽くなった。気功術と同じく身体能力を上昇させる、未知の実験によって得た未知の能力だ。

「足？いてんじゃねえぞおおー!!」

殴りかかってくるオチシロに対応するべく少女が身構えると、突然オチシロの体制が崩れた。

見ればその足にはレンドの出した魔力の鎖が絡みついていて、先日の竜猿人による襲撃でも使われた【蛇式縛鎖】チェーンロック。トモヒロにも説明したとおり確かに生活魔術であるこれは、その反面元々は軍用の拘束魔術を一般向けに改造した代物だ。殺傷能力こそないが普通の

人間ならば簡単に拘束できる。相手がオチシロでも、まだ満足なレベルまで強化されていない今なら時間稼ぎくらいできる。

「てめええええ！！ しつこいんだよお！！」

苛立ちを露わにしてオチシロが振り返った瞬間、少女も動いた。無防備に背中を晒すオチシロに向かって走り、

「逃げる！！ ミシオちゃ

」

レンドが叫ぶ間もなく、途中で拾った一抱えほどもある石を、その後頭部に思い切り振り下ろした。

オチシロが小さなうめき声を発するとともに地面に崩れ落ち、殴った石が粉々に砕け散る。

「うわ……、過激……」

「大丈夫！？」

「あ、ああ。ホントは逃げてほしかったんだけど、なあ　　！！」

今度はレンドの番だった。鎖を操作してオチシロの体を持ち上げると、勢いをつけて近くの樹に頭から叩きつける。

鈍い音と共にオチシロの体が無抵抗で地面に落下した。

「今のうちに逃げた方がよさそうだ。ミシオちゃんは自分で歩ける？」

「うん。不思議なくらい。まだ少しだるいけど……」

「この黒い霧のせいかな……？」

さすがのレンドにもミシオが何の実験を受けたのかまでは分からないらしい。ミシオ自身あの黒い霧が実験の結果であることは想像がつくが、それがどういふ影響を及ぼしているかはわからないのだ。

だが今それを深く考える余裕はなかった。

「……痛い」

倒れていたオチシロがフラフラと立ち上がる。頭からわずかに流れる血を手で拭いそれを信じられないという表情で眺めていた。だが、その体で今だに上昇を続ける魔力が危機の去っていないことを物語っている。

「……痛い？ ……この俺が？ ……俺は、この俺はあ！ 最強になつたはずだぞお！！」

『っ！！』

叫びと共に振り返つたオチシロが一気に二人に飛びかかる。とつさに体の周りにタスキのような防御魔術を展開したレンドをその防御ごと吹き飛ばし、黒い霧を纏つたミシオの首を掴むと、地面に猛烈な勢いで叩きつけた。

「っ、かはっ！！」

叩きつけられた衝撃でミシオの体を覆っていた霧が一気に霧散する。どうやらこの霧には鎧のような効果もあつたようで、それによる衝撃吸収効果が無ければ間違いなく死んでいた。

そしてその霧を介してなお、オチシロの手がミシオの首に食い込んでくる。

「俺は最強だああ！ 最強になったんだああああ！ そんな俺に、お前は どうして痛みなんか感じさせてんだよおおおお」

半ば錯乱した状態で男は絶叫する。少女の手が首をつかんだ腕を外そうともがき、爪を立てるが、その程度では男の腕力は緩まない。逆に刻印の効力で強化された力が、少女を守る黒い霧を急速に消滅させていく。

「そおおだ！！ 俺は最強になったんだ！！ 俺は無限に強くなる！！ 強くなってみせる！！」

力を誇示し、狂ったようにオチシロが叫ぶ。だが、その声はほとんど悲鳴に近かった。自分が追い詰められている現実を受け入れようとせず、力を示そうという必死の形相。

そしてだからこそ、ミシオにはそんなオチシロの言葉が我慢ならない。

『……そのの、……どこが最強、なの……！！』

「なにい？」

頭の中で響いた声にオチシロは思わずあたりを見回す。しかしどうやらすぐにその声が、自分がねじ伏せている少女のテレパシーによるものだと判ったらしく、その視線をミシオに向け直した。その瞳には明らかに恐怖と混乱が見て取れる。

『みつともなく取り乱して……！ 誰かに倒されるのをすごく怖が

つて!」

喉に食い込む腕によってすでに呼吸もままならない。それでも少女は必死で叫ぶ。声の代わりに心で叫ぶ。持って生まれた能力で内心のそれを思い切り叩きつける。

原動力になっっているものの一つは自分を襲っている理不尽への怒りだ。だがそれ以上にこの男が強者を名乗ることが許せなかった。それがまるで本当に強いと思えた人たちを貶めているように感じられたから。

「あの村の人たちは一度もそんな表情を見せなかった! 恐竜が飛んで来たときも、あなたに会ったときも!」

昨日『ダイノロイド竜猿人』と遭遇した時の智宏ですらここまでみつともない取り乱し方はしていなかっただろう。

だからこそオチシロが強者を名乗るのが許せない。それがまるで彼らの強さを侮辱しているように思える。

そして同時に、オチシロの脳裏に一人の人間の顔が浮かび上がる。脅え、取り乱し、恐怖にひきつった弱者のような、しかし弱者ではありえないはずの自分の表情が、少女の目を通して【感覚投影】でオチシロの中に直接送り込まれているのだ。

「……やめろ!」

「私は、あなたが強くなんて見えない。あなたがとっても弱く見える!」 確かに恐竜を投げ飛ばせるようになったかもしれないけど! ただ突進するだけで森をめちやめちやにできるようになったかもしれないけど! でも、肝心の部分が弱いまま!」

「……やめろお!」

「あなたは強くなってる。強い人はもつと他にいます！ 他人はおるか、自分自身すら守れない！ そんなものが、いったいどれだけ強いって言うの！！」

「イイイイイイイイやがったなああああああああ！！」

瞬間、ミシオの体が一瞬で地面を離れる。どうやらオチシロがミシオの体を上空に放り投げたらしい。

「……つう！！」

ミシオの視線の先、拳を構えるオチシロの姿が見えた。どうやら落ちてきた少女に止めを刺すつもりらしい。もはやミシオが纏う霧くらいではその力を防ぐことはできないだろう。

「生ゴミになれええええ！！」

絶叫とともに落ちてくるミシオに向けてオチシロが拳を突き出す。確実に命を奪う、心臓を狙った一撃。

だが、それでも、その拳をミシオは見えていない。その眼に移すのは森の中を走るたった一人の少年。

「そこまでだああ！！」

その瞬間、男の拳が少女に届く前に、鉄の拳が男に届いた。それもただの拳ではありえない威力。茂みを突き破って現われたトモヒロの【土人形の鉄腕】ゴレム・アームが、今度こそオチシロを殴り飛ばした。

全身が茂みを突き破ると同時に、智宏は自分がギリギリ間に合ったことを知った。巨大化した右腕で落ちてくる少女を受け止めながら、すぐに周囲の状況を把握する。

既にオチシロが能力を再起動してから数分が経過しようとしている。オチシロの防御力が、起動してから十分ほどで無敵のレベルに至っていたことや、こちらの攻撃が効くだけでなく無力化するレベルにしなければいけないことを考えると、もう一刻の猶予もない。

（考える、思考をやめるな！ いやそれじゃ足りない。もっと思考回路を速く回せ！）

高速回転する思考回路が、自分の視界に移るものすべてを材料にすぐさま作戦を組み立てる。目の前のオチシロ、開けた土地、立ち上がるレンド、追い付いてきたブライン、そして、

（……！ あれは！！）

そうしているうちに予想していなかったその存在に気が付いた。驚くより先にそれをすぐに計算に組み込み、全員が生き残り、【力学崩壊】を排除する作戦を頭の中に叩きだす。

（……これしかない。後の問題は伝達）

『 作戦の伝達は私が！ 行って智宏！！』

ミシオに伝達を頼む前に、智宏の作戦を読み取ったらしいミシオ

がそう答える。応じるように飛び出すと、ほぼ同時に作戦が伝わったらしくレンドとブラインの驚いたような表情でこっちを見てきた。

「今さら逆らう気はないが、本当にこの作戦で行くのか少年？　と
いうかよくあの術式の特徴が、【轟放雷】^{キガボルト}の存在が分かったな？」

「前後の術式の名前を一回聞いてましたからね。似たような魔術も
覚えただけですし」

「っていつかそんなことより俺戦闘要員ですらないんだけど？　失
敗したら俺死ぬんじゃない？」

「どっちみちもう後も時間もないさ。ここで失敗したら全滅必至だ。
もう一度あいつが刻印の再起動に入るなんて思えないからな」

嘆くレンドの気持ちは分からなくはないが、実際もう余裕が無い。
ここにいるメンバーだけで何とかするしかない以上一人も無駄にで
きないのだ。それがたとえ即興の連携でもやるしかない。

「行くぞ。素人に負けずに腹をくくれ！！」

「了解だ、こん畜生！！」

レンドの叫びを皮切りに、三人がいつせいに動き出す。ブライン
を中心にトモヒロが右、レンドが左に走りだした。

智宏の指示のもと、まず最初に仕掛けたのはブラインだった。掌に魔方阵を展開し、電撃を浴びせる。

術名は【強放雷】^{メガボルト}。昨日の会話の中に一瞬だけ登場した魔術だ。威力は先ほどの【極放雷】^{テラボルト}には威力も距離も遠く及ばないが、それは問題ではない。

「ぐうっ！」

必要なのはその閃光。相手が一瞬でも目がくらめばそれでいいのだ。

その隙について智宏は右手の【土人形の鉄腕】^{ゴレム・アーム}に新たな術式を追加する。

(術式追加 【土神の剛腕】^{タイタン・クロウ}!!!)

目をくらませ、無防備になったオチシロの体に巨大な剛腕が右手から殺到する。ただしその動きは今までとは違い、拳を開き相手を握りつぶすような動きだ。

「ク、ツノオオオオ!!!」

閃光によって一瞬反応が遅れたオチシロが、それでも剛腕を両手で受け止めようとする。だが次の瞬間、右腕の違和感に気が付いた見れば右腕に鎖が三本もまきついている。左でレンドが展開したそれは、オチシロの目の前で四本に増え、その動きを阻害する。

「なっ!!!」

レンドから伸びた鎖を振りほどく暇はない。オチシロはとっさに右腕を使うことを諦め、左腕と右足で剛腕を受け止める。

「っ！！ やっぱりそんなに甘くはないか！！」

上から迫っていた四本の指を左手で中指の根元をつかむことで止め、下から迫る親指を右足で受け止める。強化された肉体による力技で、練り上げた策を圧倒する。

「ふざけんなあ！！ この鎖！」

「おわあ！！」

左足だけで体を支えているという不安定な体制にも関わらず、オチシロは鎖を引っ張ってレンドを引きずり始めた。軽い人間なら持ち上げられるという鎖を四本と、その先にいるレンドをまとめて引きずってオチシロは体勢を立て直そうとする。

「させない！」

それに飛びついたのはミシオだった。黒い霧を纏ったままレンドに飛びつき、レンドの体ごと鎖を引っ張る。

「ブラインさん！」

「今準備ができた！！」

言葉と共に再びブラインが放電魔術を展開する、ただし炸裂するのは先ほどの手のひらの術式に手首の術式を追加した強化版だ。その名を【轟放雷^{キガボルト}】というこの魔術は、先ほどの【強放雷^{メガボルト}】に新たな魔方陣を加えることで発動する魔術だ。今智宏が使っている【土人形^{ゴレム・アーム}の鉄腕】からの【土神の剛腕^{タイタン・クロウ}】と理屈は変わらない。そのメリッ

トは大きな魔術を撃つ隙を、それより弱い魔術で埋められるという点にある。

そうして展開された魔法陣から、発動までの時間に比べてはるかに強力な電撃が放たれ、オチシロの顔面を襲った。

「ぐがああああ！」

顔全体を襲う電撃に流石の墮城も悲鳴を上げる。だがその電撃を受けてなお巨腕と鎖にかかる力は緩まなかった。むしろ時間とともに強くなる力が三人の命を脅かす。

「……効かねえんだよお！！　これが俺の力だ！！　無駄に足？　いでんじやあねえぞおゴミどもお！！」

痛みに苛立ちながらも自分の優位を確信して墮城は声を上げる。今の状態でなら墮城自身が戦闘不能になることはないと判ったからだ。確かに魔術は墮城の体にダメージは与えているが、それが敗北につながるまでには達しておらず、体に軽いやけどを負ったのと、あとはせいぜい閃光に目がくらんだくらいだ。

この程度の威力では、今の墮城の命を奪うことはおろか、その意識を奪うこともできない。流石の刻印も意識のない状態では使えないのだが、この威力なら意識を奪われることもないだろう。

「無駄じゃあないさ……」

だがそんな状態でも目の前の少年は絶望の表情を浮かべない。墮城にはそれが氣にくわなかった。その表情が先ほどの少女の言葉と一緒にあって墮城のプライドを傷つける。それが墮城には我慢ならないほど腹立たしかった。

そしてだからこそ気が付かなかった。今受けたばかりの電撃がまた

してもただのめくらまじだっただことに。

「覚悟しろ外道があー!!」

「な、なにいいいい!?!」

背後からかけられた声に驚いて背後を振り返ると、振り向いた後ろのその上に、空からこちらに落ちてくる村の戦士長の姿があった。大男は落下しながら腕と大剣に気を集め、振り上げた右腕を左腕で止めて魔力を溜める。左腕の力を振り下ろしに転換させることで生まれるのは、一撃にすべてを注ぎ込んだこの世界最高の斬撃。

「やめろおおおおおお!!」

「【頭蓋割ずがいわり】!!」

最高の戦士による斬撃が動けないオチシロの肩に食い込む。刃はそこでとどまることなく、最強の効力を持つ刻印ごと、右腕を叩き斬った。

「天、誅!!」

一瞬遅れ、大男の宣言と共にオチシロの腕は、鎖に惹かれて宙を舞った。

「よし!!」

腕の切断と共にオチシロから感じる魔力が劇的に減少し、智宏は作戦の成功を確信した。

もつとも重要な役割を果たしたブホウト、二人のオズ人に気が付いたのはこの場に出てきてすぐだ。何のことはない。オチシロの死角にある位置を、二人のオズ人がブホウトを抱えながら魔術で飛んでいたのを見つけただけである。そしてそれが気づかれていないことを察したからこそ、すぐさま三人、特にブホウトを作戦に組み込んだのだ。

その結果がこの死角からの不意打ち。そして大本である刻印の斬り離しだ。

地上にいる四人でオチシロに腕を斬りやすい体制をとらせ、なおかつぎりぎりまで空にいる三人から注意をそらす。そしてタイミングを見て上空の二人がオチシロのもとにブホウトを投げ込む。それこそがこの作戦の根幹だった。

腕が切り落とせなかった場合魔術の使える四人で集中砲火を浴びせる作戦も考えていたが、刻印自体を奪えるならばその方がいい。

「俺のぢからああああー!!」

そして、作戦はまだ終わっていない。

「ブラインさん！ 腕の方をお願いします！」

「了解だー!!」

声に応じるように空を舞う腕に向けてブラインが魔術を展開した。肘に最後の魔方陣を展開し、完成させるのは真正銘、最高威力の

【極放雷^{テラボルト}】。

「おまえはこつちだ!!」

それに応じるように【土神の剛腕^{タイタン・クロウ}】で捕らえたオチシロをこちらに引き寄せる。すると先ほどの力が嘘のように肩からおびただしい量の血を流したオチシロがこちらに引き寄せられてきた。

途中で魔方陣の一部を消去し、剛腕をドラム缶大の巨腕に戻してこちらによるめくオチシロに振りかぶる。

「悪いけどな【力学崩壊^{バランスブレイカー}】! あんたの刻印、強いけど使えねえよ!!」

次の瞬間、最強の刻印が電撃によって腕ごと燃え尽きる。それは同時に智宏の巨腕がオチシロの顔面を殴り飛ばした瞬間でもあった。

エピソード

異世界生活四日目も夜を迎える時刻になった。

智宏にとつて波乱万丈だったこの四日間のなかでも特に劇的だったこの日もようやく終わりを迎えようとしている。

村では戦いの始末がようやくひと段落し、昨日と同じメンバーで食事を始めていたところである。ちなみに夕食はオチシロが投げつけてきた巨大ワニだった。戦後の後始末としてやったことの一つがこの巨大ワニを朝方仕留めた甲殻竜と同時進行で解体し、村に運ぶことだったというのだからこの世界の人間はたくましい。

だからと言って無難いいことばかりだったわけではない。村の戦士の中には少なくない負傷者がいたし、やはりと言うべきか、ウンベルトは死亡していた。とらえられたアルダスとオチシロもレンドの世界、オズに連行して取り調べるらしく、ブラインと二人のオズ人によってどこかに連れて行かれてしまった。レンドによると一足先にオズに運んだとのことだ。ミシオが逃げ出してきたという施設も、本国からさらなる増援を呼んで本格的に捜査するらしい。

最善とは流石に言えない、だが、それに近い結果を出すことはできただろう。そしてその結果には確実に智宏が大きく貢献している。

「……………だつて言うのに、なんで当の本人はこんなにテンションが低いんだ？」

「……………えっと、お腹すいてる？」

「……………ちげーよ」

呆れたようなレンドの声と、的外れなミシオの声にどうにか返事を返し、智宏は顔を上げた。だが声にも表情にも相変わらず覇気が

戻らない。

時刻はすでに夜を迎え、またいつものメンバーで食事をしている最中だ。

「なんとというか……、【スマートプレイン集積演算】の副作用みたいなものに苛まれてるんだよ」

「副作用？ ってちょっと待てトモヒロ。お前刻印は副作用が出ないみたいなきことを言ってたか？」

「……確か、自分が傷つくような能力なんて、望まないからって……」

「ああ……まあそうなんだけどね。これは何というか気持の問題と
言うか、避けられない必然と言うか……」

言いながら智宏自身も今自分が陥っている状況を頭の中でまとめる。感覚としてはそれは自己分析に近かった。

「えつとき、要するに【スマートプレイン集積演算】っていうのは精神状態に左右されずに思考できる能力なんだよ。普通恐怖にすぐみあがってたり、パニックになってたりすると思えば落ちて落ちるじゃん？ でも僕の場合、その落ちた思考能力を刻印の効果で補ってるからどんなにビビっても的確な対処が出来ちゃうんだよ」

「……つまり、内面の動揺を簡単に押し殺せるということか？」

「まあ、そういうことかな……。でもそれって、どんなに怖いことでもそれが的確な対応だったらやっちゃうってことで」

「怖いのですと我慢して、戦ってたの？」

「まあ、そういうことかな。気分としては無理やりジェットコースターに乗せられている状態に近い。怖くて堪らないからすぐに降りたいけど、下りると危ないのが判っちゃうから降りられないみたいかな？」

我ながら微妙な例えだとは思ったが、より適したたとえを探す気力もなかった。この場はおおざっぱでも伝わればそれでいい。

「えっと……ごめん。ジェットコースターって何？」

「……そこからか」

思っていた以上に異世界人との会話は難しかった。ミシオの世界ならひよっとすると絶叫マシンくらい有るかと思ったが、どうやら異世界はそこまで甘くないらしい。

「それはなミシオちゃん。人間を椅子の上に縛り付けて空中のレール上を高速で走らせるアースの拷問器具のことさ。途中で逆さまになったり、落っこちたりするおっかない機械で、乗った者がほぼ必ず悲鳴を上げることから人々は皆このマシンをこう呼ぶんだ。『絶叫、マシン』……！」

「トモヒロ！？ 拷問にあったような気分だったの！？」

「嘘を教えるなあ……！」

テンションを無視して激しく突っ込んだ。とてもダウンナーな気分になんかなっていられない。油断も隙もあったものではなかった。

「要するにだ！ 今僕は【スマートブレイク集積演算】発動時に感じていたいろんな感情がぶり返して来て酷い気分になってるってこと！ わかった！？」

「……………おう！」

「ついでに、智宏が元気になったこともわかった」

「……………む」

言われて、初めて智宏自身も自分のテンションが若干元に戻っていることに気づく。流石にもとどおりという訳でもないが、気分はそんなに悪くない。

「おうい、レンド君。その二人がヨシダトモヒロ君とハマシマミシオくんかね？」

そうしていると、村の中心から大きな声を上げて恰幅のいい男性が歩いてきた。耳がレンドたち同様長いところを見るとどうやらオズ人らしい。かなり高齢らしく、蓄えられた口髭も豊かな頭髪も暗い中でも目立つほど白い。

「初めまして。この村でオズ人のリーダーをしているゴードンだ。今回は異世界に関する事実の一部を隠匿し、不当な取り調べを行ったことを深く謝罪したい」

言われて、智宏はその人物がちよくちよく話題に出ていたゴードンであることを初めて知った。確かに一国の大使と言っただけあって威厳のある人物に見える。

「また、我々に君達及び君達の世界に対して敵対する意思はなく、今後も双方の友好的関係を設立するべく努力していくことをここに宣言する」

「……はあ」

続けて放たれた堅苦しい言葉に、智宏にはここは記者会見場なのだろうかと本気で疑問を覚える。威厳がある分余計に堅苦しく思えるのだ。

「えっと、まあ、そちらにも事情があったでしょうし、こちらは気にしていませんので気にしないでください」

相手の立場を考え、智宏はそうどうにかそう答える。確かに危険な目にもあったし、必要以上に異世界に留まらされたことは確かだが、それについて文句を言う気にはならなかった。隣のミシオの方を見ても意見は同じようで、智宏に対して小さくうなずいる。

「っていつかゴードンさん、その職業病的なしゃべり方がいい加減やめてください」

「待て、職業病？ その発言は誠に遺憾だ。撤回を要求する！」

「あんだ、自分の発言を振り返れ！」

智宏はこっさりレンドが突っ込みを入れたことに驚いた。どうやらゴードンという人物は自分をまともだと思っているタイプの変人らしい。

「そう言えばさ、僕らはいつになったら元の世界に帰れるんだ？
帰る方法は用意してくれるんだろう？」

「ん？ まあそのつもりだけだね。ただ早くても明日の朝になるかな。それに二人いつぺんに元の世界に返してもこっちの人員不足でその後のことができないし、片方の世界に三人で行って、そこで一人帰してからもう片方の世界に行くってことになると思う」

その後のことというのは恐らく協力要請のことなだろう。彼らとしても事情を知る人間をみすみす逃がす気はないようだ。とはいえ別にこれに関しては問題ない。智宏とて彼らにできる協力はしてもいいと思っている。むしろ問題なのはもう一つの方だ。

「まあ、これに関しては話し合って決めてほしいんだけど、どっちが先に自分の世界に帰る？」

「別に僕は後でもいいぞ？」

レンドの質問に智宏は即答した。その言葉にミシオとレンドがキョトンとする。

「別に帰れると判れば急ぐ必要もないし、元の世界では夏休みだったから学校は問題ない。まあ、親とかは心配するかもしれないけどこっちも何とかなるからな」

「……私としては、その、先に帰れるならその方がいいんだけど……でも、いいの？」

「というかむしろすぐに帰るのがもったいないような気がするんだ。どうせだったら帰る前にもう一つくらい異世界を見るのも悪く

ないかなってね」

「言っとくけど、ミシオちゃんのアイデアは、トモヒロのアースと文明体系はあんまり変わらないぞ。むしろアースの方が進んでるくらいだ」

「いいんだよ、それでも」

身も蓋もない言い方をしてしまえばちょっとした旅行気分だ。自分の世界に帰ることができるかと判ったためにできた余裕とも言える。

「まあ俺としては片方が後でいいっていうのなら話が早くて助かるんだけど。ミシオちゃんもそれでいいかい？」

「……はい。私は、早く帰りたいから」

「んじゃ、決まりだ」

そう言った後は他愛もない話しかしなかった。途中からブホウやハクレンが話に参加し、智宏は自分の世界の話をした。それはとても異世界で語られているとは思えないような気安い会話。同じ人同士だからこそできる会話だった。

そうして異世界生活四日目の、そして第一世界エデンでの最後の夜が更けてゆく。

「トモヒロ？」

村のほとんどが寝静まった頃、智宏はミシオに声をかけられた。智宏としては自分以外に起きている人間がいるとも思っていないかったため少し驚いたが、相手が自分と同じ異世界の人間であったことで少し納得した。

「なに、してるの？」

「うん、まあ、ちよつと星を……」

そう言つて智宏は上を見上げる。そこには自分の世界ではお目にかかれないような満天の星空が広がっていた。星の配置自体は先ほど元の世界度同じだと確認したが、それでもこの星空は星の光を隠す地上の明かりも、大気汚染もない、この世界だからこそ見える星空だ。

「あんなに帰りたがつてたのに、いざ離れるとなると思うところがあんだよ」

「それは……、ちよつとわかる」

死にそうな目にもあつたし、辛いとも思つた。それでも不思議なことになつた四日間過ごしただけの世界に智宏は愛着を持っていた。ただ、正直に言えば智宏の内面で渦巻いている感情はそれだけではなかつた。

「本当はさ……、もつとうまくやれたんじゃないかと思つんだ」

「え？」

口にしてから、智宏は自分が弱気になっていたことを悟る。だがもはやここまで言ってしまったてはやめるわけにもいかない。

「昼間のこと。最初の二人のときも、オチシロって奴のときも……」

もっといい対応ができたのではないかと思う。自分は【集積演算】スマートプレイというとんでもない刻印を手に入れてしまったのだ。そんな力があるのだからもっといい結果、たとえばウンベルトが死ななかつたり、オチシロの腕を切るようなまねをせずに済んだり、それどころか誰かを殴らずに済んだのではないかというそんな感情。

「人の死や暴力つてもものに免疫が無いからそう思うんだろうな……。あいつ等に対して感じたこともないような怒りを感じたのに……。死んだ方がいいような連中だとまで思ってたのに……。それでも、もっと別の結果を出せてたんじゃないかって思っちゃうんだよ」

行ってみればこれも感情のぶり返しだ。あのときはしている暇がなかった後悔という感情。それが余裕ができたとたんに智宏の心を苛んでいる。

つくづくあまい話だ。今智宏は、倒すべきだった敵に同情し始めている。

「それで、いいんじゃないかな。トモヒロは……」

「え？」

「私は……、初めて会ったとき、トモヒロがそういう人だって分かったから信じられた」

「……」

「最初にあつたとき、本当に私を助けようと思っていたから。……
それに」

「……それに？」

「……それにトモヒロの【集積演算】スマートプレインがあるんだからって話なら、
よくなった頭で一人だけ逃げることも、逃げる言い訳をすることも
できたんじゃないかって……。そう思うから」

「……！」

そんなこと思いつきもしなかった。そして思いつかなかつたとい
う事はこの場合そんなつもりがかけらもなかつたことを意味する。
なぜなら逃げたいと思えばすぐに方法や言い訳を思いつく。それが
【集積演算】スマートプレインという刻印の効力だからだ。そしてもし逃げることを
選択していたら、全員が村に帰りつくことはできなかつただろうこ
ともうぬぼれ抜きで理解できる。

「だから……、ありがとう。トモヒロはそれでいいんだと思う。……
…それに、私は甘いもの好きだし……」

「え？」

「……何でもない。食べ物の話……」

そう言つとミシオは振り返り、ハクレンの家に戻つていった。明
日に備えて寝るつもりなのだろう。何となくその顔が赤かつたよう

な気がしたが、星明かりだけではよくわからなかった。

「……ありがとう、か」

呟いてもう一度夜空を見上げる。そこにあるのは世界では絶対に見られない景色だ。

「異世界も悪くないな」

もし自分が異世界に来たことで、誰かの助けになれたならそれはやはり良いことだったのだろう。ならば、今すべきことは後悔ではなく、自分の功績を素直に誇ることだ。

第一世界エデン最終日。智宏は暖かな気持ちで眠りについた。

エピソード（後書き）

とりあえず一章完結です。

二章もチエックや、場合によっては加筆などが済み次第投稿していこうと思います。

感想や批評など頂けると嬉しいです。

1：二つ目の異世界

異世界生活はすでに五日目の午後を迎えた。とはいえ智宏がこの世界に来てからはまだ半日もたっていないので新たにカウントするべきか、それとも元の世界を離れてからの日数を数えるべきかは迷いどころだ。そして同時に、そんなことをどうでもいいと思ってる自分もいる。

なぜならそもそもの話として、この世界に来てからというもの、どうしても異世界にいるという実感を得られずにいるという状態があったからだ。

「いやあ、俺、異世界に来て初めて食ったけど、アイスキャンディってのはいいもんだねえ」

「まあ、確かに夏にこれがあるってだけで暑さも少しはましになるな」

実感を得られない原因の一端を担っているのが今隣を歩くレンドと一緒に食べている棒アイス（ソーダ味）だ。

先ほど通りがかった駄菓子屋で購入したもので、どうやらレンドはこれがいたく気に入っているらしい。

現在智宏達がいるのは、レンド達が第二世界アイデアと呼ぶ世界だ。智宏のいた第三世界アースや、レンドのいたという第五世界オズから見れば異世界ということになる。

だが、先にも述べたとおり、智宏に異世界という実感は薄い。何しろこの世界、アースと文明や文化体系が酷似しているため、どうしても異世界とは思えないのだ。実際、文明レベルこそアースに劣っているものの、立派な科学文明を育て上げているこの世界の街並みは、アースの街並みと割とよく似ており、この棒アイスのように

よく似た文化も持っている。

智宏としては、唯一アースと違うこの世界ならではの特色、三十人に一人という確率で存在する超能力者の存在を知っていたため、それが見られることを若干期待していたのだが、こうして歩いていてもそれらしいものは見かけられなかった。

「まあ、智宏にはありがたみが無いかもしれないけど、俺達オズの人間やこの前のエデンの奴らにはこの世界も十分すごいんだよ。俺らの世界にはこんなアイスなんて普及してなかったからな」

「まあ、そうだろうな……」

実際つい昨日まで智宏もいた第一世界エデンにはアイスキャンデーなど夢のまた夢だろう。何しろエデンは恐竜が絶滅することなく跋扈している世界で、それによって人類は文明の発展基盤となる第一次産業を抑えられているのだから。

あるいはそう言う世界を経験した後、この世界に来たから異世界であるという実感が得られないのかもしれない。

「それにしても、エデンはともかくオズにもアイスってないんだな。魔術で冷凍技術とかありそうなイメージがあつたのに……」

何となくゲームや漫画のイメージで氷魔術の存在を思い浮かべる。実際のオズの魔術はそう言ったイメージよりさらに文明として汎用性を重視したものだ。知識さえあれば誰でも使えると言う特性などその最たるものだろう。いくら剣と魔法の世界に近い世界でも、魔術による文明は機械のそれに引けを取らない。ならば冷凍技術くらいあってもおかしくなさそうなものだ。

「……いや、まあ、物を凍らせる魔術自体は結構あるんだよ。それ

に魔力自体で氷を作ることまでできるから。物を冷やすこと自体は不可能じゃないんだ」

「だったらアイスくらい有っても良さそうなものなんじゃ……」

「それがそうでもないんだよ。魔術の技術って確かにものを冷やす技術があるけど、物を冷やし続ける技術が無いんだ」

「……ああ、そうか。もともと魔術って人間が使うものだからな」

「そう言うこと。もし人間に冷蔵庫の代わりにさせようと思ったら一日中一つの魔術を使い続けなくちゃなんないだろ？ まあ、儀式魔術や、魔石って言うそっちの機械と同じように自動で魔術を發動させる技術もあるにはあるけど、そっちだって長時間ぶっ続けで使えるものじゃないし、そもそも一つ作るのにえらく金がかかるからあまり普及していないんだ」

「だからアイスは商品にならないってことか……」

「まあ、そういうことだ。やろうと思えばできないことはないから、専門店やレストランならあるにはあるんだけど、それ相応に値段も張るしからあんな風に種類もバリエーションが無いし、手軽に売れるものでもないんだよ」

言われてみれば智宏にも氷に塩をまぶして、その上で冷やして作るアイスクリームの話聞いたことがある。

だが一般に普及させるために必要なのは作ったアイスを融かさないう技術なのだろう。言ってしまうえば作る技術はあっても売るために保管する技術が無い。だから商品として普及しないという理屈なのだろう。

「っていつか、さつきちらっと出てきたけど、魔石ってあの宝石みたいなのが魔石ってことでもいいのか？」

智宏は以前エデンで使った通信機を思い出す。宝石がいくつも込められた卵のような装飾品。今のところ魔石と言われて思い当たるのは智宏にはそれしかない。

「みたいなじゃなくて、まんま宝石を魔力加工して作ったもんだけど。言つたる？ 金がかかるって」

「……納得した」

確かにあんな高そうな宝石をいくつも使っていれば金もかかるだろう。しかも宝石を加工したということは加工にも費用がかかっているはずだ。これで普及するわけが無い。

「ついでに言つと魔石ってのは使う鉱物なんかの性質も考えて魔法陣を刻んでるから、安上がりな材料で作ることもできないんだ。もしこの前使った通信術式を鉄とかに刻もうと思つたら、通信用の装飾品じゃなくて、通信用の盾を作るはめになる」

「盾って……。要するに巨大な鉄塊ってことか？ っていつか魔石ってやつがみんなそんなに金がかかるんだつたら、生身で使つた方が安上がりじゃないか？」

「それがそうもいかないんだよ。前にも言つたけど魔石やら儀式魔術やらつてのは、元々人間の魔力量や【マーキングスキル】やらじやあ展開できない魔術を使うための技術なんだ。術式をあらかじめ用意できる点や、魔力をためておいて使う点で人間の魔術とは異なる

るからね。加えて、人間のおつむじや処理できないような複雑な工程を踏むものも多い。智宏も見ただろ？ この世界に来るのに使った世界転移術式の複雑さと大きさを」

「……まあ、確かに」

言われて、智宏はその魔方陣を思い出す。世界転移の魔方陣は十畳の部屋を埋め尽くすくらいの大きさと、複雑な魔方陣をさらに七つも同時に展開して歯車のように噛み合わせるといってんでもない構造の魔法陣だった。使用した魔力も馬鹿にならない。実際、展開した魔方陣が周辺の魔力を集めて発動可能になるまでに一晩かかったくらいだ。

そして同時に思い出す。その魔方陣を利用して一緒にこの世界に降り立った少女のことを。

「……どこ行っただらうな」

「さあね……。それを今から探してるんじゃないか」

少女は今朝、と言ってもまだ日も昇らない真夜中と言っていい時刻に、この世界に来て、直後忽然と姿を消した。

少し目を離しただけの隙に。まるで逃げるように。

智宏とミシオが第一世界エデンを出発したのはその日の朝だった。いや、正確にはまだ夜と言ってもいい時間だったかもしれない。なにしろあたりはまだ真っ暗で、出発の準備や移動もレンドの魔術

の明かりを頼りにして行われたくらいなのだ。

しかしながら、それでも見送りに来てくれた人々は大勢いた。

エデンにおいてずっと居候させてもらっていた家の家主で、村医者のハクレン、その妻のリンファ、村の戦士長のブハウ、レキ八村に駐留している異世界人のゴードンをはじめ、その他にも大勢の村人たちが出発前に洞窟の前に集合していた。

中には夜の警戒に当たるためなのか、巨竜の鱗でできた鎧をまとい、牙でできた剣を携えた戦士もいたが、ほとんどが本来ならば明かりのほとんどないこの世界では寝ているはずの人々だ。

厳しい環境でたくましく生き抜き、それゆえ高潔で義理がたい彼らに感謝と再会を約束して別れを告げる。

元の世界に変えるため、まずはアイデアに移動すべく目指す場所は村の外れ、神殿や来客用の部屋などが集中する、村で唯一の洞窟だ。トモヒロも実はこの洞窟に入るのはその日が初めてだったのだが、入ってみてその内部構造の複雑さに驚いた。

何となく小学生のころに教科書が何かで見たアリの巣を思い出す。実際広さこそ三人くらいなら楽に通れるものだったが、道は無秩序に枝分かれしており、智宏もレンドの案内が無ければその部屋にはたどり着けなかった。これだけ深いと空気がこもったりしそうなものだが、どうやらどこかに換気用の穴が開けられているらしい。魔方阵のある部屋はかなり奥にあったが、行く途中の空気は割と新鮮だった。

「着いたよ。この部屋だ」

「うおお……！」

「……わあ」

部屋の中を見渡し、二人で思わず嘆息する。案内されたのは洞窟

の中とは思えないほど広い部屋で、その一角の床の上には、青白く輝く大量の魔法陣が暗い部屋の中で煌々と輝いていた。よく見るとその一角以外にも起動していない魔法陣らしきものがいくつも見える。

どうやら異世界に渡る魔法陣と言うのは一つの魔法陣ではないらしい。大小様々な魔方陣が歯車のように噛み合い、中心の巨大な魔方陣に接続されている。大きさは十畳の部屋いっぱい広がるほどの大きさだ。確かにこれは人間が【マーキングスキル】で展開するには無理がある。

「ふん、来たかレンド」

その部屋の中央、光り輝く魔方陣のそばの暗がりから男の声が聞こえてきた。そこで初めて部屋の中に誰かがいるのに気が付く。

「おはようございますダイン先生。どうやら準備、済んでるようですね」

「ふん、とりあえず万全だ」

「おはようございます……す?」

レンドに習い、智宏も挨拶をしようとしてしかし、魔方陣の明かりで浮かび上がったダインの姿に言葉を失う。それほどにダインの格好は奇妙なものだった。

この世界の服の上に明らかに合わない白衣、それだけならいざ知らず、さらに特徴的なのはその頭だった。音楽室の肖像画に描かれていそうな、昔の作曲家のような髪型、クルクルとした髪の毛が大量に付いたその髪型は奇抜を通り越して明らかに異様だった。この部屋の環境がその異様さに拍車をかけている。

「えっと……、はじめまして、ですよね。吉田智宏です」

「あ、えっと、ハマシマミシオです」

「ふむ、オズの大学で魔学教授をしている。ダイン・ダンブレックだ」

「……え？ 魔学教授、ですか？ 職人ではなくて？」

ダインの言葉に思わず智宏は疑問の声を上げる。確か村で聞いた話ではダインは魔石と言うオズの技術製品を作る職人だったはずだ。

「ふむ、職人という答えでは単位はやれんな。確かに魔石造もしてはいるが本業はそっちではない。ただ村の人間に学者と言う職業を説明するのが面倒だったただけだ」

「……ああ、なるほど」

確かにこの世界には学者と言う職業は存在しそうにない。この世界は生活に必要な技術こそ発達し、広められてはいるが、ほかの世界でいうところの学問と言う概念ではない。そもそも、文字が一部の人間にしか使われていないような世界なのだ。そんな世界で学者などと言う概念が通じるはずもない。

「ふむ、二人とも理解した、か。頭はそこそこいいようだな。頭がいい人間は好きだ。知恵あるものとの会話は常に何かの発想の種を産む。アホウのレンドとは大違いだ」

「はいそこ！ いちいち俺を引き合いに出さない！」

「どうやらどこに行ってもレンドはこういう扱いらしい。そう思っ
て智宏は自分の判断が間違っていないかったことに安堵した。」

「トモヒロ？　もしかして今すぐく失礼なこと考えてない？」

「いや、別に。それよりダインさん。この地面で光っているのがイ
デアに行くための魔方陣ですか？」

軽くレンドの非難をそらし、智宏はダインに質問する。するとダ
インはどこからか葉巻を取り出し、指先に展開した魔方陣で火をつ
けた。部屋のなかにたばことは違う甘い臭いが広がる。

「まあ、そうだ。世界転移魔術の魔方陣、それをちゃんとした形に
改造したものだな」

「ちゃんとした、形？」

ダインの奇妙な言い回しにミシオが疑問の声を上げる。するとダ
インはくわえていた葉巻の煙を大きく吸い込み、吐き出すと、魔方
陣の中心に向かって歩き始めた。

「そもそも君たちがこの世界に来るのに使った転移魔法陣、私はこ
いつを『落とし穴型』と呼んでいるのだが、こいつのつくりは非常
に稚拙で不完全だ」

「まあ、確かに。言葉の通じるレキ八に出るって以外、どこに出る
のかもわからないって言いますし……。そういえばどこの世界に出
るのかもランダムだったっけ？」

「増える落とし穴、だし」

「正解だ。この魔方陣は『安全性』と『確実性』と言う二点において、著しくその要件を欠いている。こうして異世界に来ている君たちならわかるだろうがこんな危険な魔術、普通なら使用されない。商品としてまず売れないし、法律は必ずや敵に回る」

行ってしまうえばブレーキやランプのない車のようなものだ。便利な機能はあるものの起動させるだけで他人を危険にさらす。確かに、そんなものを売りだしても、いつ事故を起こしてもおかしくないのでは売れないし、法律がそんなものを野放しにするはずがない。

「はつきり言ってしまうえば、私はこの魔方陣を作った奴は真正のアホウなんじゃないかと疑っている。出口となつた箇所勝手に設置されるといふ周辺環境へ配慮のなさ、目標地点特定手順のずさんさ！！ 目標が異世界であると考えれば、我々の世界では常識とも言える『二対式魔法陣』にできなかったのは仕方ないとも言えるが、これはあまりにもひどい。もし私の生徒がこんな魔方陣をデザインしてきたら、その時点でそいつは落第にしている」

「えっと……、『二対式魔法陣』って何ですか？」

「オズの転移魔法陣の常識とも言える形態さ。俺らの世界で転移魔術ってのは、その名のとおり人や物を送り出す側の『送還陣』と、送ったものを受け取る側の『召喚陣』を二つセットで使うものなのだ。まあ、『召喚陣』の方も事前に設置しなくちゃいけないものだから、相手が異世界じゃ設置のしようがなかったんだろうね」

「えっと、つまり入口と出口みたいなものですか？ ……その、『二対式魔法陣』って言うのは？」

「そう。その通りだ。細かい部分はこの際省くが、私たちの世界では常識と言えるような技術がまるきり欠如している。こんなめっちゃくちゃな魔方陣もそうはない。三歳児が教本を見て描いたいたずら書きかと思ったくらいだ」

魔方陣の中を歩き回りながら、ダインは出来得る限りオリジナルの魔方陣のずさんさを表現しようとする。途中でこちらに気を使っ
て専門的な用語を避けるくらいの余裕はあるようだが、どうやらダインは魔方陣の製作者に学者として複雑な思いがあるらしい。

「でも……、この魔方陣を作った人って、その、どういう人だったんだろう？」

「ん？ どういうこと？ ミシオちゃん？」

「えっと、要するに酷く稚拙な技術で、その、だれもやったことのないことをしてるんでしょ。それってすごいことなんじゃ……？」

「間違いなくすごいことだとも！！」

ミシオの疑問に魔方陣のなかのダインが声を上げ、ミシオは飛び上がった。

「これだけ転移魔術の基本を無視しておきながら、ちゃんと異世界などと言う場所に繋がっているとと言う事実！！ 何よりでたらめなようできてしつかりと機能している未知の文字の数々！！ こいつを制作した人間は間違いなく天才だ！！」

「……さっきは三歳児がどうか言ってくれに」

「レンド君、君は何も分かっていない。本当に何も分かっていない。まったくもって何も分かっていない!!」

「……三回も言わなくても」

「えっと、つまりこういうことですよ？ この魔方陣の製作者は基本を全く知らないのに、偶然ではなく優れた結果を叩きだしている、と」

「まあ、詳しくはもっと調べてみなければわからんがな。何しろ魔方陣自体の解析はまだ完全ではないのでね。目の前の魔法陣もとりあえず行き先の完全な特定は可能になっているが、それはオリジナルに必要な機能をつぎはぎのように追加しただけで、本格的な改造とは言い難いからな。何しろこの魔方陣、ある程度普通の転移魔術と通じるものはあるものの所々でまるで違う未知の文字が使われとる。例えばここ、この十番回路など」

「あー、先生？ 俺たちそろそろ出発したいんですけど……」

「……おっと、つい熱く話し過ぎてしまったか。そう言えば君たちをアイデアに送らねばならんのだったか」

自分の役割を思い出し、魔法陣に触れ始めたダインの様子を見ながら智宏は考える。

稚拙なようで天才的。

画期的でありながら常識的なところで不完全。

智宏にもダインが魔法陣の製作者への評価が一定しないと云うのもわかる気がした。褒めるべき技術を使いながら貶すべきミスが多すぎる。実際、彼自身褒めるべきか貶すべきか決めかねているのだ

ろう。

(本当に、一体どんな人だったんだろう……?)

誰が製作し、仕掛けたのか分からない異世界への魔方陣。だが、これを制作した人物は恐らく五つある世界で初めての異世界渡航者だったはずだ。

だとしたらその人物はなぜ名乗りを上げなかったのか？ そして今どうしているのか？

むしろ智宏にはそちらのほうが問題のように思えた。異世界の発見など歴史の教科書に残して余りある世紀の大発見のはずだ。それなのにこの魔方陣は製作者が誰なのかまるでわからない。そもそもこの製作者は何の目的で、そしてどういう経緯でこの魔方陣を作り上げたのだろうか？

「起動するぞ。少し離れてくれ」

と、ダインの言葉に智宏は目の前の魔法陣に意識を戻した。言われたとおり少し後ろに下がると、とたんに魔方陣が輝きを増し、その中心に黒い球体が現れる。

「？」

てつきり魔方陣に異世界行き穴があくものと思っていた智宏は、その予想に反して黒い球体が魔法陣の中心に現れたことに意表を突かれる。しかし当の球体はそんな智宏の疑問を無視してどんどの大きくなり、ついには直径三メートルほどの大きさにまで成長した。

「開いたぞ。これが異世界へのゲートだ」

「……地面に穴があくとかするんだと思ってました」

「それはオリジナルの話だ。危険はないとはいえ穴の中に飛び込むなど心臓に悪いだろう?」

「まあ、たしかに」

どうやらゲートの形状まで改造されているらしい。ダインの信念なのか、かなり使う人間のことを考えて改造されているようだ。

「んじゃ、とりあえずアイデアに行くとしますか」

「普通に入ればいいのか?」

「ああ、そうすりゃ向こうに勝手に出してくれる」

「へえ」

智宏が何となく感心していると隣でミシオが歩み出てきた。

「これで……、元の世界に、帰れる」

やはり何か思うところはあるのだろう。そう思ってミシオの顔を横目に見た智宏はしかし、その表情が思っていたのとは違うことに気が付いた。

(……あれ?)

「おい、そろそろ行くぞ」

その表情が何かを悟る前にレンドの声が智宏を現実を引き戻す。見ればすでにレンドが黒い球体の手前まで近づいていた。

「悪いがあんまり長くゲートを開いていたくはないので手短に頼む。実はこの術式、まだ改造が中途半端でエネルギー効率が酷く悪いのだ」

「え、あ、はい！」

ダインにも急かされ、智宏はミシオとともに慌ててゲートに近づく。それを確認するとレンドは手本でも見せるように、気軽な表情でゲートに飛び込んだ。

瞬く間にレンドの姿が黒い球体の中に消え、姿が見えなくなる。

(とりあえず特に心配することもないかな)

未知の黒い球体に飛び込むという行為には若干の不安を抱かされるが、だからと言ってここで躊躇しては始まらない。

智宏は覚悟を決め、ミシオに軽く会釈すると、意を決して球体のなかに飛び込んだ。

「では、さらばだ」

途端に体が球体に触れた部分から内側に引き込まれるのを感じる。

(うわー!!)

視界が一気にブラックアウトし、全身に奇妙な浮遊感が襲ってくる。真っ黒な視界に、赤や青の光が明滅する。

しかし智宏がその状況に不安を覚える前に、視界に一気に光が戻

ってきた。

途端に浮遊感が消失し、智宏の足が硬い地面の感触を取り戻す。

「うおっと」

衝撃に若干よろけながら智宏は何とか着地を決める。

周りを見渡すと、周囲は先ほどの完全な暗闇とは違う夜の暗闇に包まれており、目の前には右手に魔方阵と光る球体を浮かべたレンドが立っていた。どうやら先ほど村を出るときにも使っていた照明用の魔術らしい。

「おっと、トモヒロ、少しこっちに来てくれるか。ミシオちゃんがこっちに出て来た時邪魔になる」

「お、おっ」

智宏が慌ててその場を離れ背後を振り返ると、それを待っていたように先ほどの黒い球体からミシオが飛び出してきた。

「ん、と、あっ」

「危ない！」

飛び出すと同時によろけたミシオを智宏は慌てて受け止める。それと同時に黒い球体は瞬く間にそのサイズを縮め、ついには跡形もなく消滅した。

「え、あ、ありがとう」

「わ、あ、どういたしまして」

受け止めたミシオが至近距離にいたことを思い出し、上目使いにこちらを見る表情に智宏の顔面が熱くなる。それをごまかすように少女から距離を取ろうとして、しかしミシオが智宏の手をつかんだことでそれに失敗した。

「…………え？」

「本当に、ありがとう」

なぜかもう一度お礼を言い、ミシオは今度こそ、その手を離す。そのとき智宏は自分が何か大切なものを手放してしまったような錯覚を覚えた。

「おうおう、君たちホント青春してるなあ」

「…………うるさい」

背後から聞こえたレンドの茶々に、鋭い視線でもって抵抗し、智宏はミシオから意識を外す。意識して周りを見回すと、どうやらここはどこかのビルか何かの屋上らしい。ただ、相当町はずれにあるらしく、付近には建物よりも樹木の方が多かった。

「……どこだ？」

「第二世界イデア、そのとある国の地方都市の暦波町の外ね。うちらが一応のアジトにしているビルの上さ」

「……ってことはイデアには着いてるんだな。一回目のときみたいに気を失ったりするのかと思った」

「ああ、あれは君の世界の人間で刻印使いの素養を持った人だけの症状だよ。世界の挟間にいる間に肉体が変質することによる数少ない副作用さ。もう刻印に発現している智宏には関係ないよ」

言われ、智宏は異世界に行く前と今とで、自分が変質していることを思い出した。それ自体は別に悪いことでもないし、特に悲観しているわけでもないのだが、どうしても戸惑いはぬぐえない。

(いや、それを言ったらミシオはもっと……、ってあれ?)

ふと、背後を振り向いた智宏は今更のようにその異常事態に気付く。眼前に広がる広い屋上。見晴らしのいいはずのそこにはしかし、智宏とレンド以外の人間は存在していなかった。

「……あれ？ ミシオちゃんは？」

どうやらレンドもそのことに気が付いたらしく、疑問の声を上げる。

そして同時に智宏は気が付いた。エデンを出発する直前、ミシオが浮かべている表情が、強いて言葉にするなら覚悟を決めるような表情だったということ。

1：二つ目の異世界（後書き）

という訳で、第二章、第二世界編を掲載したいと思います。
感想や批評など有ると嬉しいですよ。

2：第二世界アイデア

一通り今朝方のことを思い出し、智宏は軽く嘆息する。正直に言っただけでまだ数時間しかたっていないということが信じられない。軽い食事を二度ほどとった以外はすべての時間をミシオの搜索に当てていたせいか、時間の流れに対する認識が普通に暮らしていた時よりも長く感じられていた。漠然とした、言ってしまうえば根拠のない不安を抱いているからそう感じるのだろう。もしもつと状況が切迫していたら逆に時間の流れが速く感じたかもしれない。

「それにしても、俺としてはどうして逃げたのだったのもそうだけど、どうやって逃げたのだったのかってことの方が気になるよ」

食べていた棒アイスの最後の一口を食べきり、通りがかりにちよつとあったゴミ箱に棒を捨てながらレンドはそう口にする。その声は真剣に考えているというよりも、半ばばやくようなものだ。真剣にならなければいけない事態なのかどうかも判然としないので仕方無いとも言えるかも知れない。

「まあ、確かにあんな場所だからなあ」

レンドの言葉に、智宏も意識を過去から現在に戻し、思考する。あのと二人でどんなに屋上を探してもミシオは見つからなかった。実際のところ、それがどのような手段で行われたのかは目下最大の疑問だ。

「あのととき、屋上の出入り口は俺たちの目の前にあった。つまり俺たちの目を盗んで出口から出るってのは不可能だ。いったいどうやって移動したんだか……」

「この世界特有の超能力って奴じゃないのか？　テレポートとかあるんだろ？」

「まあ、あるにはあるけど少なくともミシオちゃん本人の能力じゃないな。能力つてのは一人一種類しか持てない代物だし、ミシオちゃん自身はテレパシスト。他の能力を使って出て行ったとは思えない」

「……となると」

ふと智宏の脳裏に最悪の可能性が浮かび上がる。

ミシオの蒸発が本人の意思ではなく、誰かによる誘拐である可能性だ。

というのも彼女は智宏と同じように偶然によって異世界に行っていた『異世界遭難者』ではない。この世界で誰かに捕らえられ、別世界で人道に反する実験に使われて、そこから逃げだしたという壮絶な背景を持っているのだ。

そして、昨日までいたエデンにおいて、実験を行った組織は逃げだした彼女を追っていた。それがどれほどの優先順位のなかにいるかは分からないが、諦めたり、追うこと自体を無意味と判断したりしている可能性と同じくらい、今も彼女を追っている可能性がある。だがそれをあんなタイミングで行うかどうかは、そして一味のメンバーをこちらが二人も捕まえた今、それを行う意味があるかどうかは少し疑問だ。今のミシオにそこまでの危険を冒してまでさらう価値があるようには思えない。

（それに、あいつの様子を考えればやっぱり自分で消えたと考えるのが普通だろうな）

智宏にはミシオが自分の意思で姿をくりましたのだという確信があった。ならば、本来はミシオの意思を尊重するべきかもしれない。だがそうだと判断する証拠はどこにもなく、それ以上に、この世界に帰る際にミシオが浮かべていた表情が気になった。平たく言えば、智宏はミシオが心配だったのだ。

レンドもそれは分かっているのだろう。だからこそ智宏を異世界に返すよりも、ミシオの搜索を優先している。智宏自身にしてもミシオの無事を確認するまでは元の世界に帰る気はなかった。

「ん？ ちょっと待って」

「どうした？」

突然立ち止まったレンドを振り返ると、レンドはポケットから卵大の装飾品を取り出していた。先ほど話に出た魔石を利用した通信機だ。レンドはそれから響く声と一言三言会話を交わすと、再びそれをポケットに戻した。

「なんだって？」

「情報だ。ミシオちゃんの住所が割れた。これから資料を取りに行つて向かうつもりだけど智宏も来るか？」

レンドの提案に智宏は迷いなくうなずいた。

ミシオの住所は暦波町から歩いて三十分くらいのところにある魚

寝村という漁村だった。レンドの話では、異世界との国交を樹立すべく、政府機関との橋渡しを行える人物とコンタクトを取ろうとしている仲間が、その候補に挙げて調査している人間の親族として、ミシオの名前を見つけたらしい。

二人は現在その情報をもとに村へと向かう道を歩いていた。隣には結構な大木さの森が広がっており、エデンの森とは流石に比べられないが、それでもなかなかの大きさの森だった。

「えっと、どうやらミシオちゃんの名前、智宏の世界の字で書くなら『浜島』って書くみたいだな。下の名前はたぶん『美潮』だね」

そう言いながら、レンドはオズ人の種族的な特徴である【マーキングスキル】で、空中に魔力の文字を書く。その手元にはなにやら資料らしき紙束があり、どうやらそれにミシオ家族に関する情報が載っているらしい。先ほど見た限りでは見たことのない文字ばかりだったので、どうやらオズの文字で書かれた報告書のようだ。

「家族は、父親一人と、兄貴が、ん？ 違うな。んん……と、どうやら家庭の方は結構複雑っぽいな」

「複雑？」

「ああ、どうも彼女の両親つてのが十二年ほど前、このあたりを襲った自然災害によって二人とも他界してるみたいだ。その後は彼女の爺さんが親代わりを務めてたみたいなんだが、その爺さんも三年前に病死。現在は親戚の一人が保護者になってて、その息子と一緒に三人で暮らしてるみたいだ。たぶん仲間がコンタクトを取ろうとしてたのはこの保護者だな。父親の方がこの辺じゃ、結構名の通った人物みたいだ」

「ふう、ん……」

それを聞いて、智宏はできるだけ動揺を隠して返事をする。ここで変に同情的な思考をするのは、少し違うような気がして嫌だった。そう思うことを彼女が望むかどうかはわからなかったが。

「同居してるのはサデンマクラとサデンエイガの親子。智宏の世界だと『砂殿真倉』と『砂殿宋河』って書くみたいだな」

「名前がエイガだった字は『宋』じゃなくて『栄』だろ？」

「おっと、まだ覚えたばかりだから……」

レンドにならって字の間違いを同じように【マーキングスキル】で訂正する。

智宏はアース人でありながら【マーキングスキル】を使うことができる。どういう理由かは知らないが、母方の家系の人間がエルフのような長い耳と一緒に受け継いできた体質で、一般的な日本人の容姿を持つ智宏の唯一の特異点だ。

否、すでに智宏の特異点はそれだけではない。異世界に渡るに当たり世界の外にある魔力をその身に取り込み、変質した智宏の体は、身体能力が上昇し、エデンの人間が使う気功術や、アース人の中でもほんの一握りの人間のみがまれに発現する非常識な力、【刻印】を持つ化け物じみたそれへと変貌しているのだ。実際、前の世界ではそれによって身を守ることが出来ているが、やはりというべきか、戸惑いはある。

「ってことはこれから行くのはそのサデンって人の家なのか？」

「たぶんな。まだ見つけたばかりの人物だから確かなことは調べら

れてないけど、祖父が死んだ後、サデンマクラがミシオちゃんを自分の家に引き取った、ってところじゃないかな」

「ミシオ本人がいればいろいろ聞けたかもな」

「まあな……。接触するにしても彼女が一緒の方がコンタクトが取りやすかったから、それは思っけど」

「本当に、なんで消えたりしたんだろう？　なんか特殊な事情でも抱えてたのかな」

「まあ、事情と言うなら心あたりはあるが」

「心あたり？　どういうことだ？」

「この世界特有の世界事情ってやつさ」

そう言うトレンドは少しだけ、辺りを見回した。すでに二人は町を出て魚寝村への道にさしかかっている。右手は森の木々がじゅまをして視界を遮っているが、他に誰かがいるようには見えない。流石にまだ人前で大っぴらに異世界の話はしたくないらしい。

「ミシオちゃんがそうであったように、この世界には他の世界では見られないような超能力者が三十人に一人の割合で存在するってのは知ってるな？　加えて言うなら文明が発達した今もその有用性は社会が認めるところなんだが、実は同時にある問題を抱えている」

「……ひょっとして差別問題か何かか？」

「まあ、そういうことだ」

そう言つとレンドは肩を落としてため息をついた。

人間の歴史とは差別の歴史であると言つてもいい。アースでも昔から身分や性別、人種や宗教など、歴史のあらゆる場面でそれは存在していた。極端でも何でもなく差別の問題をなくして歴史を語ることはできないくらいなのだ。

実際、智宏がミシオに超能力の話聞いたとき、一番はじめに思つたことの一つが『差別の問題とか大変なんだろうな』だった。智宏とて、超能力の世界で差別は間違いなくあるだろうと考えていたのだ。

「まあ、行つてしまえば能力の有無つてのは、他の才能なんかと違つて明確な性能差だ。これで差別が起きない方がおかしいだろ。実際、この世界の歴史は能力者への扱いをめぐる話で八割が埋まつてると言つてもいいくらいだ。今でこそ廃れてるが、昔の宗教には能力者を悪魔の申し子として扱う宗教が腐るほどあつたし、それと同じくらい能力を神に与えられた選ばれし者の力だと解釈する宗教もあつた。能力に遺伝する性質があつて明確に能力が人種の特徴になつてたら、今でもこの世界は能力の有無で争つてただろうぜ」

「能力は遺伝しないのか？」

「ああ。完全に運任せだ。実際、能力者がトップに立つても後継者が能力を持つてなくて、そのせいで跡継ぎ問題に発展したこと滅びた政権やら勢力やらが歴史上にいくつも存在する。その逆もまたしかりだ。この世界では能力者の支配は世代をまたがないつてのが今じゃ定説なんだよ。だからこそこの世界の差別問題は落とし所を見つけれたと言つてもいい」

「それじゃあ今は能力による差別は無いのか？」

「表向きはな（・・・・・・）」

そう言うトレンドはまたも苦々しげに溜息を吐いた。それだけで話の内容が想像できる。

少し考えれば分かることだが、いくら法律や世論が能力者差別をやめたところで、人の心はそう簡単には変わらない。

「能力者ってのはどこでもエリート扱いされる傾向にあるから、たとえば雇用の機会だって、能力者はどんなに景気が悪くても一定以上の数が雇われるけど、非能力者はそうはいかない。彼らは能力者に劣等感を持ち続けてるし、それがエスカレーターして排斥団体が生まれる例も珍しくないんだ。能力のメカニズムがほとんど解明できていないってのも大きいな」

「解明できていないのか？」

「脳の一部にそういう働きをする機関があるってのが一般に言われてるけど、詳しいことは何一つ分かっていない。学者によっては無害な脳腫瘍なんじゃないかって言ってるやつもいるくらいだ。人によって性能も条件もまるで違うしな」

「性能？」

「ああ、能力者だって万能じゃない。同じ能力の持ち主でも得意不得意があるし、出せる出力もまちまちだ。何らかの条件が付く場合もある」

「得意不得意に条件って言うと……、ミシオの場合なら受信が不得意で送信が得意。条件は受信するのに触れなくちゃいけないってと

「ころか？」

「ミシオの持つ能力は簡単に言えばテレパシーだ。ここに来る前にも、エデンでその能力にはずいぶんお世話になっている。」

「あと、他にも能力の条件の例を上げると、手を使わずに物を持ち上げることのできる念動力なら、持ち上げるものの大きさや重量にサイコキネシス限界があったり、特定の物にしか能力を行使できなかったり、珍しいのになると特定の動きしかさせられないってのもいるな」

「なんか思ってたほど万能でもないんだな」

「そりゃあな。ついでに言うともミシオちゃん的能力はかなり強力な方だな。多少偏りがあるとはいえ『受信』と『送信』の両立。しかも送信に至ってはあれだけの広範囲に、しかも送った感覚を相手自身のものだと錯覚させられるレベルだ。同じ系統の能力の中ではトップクラスの性能と言っている」

「あいつってそんなにすごかったのか……」

「だけど、この能力の性能も一生を通じて変化しないわけじゃない。得意なことができるようになったり、出力が上がったり、使用条件が緩和されたりってことは普通にある。まあ、広い意味で言うなら万能に近づいていくってことなんだけど。問題っていうなら、そういう人間には決まってそれを引き起こす原因があるってのも問題だな」

「原因？」

「そ。まあ要因って言うてもいいけど、そういうものが二つある。」

「一つは定番の努力と根性。具体的には能力を積極的に使いまくって、地道に力を強めていくこと」

「筋力なんかと同じか」

「そういうこと。そしてもう一つ。実はこっちの方が問題で、日常的に感じるストレスが多い人ほど能力が強化されやすいつて統計があるんだ」

「ストレス？」

確かにストレスが脳に影響を及ぼすというのはよく聞く話だ。能力者の能力が脳によるものなら、ストレスがそれに影響を及ぼしてもおかしくはない。

「そしてこれがまた曲者でね。さっきも言った通り能力者ってのはある種のエリートだ。そしてそれゆえ必然的に、自分の子供をエリートに近づけようと無茶をやらかす奴らが出てくるんだ」

「無茶って……、おいおいまさか」

「そう。ストレスで能力が強くなるのならストレスを与えればいい。たとえ能力者じゃなくてもストレスを与えれば能力に目覚めるかもしれない。そういう考えを持つ奴がしょっちゅう出てきては事件に発展する例が結構あるんだよ。実際、原因こそ分らないけどある日突然能力に目覚める人間もいるから一部では結構信じられているんだ」

「……具体的に何をするんだ？」

「やり方は人にやってまちまちだけど、そのほとんどが虐待事件として扱われることが多いね。逆に言えばそうまでするほど非能力者の能力者に対するコンプレックスは強いってことになる」

それを聞いて智宏はこのタイミングでレンドが話した理由に合点が行った。要するに能力者はトラブルに会いやすいのだ。

能力者への差別や排斥、能力自体の優越、確かにトラブルの種という意味では十分なものばかりだろう。

「じゃあ、ミシオは能力が発端で何かのトラブルに巻き込まれてるって言うのか？」

「まあ、あくまで可能性の話だな。能力者ならこの世界では珍しい話だし、彼女の能力は結構強い部類だったことを考えると、日常的に強いストレスにさらされている可能性はある」

「もしそうなら、僕らでなんとかできるのかな」

「さあな。流石に情報が少なすぎて何とも言えんよ。手を出せる問題とも限らないし。それに俺たちだって満更他人事でもないしな」

「え？」

思わぬ発言に、智宏はつい疑問の声を上げる。それに対してレンドは声の調子を若干下げ、憂鬱そうな表情で話を続けた。

「能力者と非能力者、持てる者と持たざる者。でもここで言う持っているものつてのは、別に超能力でなくとも、魔術でも、気功術でも、刻印でもいいんだよ」

「いや、でも僕らは、……ってああ、そうか」

現在レンド達は五つある世界の間で交流を持たせるべく活動している。これは彼らの活動が実を結んだ時に起きる問題の話なのだ。

「だからトモヒロも気をつけた方がいいぞ。なにしろ智宏の場合、魔術に気功術に刻印と四つの異能の内三つを兼ねそろえてるからな。これからは、とりあえず刻印使いつてことは伏せた方がいいと思うぞ」

「気功術も刻印使になったときの影響だからそつちも隠した方がいいかな。まあ、魔術は見た目の問題もあるから隠せないかもしれないけど……」

「まあ、隠すと出身世界の話をする時ややこしくなりそうだからな。隠さなくてもややこしいけど」

言われた通り、とりあえず智宏は今後自身の持つ異能を隠すことに決める。ただでさえ目立つ耳を持っているというのにこれ以上妙な注目やトラブルに会うのは願い下げだった。

「さて、話の続きだけど、差別の問題は俺たちにとっても大問題だね。何しろこれから先、五つある世界の住人が交流した場合、世界によって人間の持つ力が違うことが必ず問題になる。【マーキングスキル】、【気功術】、【能力】。そして【刻印】。これらを持つ者と持たない者の間で、あるいはそれぞれ違うものを持つ者の間で感情的なへだたりをどう緩和するかってのは、今から頭の痛い問題なのさ。まあ、だからこそ俺達はこの世界をモデルケースにできないかと注目してるんだけどね」

五つの世界の中で唯一、異能を持つ者と持たざる者が共存している世界、第二世界イデア。

そういう意味でこの世界が、この世界の歴史がこれからの五つの世界に与える影響は限りなく大きい。

「でも、それって今から心配することか？ 確かに何らかの対策は練っておく必要があるけど……」

「そうだねえ……。ついでだからトモヒロにはちょっと踏み込んだ話をしちやおうか」

「踏み込んだ話？」

「なあトモヒロ、何で俺らが異世界との接触こんなに気を使ったり、トモヒロたちみたいなのを保護したり、テロリストの摘発に力を注いだりしてると思う？」

「え？ それって何か前に言っただけじゃなかったか？」

レンド達の目的は異世界との国交を樹立し、世界間の貿易を行うことだ。彼らの行動を智宏はより良い関係を築くためのものだと思っただけだ。

「まあ、確かに半分はそれだ。でももう半分くらいこっちの世界事情ってのもあるんだよ」

「世界事情？」

「ああ。たぶんこれは智宏のアースでも共通する事情なんだけど。問題の大本は世界を歩き来するために使ってる魔方陣なんだよ」

「あの魔法陣の問題って……、有りすぎるほど有るぞ?」

「……まあ、その話は今朝方したからおいとくとして、この場で問題になるのはさ、魔法陣で世界を行き来するに当たって必ずレキ八を經由しなければならぬってことなんだ」

「まあ、確かに……」

問題の魔法陣の効果は正確に言えば異世界に行くというものではない。世界に限らず日本語、彼らがレキ八語と呼ぶ言語を使うレキ八という都市に行くものだ。当然のように異世界に行く場合必ずどこかのレキ八に出ることになる。

「でもさ、そうなってくると当然の帰結として、世界と交易できるのはレ(・)(キ)(・)(ハ)(・)(と)(・)(い)(・)(う)(・)(土・地を)(・)(持・ち)(・)(レ)(・)(キ)(・)(ハ)(・)(語を)(・)(使・う)(・)(国・だ)(・)(け)(・)(っ・て)(こ・と)(に)(な・る)(ん)(だ)(よ)」

「……あ」

「理解したか? 前にも話したが、異世界との交易は莫大な富を生む。だけどその恩恵を受けることができるのはそれぞれの世界でたった一国だけだ。そんな状況が他国のやっかみを生まないわけがない」

「確かに……」

言ってしまうえば天然資源の問題と理屈は同じだ。世界間交易といふのは石油やレアアースと同じく特定の土地でしか得られない利益

なのだ。そしてそうなつてくるとそれをめぐって争いが起きること
歴史が証明している。智宏とてそれをリアルタイムで見ているのだ。
加えて言うなら世界一つと貿易ができるなど、下手な油田よりもは
るかに価値がある。」

「幸いなことに、そんな莫大な利益を一人占めしてもすぐにうちの
国が攻められるようなことはない。トモヒロの世界でも同じようだ
が、オズでは侵略のための戦争は国際法上ではご法度だ。相手の持
っているものが欲しいから奪っていいなんて掠奪者の理屈はとうの
昔に廃れている。……でも相手が悪人だったら話は別だ」

「悪人？ どういうことだ？」

「例えば異世界人に対して国が非道な行為を行えば、それは間違い
なく悪人だ。虐殺行為を働いたり、略奪を働いたり、侵略を働いた
り、極端な話それらを容認するような姿勢を見せたり」

「この前の奴らみたいなのを見逃したり？」

「そう言うこと。もしそう言った不法行為を働いた場合、他国はそ
んな国に世界の窓口を任せるわけにはいかないと行って俺の国から
土地を奪う大義名分を得ることになる。そうなつたらまあ、うちの
国は終わりとまではいかないけど、レキ八をオズの国際社会が共同
所有して交易の窓口にするって流れにはなるかもな」

「……それって結構やばくないか？ 確かオズのレキ八ってフリリ
アの首都だろ？」

「ああ、だから俺らの国じゃ異世界とのトラブルを病的なまでに避
けているのさ。特に戦争なんてもつてのほかだ。ただでさえ首都であ

るレキ八に踏み込める魔方陣が各世界にばらまかれていた状態で、
仮に戦争なんかふっかけられたら甚大な被害が出るし、その理由が
何であれ、他国が理由をつけて干渉してくる。だから出来るだけ紳
士的に、かつ平和的に事を進めたいんだよ」

「何か異世界とのつながりがデメリットばかりに思えてきたな……。
いつそ異世界なんてありませんでしたって形にしちゃったらどうだ
？ 事なかれ主義を極めてさ」

「ムリムリ。魔方陣が増え過ぎてるもん。今さら世界を渡る人間の
流れは止められないよ」

「だよなあ……」

たとえレンド達が無かったことにしても状況は決して良くなるな
いだろう。智宏のように偶発的に魔法陣に引っかけた異世界に行
くを防ぐには魔法陣が増え過ぎているし、その魔方陣を使って異
世界にわたり、悪事を働く輩も出てきている。それらが野放しにな
ることを考えればむしろマイナスにしかならない。

だが智宏のその認識は次のレンドの言葉で砕け散ることとなった。

「それにこの事業にはデメリットを遥かに超える価値がある」

智宏が声の調子が変わったことに気付きレンドの方を見るとその
表情は酷く楽しそうなものだった。あえて言うならワクワクしてい
るように見える。

「正直に言えば俺たちもいつまでも異世界との交易を独占できると
は思っていない。一応あの魔法陣の解析も進めて他の都市でも使え
るようにしようとしてるしね」

「今朝のあの魔法陣みたいにか？」

「あれはまだレキ八内にしか出られないんだけどな。でも、そういうことも考えて、本気で研究すれば、あの魔法陣が他の町でも使えるようになるまでは最短も半年位だったのが俺たちの見解だ。同時にそれはフラリアが異世界との交易を独占できるのは半年までだったことを意味している」

「たった半年か？」

「いいや。半年もあるんだよ（……）。考えてもみる、半年間異世界との交易を独占できるんだぜ？ たった半年でもそんなものを独占できるだけで得られる経済的な利益は計り知れない。何しろ相手は世界四つだからな。それに、そうなればうちの国は異世界と最初に交わった国として世界に名を轟かせることになる。人間ってのは初めてが好きだからな。これを逃す手はない」

智宏の目の前でレンドは目を輝かせながらそう語る。確かに、言われてみればこういうものは半年でも相当大きな差を生む。異世界と唯一取引ができるとなれば、他国から企業はなだれ込むようになってくるだろうし、そうなれば経済は劇的に活性化するだろう。異世界の技術が最初に定着するのレキ八ということになるし、そうなればその国は必然的に文明の最先端に行くことにもなる。さらに初めて異世界と交わった都市となれば政治的にも歴史的にも箔が付く。そうなれば先の時代でもその恩恵は続くし、観光地として盛り上げることも可能だ。実際、日本にも外国との貿易の拠点となった都市が観光名所になっている例がある。世界中探せば到る所にあるだろう。相手が異世界となればそう言った都市以上の価値を持つだろう。

「それに言葉の問題もある。いくら技術的に他の国が異世界に行けるようになったって、言葉で繋がっているレキ八同士の交流と違って、他の国同士では意思の疎通そのものが困難だ」

「まあ、確かに。異世界で日本語が通じてるってのが既に奇跡みたいなものだからな」

智宏達が使う転移魔法陣の転移先の条件の中では、レキ八という地名よりもむしろ使用言語の特定の方が条件としては厳しいだろう。もしも日本以外の国が異世界と交流しようとした場合、まったくの未知の言語を一から学ばねばならないのだ。そんなことをするくらいなら、智宏の世界でも日本語として既に学習方法が確立しているレキ八語を学んだほうが都合がいい。そうなれば自然、最初の貿易相手国として選ばれるのはレキ八を内包する国ということになる。

「これから先の未来、五つの世界のレキ八は間違いなく世界の中心になる。無かったことにするなんてとんでもない。これから先のことを考えるなら、この事業には命をかける価値すらあるのさ。一生に一度有るかないかの歴史の巨大な岐路に俺達は立ってるんだぜ？」

「おまえが楽しそうな訳が分かったよ」

同時に智宏は心の中でレンドに対する認識を改める。今までレンドの性格は何となくつかみどころのないイメージがあったが、この瞬間、何となくその本質を垣間見た気がした。どうやら目の前の男はこの事業にかなりの情熱を燃やしているらしい。

そんなことを考えたとき、智宏の視界の隅に今までなかった色が映った。光を反射する、輝くような蒼。

「おお！」

海だった。山に囲まれた小さな村の先に、キラキラと輝く海が見える。

「さあて！ それじゃあ、ミシオちゃん探すついでに、この先の全世界の平和のためのお仕事といきますかあ！」

そう言ってレンドは張り切って村への一步を踏み出す。その勢いに付き合わないほど智宏は付き合いが悪くなかった。

2：第二世界アイデア（後書き）

またもや説明回です。感想や疑問点など頂けると嬉しいです。

3：訪問

魚寝村は南を海に、北と東を小さな山に囲まれた小さな村だ。どれくらい小さいかというと、せいぜい百名弱しか住んでいなかったエデンのレキ八村よりさらに家の数が少ない。面積も海と山に囲まれていることから、断崖に囲まれていたレキ八村と似たり寄ったりで、村の人間のほとんどが海で魚などの海産物を取り、それをここに来るのに通った西周りのルートで暦波町に売りに行って生活している。どうやらこのあたりには同じような村が点在しているらしく、暦波町はそこで獲れた品が集まる町らしい。

そしてそんな村の片隅にミシオの住むサデン家は存在していた。

「でかいな……」

サデン家はかなり大きな日本家屋だった。正確にはこの世界に日本と言う国はないので、日本家屋に近いこの世界の建築様式ということになる。だが、見た目は日本家屋と言って間違いない。どうやらレンドの情報に有った父親が有力者というのはまんざら嘘でもないらしい。

「しっかし、ほんとにこの世界は日本にそっくりだな……」

「まあ、立地っていうか、国のある場所も同じだからね。国の位置が近いとある程度同じような文化が生まれやすいんだよ」

「そうなのか？ 一体どういう理屈なんだ？」

「うーん……、要するに機能性と土地柄の問題なんだけど……。要するにさ。文化や文明、道具や建築物ってのはその土地で必要にな

るから生まれるものなんだよ」

「まあ、それはそうだろうな」

普通物と言うのは誰かが必要とするから生まれ、便利だと思うから普及するものだ。中には例外もあるだろうが、どこの世界でも基本的にそれは変わらないだろう。

「んで、そうやって生まれたものってのは時を経ると共により使いやすいようにその形を変えていく。より便利に、より効率よく、ね。でも、そうしたよりよい形ってのは大体の場合決まってくるものなんだ」

「決まってくる？」

「そう。考えてもみる。たとえ世界が違ってても最善の形ってのはそれは変わらない。どんなものでも機能性を突き詰めていけば落ち着く形は一定のパターンに収まるものなんだよ」

「それがさっき言っていた機能性の問題か。じゃあ、土地柄ってのは？」

「こつちはもつと簡単だ。例えば暑い地方で熱をため込んで逃がさないような家は作らないだろう？」

「確かに」

それだけで智宏はレンドの言うことを理解した。要するに気候が同じならば作る家の条件が重なってくるのだ。熱い場所なら風通しのいい家を。寒い場所なら熱を逃がさない家を作るように、どんな

ものにもその土地に合せた形というものが存在する。

「加えて、気候が同じってことは生息する生物や植物なんかかぶる。土地が同じならばその土地で取れる鉱物なんかもだ。それはつまり同じ材料がそろってることになるから、必然的に同じものが作られる可能性がさらに増える」

「なるほどな」

もちろん、まったく同じ結果が出るわけではないだろう。現にこの世界とアースではアースの方が若干進んだ文明をもっている。進み具合の他にも歴史的な事情などで廃れてしまった文化などもあるだろうし、逆にアースで発達しなかった文化が発達している可能性もある。

「まあ、そんなわけで、レキ八を持つ国がほとんど同じ場所にあるアイデアとアースは、息づいている文化もかなり酷似してるって訳だ。ちなみにこの世界にもわびさびの文化はあるし、和服なんかもあるぞ。だから俺ミシオちゃんを見てて和服が似合いそうだと思ってた」

「……まあ、確かに」

少しだけその姿を想像していいかもしれないと思ってしまった。これではレンドのことをバカにできない。

「後その派生形で、浴衣や巫女服、あと制服姿もいいかもしれないなあ！」

「……うん、やっぱり僕ここまでではないわ。っていうかお前、僕の世界の文化に染まりすぎじゃない？ 正直今言ったような服がお

前の国にあるとは思えないんだけど？」

「ん？ ああ。確かに今のはアースの世界の文化だよ。俺、何度も世界を行き来してるからな。特にアースの文化はお気に入りなんだ。何せ、絵が動く世界のものだからな！」

「……そうか、よく考えたらオズにはアニメなんて文化はないのか」
「映像技術自体が無いんだよ。メディア自体も未発達でさ、だからああいう娯楽にあふれたアースに行ったときは感動したあ。さっきの日本の文字だって日本の漫画を読むために覚えたくらいだからな！」

「お前、異世界人じゃなくて二次元の人だったのか……」

予想以上に生き生きと、楽しそうに語るレンドを見て少しだけ納得した。今までの会話で話の通じる部分が多いとは思っていたが、どうりで詳しいはずだった。

「あんたらさあ、人の家で何騒いでるの？」

「え？」

突然声を掛けられて驚いて振り向くと、そこに背の高い若い男がいた。夏とはいえ肩や腹をむき出しにした露出の多い恰好で、耳にはピアスを付けている。表情はどことなくこちらを見下すようないやらしさを含んでおり、目つきもあまりいいとは言えない。さらには、どうやらガムが何かを噛んでいるらしく少スキついミントの臭いがする。

そんな中でも智宏は、目の前の人物が先ほどの話に出てきた息子の

エイガであることを何となく察した。「人の家」と言っているのだからこの家の住人で間違いないだろう。

「うちに何か用？ 親父に客か？ 見たとこ一人はガキみただけ
ど」

「……ええ、マクラさんとハマシマミシオさんに用がありません」

「あん……？ ミシオに？」

レンドがミシオの名前を出すと、エイガはあからさまに驚いたような表情を見せた。その反応を智宏がいぶかしんでいると、エイガはくちやくちやとガムを噛みながら智宏とレンドをじろじろと眺めまわし、最後に二人の顔に注目してからようやく納得したような顔をする。

「ふうん……。まあ、いいや。上がってけよ。少なくとも親父はいるはずだぜ」

そう言つとエイガは、どこか楽しそうに顔を歪めて見せた。

智宏達を通されたのは庭の見える和室だった。どうやら客間らしく、掛け軸や焼き物がそれとなく飾られて部屋を飾り、客を迎えるための家の顔の役を果たしている。

そんな風情のある部屋でしかし、レンドは一つの苦行を強いられていた。

「おいレンド、正座がそんなにきついか？ 僕だって慣れてるわけじゃないけどそんな苦悶するまでじゃないぞ？」

「……ああ。足がどうにかなりそうだ。異世界でいろんな文化を見てきたが、こついうところは全く理解できない。足にも悪いだろうこんな恰好」

「まあ、足腰に負担がかかるのは認めるが……」

もつともこの差は単純に智宏の肉体が強化されていることによる副産物かもしれない。世界を渡るにあたって濃密な【全属性】の魔力を大量に取り込んだ智宏の体は、気功術を使わなくても身体能力が高まっている。ならば普段以上に正座に耐えられている可能性も否めない。

そんなことを考えていると、ふすまの向こうから人の気配がした。それに気がついて間もなくふすまが開き、着物を着た老人が入ってくる。

「お待ちせして申し訳ない。ミシオの養父をやっております、砂堂真倉と申します」

「吉田智宏です」

「レンドブランド・リードです。本日は突然の訪問、誠に失礼いたしました」

先ほどまでの様子をおくびにも出さず、しつかりとした態度でレンドがそう挨拶する。内心では足のしびれに悲鳴を上げているだろうにそれを相手に少しも見せないのはさすがだった。

「いやいや、ミシオに関することでしたらいつ来ていただいても構いません。正直あの子のことでは我々にも至らぬところがありますから。……ところで、失礼ですが今日はどういったご用件で？」

そんなことを考えている間に、こちらに歩み寄ってきたマクラも目の前の座布団に座る。途中こちらを見たマクラの視線が、二人の耳元に注がれるのを感じたが、生まれつき長い耳を持つ智宏にとってはいつものことなので特に言及しなかった。それがなくともレンドのような西洋人はこのあたりでは珍しいだろう。

「はい。実はミシオさんと急に連絡が取れなくなりました、こちらに伺えば何か分かるかと思いい来たのですが……」

「そうでしたか。しかし……」

そう言うとマクラは急に表情を曇らせた。しかしすぐに意を決したように話します。

「実は私達もあの子がどこにいるかは分からないのです。もともとあの子は私たちと距離を置いているところがありましたし、特に息子の栄河とは折り合いが悪く、最近も十日ほど前から行方が分からないのです」

十日。その数字に智宏は少しだけ判断に困った。というのもミシオは異世界で少なくとも七日間の時間を過ごしているのだ。そのうち智宏が知っているのは二日、知りあう前にミシオがカウントしていたのは五日で計七日だ。

だが彼女が異世界に行った理由が誘拐であり、彼女が違法な実験を受けていた期間は本人もカウントできていない。誘拐されてから逃

げだすまで三日以上かかっていたのなら、最悪家に帰っていない十日間というのはミシオが誘拐され異世界にいた時間そのままという可能性もあり得る。

「私としましても心の痛む問題でして……。何とか良い関係に改善したいとは思っているのですが」

「息子さんと折り合いが悪いと言われましたが……」

「……はい。不肖の息子です。妻を早くに失い、それから私一人で面倒を見てきましたが、私も立場の有る身でしたし、どうしても甘やかしてしまつて……。あの通りの人間に育つてしまいました。お恥ずかしい限りです」

そう言つてマクラは小さくため息をついた。確かに智宏もあの息子にいい印象は持てなかった。あれならミシオと折り合いが悪いのも頷ける。

「……ミシオさんの行く先にどこか心あたりはありませんか？ 仲の良い知人などは？」

「申し訳ない……。それもわからんです。なにぶんあの子にはなるべく踏み込まぬように付き合っていましたから」

「そうですか……。わかりました。こちらでも引き続き探してみます。ついては彼女について何か分かったときに連絡したいのですが？」

「うちに電話があるのでその番号を教えましょう。何かあればそこにかけてください」

「ありがとうございます」

そう言ってレンドは名刺のような紙を取りだすと、それをマクラに手渡す。どうやらレンドも連絡先を教えるつもりらしい。

（なるほど……。流石にミシオ本人がいない状態で異世界の話はないか。……ん？）

二人が連絡先を交換する姿を見ながら、ふと、小さな引つ掛かりを覚えた。何か記憶の底で引っかかるような感覚だ。しかしそれが何かがわかる前にレンドは番号の交換を終え、会話を再開する。

「では私ももう一度ミシオさんの検索を試みます。こちらでも心あたりを当たってみましょう」

「お願いします。こちらでも知人を当たってみますので。……あと、勝手な話なのですが、もう二日たっても消息がつかめなかった場合警察にも連絡しようと思っています。事情が事情なので今まで控えておりましたが、流石に十二日も行方不明となると事件に巻き込まれた可能性がありますから」

「あ、えつと……」

マクラの言葉に思わず智宏は反応した。邪魔になるのもまずいのでこれまで会話に参加していなかったが、さすがにこれは言っておいた方がいいだろうと思ったからだ。

「ミシオは、その、今朝がたまでは元気であることを確認しています。ですから心配はいりません」

そういつた瞬間、目の前の老人の表情が驚きの表情にかたまる。眼を見開いて口をわずかに開けたその硬直は一瞬だったと思われるが、智宏にはその瞬間が酷く長く感じられた。

「あ、え……、どうされました？」

「え、ああ、いえ。……その、失礼ですがお二人はミシオとはどういった関係で？」

「へ？ ……あ」

言われて、智宏は初めて自分の言ったセリフに潜むいかがわしさを自覚する。それによって自身の顔が熱を持つのを自覚し、慌てて智宏はその誤解を解きにかかった。

「ああ、いえつ。彼女とは以前から知り合いだったんですけど、最近急に姿を見なくなって、それで心配してたんですけど、今朝道を歩いていて遠目に彼女がいるのを見かけて、でも目を離れたすきにどこかへ……」

慌てて訂正しようとし、だからと言って異世界について話す勇気もなかったため、即興でミシオとの交友関係を捏造する。深く突っ込まれたらたちまちぼろが出そうな説明だったが、マクラはそれで納得したらしくすぐに落ち着きを取り戻した。

「………そうですか。ああ、無事を確認しているのですかそれは良かった」

智宏の証言に、マクラは心底安心したようで、今度はしきりに「

よかった、よかった」と繰り返す。どうやら彼自身かなり心配していたらしい。

レンドは、そんなマクラが落ち着くのを待つと、話を切り上げるべくこう切り出した

「では、私どもはこれで失礼します。貴重な時間をありがとうございました」

「いえいえ、こちらもミシオの消息がわかって安心しました。異国の方とお話するのも珍しいです……。ああ、玄関までお送りしましょう。なにぶん広い家ですので」

そう言うとマクラは優しげな笑顔を浮かべて立ち上がった。レンドもそれに笑顔で何かを答えながら立ち上がるうとしてしかし、すぐに硬直したように動きを止める。

「ええ……と、あの、お構いなく」

顔から脂汗を流しながらレンドはそういう。それに対してマクラは不思議そうな顔をしたが、智宏はすぐに原因を察した。

「すぐには立てませんので……」

途端にレンドは前のめりに倒れ、負けを認めざるを得なかったスポーツ選手のように地面に突っ伏した。

4：彼女の逃走

ミシオの自宅への訪問を終え、智宏とレンドはとりあえず暦波町に帰ることにした。素朴な家が立ち並ぶ道を、海と浜辺で作業をする漁師たち眺めながら歩く。ちなみにこの村の道路は日本のそれと違い舗装されていない。町の方では舗装された道路の方が多かったが、このような小さな村ではその必要性もないのかもしれない。西周りのコースから北の山を迂回する道にさしかかるあたりになってレンドが口を開いた。

「とりあえず父親の方には問題なさそうだな」

「うん。实际いい人だったと思うよ？ 息子のエイガには問題があるようだったけど、でも……」

「でも、どうしたんだ？」

「なんか引つかかっている感じがするんだよ。何なのかがよくわからないんだけど……」

「引つかかっていることねえ……？ なあ、だったら使ってみたらどうだ？」

「何をだよ？」

「【スマートプレイン集積演算】をだよ。頭が良くなるって言うお前の【スマートプレイン刻印】。そ
ちの方が早いだろ？ こついつ話をするのはね」

「……まあ、そうか」

言われ、エデンで発現した自分の【刻印】のことを考える。脳の機能が強化され、記憶力、というよりも思い出す力が上がるこの力を使えば、確かにこういった考察は有利だ。額に刻印が浮かび上がってしまうが、幸いここには人氣が無い。

智宏がこの【刻印】という異能を今まで使わなかったのは別に忘れていたわけではない。便利で夢のような能力ではあるし、特にリスクもないのだが、それゆえ何となく気後れしてしまうのだ。まるで自分がズルをしているような、微妙な気分になってしまうというのが正確なところだろう。

(まあ、でもそうも言ってられないか)

自分のなかの葛藤を横に置き、深呼吸をして覚悟を決めると、額に魔力を流してそれを発動させる。

(スマートプレイン【集積演算】!!)

途端、時間の流れが遅くなったように錯覚が襲ってくる。思考が何倍にも加速しているため、周りの時間が遅く感じるのだ。放っておくとくだらないことに思考を費やしそうだったので、智宏はすぐに記憶をさらい始めた。ミシオと出会ってからを中心に、違和感の正体を探して。

「……ちょっと待ってる。思い出すだけならともかく、さっきの会話とのつながりを探さなきゃいけないから……」

そう言っただけで智宏は歩きながら思い出す作業に集中する。とりあえず検索対象はミシオと出会ってから今までの二日間だ。それ以前は可能性として低いためカットし、二日間の記憶を脳内でリプレイす

る。

すると思いのほか早くヒットした。

「……………これか？」

「早いな。……………って言っても、もう十分は経ってるか。で？ なんだった？」

「電話だよ」

「……………電話？」

不思議そうな顔をするレンドに説明すべく、頭の中で話をまとめる。

「さっき話してた時、マクラさんは『うちに電話がある』って言うてたろ？」

「ああ、実際番号まで教えてもらったな」

「でもミシオは最初に二人で話したとき、『電話自体そう触れる機会があるものじゃない』って言ったんだ」

「……………それって一般には普及してないって意味で言ったんじゃないか？ 実際、この世界じゃ電話なんてまだまだ有る家に借りに行つて使うような普及率だぞ？」

「まあ、普通に考えたならそうなんだけど、でもあのときの口調はそんな感じじゃなかった。まるで、自分の家に電話があるのを知らないような……………」

「……気のせいじゃないのか？　いくら家に寄りつかないとは言え、もしそうだとしたらこの電話はかなり最近引いたことになるぞ？　まあ、それはそれでおかしいってわけじゃないけど」

「あるいはミシオがそれだけ家をあけてるって可能性もあるな」

「でもあの爺さん、家をあけて十日って言ってなかったか？」

「十日の内に電話を引いたと考えるべきか、あるいは……」

そこまで考え、しかし智宏はそこで溜息と共に思考を打ち切った。確固たる根拠もなくそこまで考えていたらきりが無い。もっと決定的な情報がなければこれ以上はただの推測だ。

「おっと。トモヒロ、街が見えてきたからそろそろ刻印を解除しろ」

「ん？　ああ。そうだな」

見れば、すでに目の前の光景は森から建物にシフトしつつある。どうやら考え事をしている間に町についてしまったらしい。

人に見られてもよくないので、すぐに智宏は額への魔力供給を止め、刻印を解除する。つい昨日手に入れたとは思えないほどスムーズな操作だ。ほとんど体の一部を動かすように操ることができる。

(……いや、実際体の一部なんだっけ)

歩きながら周りを見渡すと、ちらほらと畑が見えた後、すぐに住宅が見え、それすらもすぐにビル街に変わった。ビルと言っても高いものでも五階建てくらいの規模だ。建物の並び方もかなり雑多で、

高さもバラバラなところが多い。ビルとビルの間路地も狭く、このあたりも日本とあまり変わらない。無計画で無秩序な広がりを見せる街並みだった。

エデンでミシオと話をしたとき、智宏はこの世界の文明レベルを五十年ほど前のものと判断した。だが、目の前の街並みを見てみると一概にそうとも言えないらしい。確かにアースに比べれば一様に文明レベルは遅れているが、その遅れ方にもバラつきがあるように思える。

(物によつては小さい頃にはまだあつたような品まであるな。同じ科学文明でも発展のし方が違つてことか?)

智宏がそんなふうに見ると異世界の文明について漠然と考察していると、唐突に、本当に唐突に、目の前の路地からミ(・)(シ)(・)(オ)(・)が(・)(・)姿を現した。

「え?」

「ん?」

「は?」

それぞれがそれぞれ疑問の声を上げて沈黙する。当たり前だ。少なくとも智宏はこのような状況は予想していなかった。

見れば、ミシオはこの世界に来たときとは違い、ちゃんとこの世界の服を着ていた。この世界の学校の物らしきセーラー服。それに若干合っていないリュックサックを背負い、靴はスニーカーを履いている。どう見ても今まで学校に行っていましたといった出で立ちだ。

(……ええええええ……、そんな落ちい!?)

智宏の心のなかに激しい動揺が広がる。当然だ。行方不明になって血眼になって探していた相手が普通に学校に行っていたのだからそうしていると、さすがのレンドも沈黙に耐えられなくなったらしい。戸惑ったように口を開き、「えっと」などと言って話を切り出そうとした。

だがそれに対するミシオの反応は劇的だった。声に反応するように突然踵を返すと、今出てきたばかりの路地に飛び込んだのだ。

『逃げた!?!』

二人揃って驚きの叫びをあげ、慌てて路地をのぞきこむ。すると既にミシオはかなりの距離を走りぬけており、みるみるその姿が小さくなっていく。

「ってミシオちゃん足速あつ!!!」

「言ってる場合か! 追いかけるぞ!!」

智宏は思わずそう言って路地に飛び込む。今まで必死で探しておいて、ここで逃がすなどという選択肢はあり得なかった。

だが、

(……追いつけない!! なんだあの速さ!?)

智宏の体は世界を超えたことで強化されている。それによって今の智宏の足は相当な速さを誇っているはずなのだ。

だが追いつけない。ミシオも相当足が速いうえ、どうやら路地裏の走り方を心得ているようなのだ。

途中に積んである荷物の山を軽々と避け、とび越え、すり抜ける。智宏達が少しでもスピードを緩めるようなところをそのままの速度で走りぬける。ミシオの走り方には速さ以上に技術と経験によるものが垣間見えた。

(……単純に速いだけじゃない!! まるで慣れてるみたいに走ってる!!)

三人が順番に路地裏から飛び出す。どうやら両側の建物の反対側に出たらしい。時間が早いせいかまだ人はまばらだが、どうやらこの場所は商店街のようだ。店の前に立っていた店主たちが驚いたようにこちらを見つめている。

だが、ミシオはそれには目もくれない。一直線に対岸の路地裏を目指し、そこに飛び込む。

「待ってくれよミシオちゃん!! なんで逃げるんだよお!!」

背後でレンドが叫ぶが、ミシオに伝える様子はない。それどころかむしろその走りをさらに加速させたようだった。どうやら伝える気はないらしい。

「ハア……、ハア……、なんだあれ、めちゃくちゃだ!!」

「くそ! このままじゃ見失う!!」

既にバテ始めているレンドを見て智宏は危機感を覚える。まっとうに追いかけていたのでは追いつけないことはだれの目にも明らかだった。

(幸い、路地裏なら人気もない。……ならば!)

走りながら決意を固め、智宏も路地裏に飛び込む。そして飛び込むと同時に額に魔力を流した。

(スマートブレイク 【集積演算】！！)

再び思考が加速し、それと共に智宏の走り方が劇的に変わった。ミシオの走り方を観察し、手足の効率のいい動かし方を考える。そうすることで走り方から無駄を取り除き、途中の障害物を最適のコースで回避して疾走する。

(さらに 気功術発動！！)

意思のもと、体内の魔力を操作すると、地面を蹴る足にさらなる力が加わった。第一世界エデンでは一般的な肉体強化の技術。異世界で学んだ魔力を操る感覚を完全な形で思い出し、手足に魔力を流して強化する。

(行っけえ！！)

技術と経験を思考で補い、高まった速度を最大限に使ってとにかく走る。前を走るミシオがだんだんと近づいてくるのを感じながら、さらに速く走る方法を考える。

(よし、これなら ！？)

追いつける確信を得ようとしたちょうどそのとき、前を走るミシオがスカートのポケットから何かを取り出した。

(……手袋？)

走りながら手にはめたそれを見て智宏はそう判断した。手先の器用さを失わない、指先のないタイプの手袋。それこそが、ミシオが自身の手にはめたものだった。と、突然ミシオが角を曲がった。

(っ!!! しまった!)

慌てて智宏もその角に向かって走る。これで巻かれては目も当てられない。身を隠される前にミシオの姿をとらえ直さなければならぬ。

しかしそう思いながら曲がった角の向こうにはしかし、ミシオおるか猫の子一匹いなかった。

「…………え？」

しかもただ誰もいないのではない。行く手にビルが立ちほだかり、行き止まりであるにもかかわらず少女の姿だけが忽然と消えているのだ。

「ハア…………、ヒイ…………、どうしたトモヒロ、追いついたのか、って、あれ？」

遅れてやってきたレンドが驚愕の声を上げる。見間違いかとも思ったが、智宏の記憶は間違いなくこの場所に入ったのを覚えている。

(なんだ? 一体どうやって…………、ん?)

だが、そのとき、何かのものがかすかに智宏の耳に入る。それは靴で地面をけるようなかすかな音だ。場所は、

(上?)

疑問に思いながら上を見上げ、そして見た。
はるか上、五階建てのビルの屋上の鉄柵を、スカートを翻しながら乗り越えるミシオの姿を。

「はああああああああ!?!」

「あれが噂のスパッツ!」

「驚くところはそこじゃねえええ!」

反射的に左足でレンドの膝に蹴りを叩き込み、ついでに流れるような動作で軸足を入れ替えて体制の崩れたレンドの背中に右足を叩き込み、さらに行きかけの駄賃で体を回転させ、左足を倒れかけたレンドの頭に叩きこむ。

鈍い音と共に隣のアホが地面に沈んだ。

「よし! 落ち着いた!」

「なんでじゃあっ!」

背後でレンドが抗議の声を上げる。

だが智宏はそれをあっさり無視して、壁に、もっと言えば壁面に取り付けられたパイプに組みついた。

「っておいトモヒロ!? どうするつもりだ?」

「決まってるんだろ! 追いかけるんだよ! あいつがやったみたい

にこの壁よじ登ってな!」

ことがここにいたり、ようやく智宏はそれが少女があそこにいた、そして智宏達の目を盗んで消えることができた理由だろうと判断した。ビルの壁というのは換気口や雨どいのパイプ、窓枠、さらには窓のひさしなどの足場があちこちにある。それらは人が昇るために作られたわけではないが、それでも昇って昇れないことはない。

(にしたってこんなこと普通はやらないぞ! まったくどういう神経してるんだ!!)

そう考えながら智宏は瞬く間に三階の窓のひさしによじ登る。【スマートブレイク集積演算】で算出したミシオも通ったと思われるコースはまだ先があつたが、これ以上はそこを通る必要が無い。

(術式展開

チェーンロック【多目的鎖】!!)

ここからなら届くだろうことを確信し、智宏は魔術を発動させる。するとすぐさま掌に展開した魔方陣から鎖が放出され、先についた分銅が屋上の鉄柵に絡みつく。

「よし」

「待てトモヒロ。こいつを持ってけ!」

声に智宏が振り向くと、目の前に何か手のひらに収まりそうなものが飛んできた。

驚いてキャッチするとそれは手の中で小さく輝く。魔石による通信機だった。

「そいつから声が聞こえたら真ん中の魔石に魔力を流せ！ そうすればそつちからの声がこつちにも届く！ 後で連絡するからとりあえず今は受け方だけ覚えとけ！」

「わかった！！」

返事とともに通信機をポケットにおさめると、智宏は鎖を巻きとって一気に壁面を上り始めた。

智宏とミシオの追走劇が舞台を屋上に移したちょうどそのころ、表の道ではその様子を知って笑みを浮かべる人物がいた。

「……ハハ、アハハハハハ！」

その笑みは純粋な喜びから来るものだ。にもかかわらず、その表情は邪悪と言っていい形に歪んでいる。

「ハアツハツハツハア、ヒ、ヒッヒッヒッヒ」

周りにいる通行人がこちらを見ているのが見える（……）が、それすらも気にせず男は笑い続ける。

「ヒヒ、ハア、ハハ！」

ひとしきり笑うと、男はポケットからガムを取り出して噛みしめる。ニヤつく顔を隠そうともせず、男は頭の中で一つの計画を練り

だした。

「親父は……、まあ、なんとなんとかなるとして、問題はやっぱりあの二人か。……なら、あいつ等の力でも借りるかな」

これからすることを想像しながらガムをじつくりと噛みしめる。脳裏にこういうことに向いていそうな仲間を思い浮かべ、その中からすぐに連絡の取れる人間を探し出す。

「ハトリの奴ならすぐに連絡が付くかな。はっ、まったく。電話が（・）携帯で（・）（き）（る）（・）世界がうらやましいな」

ガムを噛みながら面倒臭そうにそう言うと、その男、エイガは街を歩きだした。

5：追跡

「どつという神経してんだあいつは……！」

ミシオを追って屋上に上ってすぐ、智宏は驚愕とともにその言葉をはきだした。

屋上に上ったとき、智宏はほぼ間違いなく追い詰めたと思った。

だが、ミシオはアクション映画顔負けの鮮やかさで、ビルの屋上から隣のビルの屋上にダイブしたのだ。

「そこまでするか普通!？」

苦いセリフを吐きだしながらそれでもミシオを追って智宏も跳ぶ。気功術によって強化された体は、地上十メートルはあるビルの隙間を軽々と飛び越えた。

「おつかねえ!!」

だが、それでも恐怖が無いわけではない。当たり前だ。下を見ればビルとビルの隙間から地面が覗き、そしてまかり間違っただけに落ちようものなら怪我で済むかもわからないのだ。つくづく躊躇いなく跳べてしまったミシオの神経が信じられなかった。

だが、ミシオの逃走はその程度では止まらない。

ビルからビルへ飛び移った智宏を見ることもなく、彼女は屋上のはしの手すりに飛び乗ると、そこを足場に次のビルへと飛び移った。着地してすぐ柵をつかみ、バランスをとると、今度はビルの淵沿いに右のビルに向かって疾走し、それを助走にして三度飛び移って見せる。そうして飛び移った先でさらに柵をつかむと、今度は無駄のない動きでそれを乗り越えた。

その足取りには迷いがまるで見られない。選ぶコースも無理のない確実に飛び越えられる安全なルートばかりだ。

恐らく他の人間ではこうはいかないだろう。運動能力的にはある程度の身軽さがあれば可能かもしれないが、ビルを飛び移る度胸と、ルートを選ぶ判断からは明らかに普通なら持っているはずのない経験を感じる。

(明らかにこのルートを使い慣れている……。でも何でだ?)

人が通れないような道を的確に選び、恐怖を無視して走りぬげる。まるで逃げ(・)(る)(・)(こ)(・)(と)(・)(に)(・)(慣れ)(・)(て)(・)(い)(・)(る)(・)(よ)(・)(う)(・)(な)(・)(動き)(・)(だ)だ。彼女が事前に手袋をはめたこともその予想に拍車をかける。事前にそんなものまで準備しているなどただ事ではない。

(……絶対おかしい。これじゃあ、ますます逃がすわけにはいかないじゃないか!!)

即座に決断を下し、ミシオの通ったルートから外れる。彼女がいる斜め向かいビルをまっすぐに目指し、柵を足場に空中に飛び出した。飛び越えるには距離がありすぎる距離。ミシオでさえ隣のビルを経由する形で飛び移ったそれへの道を、智宏は異世界の技術でカバーする。

(術式展開

チェインロック
【多目的鎖】!!)

智宏の手の先で魔方陣が展開され、そこから一本の鎖が飛び出す。鎖は目指すビルの柵に絡みつく、出てきた魔法陣に吸い込まれる形で智宏をその屋上に引き込んだ。ビルの高さが一段低くなっているのも幸いし、ただの身体能力だけで飛んでいるミシオには跳べな

い距離を、魔術と気功術の併用で跳び越える。その結果として二人の距離は短縮され、さらに、

「追い詰めた!!」

「っ!!」

ミシオの逃げ場をうまく封殺することに成功した。

ここはビルの屋上だ。ここから逃げるには他のビルの屋上に逃げるか、建物内部に逃げ込むしかない。だが、ビルはミシオに対峙する智宏から見て左右にあり、ミシオがどちらかのビルに飛び移ろうと思えば【多目的鎖^{チェインロック}】で確実に捕まえられる。それはビルへの出入り口でも同じで、智宏の背後などもつてのほかだ。残るルートはビルのないミシオの背後、先ほどの商店街しかないが、そこには飛び移れるような場所はない。

普通なら観念するべき状況。

だが、ここでもミシオは智宏の上に行く。

ミシオは最後のルート、商店街方向の空中に向かって飛び出したのだ。

「んなあ!?!」

ミシオの行った行為の危険性をすぐさま認識し、智宏がビルの柵を飛び越える。するとその向こうでミシオが、街灯のポールを空中で捕らえてそれに巻きつくようにしがみつき、その勢いでポールを中心に回転しながら滑り降りていくのが見えた。

「サーカスでやれえええええ!!」

あまりに人間離れした動きに思わず突っ込む。

魔術や気功術、さらには刻印という常識外の力を持つ智宏から見てもそれは非常識な光景だった。そもそもミシオは、まだ身体能力を上昇させるあの黒い霧すら使っていないのだ。

「無茶苦茶だ！ くそ！」

ミシオを見失うのを避けるためにビルの上を移動し、対岸に手ごるな路地が無いせいかそのまま商店街を走るミシオと並走するように移動する。ミシオが下りてくるのを見つけた何人かの一般人に見つかったが、もはや気にしている余裕もない。子供に指をさされても気にしない。

ようやく【多目的鎖】チェインロックを用いて路地に降りたのは、ミシオが対岸の路地に逃げ込むのと同様だった。降りた場所のおかげで人に魔術を見られることこそなかったが、さっきまでよりミシオとの距離が空いてしまっている。

「逃がすか！！」

間髪置かずに走りだし、ミシオの入った路地に飛び込む。

だが、路地に入ってミシオを発見し、途中にあったビールの空箱の山をよけてその先に出ようとしたとき、急に足を何かにとられた。

「なあ！？」

驚いても状況は変わらなかった。

バランスを崩した智宏の体は地面に投げ出され、それに追い打ちをかけるように崩れたビールの空き箱の山が殺到した。

「ハア……、ハア……、振り切った、かな……」

背後でビールの箱が派手に崩れる音を聞いた後も走り続けた。ミシオは、迫ってくる気配が完全に消えたことでようやく足を止めた。路地の壁にもたれて上がっていた息を整える。

「ハア……、ハア……、危なかった。これからは智宏達にも、気をつけないと」

驚くべき運動能力で智宏を翻弄していたミシオだったが、本人にしてみればかなりギリギリの状況だった。

まさか自分の独壇場とも言える場所であそこまで追いつめられるとは思わなかったのだ。そうでなければあの高さから降りるのになんか八かの手に出たりはしない。異世界で手にした黒い霧の力を使うという手もあったが、魔力である霧を使うと振り切った後も智宏に位置がバレてしまう。それを考えれば今行ったのは間違いなく全力の逃走だった。

(……とにかく、いったん家に戻った方がいいかも。レンドもこの近くを探してるかもしれないし、今見つかったら……)

心の中で抱いた思いを無理やり押し込める。彼らの性格だ、そうなることは分かり切っている。そして自分がそうなったとき耐えられないかもしれないことも。

「……行こう」

そう言葉にして、ミシオは路地から出る。だが目の前に知った顔

を見つけてしまった。

「……シオちゃん」

「……カイル」

目の前にいたのは村に住む青年だ。年はミシオの五つ上。漁師という職業柄
肌が日に焼け、体も筋肉質で大きい。

「帰ってきたのか……」

「……うん」

カイルとミシオは小さい頃からよく遊んでいた中だ。正確には同年代の子供が村にいなかったため、年上のカイルたちのグループに混ぜてもらっていたと言ったほうがいい。現にそのグループの三人は、三人とも年上で、だからこそ兄弟のいないミシオにとって三人は年上の兄弟のような存在だった。

その中でも特にカイルはよく自分の面倒を見てくれていた。村のなかでも数人しかいない能力者同士だったというのも大きいかもしれない。

だがそれも三年前までの話だ。

「なんで……」

「……？」

「なんで帰って来たんだよ……」

「……………!!」

カイルのそのセリフに、ミシオは思わず息をのむ。聞きよつによつてはあまりにもひどいセリフ。そして、彼の本意を知ってなお、聞きたくはなかったセリフだ。

「……………、ごめん、もう行く」

「待てよ!!」

言葉から逃れるべく立ち去ろうとしたミシオの肩をカイルの手が掴む。だが、その力はためらいを表すように弱く、口調も半ば悲鳴のようだった。

「……………なんで帰って来たんだよ」

「……………あそこで、やらなきゃならないから」

「なんで！ まだそんなことを」

「あと、三十五日なの」

できるだけカイルの言葉を見ないように、ミシオは己の言葉を紡ぐ。そうしなければ今の自分を保てる気がしなかった。あと三十五日。たったそれだけの日数が、今のミシオには途方もなく長く感じられる。

そして、それはカイルも分かっているのだろう。

「今までは何とかやってこれたかもしれないけど、これから先もそうだと思うのか？」

「何とか、する」

「あいつ等がこれから先、今までと同じ程度ですますとは思えない。下手したらお前　！」

「　　ミナセは元気？」

カイルの言葉を遮るように、ミシオは三人のうち一人の名を口にした。思っていたとおり、カイルの体が凍りつく。

ミナセは三人のうち、唯一の女性だ。活発で気立てがよく、そしてカイルと仲が良かった。ミシオは小さい頃からこの二人の仲の良さは別格だと思っていたし、その考えに違わず半年前、二人は結婚した。

「カイトは家を出て都会に行くんだよね？」

ごり押しのように最後の一人、彼の弟の名前を出す。その効果はきめんだ。カイルそれだけで何も言えなくなり、肩に置いていた手を力なくおろしてしまった。

「あんまり私と、話さない方がいいよ」

そう言つとミシオはカイルが何かを言う前にその場を逃げ出した。どこに『目』があるかわからない以上長居はできない。

「……いじめ」

歩きながらミシオは酷い自己嫌悪を感じる。これではほとんど脅しのようなものだ。カイルの言葉に耐えられず、思わず嫌いな人間

が使う方法を使ってしまった。

(あと、三十五日。それだけ乗り切れれば)

そう考えながらも、ミシオは自分が酷い誘惑に駆られていることを自覚する。異世界などに行き、その世界の人々に出会わなければ、こんな誘惑は生じなかつただろう。

そこでミシオはその原因の一端、先ほどビール箱に襲わせた少年のことを思い出した。彼らがこれで諦めるとは思えない。もし彼らに自分の事情を知られてしまったら、もうこの誘惑にあらがうことはできないかもしれない。

「……あと、三十五日」

それでも少女は無理やり自分を鼓舞し、家への道を急いだ。

「……やられた」

ミシオにまかれ、自分が転んだ原因を探った智宏は、崩れたビール箱の中にそれを見つけてそう呟いた。

見つけたのは壁を走るパイプと、箱の一つ、そしてそれらをつなぐ透明な糸。

「……これは、釣り糸か？」

智宏の父親は趣味で釣りによく行っている。昔は家族で良くそれ

につきあったのだが、目の前のそれはそのとき使っていた釣り糸によく似ていた。

「……なるほど、ここは海の近くだし、魚寝村はもろに漁村だ。釣り糸くらい腐るほどあるな」

どうやら智宏が引っかかったのはかなり単純なトラップだったらしい。パイプと箱に糸を取り付け、それで足を引っかける。しかも引っかかると積んである箱の山の、土台の役割を果たしている箱が引っ張られるため、山が崩れて引っかかった相手に追撃まで加える。箱の中が空だったから良かったが、そうでなければかなり危険なトラップだ。

「……でもこれ、よくあんな短時間で仕掛けられたな」

こんなものを仕掛けられたとしたら、智宏がミシオから目を離れたビルを降りる瞬間しかない。そんな短時間で重りに糸を結び、それをトラップとして仕掛けるなど不可能だ。

となるとこの釣り糸と重りは元からミシオが結んだ状態でもっていたとみていいだろう。そもそも長さが半端だし、この場で仕掛けるだけなら糸だけでいい。仕掛けるだけならあの短時間でもなんとかできる。

だが、それはつまりこの釣り糸と重りが、最初からトラップとして用意されていたものということになるのだ。

「……だけどそうになると、またおかしな所が増えるな」

理由不明の逃走、壁を登り、ビルからビルに飛び移る身軽さと技術、トラップの種を所持し、それを仕掛ける素早さ、そしてないよ、それらに慣れているような様子。

エデンにいたときからずれた少女だとは思っていたが、この世界で見る彼女は明らかに異常だった。世界観に合っていない、と言ってもいいかもしれない。

『……ト……ヒロ、……モヒロ、トモヒロちゃん聞いてるの！ 返事をしないと怒りますよ！』

「ん？」

分析を終えて再び追跡すべきかを思索していると、ポケットの中から不気味な声が聞こえた。取り出して見るとレンドにもらった通信機から声が聞こえる。気味の悪い裏声の女喋りでなければそれはレンドの声だった。

無視したい気持ちを抑えて、指示された場所に魔力を流し込む。

『ああ、トモヒロちゃん？ もう、やっと出たのね！ ワタシ心配で心配で』

「現在この電話は持ち主が出る気のない状態にあります。耳を貫く爆発音の後に自分の鼓膜が無事であることを確認して、速やかに電話をお切りください」

『待てええええい！！』

すぐさま女喋りをやめて叫ぶレンドに、智宏は舌打ちして展開していた【銃炎弾^{ファイアバレット}】の魔方陣をかき消した。

『っておいトモヒロ！ 一応こっちは心配して連絡してんのにその対応はあんまりじゃないか？』

「嘘つけ、そうだったらもつとまともな切り出し方をするわ！
…で？ 何の用だ？」

「いや、そろそろ捕まえたかと思って」

「いや、逃げられた」

「はあっ!？」

驚きの声を上げるレンドに今までの経緯をざつと説明する。すべてを話し終えた後でレンドがあげた声は驚きとあきれにあふれる声だった。

「……マジかよ。っていうかトモヒロ？ お前魔術の使用とか人に見られてないだろうな？ 変な形で異世界の存在を広められても困るんだけど？」

「ああ、それは大丈夫だと思う。魔術は全部人気のないところで使ったし、刻印は見られたかもしれないけど、あの距離で理解できるとも思えん。ミシオもあの黒い霧は使ってなかったしな」

「ならいいけど……」

それにこの世界には能力の存在がある。事と次第によっては見ていた人間が勝手に何かの能力と勘違いしてくれる可能性もあるのだ。流石に限度はあるだろうが、安心材料ではある。

「で？ トモヒロはこれからどうするんだ？ とりあえずミシオちゃんはこの前の奴らに攫われてた訳じゃないって分かったし、いったん戻るか？」

「いや、そのことなんだけど、僕はそのままミシオを探してみようと思うんだ。ダメかな？」

「いや、それはいいけど、あてか何かあるのか？」

「無いな」

「無いのかよ！」

「ある訳ないだろう？ 僕をどこの世界の住人だと思ってんだ」

レンドと会話しながら、智宏はとりあえず崩れたビール箱を片手で積み直す。情動的に流石にこのまま放置していくわけにもいかなかった。

「おい、トモヒロ？ 当然のようにあてがないとか言ってるけど、じゃあどうやって探す気なんだよ？ 言っとくけどこの街結構でかいからあてもなく探しても無駄だと思うぞ？」

「あては無いけど手掛かりはあるんだよ」

「なんだよ手掛かりって？」

「一つは制服。さっきのミシオ、制服姿だっただろ？ ならあの制服を使ってる学校を探せばとりあえず学校は特定できる」

「なるほど。でもそれなら俺の方でもう手配してるぜ？」

「そりゃ丁度いい。これに関してはそっちに頼もうと思ってたから

な

「どうやら智宏と別れた後にそのあたりの手配を済ませたらしい。普段の言動に反してそういうところはさすがだった。」

「じゃあ僕はもう一つの方の手がかりを追ってみるかな」

「もう一つ？」

「ああ。なあレンド、ビルの壁やら屋上やら、普通通り道にならないところが通り道になって、そこになにも痕跡が残らないと思うか？」

「っていつか残るのか？」

「ああ。壁なんかは如実だな。なにしろ、パイプや看板なんて人間の体重が乗ることを想定して設置されてないから、ネジがゆるんだり、歪んだりしてる」

「実際ここまで来る間にそれらしい痕跡はたくさんあった。壁の他にも頻繁に掴まれる柵のペンキがはげていたり、隅にたまった砂の上に足跡が残っていたりしたのだ。そしてそんなところに移動の痕跡を残す人間が何人もいるとは思えない。」

「特に壁の痕跡は重要だな。壁に痕跡が残ってるってことはそこから上り下りしてるってことだ。もしそうなら」

「その近くにミシオちゃんがよく立ち寄っている？」

「そういうことだ」

何しろ、そんな道を道として使う人間はミシオしかないのだ。痕跡の主は必然的にミシオと言うことになる。

「でもよ。そんなものを町中探して見つけるくらいなら素直に聞きこみをした方が早くないか？ 町中探してそんなわずかな痕跡を見つけるなんてそれこそ効率的じゃないぜ？」

「いや、ミシオは滅茶苦茶な道を選んではように見えてかなり堅実に道を選んでは節があった。逆に言えばミシオが通ったり、とび越えたりできるならそこはミシオが使う道になってる可能性がある。なら探す範囲も見つけた道の延長だ。まあ、聞きこみの方が堅実なのは賛成だけど、それはそっちがやった方が効率いいだろう」

そう言って智宏はさっきまで走っていたビルの屋上を見る。先ほど走っているときに見つけた手がかりがどこまで続いているかは分からないが、このまま引き下がる気にはなれなかった。

「わかった。聞きこみと学校の方はこっちで何とかしよう。取り合えあえず通信機の使い方だけ教えとくから、何かあったら連絡しろ」

「よろしく頼むよ」

話しながら智宏はミシオが逃げたとみられる方角を見つめる。まだ彼女との追いかっこは始まったばかりだ。

6：秘密の森（前書き）

今回はちょっと長めです。

ご意見ご感想お待ちします。

6：秘密の森

時刻はすでに昼と呼ぶような時間から夕方と言える時間に変わりつつある。だがこの季節、まだまだ日が落ちるのは遅い。空は青いままで、その色に赤みが混じるにはまだまだまだ時間がかかる。この時間を夕方と呼ぶにはあと一カ月は待つ必要があるだろう。

「もつとも、親父はこの夏が永遠に続くことを祈ってそうだけども……」

そんなことを呟いて、栄河は味のなくなったガムを地面に吐き捨てた。

現在栄河がいる所は人気のないビルの中だ。元々は土木関係の会社の事務所だったらしいが、今では会社も潰れ、こうして栄河たちのたまり場になっている。表ざたにできない話をするにはうつつけのため、エイガは良くそういった知り合いとの待ち合わせに利用するのだ。

既に待ち始めて大分時間が経過している。先ほど人づてに放った呼び出しのメッセージが届いていればそろそろ待ち人が来るはずだ。

そう考えたとき、ビルの入口から靴音が聞こえてくる。

現れたのは派手な格好の女だった。髪の色から肌の色、爪の色まで全身の色を金、黒、青に変え、その上からこれでもかと言うほど派手なメイクを施した女は、周りを見回した後こちらを見つけて歩み寄ってきた。

「よう、栄河あ！ 久しぶりじゃん、元気してたあ？」

「この通りピンピンしてんよ。今日は頼むぜ、葉鳥^{はとじ}」

呼び出した女がようやく来たことで栄河も気分を切り替えて葉鳥と呼ばれた女に対応する。できることならこの女の機嫌を損ねたくない。彼女には大事な仕事があるし、何より彼女を怒らせると少々面倒なのだ。

「頼むってさあ、アタシ呼び出されただけで何やるかさっぱりなんだけど？ 用事は何？ まさか何時かみたいに十二の相手しろってんじゃないでしょうね？」

「だったらもつと遅い時間に呼び出すよ、頼みたいのはいつもの仕事だ」

「なに？ もしかして例の娘？」

「まさか、頼みたいのは別のやつだよ」

「報酬は？」

「これだけ」

そう言つて栄河は両手を広げて葉鳥に示す。するとそれを見た葉鳥は急激に機嫌を良くした。葉鳥はいつも金払いのいい人間の味方だ。

「うんうん！ やっぱ、金持ちのドラ息子は分かってるねえ！ その額ならアタシ何でもしちゃうよお！」

「じゃあまずドラ息子って呼ぶのをやめろ。それよりお前、その格好で大丈夫なのか？」

そう言つて栄河は女の服装を指摘する。栄河も人のことを言えた格好ではないが、女の格好はさらに露出が高い。なにしろ上はへそ出しシャツで下はホットパンツ、おまけに靴はサンダルなのだ。唯一これからを見据えたい点と言えば、そんな恰好をしながら肩から提げているのが巨大なボストンバックだという点だ。裸同然とまでは言えないが、これから頼むことを考えれば、あまりいい恰好とは言えない。

「だあいじょうぶだつて。あんたアタシの能力知つてんだろ？　ここに来る間もちよくちよくかき集めては来てるし、バックのなかにもいろいろ入つてるよ」

「そうかい。じゃあせいぜい『寸鉄の女王』の腕前に期待するとしてよう」

「まっかせなさい。んで？　相手はどこ？　これから行くんでしょ？」

「ああ、待つた。実は別件でもう一人呼んでんだ。悪いがそいつが来るまで待つてくれ」

「んー？　何？　あんた他にもあたしみたいな知り合いがいたの？」

「ああ、最近知り合つたんだ」

そう言っていると、ビルの入口にもう一人の人間の気配が現れた。どうやらこちらもちょうど来たらしい。手元の時計を見ると指定時間を秒刻みに正確に守っている。

現れたのは帽子を目深にかぶつた大柄な男だった。無に等しい表情を浮かべ、靴音だけを響かせてこちらに歩いてくる。年のころは

二人よりもさらに一回り上に見える。

「……栄河あ、こいつ？」

「ああ、そつだ」

栄河の返事に葉鳥はどことなく不機嫌な様子を見せる。どうやら葉鳥もこの男の雰囲気からその危険性を察しているらしい。

「……まあ、いいけど。あんた名前は？」

聞かれて男は初めてその場で立ち止まった。どことなく人間味のないその動きに葉鳥が不機嫌に鼻を鳴らすと、それに応じるように男も無機物のような声で答えた。

「……『渦』」

こうして栄河は準備を整えた。長年抱き続けた願望を成就させるために。

見上げる空の色が蒼から紅へとその色を変え始める。

たとえ異世界であっても変わらないその光景に、智宏はしばし己の思考を中断した。

元より一旦刻印へ流す魔力を止め、魔力の回復を待っていた状態だ。考えなければならぬことは山ほどあるが、四時間近く魔力を垂れ流してはさすがに休みたくもなる。

刻印使いの魔力の保有量は、ほかの世界の人類のどれと比べても桁違いだ。レンドによればその量は通常のオズ人やエデン人の百倍以上あるという。確かに、魔力にまつわる器官と言うのは、世界のはざままで魔力を取り込んだとき真っ先に影響を受けそうなのでその数値もあながち見当違いとは思わない。

だが、同時に刻印を使うに当たって使用する魔力も、通常のそれに比べればかなり大きい。智宏のそれは魔術と比べれば刻印の消費量の方が少ないくらいだが、それでも気功術の消費量の倍近くあるし、刻印が継続して使い続けることを考えれば魔力消費量がけた外れなのは決定的な事実だ。いくら全体量が多くとも消費量も多ければ負担も大きい。四時間もそんなものを使って、魔力が無くならないということこそ驚嘆すべきものではあったが、それでも半分近く消費してしまっただけに体にだるさぐらいは感じる。

もっとも、智宏自身が感じている疲労は、肉体的なものより精神的なものの方が強いのだが。

「……モヒロ、トモヒロオ？」

「ん？ ああ、レンドか？」

ポケットから再び声が聞こえてくるのを聞いて、智宏はあわてて身を起こす。そこでようやくこちらも操作しなければ相手に声が届かないことを思い出し、取り出した通信機に微量の魔力を注ぎ込んだ。

「お、繋がった。よう、俺だ。オレオレ！」

「この場合、分かっててそんなことを言っているのかは判断に迷うところだな」

「なんだよ。声に元気がないじゃん。どうした？」

「いや、まあ、ちょっとな」

簡単に説明できないため言葉を濁すと、レンドはたいしたことではいと受け取ったのか、すぐに「ふうん、まあ、いつか」と追及をやめた。

「ところで何の用だ？　まさかそろそろ飯だから帰って来いってわけじゃないだろ？」

「まあ、それも要件としてはないわけじゃないがな。とりあえずこつちで調べてたことの方で、智宏にも聞かせておいた方がいいかと思っ情報があつたんでな」

「聞かせておいた方がいい情報？」

レンドの言葉に智宏はすぐに【スマートプレイン集積演算】を起動させて思考速度を底上げする。智宏自身もミシオを追跡した結果かなり気になる事実をつかんでいたその辺の情報が手に入るならそれに越したことはない。本当は一度合流してゆっくり話そうと思っていたのだが、この作業は早いほうがいいと直感も告げている。

「まず、学校の方なんだが、幸いなことに担任に話が聞けた」

「それはまた随分と手際がいいな」

「実は協力者の一人がその生徒のOBでね。そのつてをたどって接触したんだ。……んで、担任に聞いた限りじゃミシオちゃん、かなりの問題児らしい」

「問題児？」

随分とイメージと違う単語が出てきたことに智宏は驚いた。智宏が知っているミシオは確かにおかしな所のある少女ではあったが、問題児と言う感じではなかったからだ。

「どの辺が問題なんだ？」

「とりあえず聞けた限りじゃ、まず、ほとんど学校に来ないらしい。出席日数がこの三年ほど常にギリギリ。他にも友達を作ろうとしたの、ガラの悪い連中に目をつけられているだのいろいろ聞いたよ」

「なるほどね。確認するけど本当にそれミシオの話なのか？」

「俺も何度も確認したんだけど、間違いならしい。学校では極端におとなしくて特に反抗的なわけじゃないらしいし、学校に来ない割に成績はいいらしいんだけど」

「……ふうん」

「ああ。その先生は今の親との関係からくる問題なんじゃないかって言ってたけどな。実際、彼女が問題を起こすようになったのは彼女の祖父が亡くなって、新たにサデン親子と住むようになった直後らしい。そのことで何度か保護者のマクラさんとも話し合ったらしいけど、この様子だと進展はしてないみたいだな」

「まあ、この様子じゃあ、そうだろうな」

「ん？ どのいつのことだ？ って言つかさつきからずいぶん思わせぶりな言い草だな？」

「ああ、今ちようどミシオの家にいるんだよ」

「なにい！？」

話した瞬間、通信機から響くレンドの声に、智宏は思わず持つ手を遠ざけた。こういつとき音量調節の機能を使えばいいのだが、生憎とやり方は分からないし、異世界の品は感覚で操作する訳にもいかない。

「ちよつと待て、じゃあ何か？ お前昼間の、あの家にまたいるのか？」

「いや、違う。行く途中右手に森があっただろ？ ミシオの本当の（・）家はあの中にあるんだよ」

「……は？」

通信機の向こうからレンドの思考が混乱するのが伝わってくる。それはそうだろう。実際この森の秘密に気が付いたときには智宏も驚いたのだ。

だが一方で、この程度で驚いていては身が持たないとも思う。

「えつと……、つまり、森の中に家があって、ミシオちゃんはそこに住んでたってことか？」

「そんな生易しい話じゃない。ミシオのやつ、わざわざ森の中にツリーハウスを自分で建てて住んでるんだ」

「ツリーハウス!? ……え、ちょっと待って! それマジな話?」

流石に現実味がなくなってきたと感じたのか、レンドが通信機の向こうで声を上げる。レンドとしては元から森の中に家があつて、ミシオが何らかの事情でそこに住んでいると予測していたのだろう。だが智宏は、「大マジだ」と答えることでその予想を否定し、立ち上がって改めて周りを見回した。

高さにしておよそ六、七メートル。森の中でもひとときわたい木の枝に板を渡し、その上に屋根をつけたツリーハウスの、まさにその中に智宏は立っていた。

材料は適当な木材やビニールシートを張り合わせたかなり無節操なものだが、古タイヤを床下に強いて枝と枝の高さの違いを調整したり、窓を作る代わりに壁を手すり程度の高さまでしか作らず、そこから屋根までを、ところどころ修理した後のある蚊帳で覆って虫が入るのを防いでいたりとかなり芸が細かい。

「たぶん、これは夏用の家だな。木の葉で家自体は隠れてるけど、風通しは抜群だし。家の中にいるんな家の設計図があつたから、冬は別の家に住んでるのかもしれない。実際、豎穴式住居の設計図も見つけたしな」

「豎穴式住居って……」

「知らないか? 僕の国では一般的な原始時代の住居なんだが。流石に材料は現代のものを使った物みたいだけど」

「いや、知ってるけど……」

通信機の向こうからレンドの啞然とした様子が伝わってくる。無

理もない。智宏とて森の中でこれを見つけたときには目を疑ったのだ。

心情的にはまだ疑っている。

「それって子供が作る秘密基地とかの一種じゃなくてか？」

「もろにここで生活してるから違うと思うぞ。木の下に火を使うための道具だとか、水をためたドラム缶とか、いろいろ生活の痕跡が残ってた」

「そんなバカな……。あんな娘が一人でそんな生活をしてるってのか？」

「信じられないだろうが事実だよ。ちなみに、人違いってこともないと思うぞ。家の中にこの世界に来るとき着てた服が残ってたし」

「おいおい……」

流石のレンドも受け入れるのに時間がかかっているらしい。ならばと、智宏は調べた状況をさらに説明して無理やりにも受け入れさせることにした。

「どうもサバイバル関係の本なんかを読んで生活に役立ててたらしいな。家の中に本棚があつてその中にそう言った感じの本がいくつも残ってた」

「いや、ちょっと待て。お前この世界の文字読めないだろう？ 何でその本がサバイバル関係だと判った？」

「どの本も全部挿絵や写真が付いてたんだよ。ざっと見たところ、

この家にある本は、魚の図鑑や野草の図鑑。ロープ術やこのツリーハウスを作るのに参考にしたと思われる専門書。まあ他にも色々だ。どれも文字はさっぱりだったが、写真や挿絵できっちり解説されていて、内容は何となくわかったよ」

「な、なるほど」

「どうもこの近くの海で魚が何かを取って、余った分を町で売って生活費に変えてたらしいな。明らかに森では手に入らない米や生活必需品が残ってたし、本棚に一冊だけあった家計簿らしいものにもそんな記録が残ってた」

「生活費も自分で……、って待て、今家計簿って言ったよな？ 家計簿なんてそれこそ文字が読めなくちゃ内容なんてわからないだろう？ 何でそんなことが言いきれるんだよ？」

「数字だけならわかるのさ。なんせ、数字だけ(・・)なら(・・)他の(・・)本の(・・)ページ(・・)の(・・)隅に(・・)丁寧(・・)に(・・)一から(・・)順番に(・・)並べられて(・・)いる(・・)から(・・)な(・・)」

通信機からレントが息をのむ音が漏れるのを聞きながら、智宏は持っていた魚の図鑑を広げてみた。その本はどのページを開いても左右の上はじにページ数という形でこの世界の数字らしきものが印刷されている。後はその文字を見てそれがどの数字に対応するかを導き出せばいい。

「家計簿を見ると二日から五日に一回の割合で出費があった。まあ、これはたぶんさっき言ったような必要物資を買ってた記録だと思う。それで、収入の方はほぼ毎日、額は日によってバラバラで少額。何

らかのアルバイトや内職だったら収入は一定の期間に一回の形で集中するだろうし、この辺は海が近い。おそらく毎日海で魚が何かを取って余分な分を売りに行ってるんだろう。現に漁に使った道具らしいのが家の中に残ってた」

「うわぁ、信じらんねえこいつら……」

言葉とは裏腹に、ようやく事態を飲み込んだらしい声が聞こえてくる。声の様子から通信機越しのもレンドの呆れている顔が目につかんだ。

「ってというかその様子だとミシオちゃんは留守なんだよな？ ってことはトモヒロ、お前留守中の女の子の家を家捜ししたのか？」

「……言うな。今ちょうどそのことに気がついてへこんでたところなんだから」

事態が深刻そうだったので、流石に間違ったことをしたとまでは思っていないが、だからと言って胸を張って誇れるようなことをしたとは思っていない。むしろやっていることはほとんど、

「 ストーカーみたいだな」

「ぐはっ！！」

レンドの無慈悲な言葉に精神を貫かれ、智宏の体が床に崩れ落ちる。

こういう点が【集積演算】^{スマートブレイン}の厄介なところだ。理屈を伴わない感情を丸ごと無視して最善の行動が取れてしまう分、後になって自分の大胆かつ遠慮容赦のなさに悶絶するはめになる。その癖、気付か

なければいいことにまでしつかりと気付いてしまえるというおまけつきだ。

「えつと……トモヒロ？ 大丈夫か？」

「……大丈夫だ。何も言うな頼むから！！ ……それより問題は、なんでミシオがこんな半サバイバルみたいな生活をしてるかだ。さつき『ガラが悪い連中に目をつけられている』って言うってたな？」

「……ああ」

「それ、たぶんマジだぞ。それもかなりヤバい状況かも」

「まあ、そんなところにわざわざ住んでたらそうかもしれないが……でもそれってただの家出って可能性も……」

「それだけじゃないんだよ」

「は？」

この森のもう一つの秘密を話そうとしてしかし、流石に智宏も言葉に詰まる。再びレンドに先ほどと同じ反応を繰り返させなければならぬと思うと気が滅入ってしょうがない。

「僕がこの森の隣にあるマンションの隅のフェンスに、人が通れるくらいの穴が開けられてるのを見つけたのが三時間ほど前。この家を調べるのにかけた時間が約三十分。マンションからここまでの距離が普通にくれば三十分。この意味分かるか？」

「えつと……、一時間が六十分だから……、あれ？ 二時間もいつ

たい何してたの？」

「答えは、ここに来るのに普通に来られなかったから二時間半だ」

「……出題がフェアじゃねえな。ってああ、そうか。考えてみれば家のある場所が分かってなきゃ真っ直ぐはいけねえもんな」

「いや、本当のところはどうか知らないが、僕はかなりまっすぐ家に来ていると思うぞ。というか、まっすぐ家を目指さなければたり着けなかった」

「……どういうこと？」

「疑わずに聞いてほしいんだけどさ。ミシオのやつ、森の中に大量の対人トラップを仕掛けてるんだよ」

「対人トラップウツ!？」

レンドが予想通りの声を上げるのを通信機からできるだけ遠ざけてやり過ごす。だが、街でミシオにトラップで逃げられた話をしていたせいか、意外に落ち着くのは早く、すぐさま通信機から「詳しく聞かせてくれ」という冷静な声が聞こえてきた。若干声が疲れていたのはこの際気にしない。

「ここに来るまでに見つけただけでも五十四。引っ掛かりかけたのが十四、実際引っ掛かったのが六。森に入った人間を問答無用で迎え撃つトラップに遭遇した」

「対人っていう根拠は？」

「トラップの性質が明らかに人を狙ったものだったからな。ちなみに森の外側ほど相手を不快にさせたり、拘束したりって感じの危険度の少ないトラップだけど、今僕がいる家みたいな場所の近くは本気でヤバいトラップが仕掛けてあったよ。【集積演算^{スマートプレイス}】と気功術で強化した視力で、どうにかトラップを見破れなかったらここまでまず来られなかったな」

特にここに来る間にちよくちよく見られた数少ない人が通れそうな小道は、致命的なほど数のトラップが仕掛けられていた。しかもこの場所に直接来る道ではないため、普通に道を歩いて探したのでは罠に掛かり放題。だからと言って道なき道を歩けば、数こそ少ないものの茂みなどに隠れて見破りにくく、危険極まりないトラップが待ち構えている。何しろワイヤー代わりに使われていた釣り糸も^{テグス}緑の多い場所には緑がかった色の糸を使うといったように、場所や狙いによって選ばれていくらしいの徹底ぶりだ。

こんな森、下手に歩きまわれば何が飛んでくるかわかったものではない。いや、何が飛んでくるのかは多少なりとも確認している。石、丸太、空き缶、砂の詰まったビン、瓦、泥、ゴミ、たわし。切が無いので確認するのは途中でやめたが、探せばもつとバリエーションがあるかもしれない。

さらに言えば、それらのトラップが警報装置の役割も果たしていたらしいのが、人を相手にしているのだろうという認識に拍車を立てる。

どうやら森の中の罠の中には、この家の周りに仕掛けられた鳴子と接続されているものがあるらしく、人がこの森の中に入ってくるとどこから入っているのかがたちどころに分かるようになっていたらしい。

おかげで最初この家に来たとき、こちらが来るのを悟って姿をくらましたのかも思ったが、どうやらそういうわけでもないようだ。というのも、この家には缶詰に始まる大量の保存食料が備蓄されて

いるのである。罨の中に混じって、迎撃に使用すると思われる仕掛けも数多くあった。

明らかに籠城することも考えている。とてつもなく異常な生活環境だ。

「そんな状況で良く家なんか見つけれたな……」

「あまりにもトラップが多かったからな。一番通らなければならぬいミシオ自身が通るルートがどこかにあるんじゃないかと考えたのさ」

実際、その予想は正しかった。ルート自体は木の上に登って枝から枝に飛び移ったり、茂みの中の狭い枝の間を通らなければならなかったりするとんでもないものだったし、そのルート自体も途中で幾つも枝分かれして、間違ったルートを選ぶと罨がお待ちかねと言う念の入りようだったのだ。どうやら正しい道筋を知っている人間しか安全にたどり着けないように作られているらしい。

こんな環境で生活しているのなら、少女のあの身軽さも頷ける。なにしろ、智宏も魔術を使用しなければ通れなかったような場所もあるのだ。生身の少女がそんな場所を通ろうと思うならそれだけの運動能力が必要だ。

「このトラップも多分本を見て作ったんだろうな。話が脱線するからさつきは端折ったけど、それらしい本が何冊があったよ」

「それにしたってとんでもねえなあ……。しかし、なるほど。それでガラの悪い奴らに狙われてるってのは確実ってか。まあ、そうだよな。誰かから日常的に狙われてもしなければ、そんな敵を想定した住環境や、あの逃走スキルは納得できない」

「それにミシオがエデンの森で五日も生き残れたのも、この生活を見れば納得できるよ。いくら外敵に襲われないようにできたって水や食べ物の問題が残る。何の知識もない女の子に五日も生き延びられる森じゃない」

「考えてみりゃ、レキ八村の立地が防衛のためってのもすぐに見破ってたしな。どこかズレた娘だとは思ってたけど……」

通信機越しに、二人でこの異常な背景に納得する。やはりミシオは普通ではなかったという確信だけが、かなりすんなりと受け入れられた。

「さて、となるとなんでミシオちゃんがガラが悪い奴らに狙われているのかって話になるんだが……」

「さすがにそこまでは僕にもわからないよ。……ただ」

「サデンエイガ、か？」

「ああ」

トラップの件に関しては自身を狙う存在がいるからという理由で説明できるが、それだけでは家を出てこんなところに一人で住んで生活しているという理由にはならない。だが、それは同じ家に自分を狙う存在がいるからだと考えれば話は別だ。

「あの不肖の息子ならガラが悪い奴らに面識があっても不思議じゃない。あの父親も折り合いが悪いとは言ってたしな」

「問題はその父親がどこまで知ってるかってことだな。同じ家に住

んでてここまでのトラブルになつてゐるのを知らないつてのはさすがに不自然だし、ん〜、でも、ミシオは養父の方とも関係を絶つてたみたいだしなあ」

「考えてみればあの父親、十日前から行方が分からないとか言つてたけど、帰つていないとは言つてないんだよなあ……。みえだったのかそれ以外だったのか……。まあ、いいや、父親の方はこつちでも調べてる奴らがいるからそつちを頼ろう」

「となると後はミシオ本人か……。そもそもあいつはなんで僕たちからも逃げてるんだ？」

「さあなあ。……正直そこが一番分からないんだよな。そんなにヤバイ状況なら俺たちに助けを求めても良さそうなものだけ……」

「そういう意味では周りの人間にまったく助けを求めてなさそうなのも気になるな。学校の先生もミシオのこんな生活までは知らなかつたんだろ？」

「さすがに知つてたら言うだろうな。っと、そうか。知られなくなつたから俺たちから逃げてるっていう可能性はあるな」

「でもそれだと結局はなんで周りに助けを求めないつて話になるな。そもそもあの村の人間はこのことを知つてゐるんだらうか？」

疑問をあげ、しかしその答えが見つからず、両方の口からため息が漏れた。

結局のところ分かつてゐることと言えば、ミシオが常識を超えるレベルで敵を想定した生活を送つてゐることだけ。そこからその敵候補としてサデンエイガを想定したが、それ以外に関してはどうと

も判断に困る状態だ。

「まあ、いろいろと可能性は思いつかないわけじゃないが……、どれも推測の域を出ないし……。こりゃいよいよ本人に聞くしかないか」

「本人に聞く……、ね。なあトモヒロ、今お前刻印使ってるよな？」

「ん？ 使ってるけど？」

「ちょっと解除してみてくれない？」

「は？」

あまりにも唐突な申し出に、しばし智宏は困惑する。何かを考察する上で、【スマートプレイ集積演算】は強力な戦力だ。それを解除するメリットがあまり思いつかない。

「やっぱりそういう反応するか……。いいから解除してくれ。そうすりゃわかるから」

「あ、ああ。わかった」

訳が分からないまま。智宏は額に流す魔力の流れを断つ。

流石にいつもの感情のぶり返しは、情報交換の円滑化に使ったくらいでは起きないらしい。おかげでいつもは襲ってくる猛烈な自己嫌悪の類は無いが、代わりに急激に頭が鈍くなったような感覚に襲われ、なんとなく不安になってくる。

「解除したか？ なら質問するんだけどトモヒロはこれからどうす

る？」

「どつするって？」

「ミシオちゃんをまだ追いかけるのかってことさ。彼女が何らかの危険にさらされているのは恐らく明らかだ。お前のおかげでそれは分かった。問題はそこから先、ミシオちゃんがさらされているのと同じ危険の中にまで、トモヒロは飛び込む気がかって聞いてるんだ」

「……それは」

「さっきまでの、刻印を使ったままのお前なら迷わず飛び込むって言ったかもな。でも今はどうだ？ ミシオちゃんがさらされている危険と同じ危険に自分を晒せるかい？」

「……」

レンドが言わんとしていることを理解し、トモヒロは沈黙する。それに対してレンドは智宏の内心を理解しているかのように言葉を続けた。

「トモヒロってさ、刻印なんて大層な物も持つてるし、それによって魔術やら気功術やらが使えるから危険に対抗することはできるんだけど、それは危険にさらされた時に対応できるだけであって、平気で危険に身を晒せるわけじゃないんだよな」

「……」

実際今まで智宏が刻印を用いて戦うことができた二回の戦闘はどちらもなし崩しの巻き込まれたものだ。それも、恐怖やパニック

を【集積演算】^{スマートプレイス}によって抑え込んでいただけで、恐れや不安を感じていなかった訳ではない。

「加えて今は俺たちがいる。そりゃあ、俺たちの目的からは若干外れちまうが、それでもサデンマクラに接触することや、彼女が俺たちが追ってる組織の被害者兼証人であることを考えれば、プロジェクトメンバーとしても見捨てるわけにはいかない。だからさ」

そこでレンドはいったん言葉を切った。智宏にもその先の言葉が容易に予想できる。

「だから、トモヒロが無理してまで危ないことに首を突っ込む必要はないんだよ。はつきり言うとき。俺達はその必要があるから彼女を追っているけど、トモヒロは別にそうしなきゃいけない理由はないんだからな」

「でも……、知ってしまったら、何とかしたいよ」

「その気持ちはわからんでもないがね、でも世の中それでなんとかできるわけじゃないのも事実。それに彼女自身が知られたくないと思っていることに、軽い気持ちと合理性だけで勝手に踏み込んでいわけじゃないのも事実だ。……正直言っちゃまうと俺もここまで付き合わせちまったのは身勝手だったと思うよ。言っちゃえば便利だから連れまわしてたようなもんだからな」

「それは……」

確かに言われてしまえばもつともだ。

智宏にはこの問題にかかわる理由が無い。いろいろあって忘れそうになるが、智宏は事故のような理由で異世界にわたってしまった遭

難者なのだ。当然のように元の世界には家族がいて、その世界での生活がある。それらに与える影響について多少の安心材料があるとはいえ、他人の事情のために蔑ろにしているものではない。

「まあ、刻印のことあるし、智宏がすごく有能なのは分かってるから、手助けしてもらえたらありがたいし、実際そうしてもらえようように働きかけるつもりでいるけどさ。でもそう言うのは一度自分の世界に帰って身の回りの整理をつけてからにした方がいいと思うんだ」

「……だよなあ」

行ってしまうえばトモヒロは部外者なのだ。軽い気持ちで他人の問題に首を突っ込むべきではない。突っ込むならそれなりの覚悟をするべきだ。

「俺としては、後は俺たちに任せて一度自分の世界に帰ることをお勧めするよ。とりあえずいったん引き揚げたらどうだ？ 次にアースに移動できるのは明日の朝だ。そのころには魔力の充填も終わってるから帰れるぜ？」

「……わかった」

若干の引っ掛かりを残しながらも、智宏はレンドの申し出に納得する。

実際、この世界の人間でもなく、異世界人でもレンド達のように組織に属しているわけでもない智宏にできることは少ない。ここでレンド達に任せるのは、犯罪者の検挙を警察に任せたり、病人の治療を医者任せたりすることと同じことなのだ。言ってしまうえば今の智宏は犯罪の現場を見かけて通報した一般人であり、具合の悪そ

うな病人を見つけて救急車を呼んだ通行人なのだ。そんな立場の間が最後までつき合わなければならぬ理由や、解決しなければならぬ義務はない。

「それじゃ、とりあえずこっちに戻ってきてもらっていいか？　いろいろ聞きたいことなんかもあるし」

「……了解」

思い気分を引きずりながらも、智宏は一度元の世界に戻る決心を固める。その後レンドからいくつか要望を聞くと、後ろ髪を引かれるような思いで通信を切った。

7：動き出す状況

「それじゃそれだけ頼む。んじゃあ待つてるから」

こちらに来るといふ智宏にいくつかの頼み事をした後、その言葉を最後に、レンドは通信用魔石への魔力供給を絶った。科学文明の産物である電話と違って、魔石の起動には多少ではあるが使う本人の魔力を消費する。だが、それでも通信の際にメインとなるのは電話の充電と同じように使用していない間に魔石がため込んでいる魔力だ。しかしその魔力は無限にある訳ではないし、あまり長く話すには容量も少ない。

余談だが、そういったエネルギーの問題はもろに魔術文明の弱点とも言える。だからこそレンド達は異世界に期待しているくらいなのだ。

現在レンドは通信の邪魔にならないようアジトにしているビルの屋上まで出てきている。離れた地面に描かれている、起動していない異世界転移用の魔方陣の群れを眺め、風にあたりながら、レンドは一つだけため息をついた。

「それにしても……、智宏の刻印、思いのほか危ない代物だな」

話している途中から、もっと言えばエデンで刻印使用後の感情のぶり返しについて聞いたときから感じていた懸念を、今レンドは確信する。

エデンでも、さっきの話でも、普通の人間なら躊躇したり恐怖し
てできないであろう行為を、しかし智宏は平気で行っていた。

「最大の問題はトモヒロが感情を無視できちまうって点か」

どんなに感情を乱していても思考が最善の答えを叩きだす。恐怖がどれだけ大きくともその答えに従って動くことができる。それによって出来てしまう感情の無視。だからこそトモヒロは平気で危険に飛びこめてしまう。

「まあ、それはあいつの価値観の問題なのかもしれないが……」

どうもトモヒロという少年は自分の身を危険にさらすことが、必要ならすべきと考えてしまうタイプの人間らしい。もし他の人間が脳を強化する刻印で最善の判断ができるとしても、その最善の形は人によって異なる。もし最善の形が自身の身の安全に重きを置いていたら流石にレンドもこんな懸念は抱かなかっただろう。

だが、トモヒロの思考回路はそうではない。

恐らくトモヒロは、自分が危険を冒すことで他人を救えるのなら、そうすることが最善だと思ってしまうタイプのお人好しな人間だ。ここで伴うリスクが智宏自身の死であったり、救われる立場の他人が見も知りもしない他人だったらさすがに話は変わってくるかもしれないが、それでも危なっかしいことに変わりはない。

危機に陥っている他者をリスクを負っても救うことができる価値観と、その価値観のもと、最善の答えを叩きだせる能力。

前者だけなら一部の職業についている人間に多少なりとも見られる精神だし、後者が揃っても、ここまで極端ではないものの、そういう人間は多く存在している。そもそもレンドに言わせれば人間というのは美しい行動をとりたがる生き物だ。自身を危険にさらしても他者を救うということに対し一定の憧れという感情をもっている。だが、それが実際に直面した状況でできるかと言われれば話は別だ。

普通であれば、感情がその行動を阻害する。恐怖によって行動は制限され、英雄的行動の前に自身の安全を考える。なにもそれは悪いことではない。恐怖という感情は生物が自身を守るために身につ

けた警報装置だ。それが無ければその人間は生物として限りなく弱い存在になってしまふ。恐怖のもとに下される判断というのは、生物として生き残る上で必要な能力なのだ。

だが、智宏の刻印はこれを制御できる。警報装置が無いわけではないが、警報装置を意識的に無効化することができてしまふ。そして警報装置が動かない建物ほど防犯上危険な建物もないだろう。

（言ってしまうえば、最善の判断ができる分、その判断に従わないことができないってところか。下手な感情に引きずられて、愚かな行動をとることが許せないってのもあるのかな。だとしたらもつとたちが悪い）

自身の身を危険にさらし、命をかけるには覚悟が必要だ。間違っても合理的だからなどと言う理由で行っていないものではない。そしてだからこそレンドは刻印を使わない状況で判断を下させたのだ。

「これからも智宏の様子は注意して見てなきゃいけないかも……。さて、と。とりあえず俺はサデンマクラについて探ってみるか……」

思考を切り替え、レンドは建物の中の同僚のもとへ戻った。

拾った木の枝をワイヤーに引っ掛け、わざとトラップを発動させる。すると木の上からロープで吊られたドラム缶が振り子のようにワイヤーの真上を薙ぎ払った。

智宏はドラム缶が位置エネルギーを使いつくし、その動きが鈍るのを待つと、ドラム缶をつっているロープをつかみ、その動きを止め

た。

宙に浮くドラム缶を足場にし、それによってようやく手が届く位置にある太い枝に手を伸ばす。

そうすることでようやく上った木の上で、智宏はあきれに近い感情を抱いていた。

「まったく、トラップと見せかけてルートへ昇る足場とか、本当によくやるよ……」

現在智宏はミシオ家から森の外にある暦波町と魚寝村を結ぶ道路に出ようとしている。

本当は最初にミシオが森に入っている痕跡を見つけた、街の外れにあるアパートの破れたフェンスの場所を目指したいのだが、最初に智宏がその場所から森に入ったとき、フェンスのあった場所ではトラップに阻まれて家に向かうルートを見つけることができず、森伝いに歩いてようやくこのルートに気が付いたという経緯があるため、最初に入ったフェンスの位置に通じるルートは知らないのだ。

今なら探せば見つけることは出来ると思うが、すでに日も暮れて暗い中で、畏を避けながら森の中を歩くというのは刻印や気功術を使っても至難の業だ。

だからこそ一度通ったルートを強化された記憶力を頼りに歩いているのである。

「本当に……、よくもまあこんなトラップを森中に仕掛けるなんて面倒な真似をしたもんだ」

木の上にあったロープを引っ張って、木の下にあるドラム缶を元の位置まで引き戻す。

本人に会えなかった以上、誰かが家まで侵入した痕跡など残せば、ミシオに余計な不安を与えてしまう。レンドの提案で、家の中に通

信機を置いて来たので、いずれはばれることではあるのだが、この森への侵入を考えている輩が他にもいるかもしれない状況で、侵入の痕跡を残すのはあまり得策ではない。下手をすると智宏が通った痕跡をたどられてミシオを危険にさらしてしまう恐れすらあるのだ。最終的に智宏が選んだのは自分が来た痕跡を出来るだけ抹消しながら帰ると言う、ほとんど泥棒のような発想だった。

「……オーケー、悲しくなるから余計なことは考えないようにしようか」

自分に言い聞かせ、智宏は【集積演算】^{スマートプレイン}で上がっていた思考の回転数を落としてにかかった。極端な話、ここから出るためには来た道を覚えている記憶力があればいい。

森の中を歩いている途中で気が付いたのだが、どうもこの【集積演算】^{スマートプレイン}と言う刻印は、智宏の思考の意志によってある程度出力を調節できるらしい。より多くの魔力を注ぎ込めば思考のスピードが上がり、同時に考えることのできる数も増え、逆に減らせば記憶力の向上と身体操作能力の向上だけの部分的な発動が出来る。要は考えないようにするということもできるにはできるのだ。

(でも、それはやっぱり難しいかな……。思考が加速してるとどうしてもいろいろ考え始めちゃうし……)

考えながら、智宏は視界の先によくやく森の出口が見えてきたことに内心でほっとし、しかし同時に後ろ髪を引かれるような思いも感じる。

智宏自身、自分がミシオのために何かをしようとして役に立つかと考えた場合、恐らく役には立てるだろうとは思う。

智宏には【集積演算】^{スマートプレイン}という、何をするにも邪魔にならない異能があるし、そのこと自体を、智宏の自惚れを排除して思考できる【

スマートブレイン
集積演算】という異能が予測している。

だが、ミシオ本人がそのことを望んでいるかと聞かれると、恐らく望んでいないだろう。

それは、理由は不明ながらもミシオがこちらとの接触を絶っていることから想像できるし、そもそもミシオと智宏は同じように異世界に渡って、たまたま会っただけの行きずりの関係だ。そんな人間が家まで押し掛けて「助けてやるぞ」などと言うのは、いささか厚かましすぎる。

(いや、そもそも僕とミシオは異世界に渡った事情すら違うか……)

智宏が異世界に渡ったのは、言ってしまうえば事故のようなものだ。たまたま通った道に、たまたま運悪く、異世界の落とし穴が存在していたにすぎない。

だがミシオは、智宏とは事情が違う。本人に詳しくは聞いたわけではないが、聞いた話から察するに彼女が異世界にいたのは、非人道的な実験の被研体にしようとした、犯罪組織による誘拐の結果だ。どう見ても智宏より状況は悪い。

と、そこまで考えて智宏は自分の思考に引っ掛かるものを覚えた。

(あれ?)

落としていた思考の回転数をもう一度あげ、その引っ掛かりの正体を探る。

智宏の足が森をぬけて道路の地面を踏みしめ、街灯の明かりでその詳細が見えるようになったとき、智宏も自分の中の引っ掛かりの正体を見破った。

(誰か) (に) (狙わ) (れ) (て) (い) (る) (命)
人間が) (都合よ) (く) (別の) (第三者に) (命)

を(・)脅か(・)さ(・)れ(・)る(・)な(・)ど(・)と
(・)言う(・)偶然が(・)あ(・)り(・)得る(・)の(・)
か(・)？

まさか、と言う感情が湧きあがる。

だが加速した冷静な思考は次々に関連する事柄から事態を追求し整理して頭の中に並べ始める。

そもそもミシオが捕まったこと以上に、あっさり脱出できたことに、まず疑問がある。彼女の脱出は、彼女自身の能力である通念^{テレ}能力によって、彼女が感じている痛覚を周りの人間にも押し付けて気絶させ、その隙を突く形で行われたという。

だがそもそもの話、魔術、気功術、刻印、そして超能力と、生身でも扱える異能がこれだけある中で、例え実験の対象をアイデアの人間に限定していたとしても、それに対して何の対策もしていなかったというのはおかしくはないだろうか？

何かの理由、それこそ資金や設備、油断や驕りと言った理由で本当に対策をしていなかったという可能性はあるだろう。

だが、それ以上にミシオが何らかの形で、とられていた対策をかいくぐった可能性も十分にある。

ならば、彼らは一体どんな対策をとったのか？

超能力を防ぐ方法など有るかどうかも知らない。だが、能力者以外の、能力を持たない人間だけを攫うという方法でなら、能力による反抗と言う可能性を摘むことはできる。何しろ超能力者は三十人に一人しかいないのだ。

もしも彼らが現地で、能力のないことを確認してから人間を攫っていたとしたらどうか？ おそらく時間をかければそれを調べることは難しくない。適当な期間目をつけた人間をつけまわして能力を使うか否かを観察すればいいのだ。

だがそんな方法は非効率極まりない。そんなことをするくらいならば現地人間に聞いたたり、そういった情報をもっている者に聞いた

りした方が早い。

そして重要なのは、それを行うのは現地の人間の方が都合がいいということだ。

もしも彼らが能力を持たないイデア人の拉致に、行為をスムーズに進めるために現地の人間を協力者として使っていたとしたら？

もしも使われていた協力者が、排除したい人間を異世界人に攫わせることで始末しようとし、能力者であるミシオを非能力者と偽って攫わせていたとしたらどうか？

「もしも、エデンに連れて行かれたこと自体が、ミシオを狙ってる奴らの策略だとしたら……！！！」

智宏は自分の予想に寒気を感じた。

いくら筋が通っていても、今智宏が行っているのはただの予想の一つだ。仮説がほとんどで、当たっている可能性など半分もない。

だが、もし当たっていた場合はどうか？

今でこそミシオは実験の成功という皮肉な形で生き残っているが、実験がもし失敗していたらどうなっていたか、そして成功しても、そのまま逃げだせずにいたらどうなっていたかは想像に難くない。

そんな中で、もしミシオが生きてこの世界に帰っていることを知ったらどうするか？

「今度こそそう急に始末しようとする……！！　それも、事と次第によつては異世界の技術を持ち込んで……！！！」

そこまで考えて、智宏は自分のうかつさを心のそこから呪う。よく考えれば、ミシオが異世界の誘拐者たちに狙われている可能性は少なからずあったのだ。

そしてもう一つ、そもそもミシオは今どこにいるのか？　智宏自身避けられているというのは分かるが、だからと言って明らかに

立てこもることを想定された森の中で、気配すら感じないというのはどういふことなのか？

「くそ！！　そもそもミシオはどこ行っただんだ！？　本当に無事なんでしょうな！？」

最悪の予想が強化された思考の中を駆け巡る。それによって湧きだした焦燥が智宏の精神を侵食する。もしも予想が当たっているなら、彼女はこれまでより数段強い理由で狙われる可能性があるのだ。だがそのとき、右腕を何かがかすめたような小さな痛みと、直後に足元から生じたチリン、という小さな音が、智宏を現実に取り戻した。

(？　……なんだ？)

気になって足元を見ると、そこには板状に輝く金属が転がっていた。よく見るとそれは、工作などで良く使う、カッターナイフの代えの刃のようだった。

(なんでこんなものが　！？)

瞬間、見ていた刃がいきなり起き上った。まるで地面に垂直に突き立てられたかのように上を向き、その刃を、何か(・)(・)で(・)(・)汚れ(・)(・)た(・)(・)その切っ先を智宏に突きつける。

(っ！！　アイアン・ガント術式展開【鉄甲】！！！)

とっさに右手に魔方陣を展開し、文字どおり智宏の目に飛び込もうとしていた刃を、鉄の魔力に包まれた右手で掴み取る。

間一髪、右目からわずか数センチのところでは掴まれた刃は、トモ

ヒコの握力にまでは逆らえず動きを止めた。

だが、智宏は同時に、先ほど右腕に感じた、そして今感じた痛み
の正体が、掴んでいる刃によるものであることに気が付いた。

(っ！ 腕を切られている！！)

透けて見える魔力の手甲の向こう、肘から少し下のところに傷口
が走り、そこから出血しているのが見える。見たところ致命的なほ
ど深い傷と言う訳ではなさそうだが、傷口からはどんどん血が溢れ
出しており、腕を赤く濡らしている。

「まったく、予想外のところから来ないでよね。って何その手？
光ってるけど……、手袋？」

智宏の左側、街灯の光からちょうど影になる位置で女の声がする。
智宏が向きなおると、声の主はゆっくりとこちらに歩き始めた。

街灯の光に照らされ、巨大なバックを下げた女の姿が見えるよう
になる。その見た目は一言で言うなら、

「……やまんば？」

「ああ！？ なんだとこらあ！！！」

智宏が簡潔に述べた感想に、しかし女は怒声を上げる。

担いでいるバックは異質ではあるものの、それは智宏の住むアー
スでも一昔前には存在していたファッションだった。しかも今はそ
の表情を怒りで凶悪に歪めているため、余計にその感想に当てはま
って見える。

「まったくよお、誰も来なかったら何もしなくていいっていうから、

どうせなら来ないでくれた方がこっちはぼろもっけでラッキーって感じだったのに、こっそり通り抜けようってのはどういいう見よ？」

「……これは、あんたがやったのか？」

女の口調から半ば確信を持って右手の刃を示す。案の定女は特に疑問を持つわけでもなく、にやりと残酷そうに笑った。

「まあ、実を言うとさあ、この道今は通行止めなんだよね。知り合いのボンボンが自分の女に会いに行くって意気込んでてさ、だからさあ、邪魔にならないように村に人を入れるなって頼まれてんのよ」

「……それはサデンエイガとハマシマミシオのことか？」

「んん？ 何で知ってるの？ ……って、ああっ、その耳ってもしかして……うっわ、聞いてたより冴えねえ……」

女の反応に智宏は自分の予想が当たり始めていることを確信する。同時にミシオが危機に陥っていることも。

「まあ、いいや、どうせ二目と見られない顔にしなきゃいけないんだし。その点じゃあラッキーだったかなあ、ああ、そうだ。あんた自分で選んで見る？」

そう言っただけで女は右手を軽く上げる。すると暗がりの中から光を反射する何か大量に表れた。

「……っ！！」

それが何かはすぐに分かった。カッター、剃刀、糸鋸の刃、釘、

針、ネジ、画鋏、その他工具のかけらや、わずかにパチンコ玉やコインのようなものが混じった金属の群れ。それも百や二百は下らない数が宙に浮き、その切っ先の全てを智宏に向けている。

「切る（・）（の）（と）（刺す）（の）（の）（の）、そして）（・）（打つ）（・）（の）（の）（どれがいい？ 葉鳥ちゃんは親切だから特別に選ばせてあげるよ？」

超能力、と言う言葉が頭をよぎる。智宏の前にいる女は、間違はなく智宏が見たがっていた超能力者だった。

「はい、三！ 二！ 一！ ブー時っ間切れえ！ 要望が無いなら行き当たりばったりに行ってみようかあ！！」

そう言っただけが右手を智宏にさし向ける。それと同時に女の周囲に控えていた金属の群れが一斉に智宏めがけて殺到した。

言葉と違い、狙いは顔だけではない。智宏の全身をところ構わず傷つけるべく、金属の群れが空を切って殺到する。

だが、智宏に食らいつく直前、それらは智宏の足元から現われた輝く半透明な壁に阻まれた。

「……は？」

相手をスタスタにするはずだった金属群が、いきなり現れた壁によって阻まれ、弾かれる様に女はポカンとした表情で固まる。

だが智宏はそんな表情を見ても相手に容赦する気は起らない。

「どうやら、思っていた以上にあいつはやばい状況にいるらしい。いや、あの家を見た時点でそう急に探しに行くべきだったな」

智宏の額で暗がりを照らすほどに刻印が輝きを取り戻す。加速し始めた思考は、今するべきことを着実に智宏自身に命じていた。

「ちようどいい。いろいろと知っている人間が欲しかったところだ、それじゃあ、まずはいろいろ吐いてもらうところから始めようか？」

獯猛な感情を冷徹な思考で包みこみ、目の前の葉鳥と名乗る女に向けて智宏はきっぱりと宣戦布告を突きつけた。

7：動き出す状況（後書き）

ふと思う。これってファンタジーなのだろうか？
ご意見ご感想お待ちします。

8…寸鉄の女王（前書き）

よつやく戦闘シーンです。

8：寸鉄の女王

見た目とは裏腹に大きな態度をした少年は、いきなり葉鳥に向かって火を放った。

「ギヤアアツ!!!」

驚き、あわてて飛び退くと、今自分がいた場所の少し手前に炎の塊が直撃し、地面を粉々に焼き砕く。

「な、な、な……」

思わぬ反撃に葉鳥がわなわなと震えていると、手と額を光らせた少年が空中に奇妙な図形を描きながら再び言葉を投げかけた。

「さあ、どうする？ 僕は優しいから、特別に焦げて喋るか、焦げずにしゃべるかを選ばせてあげるよ？」

ニコリともせずにも本気とも冗談ともつかないセリフを無表情で口にする少年に、葉鳥は恐怖を覚える。だが、それに屈するほど、葉鳥は弱くもなかった。

「なっ、めんなあ!!!」

叫びと共に、葉鳥は地面に散らばる金属群に意識を飛ばす。それだけで大量の凶器達は宙に浮かび上がり、今度は左右から少年に襲いかかった。

「ぶっ!!!」

それに対して少年は、焦ることもなくわずかに息を吹きだしただけで対応した。もう一度地面に魔方陣を展開し、比較的の数が多い左側を先ほどの半透明の岩の壁で防ぎ切る。

右から来る残りの釘と刃を、前に向かって走ること回避し、それでもギリギリ直撃コースにいる数本を右手の光る手で叩き落とす。結果としてそれは、少年が対応する隙に森へ逃げ込もうとした葉鳥を追いかける形にもなった。

「くそおつ、聞いてねえぞ相手が能力者なんて!!」

仕事の依頼人に怒りを露にしながら、金属群にさらなる意識を飛ばす。

すると金属達は葉鳥の意志に答え、次々と浮き上がり、少年の頭上から殺到した。

「っ!!」

上空から響く金属音に、危険を感じた少年が横へと飛び退く。

すかさず金属群に方向を転換させる。すると、二割ほどの金属が間に合わずに地面に突き刺さったものの、残りは方向を変えて少年に追撃をかけた。

「しっこい!!」

再び岩壁を作って金属群を弾き飛ばすが、その隙をついて葉鳥は距離をとる。

距離にしておよそ十五メートル。どちらにとっても不利な距離だった。

「……なんだてめえ……。火イ出すだけならともかく、壁作るとか……、いつたいなんの能力だ!？」

相手の使う能力の多さに、葉鳥は疑問の声を上げる。

通常能力者の持つ能力は一人一能力だ。まれに能力によって多彩な現象を引き起こす能力者も存在するが、そういった人物も実際は適用範囲の広い一つの能力を、応用によって多彩に見せているにすぎない。

だが、この少年の使った二つの能力は、あまりにもかけ離れている。炎を使う能力は、レアながら存在する。いきなり壁が現れるというのも空間移動テレポルトの一種だと思えばかろうじて納得できる。だがそれらを両立するなど通常はありえない。

二つの能力を使う不気味な相手に、葉鳥の思考は混乱を極めていた。

一方智宏の方も内心で焦りを抱いていた。

(ふくらはぎはかすめて服が破れただけ、肩甲骨の辺りも同じだな。右太股は……、浅いが斬られているな)

感覚を頼りに先ほど避け切れなかった(……)場所を確認していく。合計三か所。どれも不意打ちで斬られた右腕と比べてもとるに足らない傷ばかりだが、避け切れなかったというのは問題だ。

(この現象、サイキネシスとか、テレキネシスとか、念動力っぽ

い何かだろう。詳細は……)

周りで宙を舞っている者たちを見る。相手の操っているものから見れば詳細は明らかだ。

(恐らくは小金属に限られるって条件付きの念動力。正確に金属の種類まで特定されているのかまでは分からないが、ミシオのトラップを考えても金属が少なそうなこんな場所に、わざわざ金属を持ち込んで使っている時点で間違いない)

思考を加速させて、状況を分析する。この場を切り抜けるだけなら【テラボルト極放雷】や【タイタン・クロウ土神の剛腕】、【クラスター・ファイア集束爆炎弾】といった強力な魔術で相手を吹き飛ばしてしまえばいい。だがそれをやると、危機的状況にいると思いきミシオの居場所が聞きだせなくなってしまう。

(今までの言動からしてこいつは異世界のことについては知らないようだが、ミシオを狙ってるエイガとは関わっている。ならエイガの足取りを追えばミシオにはたどり着けるはずだ。是が非でもこいつからエイガの行先を聞き出さないと!!)

そこまで考えて、問題は相手の能力に立ち返る。話を聞きだす上で相手の能力は明らかに邪魔だった。

(最大の問題はこの数だ。一つ一つはまともに食らっても大した威力じゃないが、全部食らったらさすがにまずい。さっきからのやり取りで嫌な感じに周りにはらまかれてるし……)

流石ツクシエルに四方から攻撃されたら魔術を使っても防ぎきれない。【岩壁城塞】で防ぐことができるのは一方向からの攻撃のみ、ほかの魔術でもこの数を撃ち落とすのは不可能だ。

(「ここから先、下手に【岩壁城塞】ロックシエルなんて使おうものならこっちの動きが制限される。なら最悪、食らうの覚悟で捕まえる!!」)

「来るんじゃないねえ!!」

周囲の金属が浮きあがると同時に智宏も動いた。

気功術を発動させ、素早い動きで迫りくる金属群の間をすり抜ける。

「逃がすかあ!!」

だが、今度は葉鳥もそれに合せた。自身もバックステップで距離を稼ぎながら、金属達を急旋回させて智宏を背後から襲撃する。

(スピードは向こうのほうが若干早いか。ならっ!!)

捕まえる前に追いつかれると判断した智宏は、背中に意識をさし向ける。

(術式展開

【空圧砲】エア・バスター!!)

意識と共に智宏の背中で魔方陣が展開され、そこから急激に空気が噴き出した。

吹きだした空気は背後に迫っていた金属群を吹き飛ばし、さらには智宏の体をジェット噴射のように加速させる。

「げえ!?!」

智宏もこの魔術を使うのは初めてだ。魔方陣と発動までの手順は

依然見て覚えていたのだが、効果を見ることまではできなかったの
で使ったことが無かったのだ。

だがこの世界に来てから効果だけはレンドに聞いていた。それで
も実際にうまくいくかは若干の不安があったが、結果は上々だ。相
手の反応からしても背後からの攻撃をあんな形で防がれるとは思っ
ていなかったらしい。葉鳥はすでにこちらに背を向けて逃げだして
いる。

そしてだからと言って、ここでみすみす逃がすほど智宏の思考は
甘くない。

(術式展開

ファイア・バレット
【銃炎弾】！！)

相手の動きを止めるべく、足を狙って炎弾を放つ。だが炎弾が着
弾する寸前、魔術に気がついた葉鳥は突然その身を宙に浮かし、飛
ぶようにして炎弾を回避した。

脱げて取り残されたサンダルが炎弾を受けて爆散する。

「なに!？」

足を地面から放し、道路の上を低空飛行する葉鳥に智宏は驚愕の
声を上げる。だが、次の瞬間には智宏はその原因を看破した。

葉鳥手の先、しっかりと握られた巨大なボストンバックが葉鳥の
体を引っ張るように飛んでいるのだ。

(中に鉄を仕込んで、いや、隠し持っているのか?)

飛行の仕組みを看破しながら、智宏は追撃をかけるべく魔方陣を
構える。それに対して葉鳥も、飛びながら鞆を胸の前に抱くように
し、その口を最大まで開いた。どうやら中の鉄を逃げきるための推
進力として使うのではなく、こちらの攻撃への対応と反撃に使う腹

積みもらしい。

「『寸鉄の女王』舐めんなあ！！」

（術式展開

バルカン・ファイア
【回転機関砲】！！）

互いが同時に攻撃を放ち、二人の間でぶつかった鉄と炎弾が爆発する。炎弾の爆発で金属は砕け散り、吹き飛ばされ、しかし炎弾自体も爆発するゆえに葉鳥には届かない。

だが、この勝負は明らかに智宏が有利だ。能力で飛ぶ葉鳥と、魔術で走る智宏の速度はほぼ同じ。だが、こうして葉鳥が攻撃に鉄を使ってしまえば智宏の方が速度は圧倒的に勝る。

そして、弾丸の数も智宏の方が勝る。智宏の魔術は魔力が続く限りいくらでも撃ち続けることができるのだから。

「ああああ！！ くっそお！！」

悪態をつきながら、大量の鉄を失った葉鳥が地面に足をつける。よろけながらも着地し、そのまま自分の足で走ろうとするが、その速度は先ほどとは比べるべくもない。

智宏は、魔法陣を構える腕をわずかに逸らし、走る葉鳥のすぐ横に炎弾の一発を着弾させる。

「うぎゃああ！！」

爆風に殴られ、葉鳥の体が横倒しに地面に転がり、その動きを止める。

すでにかかなりの距離を詰めている。背後の金属群も追いつくまでには時間がかかるだろう。追い付いて取り押さえる時間は十分ある。そう思ったとき、葉鳥が奇妙なことを始めた。座り込んだまま体

制をこちらに向け、右手をこちらに向ける。さらにその手はピストルでも構えるように人差指と親指を立て、人差指をこちらに向けていた。そして、その指の先で何かが浮いている。

(なんだ……?)

浮いているそれを、智宏は最初釘かと思った。だが良く見るとその釘は、側面にネジのような溝が掘られている。智宏もホームセンターで見たことがあるそれは、ビスと呼ばれる代物だった。そしてそれがいきなり回転を始める。

(…… ！！ ！！ まずい！！)

とつさに危険と判断して智宏が真横に飛び退く。

すると間一髪、他とは比べ物にならない速度で智宏がいた場所を、回転を帯びたビスが通過した。

ダンツ、という音がして背後の木にビスが突き刺さる。

背後を確認すると、先ほどのビスのものと思しきネジの頭が木の幹に深々と食い込んで煙を上げていた。どうやら回転によって摩擦熱まで発生していたらしい。

「は、はは、ははははは！！！」

そしてそれを見て葉鳥は笑う。智宏は葉鳥が自身の突破口を見出したことを理解した。

「そうかあ！！ そっか、そっか！！ そっか！！ そっか！！ 量より威力だよなあ！！ あははははっ、ハア！！！」

気合いの一声で、葉鳥の持つ鞆から七本のビスが勢いよく飛び出

す。ビスは葉鳥の上に滞空すると、その切っ先を智宏に向けて一斉に回転を始めた。

自身の力をビスに集中しながら、葉鳥は立ち上がる。逃げる過程で髪が乱れ、サンダルは片方脱げて、服も泥だらけになったその姿はしかし、鬼気迫る表情によって本物の山姥のように見えた。

「あんとエイガの野郎のおかげで服もメイクも台無しだ……」

切っ先を突きつける木ネジに対抗するため、智宏は全身を緊張させる。どうやら先ほどの一撃は大量に操るのに使っていた力を集中させることで生み出していたようで、ほかの金属は地に落ち、完全に沈黙している。

だがそれは今安心材料にはならない。今度の攻撃は食らったら先ほどとは比べ物にならないダメージを追ってしまう。先ほどの一撃を考えれば銃を突きつけられているようなものだ。

(なら、術式展開 ！！)

「ネジ穴開けて詫びなあ！！」

(【岩壁城塞】^{ロックンシェル} ！！)

瞬間、目の前に現れた壁の向こうで、金属が岩を削る音と火花が散る。だが智宏はそれで安心するようなことはなく、壁の出現と同時に右側に駆けだした。

予想通り、智宏の進行方向上に、壁の横から攻撃するべく回転したビスが現れる。さらには音からして背後にも一つ、合計で二本のビスが壁のない側面から挟み撃ちにしようとしていた。

「負けるかああああ！！」

気合いとともに目の前の木ネジを、アイアン・ガント【鉄甲】によって保護された右手で横殴りに殴りつける。さらには魔力の供給を絶たれて消え始めている壁をつかみ、体を壁の向こうに引っ張る。

直後、火花を散らして吹き飛んだビスが見当違いの方向に発射され、背後から智宏を襲おうとしたビスが、智宏の二の腕をかすめて地面に着弾した。

「痛っ、そおおおおお！！」

だがまだ終わりではない。相手にはまだ最低でも四本のビスが残っている。

「チイツ！！」

(術式展開　！！)

葉鳥がビスの照準を変更する前に、智宏は背中に魔方陣を展開し、起動させる。準備は智宏の方が一瞬勝り、葉鳥がビスを打ち出す前に発動させることに成功した。

(ファイヤーバードストライク【火炎鳥襲撃】！！)

「なっ！？」

智宏の背中から突然飛び出した四羽の炎鳥に、葉鳥は自身の危険を悟る。炎鳥が葉鳥本体を狙っていることを看破すると、とっさにビスの照準を変更して四羽の炎鳥を打ち抜いた。

智宏の前方四ヶ所で同時に爆発が起きる。

「これでお前を守るものは何もない!!」

「くっ、ああ!!」

一気に距離を詰め、葉鳥の顔面を掴んで足払いを掛ける。倒れこんだ葉鳥を押さえつけ、手のひらと顔面の僅かな隙間に魔方陣を展開する。

「さっきの火の玉だ。妙な真似をすればこのまま発動する！」

「っ!!」

脅しと共に五本の指で貫かれる形になっている魔方陣に魔力を込めて輝かせる。すると周囲で地面に金属が当たる音が次々と響いた。流石に観念する気になっただけらしい。

「わ、悪かったよ。あたしは、ほら、頼まれてここにいただけなんだ。特にあなたに恨みがあるとかじゃ」

「そんなことはどうでもいい。ミシオはどこだ？ エイガはどこに行くと言っていた？」

「も、森の向こうの岩場だよ。村の海沿いからもいける場所さ。ミシオって娘はそこで毎晩海に潜ってるらしいんだ」

「毎晩？ 夜に潜ってるのか？」

「あ、ああ。何でも前に栄河たちがちよっかい出したら、暗い時間に潜るようになったらしい。え、栄河も実際にこの時間に潜ってるって知ったのは、さ、最近だって言ってた」

多少どもってはいるものの、淀みなく発せられるその答えに、智宏は葉鳥が嘘をついていないと判断した。こんなにスラスラと嘘の情報を吐ける人間がいたらそれだけで脅威だ。

海に潜っているという証言にも裏付けがある。恐らくミシオの家で見た家計簿、その中であつた唯一の収入源である漁に出ているのだらう。夜の海に潜るといふのはなかなか危険ではあるだらうが、狙われている中では闇にまぎれて逃走できる分むしろ安全なのかもしれない。

「な、なあ、あたしはこのまま帰ってもいいかい？ あたしも相手が能力者つてのは契約の範囲外なんだ。栄河の野郎はとっちめてやりたいけどそっちはあんたに任せるよ。だからさ」

「まあ、それはいいけど」

瞬間、智宏は葉鳥の上から勢いよく飛びのいた。案の定、直前まで智宏の頭があつた位置で釘同士がぶつかり合い、火花を散らす。

「あんだ、ただで帰る気ないだろ？」

「大当たり……」

見れば、智宏の周囲には既に数十本の金属が浮いており、完全に周囲を包囲されていた。どうやら地面に落とすと見せかけて会話で時間を稼ぎ、闇にまぎれて少しずつ周囲に配置していたらしい。

「生憎と想定外の仕事には法外な報酬をつてのがあたしのポリシーなんだ。実は仕事はきっちりやるタイプなんだよ」

すでに周囲のどこにも逃げ場はない。たとえ魔術でどこかを突破しようとしても周辺全てを吹き飛ばせない以上、残った金属達が智宏を襲うだろう。

だが、問題ない。葉鳥が大人しく引くとも最初から思っていないかったし、何より、

「……悪いね」

「ああ!？」

「実はもう、あんたが喋れる状態である必要はないんだ!!」

葉鳥の額で血管が切れる音がし、同時に空を切る音とともに、全ての金属が包囲の中心へと殺到する。数百本にかけていた力を数十本に集中した攻撃は、先ほどのビスほどではないものの人を殺すのに十分な威力を持って中心にいる智宏を葬り去る、はずだった。

「は?」

だが、目の前に広がる光景に葉鳥はポカンとした表情になる。

さっきまで少年が一人いただけの場所には、しかし次の瞬間には巨大な半透明の塔がそびえていた。中心の少年を四方から貫き、斬り裂くはずの金属達はすべてその塔に刺さっている。

そして葉鳥は、その塔の根元の形を見てその正体に気が付いた。

「……腕?」

「正解だ!」

塔に見えた腕の先、遙か上空から聞こえた声に、ようやく葉鳥は

上を向く。そこには巨大な腕に肩の部分で繋がり、反対の手の先に魔方阵を展開した智宏の姿があった。

「とりあえずあんたから聞かなきゃならないことは全部聞いた。だから」

「ま、待って！！ やっぱりあたし ……！！」

「 ……寝てる！！」

そう言った瞬間、魔方阵から放たれた雷撃が葉鳥の意識を残さず奪い去った。

8：寸鉄の女王（後書き）

ご意見ご感想をお待ちします。

9：襲撃の渦

森の中でいくつかの音が連続して響いたのを聞き、智宏はとりあえず葉鳥への対応を終えたものとした。

気絶した葉鳥から金属の入ったかばんを遠ざけた上で、本人を森の中に放り込むだけの単純な作業。だが森にはミシオが仕掛けたトラップ、このあたりなら拘束系のトラップが大量に仕掛けられているため、拘束の手間はそれだけで十分だった。

「それにしてもこの時間に海とは盲点だった」

考えてみればミシオの家に着いたのは夕方頃。森に入ったのはもつと前になるので確かとは言えないが、ひよつとすると智宏が来たのは夜に海に潜るために家を空けた直後だったのかもしれない。流石の智宏もまさかそんな形で入れ違いになるとは思いもしなかった。

（流石に【集積演算】スマートブレインがあってもそこまでは分らんか）

【集積演算】スマートブレインというけた外れの異能を持っている智宏ではあるが、『頭が良くなること』『』『すべてのことがわかる』と言う訳ではない。記憶力は上がっても知らないことまでは思い出せないし、基本的には元からある思考能力の上昇であるため、通常の智宏がいくら考えても出せないような答えは出せない。そういう意味では盲点を突かれると言うのは対策のしようのない【集積演算】スマートブレインの攻略法だった。意図してやったわけではないだろうが。

「とにかく、海岸へ……！！」

森を抜ける、村を経由する。二つの選択肢の中からすぐさま後者

を選び智宏は走りだした。今から森のトラップを攻略している暇はない。

「くそ、こんなことなら通信機を置いてくるんじゃないかった」

連絡手段がない現状、レンド達に救援を求めるという方法は使えない。連絡を取るなら森の中のミシオの家や、暦波町にあるレンド達のアジトなど余計な時間をかけなければいけない場所まで向かわなければならぬ。事が一刻を争う現状、救援を求める暇などないに等しかった。

（とにかくミシオの安全確保が最優先だ。海まで全速力で向かって無理やりにもミシオを連れ帰る！）

そう決意すると、智宏は背後に【空圧砲】エア・バスターの魔方陣を展開し、気功術と組み合わせた最高速で走りだした。

暗黒の海の中に一筋の光を差し込み、その明りを頼りに海の底を目指す。

何も何十メートルも底を目指しているわけではない。明るい時間ならば水上からでも底を見ることができるような深さだ。

だがその程度の深さの海でも、夜ともなればヘッドライト無しではほとんど視界の利かない海となる。そんな海を安全に泳ぐには、ある程度の経験と勘が必要だった。

（……やっぱり、泳ぐのはいいな）

しばらく海から離れ、久しぶりに潜った海でミシオはそう実感した。今でこそ生活のために潜っている海だが、考えてみればその前はそんな理由が無くてもよく泳いでいた。

漁村生まれの子供にとつて海に潜って食べ物をとるなどということとは日常的な遊びだ。実際ミシオも、幼いころは良く潜って貝や海藻などを取っていた。魚をとるようになったのはごく最近だが、それも小さいころにカイルがよくやっていたのを真似し始めたのがきっかけだ。彼の場合、己の能力を利用していたので完全にまねできる芸当ではなかったが、結果としてその経験が今のミシオの食卓を賑わし、少ない収入源として機能している。

(今日はこれくらいにしようかな)

手にした貝を腰につけたタンポ呼ばれる袋に入れ、ミシオは今日の漁を締めくくりにした。すでにタンポの中には森でついた魚や、海藻、貝などがごちゃ混ぜに放り込まれて入る。これ以上泳ぎに支障をきたす恐れがあるほどの量だった。

現在のミシオの格好は、学校指定の水着に様々なものを付け足した奇妙なものだ。髪を手拭いでまとめてその上から海中用のヘッドライトをつけ、顔には磯メガネ、手足を傷付けないために足袋と手袋をつけ、水着にベルトを縫い付けて貝を岩からはぎ取るための磯ノミヤ、魚をとるために使う鋸、獲物を入れるタンポなどをくくりつけている。

(そう、後たった三十五日。それだけ。三年も頑張つて来たんだからこれくらい)

想定外の事件には巻き込まれたが、残りの日数わずかだ。最悪二週間くらいなら森の中に立てこもって過ごすこともできる。そう考

えれば、この程度なんてことはない。

消沈しかけていた気分を盛り返し、ミシオはゆっくりと浮かび上がる。心地よい水の温度を肌で楽しみながらも、優しい海に抱かれる感覚を体に染み込ませる。

ミシオとて決して海を甘く見ているわけではない。夜に潜ることに危険性もよく分かっているし、何よりミシオの両親が海によって死んでいるのだ。

だが、それに対して思うところはほとんどない。海とはそういうものであり、注意を払うべき相手ではあっても、恐れ憎むべきものではないと言うのが祖父の教えだ。

(うん、がんばろう。そうすれば全部うまくいく)

決意を固め直し、水の中から顔を出す。空気を吸い込み、月明かりを目にしたそのとき。

(!?)

目の前の陸地、その向こうからかすかに魔力を感じる。異世界で何か(・・)をされたときから感じるようになったその感覚は、その後も断続的に陸の上で起こっているそれをミシオに伝えてきた。

(……なに？　これは……、魔術？)

異世界人がこの世界で活動しているということは知っている。彼らが決して危険な存在ではないこともだ。だが連続で感じる魔力の感覚は、異世界の森で垣間見た魔力による戦闘と同じようなリズムを作っていた。

先を争うような、魔力を使い続けなければならぬとでもいうような、息つく間もない魔力感覚の連続。

(なに……?)

と、ミシオの注意が完全に陸地を向いたそのとき。

「っ!! ガボっ!!」

いきなり足につかまれるような感覚が走り、体が一気に水面に沈みこんだ。

慌てて息を止め、自身の足元を確認する。

(っ!! いつの間に!!)

足元にいたのは漆黒のウェットスーツを着た人間だった。体格から見て恐らく男。背中酸素ボンベから伸びたマスクと、水中用のゴーグルによって表情までは覗えないが、右手でしっかりとミシオの足を掴んでいる。

それが何を意味するかは直感でわかった。

(はな、して!!)

相手の意図をすぐさま察し、ミシオは腰にさした鋸に手を伸ばす。海に潜っていてこついつた危険な行為を受けたことは以前にもある。流石に海の中にまで入ってきたことまではなかったが、こつなることを予想していなかった訳ではない。

水中で狙いを定め、掴んだ鋸を下に向けて槍のように突き出す。

狙いは相手の手首。相手が足から手を放しさえすればどこにでも逃げられる。

ミシオの素早い対応に、驚きで口から気泡を吐き出しながらウェットスーツの男は慌てて手を放して引っ込める。

銚がなにもない水中を貫くと同時、ミシオは身を反転させて陸に向って泳ぎ始める。同時に腰のタンポに手を掛け、

(さよなら、今日の晩御飯!!)

内心で涙ながらに獲物の数々に別れを告げながら、タンポをベルトから外して水中に捨てる。こと逃げることに集中しなければならぬこの状況では今晚の夕食といえども邪魔にしなければならない。

しかしそれは同時に、そういった邪魔さえなければ逃げられるということでもある。ミシオにとって夜の海を泳ぐことは日常的な行為だ。暗い海を泳ぎ慣れていない人間よりはるかに速く泳ぐ自身があるし、何より相手は重い装備を背負っている。単純な泳ぎの速度で負けるはずが無い。

だが、

(!!)

予想に反していきなりミシオの足が掴まれて引っ張られ、さらにはものすごい速さで水中を移動する。

見れば先ほどの男がミシオの足を掴み、ありえない速さでおきに向かって泳いでいた。

まるで漁船か何かに引き摺られているかのような勢いで引っ張られた少女の体は、それによって襲ってくる水の勢いによって抵抗すら許されずに陸地から離されていく。

(い、息が……!!)

口から空気が急激に漏れるのを必死に手で押さえながら、ミシオは相手が何らかの能力者であることを察した。恐らくは念動力系サイコキネシスの能力者だろう。どういう能力でどう使っているのかは正確には分からないが、水中でのこうした応用法はそう珍しいものではない。実際、村にも能力を使って漁をする人間が存在している。カイルなどその典型だ。

だがこの状況はまずい。いかに泳ぎがうまくても結局は地上に生きる少女でしかないミシオにとって、水中で念動力系サイコキネシスの能力者を相手取るなど自殺行為だ。

加えて呼吸が巨大な問題となってくる。相手は酸素ボンベで長時間の水中呼吸が可能なのに対し、ミシオはすでに肺の中にあつた空気を吐き出す事態に陥っているのだ。胸の中で肺が悲鳴を上げている現状、なんと少しでも一度水上に上がる必要がある。

(手を、放してエー!!)

心の中で悲鳴に似た絶叫をあげ、ミシオは通念能力テレパシーを使用する。送りつけるのは自身の感覚。胸を締めあげる、呼吸不能の苦痛だ。

『!!』

再びボコリ、と泡を一つ吐き出し、男はその場で胸を抑えて急停止した。狙い通り、送られた感覚を自身の感覚と錯覚し、ミシオの足から手を放す。

(今!!)

自由を取り戻した体に力を込め、異世界で手にした黒い霧で体を覆う。水中にも関わらず、霧のような形状を保つその魔力によって自身の身体能力を底上げし、ミシオは一気に水上を目指して泳ぐ。

だがそれは、

(……もう気づかれてる!!)

視界のはし、混乱した様子を収め、こちらに向き直る男の姿があった。

自身の感覚を送り付け、実際に感じている感覚と誤認させることのできる感覚投影だが、その効力は気づかれてしまえば意外と脆い。自分の感覚でない気がついてしまえば、そんな偽物の感覚、簡単に無視できてしまうからだ。

水上まではあと一メートルもない。だが、その距離は今のミシオにとってあまりにも遠い距離だった。

男がミシオに右手を向ける。

(!?)

一瞬の空白、

そしてその後、強烈な圧力が少女を水面からひきはがした。

(う、ああ!!)

急激な水の流れに成す術もなく巻き込まれ、少女の体が水中で振り回される。その軌道は男を中心に渦を巻き、呼吸のできないミシオをめちやくちやに翻弄する。

(……ため、らった?)

だがその状態で、ミシオは自身に生じた一つの疑念に思考を囚われていた。

(それにこの能力……、まさか……)

疑念が少女の心を蝕み、水の流れが少女の体から体力を奪い去る。渦がおさまるところには、すでに泳ぐ体力は奪われ、酸素が尽きかけていることよって意識すら危うい状態になっていった。

(液、体操作……)

だが、それでもミシオの意識は一つのことに向いていた。消えゆく渦の中心にいる男、見ようによっては躊躇い、悲しみ、何かの葛藤に苛まれているように佇むその男が、ミシオにはまるでよく知る人間であるかのように見えたのだ。

(まさ、か……)

視界が歪む。

意識が霞む。

だがそんな中でも、ミシオの目は男のゴーグルの向こう、涙をにじませ、目を充血させた青年の顔を捕らえていた。

(カイ、ル……!!)

ミシオのよく知る人間が、

兄のような人物が、

村で家族と過ごしているはずの青年がそこにいた。

(どっ、して……!!)

少女の胸が激痛に軋む。

肺に流れ込む海が命を削る。

消えゆく意識の中で、少女は悲痛な痛み以身を裂かっていた。

9：襲撃の渦（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

10：夜の始まり

暗い海の中を沈んでいく。

それが、ミシオの意識が感じた感覚だった。

丸で光の届かない深海に向かって沈んでいくような感覚。それ自体には不思議と苦痛はなかった。呼吸も水圧も問題を感じることはない。まるで海の一部になったような奇妙な感覚。

ただ、周りに魚の一匹もない、暗い水中にミシオ一人しかいないと言つのが少しさびしかった。

ふと、はるか上、恐らくは水面があるであろう場所から明かりがさしこむ。暗い海の中で唯一深海まで照らすような明るさを持つその光は、気付くと光ではない、別の形をとっていた。

最初に現れたのは両親、幼いころになくなったため、目元などがいまいで良く見えない。

次に現れたのは祖父。両親が泡となって消えてしまった後に現れたそれは、ミシオに小さく笑いかけた後同じように泡となって消えてしまった。

そこに来てようやくミシオは悟る。今見ているのは自分の走馬灯なのだ。おそらく今自分は死に向かっているのだろうと。

そしてその原因も思い出す。自分を殺した青年の、苦痛と悲しみに彩られた表情も。

怒りは湧いて来ない。彼の行為の理由は大体予測できる。それによって生まれる感情は怒りではなく、こうなることを防げなかったことに対する悲しみだけだ。結局自分は平穩の中で生きていてほしかった人すら、自分の問題に巻き込んでしまった。

と、そこまで考えたとき急に目の前の光が熱を帯びた。体が急に熱を取り戻し、同時に目の前の光が再び誰かを形作る。この局面でまだ出てくる人間がいることに驚きながら、ミシオはその姿を確認した。

誰だかはハッキリとは分からなかった。だがその姿は今までの三人と違いはつきりとした実態を持っているように感じる。加えてその様子も、こちらを見ているだけではなく、まるでこちらに手を伸ばしているように感じられた。

(誰……？ 見覚えが……、ある)

そう感じ、ミシオはノロノロと手を伸ばす。戸惑いを抱えながら、それでもゆっくりと手を近づけていくと、相手の手が、待ち切れないとばかりにミシオの手を掴んだ。

その瞬間、大きな波が砕ける音とともにミシオの意識は覚醒した。

「あ……これ……？」

目を覚ましたミシオはしばし自分の置かれている状況が理解できず、横になったまま呆然としていた。目の前には自分の寝ていた大きな岩場。ゴツゴツとしながらもある程度平らなその場所は、昔海で遊んでいたところによく集まっていた思い出の場所だ。

「……ん」

起き上がり、右手に若干のしびれを覚える。どうやら右肩に左手を置き、それを枕にして眠っていたらしい。どうやらミシオは左手と左足を前に投げ出すようにして横倒しに寝ていたようだ。奇妙な寝像だったが、今自分が置かれている状況を考えるとあまり問題に

はならない気がした。

「なん、で？ 私……？」

ゆつくりと記憶をたどっても、最後に思い出すのはカイルの悲痛な表情だ。それを思い出すだけで巻きこんだ申し訳なさと胸がいつぱいになるが、あの状態がどうして今のこの状況に繋がるのかがよく分からない。

と、そこまで考えたところでミシオは、自分が着ている改造した学校指定の水着に一つの異変が起きていることに気が付いた。

「……え？」

自分の胸元、本来名前を記入する場所にはさつきまではありえない光景が広がっていた。

眼に飛び込んできたのは薄めたような赤色。鼻をつくのは弱いながらも明確な鉄の臭い

胸元に広がるそれは、通常ではありえない血痕だった。

「なに……、これ……？」

少女の思考が一気に混乱で満たされる。自分がここにいる理由だけならともかく、いくら何でも血痕の理由までは到底想像できなかった。

魚の血、という可能性が頭をよぎる。それならいつも捌くときによく見ているし、別段珍しくもない。だがミシオには、水着に付着したそれが、もっと別の危険な事実の証に思えてならなかった。

「よっ、お目覚めかい？」

「しない。絶対」

「おお、おお、言い切ったねえ。その血塗れの理由も知らないで」

「……………!!」

何かを知っているような口ぶりに、ミシオの心臓が跳ね上がる。この血がいつたい何のものなのか、猛烈ないやな予感がミシオを襲ってくる。

「何を、知ってるの？」

「何でもしてるぜえ。お前がこの十日間どこにいたのかとか」

「っ!! まさか」

その言葉を聞いた瞬間、ミシオ自身考えていたことが的中したことを悟り、同時に怒りを湧きださせる。だがその怒りは次にエイガが口にした言葉によって粉々に砕け散った。

「俺の後ろに誰が、どんな状態で転がっているかとか、な」

「……………え？」

言つて、エイガは一步、その身を横にずらす。その向こうにあつたのは、黒いはずのウェットスーツを赤く染め、体重を岩の一つに預けるカイルの姿だった。

「カイル!!」

慌てて彼のもとへと駆け寄り、その生死を確認する。意識はなく、腹にある傷からはおびただしい量の血が流れてはいるが、どうやらかろうじて生きているらしい。ミシオは頭の手拭いを解くと、止血のために腹に巻きつける。ウェットスーツの隙間からは、鋭い刃物で切りつけたような傷が三本見えた。

「さすがにもう意識はないかあ？ さっきまではまだかろうじて意識があつたんだが……。それにしても便利だなそいつの能力。海水だけじゃなく血液まで操って止血ができるなんて。確か液体を操作できる能力だつたっけか？ 形は違えど通念能力者テレパシストに分類される俺たちとしては憧れるものがあるよなあ」

「……………どうして」

「んん？」

「どうしてこんな、酷いこと!!」

「酷いこと、ねえ？ ……ウツクツクツク、アアツハツハツハ!!」

最初は嘔き出すように、しかしどんどん声を上げてエイガは笑う。その笑い方が、ミシオにはどうしようもなく嫌な予感を抱かせた。考えてみればエイガが今まで何の考えもなくミシオの前に現れたことなどないのだ。彼が来るときは、必ずミシオにダメージを与える方法を携えてやって来る。

「酷いこと!! ああ、酷いこと、ねえ。ウツクツクツク!! ああ、そうだ。本当にそいつは酷い!! ……でも、」

腕を広げ、わざとらしい手振りをつけてエイガは笑う。そしてその後、急に笑うのをやめ、残酷な笑みを浮かべながら決定的な一言を口にした。

「それをやったのはお前じゃないか」

「……………え？」

放たれた言葉の意味が分からず、ミシオの思考が一瞬停止する。だが、次の瞬間にはエイガの言葉を質の悪い嘘だと判断した。実際エイガは嘘をつくのがうまい。これもミシオが傷付くのを見るための残酷な嘘だろう、と。

「おいおい、信じてないって顔だな。根拠はなんだ？ 自分はそんなことしないっていう自信か？ それとも凶器の有無か？」

「……………両方」

そう、実際それが明確な根拠でもあった。自身への自信もそうだが、特にミシオにはカイルにあれだけのけがを負わせられるような凶器がないというのは決定的だ。漁に使う道具はあるが、一番危険な銚を使っても、あそこまでの切り傷は与えられないだろう。第一銚自体、海の中でなくしてしまっている。ミシオにはカイルを傷つける動機はおろか方法すらない。

だが、そこまでのことが分かっているにもエイガは嘘をつくのをやめない。

「おいおいおいおい、何それ？ マジで言ってるの？ もしかしてあれ？ 無自覚に覚醒してましたってやつ？ かあつくいいい！！！」

「なに、言ってるの!？」

「俺たちの話をしてるんだよ。俺たちに凶器なんて必要ない(・・・)って話をな」

「必要……、ない？」

意味の分からない発言の数々にミシオは混乱を隠しきれない。本当なら大急ぎでカイルを医者のある暦波町に運ばねばならないと言うのに、エイガの話が気になってしょうがない。まるでここで聞き逃すことが致命的なまでに危険な話であるかのような予感がどこからともなく不気味に湧きあがってくる。

「お前もいい加減自覚してるんだろ？ それとも見せた方が早い
か？」

「何を
」

「おれたちがとづくに、人間超えた存在だつてことをだよ!!」

瞬間、エイガの体から魔力が吹き荒れる。それは見覚えのある黒い霧のような魔力。ミシオが異世界で押し付けられた、違法な実験の完成系。それが目の前で自身の敵対している相手から噴き上がっていた。

「魔力属性は(・・)妖属性。こいつは『とある条件下で生物が死ぬときに発生する特殊な魔力』なんだそうだ」

その霧を纏い、エイガは霧の正体を口にする。その表情は明らかに楽しそうで、同時に目の前にいるものを獲物としか見ていない残

酷な獣のものだった。

「この霧は生物が死ぬときに、その生物の生前への未練によって変質することで生まれるんだよ。そして俺達は、こいつを体内で生み出すことによって、霧以上の効果を発揮できるようになっている」

「霧、以上……？」

思考がマヒしかけ、追いつめられるような心境の中で、ミシオは無意識に聞き返す。必死で目をそらしていた事象にどンドン焦点があつていくような感覚に全身から冷や汗が流れ出る。

「生物が死ぬときに生まれるこの霧は、俺達の体で生み出されるようになった今でも、その生物の生前の姿を覚えている！ 故にこの霧はただの霧の状態でも筋肉に近い役割を果たすし、こうして集めて密度を上げてやれば」

言葉に従い、霧がエイガの腕で密度を増す。さらにそれだけではとどまらず、だんだんとはっきりした形を取り始め、色も黒から薄い緑に変わり始めた。そしてその形は筋肉を再現するように盛りあがる。

「おれたちの意思一つで、生前の姿を、取り戻す！！」

現れたのは鱗だらけの腕だった。その太さはゴリラよりも太く、その五本の指の先には鋭いかぎ状の爪が輝いている。その腕に、ミシオは見覚えがあつた。

「……ダイノロイド 竜猿人！！」

そしてエイガは、その正体を見せつけるように全身を魔力で包みこ

み、腕と同じ別生物のそれへと姿を変える。

顔の部分以外を変貌させたそれは、異世界で出会った人に近い、けれど決して人とは交わらない生物だった。恐竜が進化した猿人。時に人を襲い、引き裂き、喰い殺す猛獣の姿がそこにあった。

「これがこの力の本当の使い方、『妖装』だ。ついでに言えば、あいつ等はこの能力を持った人間のことを『悪魔憑き』なんて呼んでやがったよ。実験に使ってたこの生き物が、異世界の人間には悪魔みたいに扱われてたからってさ。さて、おまえは何の生き物だ？ 化け物らしく正体を見せてみるよ」

「……あ」

「それとも正体も知らないのか？ なら少なくとも爪のある生き物だろうぜ。っそうじゃなくちゃそんな傷はつけられない」

「……ああ」

言われ、ようやくミシオは見ないようにしていた疑問を自覚する。異世界の研究所から逃げだすとき、彼女は拘束衣によって身動きを奪われていたはずなのだ。なのに、逃げだす直前に自覚めたときには拘束衣の袖はズタズタに切り（・）裂か（・）れ（・）て（・）い（・）た（・）。いくら霧によって身体能力が上がっていたとしても、刃物もないのにあんな結果を出せるはずがない。

つまり、ミシオにはあったのだ。分厚い拘束衣の生地も、拘束するベルトも、そして何より人間一人を引き裂けるだけの鋭い爪が。

（でも、そんなはず……！！）

自分が何にショックを受けているかも気がつかぬまま、ミシオは

カイルの腹の傷に視線を戻す。そこにあるのは何かで切り付けられたような二本の傷。まるで爪か何かで切り付けられたような傷跡だった。

（私が、斬りつけた？ エイガの言う【妖装】で？）

呼吸がうまくできず、ミシオのひざから力が抜ける。立て続けに起きたショックな出来事が、見ないようにしていた自身の体の変質が、そして何より、ずっと耐えてきた反動が一斉に心を追い詰める。

「いいねえ、その表情！！ さっき見た（・・・）カイルに殺されかけてたときの顔も最高だったが、今の表情は過去最高だ！！」

そんなミシオを見て、エイガは歓喜に打ち震える。手に入れたかったものをようやく手に入れたとも言うように愉悦を顔に浮かべ、ゆっくりと右手を持ち上げると、岩の上に崩れ落ち、目を見開いて浅い呼吸を繰り返すミシオに、エイガはゆっくりと近づいて来る。

「……………あ、ハア……………、ハア……………、ハア……………、うっ、ハア……………、ハア……………」

「じゃあなミシオ。長いこと楽しませてはもらったよ。礼を言っぜ」

そう言って巨大化した腕を振りかぶる。逃げなければという考えが浮かぶのに、気力も手足もそれに応じない。

だがそれはが振り下ろされる直前、付近の森から響いた轟音がその動きを阻んだ。

「な、なんだ!？」

反射的に音の発生源を確認する。場所は岩場から少し離れた森の中。そこからどういふ訳か、何かが発火でもしたように煙が上がっている。

そして気が付いた瞬間、粉塵を突き破り、額に刻印を輝かせた少年が背後に魔方陣を展開しながら突っ込んでくるのが見えた。

「ミシオオオオオオ!!」

走る少年は叫びと共に、目の前に魔方陣を展開し、打ち出した炎弾をエイガに直撃させた。

10：夜の始まり（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

11：盗撮眼

「ミシオオオオオオ！」

敵を振り切り、森から飛び出した智宏の目に飛び込んできたのは、探し求めた少女と、想像だにしない状態の二人だった。

一人はサデンエイガ。とはいえそうと判るのは、顔の部分のみがエイガの顔をしていたからであって、生物としての形状は異世界で出会った怪物のそれに近い。

(……この魔力の感覚!! ミシオが押し付けられた力と同じものか!!)

相手の状態が見知った魔力によるものと看破すると同時に、智宏は自分の予想が当たっていたことを確信する。

それと同時にもう一人、ミシオの背後で血まみれになって倒れるその男にも、智宏は見覚えがあった。

(あいつ! さ(・)っ(・)き(・)の(・)!?)

先ほ(・)ど(・)会っ(・)て(・)別れ(・)た(・)ば(・)か(・)り(・)の(・)男が血まみれになって倒れているという事実には智宏は混乱を覚える。今がいったいどういう状況なのかよく分からない。

だが、そんな中でも一つだけ確かなことがあった。ミシオに向けて振りかぶられた腕、そのたった一つの要素のみで、智宏は今すべきことを判断した。

(術式展開

【銃炎弾】!!)

ファイア・バレット

手の先に魔方陣を展開し、エイガの顔面を狙って発砲する。生み出された炎弾はしかし、直前で顔を覆った鱗だらけの腕に直撃して爆発した。

「チイツ、あいつ等何やってやがる！！ どいつもこいつもしくじりやがって！！」

とつさに顔を守った腕から黒い煙が上がるのを無視し、エイガは体勢を整える。だがその頃には、智宏もエイガの懐に潜り込んでいた。

(術式展開)

「くうっ！！」

(エア・バスター【空圧砲】！！)

腹を狙い、右手で突きつけられた魔方陣から莫大な空気が吐き出される。エイガの体が後ろ向きに押し出され、強力な圧力に身をくの字に折る。

「つてえなあこの野郎！！」

だが、エイガはその圧力に耐えていた。空気の塊に打たれた場所が黒い霧に戻って霧散し、それによって肉体へのダメージを軽減している。両足にも力を込め、数歩分後ろに下がっただけで圧力にあらがっていた。

「だったら」

それに対し、智宏はもう一度距離を詰めて左手を振りかぶり、もう一度魔方阵をエイガの腹に叩きつけることで答えた。

「もつと痛がれ!!」

(術式追加展開 エア・バスター 【空圧砲】!!)

「グオオオ!!」

両手に同じ魔術を発動させ、倍加させた空気圧をエイガの体に叩きこむ。エイガも足を踏ん張り、魔力の体を霧散させることで踏みとどまるうとするが、倍加した圧力にはさすがに耐えられなかった。踏みとどまる力を空気圧が上回り、エイガの体を宙に浮かせる。

「邪魔を、しやがってえ!!」

怒りをにじませた声をあげ、エイガの体が派手な水しぶきと共に海に落ちる。だがそれで安心する訳にはいかなかった。

(とにかく急いでここを離れない!! ぐずぐずしていると。(う)(・)(一人の)(・)方がやってくる!!)

身を翻すと、こちらを呆然として見ているミシオの姿が目に入った。その表情にはどこか覇気がなく、こちらの様子を見ても動く気配がない。

「行くぞミシオ!! とにかくいったん森に入る!」

「トモ、ヒロ? ……私」

「話はあとだ。こっちの男の手当てもしないといけない」

ミシオの反応が予想以上に鈍いことを不審に思いながらも、智宏はこの場を離れるべく動きだす。右手に【土人形の鉄腕】ゴレム・アームを発動させ、現れた鉄腕でグツタリとした男を拾い上げると、

「……ヒヤッ！」

迷った末に、同じ要領で立ち尽くすミシオの体をも一緒に抱えあげた。

魔術の腕越しにミシオが身を擦る感覚が伝わってくるが、今は手段を選んでいる余裕はない。

気功術で全身の筋力を強化すると、智宏は両手に二人の人間を抱えて走り出した。目指すのは背後の森、しかし進行方向は出てきた場所とは六十度ほどズレた場所だ。

「逃がすんじゃないやねえ！！ とつとつそのガキを沈めちまえ！！」

(させるか！！ 術式展開)

背後の海から聞こえる怒号に、智宏は左手を上に向けて魔術を展開させる。警戒するべきもつ一人の敵に、今思いつく最良の一手を選択する。

(ファイヤーバードストライク 【火炎鳥襲撃】！！)

左手に現れた魔方陣から四羽の炎鳥が飛び出す。四羽の炎鳥は魔法陣に軌道を描くことで指示を与えると、素早くその身を智宏達の進行方向、その右側の海に次々と飛び込ませていった。

海面が次々に飛沫を上げて爆発し、同時に発生した蒸気が周囲を包みこむ。たとえさ(・)っ(・)き(・)の(・)男がどんな能力の持ち主でも、姿が見えなければ狙うことはできない

「てめえこのガキイ！！ どこ行きやがったあ！！」

背後で怒号が上がるのを聞きながら、智宏は森に向けて疾走する。目くらましにした蒸気のおかげで視界は利かないが、【集積演算^{スマートブレイン}】によって強化されて記憶力によって地形や距離は正確に覚えている。立ち込めた蒸気が海風に散らされる頃には、智宏達は森に飛び込み姿をくらましていた。

栄河が岸に泳ぎ着いたときには、すでにミシオとカイルはどこかに連れて行かれた後だった。どうやらあの刻印使いの少年は、目の前の栄河を吹き飛ばしたあと、わき目もふらずに逃げ去つたらしい。

「……………くそ！！」

悪態をついて全身を覆う魔力を体内に戻し、元の姿に戻る。どうやらこの魔力で体を覆っている間は、内側は高いレベルで密閉されているらしい。海に落ちたはずの体は湿り気一つなかった。服が濡れる事態にもなっておらず、唯一濡れているのは露出していた顔面のみだった。

だがそんなこと、今の栄河には何の慰めにもならない。

「……………んでえ？ お前は今までどこで何してたんだよ？ まさか目

の前で逃がしやがったのかあ？」

「言われた通り、協力者葉鳥の回収に」

栄河が睨みつける先、帽子を目深にかぶった渦と名乗る男が、みすばらしい姿となった葉鳥と共に立っていた。二人の姿は対照的で、渦の方は服に汚れ一つないのに対し、葉鳥は全身泥にまみれ、服も髪も焦げ、縮れてひどい有様だった。そして表情は無表情な男に対して葉鳥のそれは怒りと屈辱に歪みに歪んでいる。

「……エイガア、てめえどういうつもりだ？」

「なんだよ？ てつきりミスった言い訳でも聞かされるのかと思ったら随分強気じゃんか」

「ふざけんじゃねえ！！ てめえ、相手が能力者だって何で黙ってた！？ おかげであたししゃあこんなありさまだ！！ どう埋め合わせしてくれんだよお！！」

「別にあいつは能力者ってわけじゃないんだけどね。じゃああなたって言われたら俺にもよく分からないんだけど。刻印と魔術を同時使用できる奴なんて聞いたことないし」

「ああ！？ 何を訳の判らないこと言ってるんだ！！」

「まあ、わからないだろうな。俺としても町で見たときよくわからなかった。その辺を調べようと思ってお前に任せただけど、手加減されてみたいだし、あんまり参考にはならなかったよ」

「……てめえ、まさか覗い（・）（て）（・）（や）（・）（が）（・）（っ）（・）（

た(・)の(・)か(・)？ いや、それより今の言い方、まるであたしを嘔ませ犬にしたみたいじゃないか？」

葉鳥の表情がどんどん険悪なものに変わっていく。それまで自分を倒した少年へも向いていた怒りの矛先が、今栄河ひとりに集約し行くのを感じる。

そう感じた瞬間、栄河はそれがどこまで持つかを試してみたくなった。この女がどこまで敵対的な態度を取り続けられるか。それを試すために言うべきセリフは一つしかない。

「ああ、そうだが何か？」

「てつめえ！！」

案の定、葉鳥の怒りが限界を振り切る。それを表すように葉鳥のホットパンツのポケットから一本のビスが飛び出し、栄河に葉鳥が付きつけた人差し指の先で高速で回転し始めた。恐らく先ほどの少年との戦いで見せた、能力を集中させて威力を上げる技だろう。

「ネジ穴開けて詫びなあ！！」

憤怒によって放たれるビス、だがそれが着弾するはずの栄河の脇腹は、発射される直前に黒い霧を上げて右に移動していた。

慌てて照準を変えようとする葉鳥を、栄河はその鳩尾に膝を打ち込むことで無力化する。

「う、あ……！！」

直前の威勢はどこへやら、葉鳥はたまらず膝を折り、地面にへたり込む。その姿は栄河が望む姿とはかけ離れた、あまりにもせい弱

なものだ。

「なん、で！？ てめえが、あんなにあっさり避けられるはずは…
…。っていうかなんだよその黒い霧みたいなの！！ お前の能力は
他人の視界の盗み見だったはずだろう！？」

「軌道が読めていても避けられないような一撃で仕留める。【盗撮
眼】<sup>ハッキング
アイ</sup>を知ってるお前の手並みはさすがというべきだが、生憎と俺、
もう超人なんだよ」

他人の見る視界を盗み見る。他人の脳内と情報をやり取りできる
^{テレパシー}通念能力系能力の、視覚の受信に特化した極端な限定能力。それこ
そ栄河が勝手に【盗撮眼】^{ハッキング・アイ}と呼ぶ能力の正体だった。

今の攻撃も葉鳥の視線から狙う位置を読み、攻撃を避けるという
単純な方法で避けたにすぎない。

だが、これには大きな問題がある。いくら栄河が相手の視界から
攻撃される場所を読み取れても、攻撃が栄河の動きより早くては意
味がない。だからこそ葉鳥は威力と共に速度も速い一撃で仕留めら
れると踏んだのだ。

その予想を、異世界で得た力が軽々と覆す。黒い霧によって上が
った栄河の身体能力は、栄河の移動スピードを格段に上昇させてい
た。

「さあ、どうする葉鳥？ もう少しどうにか頑張ってみるか？」

右腕に魔力を集めながら、栄河は答えの分かり切った質問をぶつ
けてみる。またも予想通り、葉鳥は何も言えずあとずさることしか
しなかった。

余りにもありきたりな反応に、栄河は右腕を異世界の生物のそれ
に変え、葉鳥の腕を掴んで、思いつき握り潰した。

「ぎゃがああああああ！！」

無残な音を立てながら骨を折られていく感覚に、葉鳥はたまらず悲鳴を上げる。

栄河が腕を放してやると、葉鳥は腕を抱えるようにして足元の岩場にへたり込んだ。涙と鼻水でたださえ滅茶苦茶な顔をさらに滅茶苦茶にし、奇妙な形に変形した腕を見ながら泣きじゃくる。随分とお粗末な、何とも見飽きた光景だった。

「やっぱりお前じゃあこの程度か。難易度が低くて張り合いがないな」

思わず口にし、異生物の手でうずくまる葉鳥の頭を鷲掴みにする。するとようやく自身のおかれた状況を悟ったのか、葉鳥が手の中で狂ったように喚き始めた。それによって栄河の興はどんどん冷めていく。

「飼い主の命令を聞けないばかりか、やたらと吠えかかる犬に要はないよ」

「やめでえ！」「ごろざないでえ！！」何でも言うつごどぎぐがらあああ！！」

汚い悲鳴を無視して栄河は葉鳥を持ち上げる。始末しようかと思っただけで逡巡するが、すぐに泣きわめく葉鳥に不快感を覚えてその体を海に叩きこんだ。妖怪によるバカ力に任せて水面に叩きつけられれば命にもかかわるが、エイガにとってやっていることはただのゴミの投棄にすぎない。

「回収しますか？」

「する訳ねえだろ。どういふ脳ミソしてやがんだ。ほっときゃあいいんだよ」

今の状況を見てなお的外れなことを聞いてくる渦に栄河は軽い苛立ちを覚える。だが流石に葉鳥とこの男では格が違う。ミシオが連れて行かれ、段取りを最初からやり直さなくてはならなくなった以上、ここで迂闊に手放すわけにもいかなかった。

「ってそうだ、そっぴやあ何であのガキがこつち来たんだよ？ 確かに葉鳥の回収はさせたし、見張ってるとも言わなかったが、それはお前があがキはしばらく動けないって言うからだぞ？ 話が違っじゃねえか？」

「それに関しては弁解のしようもない。あの状態で脳震盪も起こさずまともに動けるとは、こちらとしても予想外だった」

「何が予想外だよ何が。それとも何か？ 刻印使いつてのはそんなところまで別格なのか？」

「否、刻印使いといえども脳の構造は変わらない。脳を揺さぶればそれ相応の影響が出るはずだ」

「じゃあやっぱりお前のミスだったんじゃねえか」

機械的に回答する男にいい加減怒りを覚えながら栄河は振り返る。流石にこの相手でも二度目の失敗まで許す気はなかった。

「いいかあ？ お前の雇い主は今はこの俺だ！！ お前には俺の命

令を完遂する義務がある！！」

「理解している」

「だったら！！ 二度とあんな無様な仕事をするんじゃないやねえ。俺が指示した奴は今度こそ容赦なくぶち殺せ！！ でなけりゃあ、今度こそ金は払わんからな！！」

「了解した」

立場を利用した恫喝と言ってもいい言い草。だが、それに対する男の反応は実に機械的なものだった。

そのことのさらなる苛立ちを抱えながらも、栄河は次の方法に思考を移行させる。恐らく先ほどの三人を逃がしてしまったことで状況は白紙に戻ってしまったとみていいだろう。とはいえ、もともと思いつきで敢行した方法だ。うまくいっていたのは幸運と言っている。

「となると次は、もともとの計画通りに行くか。さつき見た様子じゃあ結構効果はありそうだし。よく考えりゃあ、あいつの魅力はあんなもんじゃない。次はもっといい表情を見せてもらおうか」

そう言ってエイガは歩き出す。当初の計画の舞台、魚寝村へ。

11：盗撮眼（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

12：偽られた重み

気功術を用いて血属性の魔力を流し込み、その上から包帯を巻いて出血を抑えこむ。それが智宏の行える唯一の治療法だった。

ミシオの案内のもと、再びミシオの住むツリーハウスまでたどり着き、そこにあつた救急用の道具一式を片手に、普段は調理などに使っているらしい手作りの木製テーブルの上で格闘すること約十分。どうにか傷がふさがり、カイルと呼ばれた青年は一命を取り留めた。

「やったぞ……、こん畜生!!」

同時に精神的な疲労が感情のぶり返しと共に襲ってくる。医者でもない智宏が他人の治療などが行えたのは、ひとえに【スマートブレイン集積演算】があつたからだ。でなければこんな血塗れの人間、見ただけで卒倒している。

もちろんこの処置はかなり応急的なものだ。元より智宏に医療の知識など無いし、無い知識が思い出せない以上、できたのは異世界で一度見た気功術という異能を使った強引な治療だけである。血を止めることこそできたものの、どこに不備が生まれているかなど分かったものではないし、何より失った血までは戻せない。血属性と**いうのはあくまで自己治療能力を高める効果を持つ魔力であり、失われた血液の変わりを果たす魔力属性ではないのだ。**

さらに言えば智宏の魔力属性は血属性を内包しているとはいえ、正確には全属性の魔力だ。これらが治療の効果にどのような影響を及ぼすか分からないため、これ以上の治療は、それこそ病院で、ちゃんとした知識を持つ医者が行うべき領域だった。

「ああ、くそ。魔力使いすぎた」

自身の魔力がかなり消耗していることを自覚し、木の根元にへたり込みながら智宏は額の【集積演算】^{スマートブレイン}への魔力供給を停止した。考えてみれば、昼間にミシオに合っただけというものの魔力を使いつぱなした。【集積演算】^{スマートブレイン}はほとんど常に使用していたし、気功術や、各種魔術など、今日一日でどれだけの魔力を使ったかは分かっただけではない。

それでも流石は刻印使いというべきか、体内にはまだ二割ほどの魔力が残っていた。だがそこまで魔力が減ると体を感じる倦怠感が半端ではない。これ以上の魔力使用はできれば遠慮したい状況であった。

（でも流石にまだそうはいかないよな。エイガたちもまだこっちを狙ってるかもしれないし。流石にこんな要塞みたいな森までは入ってこないと思うけど）

それすらもエイガのあの姿を見てしまうと定かとは言えない。やはりここは、できるだけ早くレンド達と合流するべきだろう。

「ってそう言えば、この家に通信機を置いて来たんだっけ」

携帯電話のないこの世界での唯一の連絡手段を思い出し、智宏は回収するべく立ち上がる。確か通信機は木の上のツリーハウスの中に置いたはずだ。これからどうするにしても一旦回収しておいた方がいいだろう。

「よっ、と」

木の上からたらされたロープをつかみ、木の上へと少しずつよじ登る。気功術も【集積演算】^{スマートブレイン}使っていない状態で登るのは、肉体的にも精神的にもきついものがあったが、それでも今日一日の軽技の

連続に慣れてきたのか、思いの外スムーズによじ登れた。

流石に家の中に下着姿のミシオがいるとは予想していなかったが。

「のわぁっ!!」

「え? ……ひゃっ!!」

互いに相手の存在に驚き、しかしすぐに相手がお互いの視界から消える。驚き、ツリーハウスの淵から手を滑らせた智宏が、真つ逆さまに落下することによって。

「うぉぁぁぁぁ!!」

悲鳴を上げて、慌てて木に登るためのロープをつかみ直す。【集スマ積演算イトブレイン】を使っていれば造作もない芸当だったが、使っていない今の智宏にとってはぎりぎりの判断だった。

「ト、トモヒロ! 大丈夫!？」

「あ、ああ。寿命が縮むかと思ったが。いや、それより……」

「……えっと、休んでろって言われたから」

「ああいや、こちらこそ、申し訳ない」

どうやらいつの間にか家の中で着替え始めていたらしい。途中から姿が見えなくなったことには気がついていたが、まさか着替えているとは思わなかった。

「えっと、その、何か用だったの? 何か必要なもの?」

「ああ、いや、とりあえず治療の方は終わったよ。病院に運ぶ必要はあるけど、こっちはひと段落だ。そっちに行っただのはそこにレンドに渡された通信機を残してたから回収しようと思って……」

「えっと、これ、かな？ ……分かった。着替えたら持つてく」

「よろしく頼む」

ロープを伝って木から下りながら、智宏は内心マンガのように物が飛んできたりといった過激な反応が来ないことに心の底から安堵していた。この状態でそんなことをされようものなら本当に地面に真つ逆さまである。最近なぜか危険な事態に直面し続けているが、こんなアホらしい危険で死ぬのは流石にご免だった。

地上に降り、カイルの眠るテーブルの側でミシオを待つ。だが厄介なことに世界を超えることで強化された智宏の聴力は、風による木の葉の音にまぎれて捉えずとも良い音を敏感に捉えていた。

布と布がこすれるような、どこことなく男の妄想を掻きたてるような微かな音。

(……………落ち着け僕。思い出すな。ここで思い出したら最低だぞ)

自分に必死に言い聞かせ、必死に平静を取り戻そうと奮闘する。だがそう思えば思うほど、先ほど一瞬だけみた光景が脳裏にちらついてくる。飾り気のないシンプルな下着に包まれた細身で、ある種の芸術品のような肢体。こんな生活をしていることが信じられないほど白い肌と、華奢なようできて引き締まった、余計なもの一切無い、人体の機能美とも言うような美しを持った肉体が……。

(落ち着けえ！ 本当に落ち着けえ！！ いや待て。考えてみたら

僕って【集積演算】^{スマートブレイン}があるから一度見た光景ならいくらでも……。うぎゃああー!! 待て!!
こんなことに刻印使うとか、冗談抜きで悪用だぞ!!」

「えっと、トモヒロ?」

「うわぁおー!!」

突然背後から声を掛けられ、たまらず智宏は飛び上がる。背後を振り向くと、昼間見た制服に身を包んだミシオの姿があった。その手には、先ほど取りに行こうとしていた装飾品のような通信機が握られている。

「えっと、探してたのは、これ?」

「え? あ、ああ」

差し出された通信機を慌てて受け取り、とりあえずポケットに放り込む。レンドに連絡を取るべきかとも思ったが、こちらからかける方法は【集積演算】^{スマートブレイン}を使わなければ思い出せそうにない。だが、この状態でそんなものを使えば思い出さなくてもいいものまで思い出してしまいそうだった。何より今はカイルを運ぶことを優先した方がいい。

「とりあえずミシオ、カイルさんを町の病院まで運びたいんだけど、早く運べる道を案内してくれないか? 見様見真似の気功術だけじゃ治療できてるかどうかも分からない」

「え……、あ、うん」

ワンテンポ遅れて帰ってくる答えに、智宏はわずかな引つ掛かりを覚える。海で再会したときから感じていたが、どうも今の彼女は心ここにあらずといった感じで、雰囲気もどこか覇気がない。逃げる上で必要な相手についての情報や、森の中を通るルートを聞くことはできたが、何があつたのかはいまだ聞けずじまいだ。

「こつち、来て」

それでも森を抜ける道に進み始めるミシオに、智宏もカイルを連れて歩きだす。カイルに閉じては背負つて歩くことも考えたが、傷に響くかとも思い、一瞬だけ【集積演算】スマートブレインを使って【土人形の鉄腕】ゴレム・アームを展開、その状態で掴んだまま歩くと言う手段を用いることにした。どうやらこの魔術、腕自体の重さや物を持った時にかかる負担を、何らかの手段で使用者から遮断しているらしく、下手に気功術を使つて運ぶよりも体力への負担が少ない。

だが、それでも人を一人抱えて森の中を進むのは困難極まりなかった。何しろこの森は地面以外の場所も歩かなければ目的地にもたどり着けないのだ。

片手のふさがった状態で木に登るのは困難を極めたし、巨大化した腕に人を抱えている状態では狭い場所の通行に難儀した。

ミシオ本人もできるだけ通りやすい道を選んでいようではあるが、そもそもこの森はミシオ一人以外が目的地にたどり着くことを防ぐためにトラップが仕掛けられている。最初から他人を抱えて通ることなど考えて作られてはいない。

そしてそんな中、二人で四苦八苦しながら進んでいると、いやでもミシオの思いつめたような表情が目に見え込んでくる。

「……ミシオ、大丈夫か？」

「……………うん」

声に変化はなく、しかし振り返らずにミシオは答える。その姿は、異世界エデンのレキハの森での出来事を思い出させた。考えてみればあのときと状況が若干似ている。

智宏は知っている。少女が他人の悪意や劇的な状況で、それに立ち向かえる強さを持っていることを。実際、異世界での彼女の適応力や、この世界での驚くべきたくましさは、それを証明してあまりあるものだ。

だが同時に、智宏は少女の脆さも知っている。身を守るために自分自身に強さを強い、虚勢を張り続けている彼女が、その身の内で悲鳴を押し殺していることを智宏は知っている。他でもない彼女自身が、その限界を超えて漏らした悲鳴を、偶然とはいえその耳で直に聞いているのだ。

「何があつた？」

だからこそ智宏は思う。彼女の脆さを知っている自分が、彼女の悲鳴を聞いてやるべきなのではないかと。

「何を言われた？」

だからこそ智宏は思う。自分の役目は、悲鳴を押し殺そうとする少女に、ちゃんと悲鳴を上げさせてやることなのではないかと。

「……………」

沈黙が森を支配する。目の前の少女の背中に迷いが見える。過ぎたことをしたと思う。踏み込み過ぎたと後悔する。だがそれ以上に智宏には、ここでこれを聞くことがこの世の何よりも重要だという確信があつた。

恐らく聞かなければ、もっと取り返しのつかない事態になると。

「……戻れないって、わかったの」

あまりにも長く感じられる沈黙があった後、囁くような小さな声で、ミシオはそんなことを口走る。

「うん。本当は前からわかってた。もう戻れないって。エイガと同じように、私の体はもう前とは違ってる」

「例の黒い魔力か？」

「うん。エイガは【妖装】って呼んでた。妖属性の魔力を操る、『悪魔憑き』って」

「妖属性に、『悪魔憑き』……」

それこそがサデンエイガの、そしてハマシマミシオの持つ力。確かにあんな姿を見せられたらショックを受けるのは当たり前だろう。何しろあの姿は

「……わかってたはず、だった。私がもう、普通の人とは違ってることは……」

「……ミシオ」

「前の世界ではそれでよかった。体は軽くなるし、鎧みたいに、体を守ってくれるから。……でも、この世界に、元の生活に戻ったら、いやでも自分が変わったって思えて……!!」

「……………っ！！」

その感情は智宏も感じている感情の、しかし智宏の感じている戸惑いなどとは比べ物にならないくらい深刻なものだった。

智宏のそれとは違い本人の意思がまるで関与していない、それでいてエイガのような怪物的で最悪の見本が存在する力。

ここにきて、ようやく昼間ミシオを追いかけていたとき、ミシオが黒い霧の力を使わなかった理由がわかった。彼女にしてみれば何か使う訳にはいかない理由を考えていたのかもしれないが、根本的などころで自身が押し付けられた力に忌避感を感じ始めていたのだろう。

「体のことだけじゃない。村のみんなのことだって……。巻き込まないって、決めてたのに……。私が何とかするって、思ったのに。結局巻き込んで、怪我させて……」

「それは、ミシオのせいじゃないだろう」

「私のせい、だよ。私がしっかりしていれば、こんなことにはならなかった。絶対にカイル達を巻き込んだじゃ、いけなかった。それなのに巻き込んで、辛いことをさせちゃって、拳句にこんな酷い怪我、させて……」

「……………？」

そこまで聞いて、智宏はミシオの言葉に奇妙な違和感を感じる。まるで、同じ話をしているはずなのに、話がかみ合っていないような、そんな感覚。

「私……、どうしたら、いいんだろう。傷ついて欲しくなかったの

に、結局自分で、傷つけちゃった。自分の手で、怪我までさせちゃった！！ これじゃあ、もう昔みたいには……」

「……え？」

そこまで聞いて、ようやく智宏はミシオの言っている言葉の意味を理解した。

だが、今度は別の疑問が襲ってくる。ミシオの言っていることは、明らかにおかしい。受け入れられないのではない。根本的な問題として、彼女の言う事態は起こり得ないのだ。

「ちょっと待てミシオ！ お前まさか、カイルの怪我は自分がやったって言ってるのか!？」

「……そう。海の中で、カイルに、私が」

「いや、それはいくらなんでもあり得ない。物理的に不可能だ」

「できるの!!! エデンで、あの場所を出るときにも使ってた。カイルの怪我と同じ爪を。私には、そういう力がある。きっと、海でカイルに会ったとき、カイルを斬りつけて、岩場まで泳ぎ着いたの」

それは血を吐くような告白だった。恐怖と後悔、悲嘆と絶望、そして自身に対するあらゆる不信を抱えた人間の、自己の根幹を揺るがされた人間の、瀕死の心から流れ出る血のような告白。

だが、その前提を、智宏の知識は許さない。

「それは違うぞ。だってお前はこ()の()人に()あ()の()場所ま()で()運ば()れ()て()、僕に()介抱さ()れ()て()る()ん()だ()か

「（・）ら（・）！！」

「……………え？」

言われた意味が理解出来ず、ミシオが振り向いたまま硬直する。智宏はそれに対して、最初から説明することで理解を促すことにした。

「僕がミシオのいる場所とエイガの襲撃計画を知ってあの場所に着いたとき、ちょうどミシオを抱えたこの人が海から出て来たんだ。僕が戦う姿勢を見せたら、『自分には殺せなかった』『介抱してやってくれ』って……！」

「嘘……、だって、そんな、だって私の服に血が……」

「あれは僕の血なんだよ！！ あそこに着く前に危ない奴に襲われて出血したんだ。今でこそ気功術で治療したから傷は見えないだろうけど、あのときは手当てする間もなかったから」

言われ、ようやくミシオは智宏の服のあちこちに、破れ目や血痕があるのに気がついたようだ。カイルを運んだ時に着いたのかと思っただのかもしれないが、よく見てみれば、運ぶだけでつくような場所以外にもあちこち血が付いているのだ。

そもそも智宏が初めて気功術の治療に手を出したのは、ミシオが息を吹き返した後なのだ。でなければいくら危険な状況にあると言っても、赤の他人にそんな不確かな治療を試そうとは思わない。

「この人はミシオが息を吹き返したのを確認してから、『顔向けできないから』って言って一度あの場所を離れている。その後は僕が目覚める直前まで一緒にいた。この状況でミシオがこの人を襲うな

んてことは物理的に不可能なんだよ!!」

「そんな、でも、……まさか」

「証拠になることを教えてやるのか？ ミシオは自分が起きたときにどんな態勢で寝ていたか覚えてるか？」

「それは、その、腕を枕にするように、横向きに……」

「それは救急救命の現場で、意識のない人間に対して行う寝かせ方なんだよ。」

意識のない人間を寝かせるときは、嘔吐や吐血で気管を塞がないように横向きに寝かせるんだ。特に今回は溺れて水を飲んでたからなおさらだ。ミシオに取らせた態勢っていうのは、要救助者を横向きにしたまま安定させる寝かせ方なんだよ」

体を横に倒して、下になる腕を前にだし、その上にもう片方の手と頭を載せる。足は上になる方を前に出し、体が倒れないための支えにする。

これは、ミシオを介抱するに当たって、【スマートプレイ集積演算】で記憶の奥底から引っ張り出した知識だ。保健の教科書の片隅に載っていた記述を、強化された記憶力は正確かつ完璧に引き出して見せた。だからこそ、医者でもない智宏がミシオの命を救うことができたと言ってもいい。

そしてその知識が、今度はミシオの心を救う。

「大丈夫か？ ミシオ」

一気に力が抜け、ミシオの体が地面に落ちる。その表情はまだ固くはあるものの、どこか安堵の臭いが漂っていた。

実際にいくらかは安堵したのだろう。今だカイルは危険な状態にいるため完全にはいかないだろうが、彼女が抱え込んでいた重荷は、明らかに軽減されていた。

大切な人を自らの手で傷つけたという罪の重み。実際は偽物ではない。それは、それでも確かな重みでもってミシオを苦しめていた。智宏はその重みを真に背負うべき人間に思考を向ける。どういう訳かミシオをつけ狙い、命まで狙っていた人間に。

「なあ、ミシオ」

だからだろう。深い考えもなく、自然とそんな言葉が出てきてしまったのは。

「僕の世界に来ないか？」

「……え？」

相手いる方の手をミシオに差し伸べ、座り込んだミシオを立ち上げらせる。森を出るために手を引いて歩きながら、智宏は頭の中で必死に次の言葉を探していた。

「ミシオが頑張ってるのは、この森に着いたときからすごく良く分かったよ。……いや、それを言うならエデンにいたときから、すごく頑張る奴だったのは判ってた」

たった一人で危険に直面しても、それに負けずに抗ってみせる。自分を狙うものから逃れるために罫を仕掛け、身軽な動きを身につけ、己の生活を守りぬく。

それは確かにすごいことだ。だが、その裏にあったのはきつと血のにじむような努力だったはずだ。

本を読み、体を鍛え、知恵を絞り、そしてこれだけの仕掛けを施す。

それがどれだけ大変なことかなど、智宏には想像することしかできない。

「でも、いや、だから、ミシオはもっと報われてもいいはずだ。安全な場所で何におびえることもなく、普通の暮らしをしてもいいはずなんだ」

例えば、学校にちゃんと通ったり、友達と遊んだり、気兼ねなく町で買い物をしたり、なににも脅かされずに眠ったり。

そういう智宏が自分の世界で普通に味わっているしあわせを、彼女も味わっていいと思うのだ。

「僕の世界にこいよ、ミシオ。生活のことかなら、ある程度面倒もみられるさ。何だったらレンドに助けを求めてもいい。ミシオはもっと幸せになれて良いはずだ。だから

僕がお前を幸せにしてやる」

恥ずかしさなど微塵もなく、ただただ必死でそう呼びかける。

戻れない、そういったミシオの言葉は、恐らく自身の体についてだけではあるまい。智宏には今だミシオが何を背負っているのかわいだせていないが、ミシオの言葉から彼女が村人との関係を取り戻すことを望んでいるだろうことは何となくわかった。

そして、すでにそれが取り戻せないものになっていることも。

詳しい事情はわからない。

だが、ミシオやカイルの態度を見ていれば、彼ら彼女らが互いに対して強い負い目を抱えていることがわかる。それが互いに対して

深い溝となつていこともだ。

視界の先、森が急に開けている。ガードレールを越えたその場所に、レキ八と村を繋ぐ道路が広がっている。この場を村の方に少し進めば、先ほど智宏が葉鳥と戦った場所もあるだろう。

ゆえに、この場所こそが分水嶺。二つの生活どちらを選ぶか。それが分かりやすく示された場所。

そこでミシオは、

「……ありがとう。すごく、うれしい」

智宏の申し出を、

「でも、ごめんなさい」

きっぱりと断って見せた。

「……なんで……!!」

だがそれを簡単に受け入れられるほど、智宏は物分かりがよくはなかった。

「なんで!! あんな危ない奴に命を狙われて!! こうして何度も死にかけているのに!! どうしてこんな危ない場所にとどまるんだよ!! もう戻れないって分かってくるくせに!! この期に及んでなんで!!」

「私の、責任なの」

「……なに?」

「あと三十五日。たったそれだけ頑張ればいいの」

「な……、に……？」

ミシオの言葉に意味が分からず、智宏は困惑する。だが同時に、今まで考えても答えのでなかった一つの疑問が、今この場で何よりも重要な意味をもっていることに気がついた。

そもそもなぜ、ハマシマミシオはサデンエイガに狙われているのか？

ひよつとすると自分は、問題の大元を何も分かっていないのではないか？

「誘ってくれてありがとう。とつても、うれしい」

「おい、待てよ」

「でも、大丈夫。自分でなんとかできるから」

「どつという意味だよ……！」

智宏の質問に、ミシオは答えない。

そして答えの代りに生まれたのは、遠方、村の方角から発生した、一つの魔力の感覚だった。

「……！」

「……行かなきゃ」

「なっ……！」

歩きだそうとするミシオに絶句し、慌ててカイルを降ろし、腕を掴んで引きとめる。

「なに考えてるんだ!! 今の魔力、間違いなくエイガだ。いったら間違いなく殺されるぞ!!」

「でも、村の方角だから。私が行かないと」

「そんなもの警察に任せておけばいい!! この世界にだって警察くらいいるだろう!？」

「……いる。でも、一人だけ。小さな村だから」

「それにしたって……!!」

「大丈夫。私もエイガと同じように、もう、ただの人間じゃないから」

「……!!」

その口調に、その表情に、智宏は何も言えずに硬直する。何でもないことのように言っている、しかしどうしても悲しみを隠し切れていない、そんな表情。そしてそれは、同時に覚悟を決めている表情でもあった。

「智宏は、カイルをお願い。町に行かないと、お医者さんにないから。私なら大丈夫だから」

「なんのためにそこまでするんだよ!! わかっているんだろ!？
もう戻れないって!!」

口をついた言葉は、しかしそれだけに止めることはできなかった。それだけでは止められないという確信が、より残酷な言葉を選んで突きつける。智宏にとっても、それはほとんど刃物を突き立てるような気分だった。

「わかってるよ。そんなこと」

「じゃあ、なんで!!」

「さっきも言ったよ。責任だって」

智宏の声に、ミシオはそれだけ告げると、闇にまぎれるような黒い霧を纏い、そのまま夜に消えるように走り去っていった。

12・偽られた重み（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

13：彼女の闘争

「……くそ」

追いかけるという選択肢は、カイルの存在が許さなかった。彼を一刻も早く病院に運ばなくてはならないし、それ以上にせつかく逃れた危険な状況に再び首をつっこめるほど、今の智宏は強くはなかった。

「くそっ……！！ 口だけか、僕は！！」

危険へと迷いなく飛び込むミシオを、止められないばかりか追いかけることもできない自分を歯がゆく思う。【集積演算^{スマートブレイン}】を使っていたら下せたかもしれない、追いかけるという決断を、智宏の感情の部分、自己保身が拒絶する。ミシオを追いかけていたいという気持ちはあるのに、自分から危険に飛び込む踏ん切りがつかずにいる。

（結局のところ、僕は自分がかわいいんだな……）

彼女を助けたかったのではない。彼女を助けることが最善だという判断を通じたかった。それこそが結局のところ智宏という人間が【集積演算^{スマートブレイン}】に至った要因なのだろう。

刻印はその人間の願いに体内にある大量の魔力が反応することで生まれる。そして、願いとはすなわちその人間のエゴにほかならない。もしエゴを通そうと思うなら、必ず他人の意思を踏みにじらなければならぬ。

（結局僕は、エゴを通じたかっただけなんだな）

ここに到り、智宏はようやくそのことを自覚する。そしてだからこそミシオを追うことができなかった。覚悟をきめて向かった彼女を、エゴだけで追えるほど、智宏という人間は強くはない。

『……もし、もしもーし。そこに人いる？』

「ん？」

不意にポケットから声がして、智宏は先ほどそこに入れたものの存在を思い出した。レンドに渡された異世界の通信機。

慌てて智宏は通信機を操作する。彼らならこの状況を何とかしてくれるかもしれない。

『お、出たのか。ってあれ？ そう言えば今さらだけどミシオちゃんってこれ使えたっけ？』

「僕だレンド！！ ちょうどいいところに連絡してきた！！」

『なっ！？ トモヒロ？ 何でお前そこにいるんだよ？ それともミシオちゃんの家においてこなかったのか？ まあ、いいや。こっちも新情報があって、そのことでトモヒロに伝えようと思ってたことがあったんだ』

「伝えようと思ったこと？」

レンドの言葉に、智宏の中で若干の迷いが生まれる。自分から今の状況について話すべきか、それともレンドの新情報と頼みを聞くべきか。迷った末に智宏は聞く方を選んだ。頼みがあると言っなら彼らが動くこうとしている可能性が高い。

話を聞くに当たり、思い切って【集積演算】スマートプレインを発動させ、情報を

素早く飲み込むべく思考を加速させる。

「で？ 新情報って何だ？」

『昼間あの村に行く途中で、これから行く家がサデンマクラの家だつて話をしたのを覚えてるか？』

「ああ」

『間違いだった。あれはサデンの家じゃない』

「は？」

『あれはミシオちゃんの、ハマシマ家の家なんだよ。ミシオちゃんの家系はこのあたりの昔の有力者の家系で、村の一員として溶け込んだ今でもかなりの遺産を受け継いでいるんだ』

「どつという意味だ？」

『あの家は本来ミシオちゃんの家なんだよ。だけどミシオちゃんにはまだ未成年で財産の相続権が無いから、それをサデンマクラが管理している状態なんだ。そして、あのマクラの爺さんがその立場を悪用している可能性がある』

「悪用だと？」

智宏の背中にいやな汗が伝う、今まで問題視していなかったマクラの存在が急に浮かび上がったことで、智宏の思考が急速に冷えていく。

『サデンマクラも確かに一定以上の財産は持っているんだ。でもミシオちゃんの保護者になってから、明らかにその財産を超える出費を繰り返している節がある』

「ミシオの受け継いだ遺産を勝手に使ってるってことか？ 待て、だとしたらミシオがエイガに命を狙われている理由って……！！！」

『高確率で遺産相続の問題が絡んでる。それもかなり尋常じゃない手、いや、ぼかすだけ無駄だな。ミシオちゃんを殺して自分のものにしようとしている可能性が高い』

「な……！！！」

昼間あつた老人、人の良さそうな、心からミシオを心配しているように見えた老人。だが、もしあれが全て演技だったとしたら？ ミシオがこの世界に帰って来たと聞いて、心中で歯ぎしりしていたとしたら？

考えてみれば妙な話だ。ミシオの普段の生活を考えれば、彼女がいついなくなつたのかを正確に把握できるはずがない。十日ほど姿が見えないと言っていたが、ミシオは学校にもあまり行かず、他人との接触を絶っていたのだ。そんな人間が消えたタイミングを正確に把握しているとしたら、それはその人間を消そうとした人間にほかならない。

「でも、だったらなんで他人に助けを求めなかったんだ？ そんな危険な状態なら、それこそ村の人間や警察に助けを求めるべきだろう！？」

「弱みを、握られてるんだ」

智宏の問いかけに答えるように、そばで弱々しい声がする。見れば、いつから意識を取り戻していたのか、カイルが目をあけ、まだ体力の戻らぬ口調で話していた。

「俺達は、砂殿に借金してるんだ。八年前に、台風があつたとき、船が壊滅して、そのときの借金を」

『その声、そばに誰かいるのか？ いや、今はいい。それより今調べるから少し待て。八年前……、台風……、あつた！！ 確かに八年前、ミシオちゃんの両親が無くなった台風で村の船が軒並み壊滅したって情報がある』

「そのとき村のみんなは船の修理や買い替えの代金を波晃なみあきさんに、ミシオの爺さんに借りたんだ。でも波晃さんが死んで、財産を管理している砂殿がそれに目をつけて……」

『そうか、遺産にはその人の持っていた債権、つまり借金の返済を迫る権利も含まれる。もしサデンマクラがミシオちゃんの財産管理の名のもとにその借金の取り立てを迫ったら……！！』

「借金の返済を待つ代わりに口止めしてるってのか？ そんなバカな！？」

「確かにちゃんと裁判で争えば返さずに済むかもとは、聞いている。でも、裁判を起こすのに、俺たちじゃ費用が足りない。村にそんな余裕がある人間はいないから、借金を盾に取られたらマクラには逆らえないんだ。逆らったらやっていけないから」

「逆らえない？」

「ああ、そうだ。実際俺達は砂殿に逆らったらやっていけない。借金が無くて、あいつは逆らう人間を破滅させる方法に精通してる。だから村の人間はみんな砂殿のいいなりにならざるを得ないんだ。たとえ、シオちゃんのことを見て見ぬふりをしろと言われても、シオちゃんに関わるなと言われても、たとえ……、人殺しを命じられても……!!」

「……それで、あ のとき」

ミシオの手前無理に聞きだすことはできなかったが、どうしてカイルがミシオを殺そうとしたのかがやっと分かった。彼は命令に逆らえなかったのだ。いや、最終的には逆らったと言うべきか。なにしろ彼は結果的にはミシオを殺しきれず、見逃した後にこうして怪我を追っている。

「昼間、シオちゃんと話しているのを知られて、そのペナルティに命じられたんだ。断れば村にいられなくしてやるって……。もしかすると、栄河の奴に見られてたのかもしれない。あいつには、他人の視界を盗み見る能力があるから」

「他人の視界を盗み見る？ いや、それは今はいいな。……そうか、それでミシオは他の人間に助けを求めようとしなかったのか。助けを求めればその人に危険や嫌がらせが及ぶから」

たとえ警察に助けを求めたとしても、周りの人間が従っているのならもみ消すことも可能だろう。そうでなくても警察というのはすぐに思いつく手なのだ。他にも何か手をまわしてもみ消している可能性は高い。

「酷い、話だろう……？ 自分たちの生活のためにあんな娘ひとり

に全部背負わせて！！ 村八分みたいなこととして！！ それでも俺達はのうのうと、生きてるんだから！！」

そう言っつて巨大な腕の上、カイルは歯をくいしばって涙を流す。

智宏に彼を責めることはできなかった。強烈に伝わってくる後悔と無念が、それを行うのをためらわせる。何より部外者である智宏にそれを責める権利などないだろう。

「でも、待ってくれ。ならどうしてミシオは僕らにまで助けを求めなかったんだ？ 弱みも握られていない。それどころかこの世界でのしがらみがない僕たちなら、助けを求めるのにつつてつけだろう！？」

「いや、そうした場合助け方に問題があるんだ。実は、この世界に来る前、彼女に持ちかけた話があるんだが、智宏は証人保護プログラムって知ってるか？ 確かそっちの世界にもどこかの国にあったはずだけど」

「証人保護……、たしか、犯罪の証人を犯罪者に殺されて証拠隠滅されないように隠す制度、だったか？」

智宏の記憶が正しければ、アースでもアメリカなどで実際に存在している制度である。マフィアなどの組織犯罪の証人にまつたく新しい人間としての人生を用意して保護するというもので、証人が、その存在を快く思わない犯罪組織によって抹殺されたり、復讐の対象にされるのを防ぐための制度だったはずだ。

「そう。実は俺らの方で、ミシオちゃんをその証人保護に近い形で保護しようって話があったんだ。具体的には彼女を他の世界に連れ行って彼女を攫った組織から保護しようって話だ」

「そうか、考えてみればミシオはエデンであった奴らの悪事を暴く生き証人だから!!」

『そう。こつちでも狙われる可能性を考慮して、どこかほかの場所に移り住んだらどうかって進めたんだよ』

「つまり、彼女が助けを求めた場合、その証人保護プログラムを使うことになるのか？ でもどうしてそれで……？」

智宏には、それがどうして助けを求めることをためらう理由になるのかわからない。確かに新しい人生と言うのは大変な事態だろうが、こう言ってはなんだが、今の暮らしに比べれば、エデンでの生活のほうが良かったくらいだろう。

『いや、この方法だと一つ問題があるんだ。俺達はこの世界でまだ公的機関とのつながりを持っていないから、ミシオちゃんを連れていくと必然的にこの世界ではミシオちゃんが行方不明っていう扱いになる。問題なのは、この国で行方不明の扱いになった場合、肉親による本人確認なんかを経ないと行方不明扱いは解消されないんだ。そして行方不明者は問題によっては死亡者として扱われる』

「肉親……、サデン親子か!! つまり、もしレンド達に異世界に連れていかれたら、社会的に抹殺されるってことか？ でも本当に殺されるよりは……、いや、そうか!!」

『気づいたか？ もしミシオちゃんが死亡扱いになった場合、必然的にサデンマクラが遺産を相続する。もしミシオちゃんが遺産を取り戻したいと思っっているなら、俺たちに助けを求めるわけにはいかない。それどころか迂闊にこの土地を離れただけでも、行方不明者

にされてしまう恐れがある』

「それで僕らの前からミシオは姿を消したのか。真相を知られればレンド達が保護に走るだろうと考えて!!」

『実際、俺達が最初からこのことを知っていればそうしただろうな。遺産と命じゃ優先順位は明らかだ。あるいは本人もそうなら逆らえないと思っていたのかもしれない。強く説得されてそれを拒絶できるほどの自信が無かったのかも』

「……三十五日」

『え?』

そこでようやく智宏の中でその数字の意味が見え始める。先ほどミシオが口走った『あと三十五日』という言葉。

「三十五日後に何がある? ミシオは『あと三十五日頑張ればいい』といていた。たぶんミシオのプロフィールだ。ちよつと調べてくれ」

「ちよ、ちよつと待って。えつと……、これか? ああ、これだ。

三十五日後はミシオちゃんの十六歳の誕生日だ」

「さつきミシオは未成年だから財産の相続権が無いって言ったな? もしかしてこの世界での成人年齢は十六歳なんじゃないか?」

「ああ、そうだ。正確には成人年齢は十八歳だけど、相続権を含むいくつかの権利は十六歳の時点で解禁になる」

「やっぱりか……」

三十五日後と言うのはつまるところ、彼女が遺産を取り戻す日なのだ。その日になれば自動的に遺産はミシオの物となり、サデンの干渉をはねつけることができるようになる。

ミシオがこの世界にとどまる理由がこれではつきりした。だがそうなると新たな疑問が生まれてくる。

「でも、なんでそんな遺産に固執するんだ？ あいつの生活とか見ても、そこまで金に執着する性格には到底思えないんだけど」

「ある、シオちゃんにはその理由が、ある」

智宏の思考が再び壁にぶつかったとき、そばにいるカイルが再び声を上げた。その声はさつきよりもさらに輪をかけて悲痛なものになっている。

「俺達が背負ってる借金だ。シオちゃんは、俺達がマクラのいいなりにならなくてもいいようにしたいんだ。財産を相続できれば、あの子は俺達への債権も相続できるから」

「なに？」

「あいつ等のやり口は、正直かなりひどい。特に栄河は素行が最悪だ。あいつの憂さ晴らしに付き合わされた奴が何人もいるし、村の女の中にはあいつに乱暴されかけた人もいる。親父の真蔵の方だつて、逆らった人間に酷い嫌がらせをしてまともに生活できないようにしたことすらある。シオちゃんはあいつ等から俺たちを守るために、逆らえない要因になつてる借金を奪い返したいんだ」

「……なんだよ、それ!!」

カイルの言葉に、智宏の内に炎が上がる。それまでも【集積演算】スマートプレイの冷静な思考の下で火がくすぶるような感覚を持つてはいたが、今のカイルの言葉は明らかに油の役割を果たした

確かに、今でさえ殺人などの理不尽な命令を生活のためにきかされている状態だ。たとえミシオが死亡扱いになって遺産を無事に手に入れたとしても、砂殿親子の村人に対する扱いは変わるまい。むしろ、より悪化する危険性さえある。

「逃げてほしかった。本当は逃げてほしかったんだ。俺達のことなんか放っておいて、どこかで幸せになってほしかった。でも、シオちゃんは、俺達が生活を砂殿に脅かされていることに、責任を感じてる。自分が遺産を奪われたから村の人間に迷惑がかかっていると思ってる。村の状況を打破できるのは自分だけだからって言って、無理してここに留まって……」

そこまで言って、カイルの声はうめき声に変わり始めた。どうやら怪我をしているのに興奮しすぎてしまったらしい。しかし、

「……ふざけんな」

そう呟いて、初めて智宏は自身が激しい歯ぎしりをしていることに気がついた。そして、気付いてしまったらもう止められない。智宏の中で上がった炎が、事実を可燃物に燃えあがる。

「ふざけんなよ!!　なんだよそれ!!　どこまでも汚い手使いやがって!!　あいつもあいつだ!!」

自分の中で炎の勢いが増していく。自身の安全への執着すらも、

怒りの炎が焼き尽くす。

「なにが『何とかする』だよ！ どうにもならないじゃないかそんなの！！ どこが大丈夫なんだよ！ いいかげんなこと言いやがって！！」

叫んでも一向に怒りが収まらない。それどころか、加速した思考がここは怒るべきところだと訴える。今の智宏に怒りを収める気はさらさらなかった。

智宏は思考の片隅で、先ほどから探していたミシオを助けるための口実を、記憶の片隅に放り込む。そんなことを考えなくても、すでに答えは決まっているのだ。考えなければいけないことは他にあらう。

「レンド、この通信機は僕が手放しても使えるよな？」

「あ、ああ。内部に溜めこんだ魔力がある限り繋ぎっぱなしにすれば会話は出来るけど、どうするんだ？」

「カイルさんに渡すから後の事情を聞いてくれ。それと彼は怪我人だから至急病院に運ぶ手配を頼む。悪いけど病院には彼らと言ってください」

「そ、それは大丈夫だが、君はどうするんだ？」

「決まってる！！ ミシオを捕まえて、僕の世界に攫って行くんだ！！」

言いながら、智宏は全身に魔力を行きわたらせ、気功術で肉体を強化する。さらに背中に魔方陣を展開すると、空気の推進力を使っ

て猛スピードで走りだした。

「逃げられると思うなよミシオ!!! 必ず僕の（しあわせになれる）世界に、お前を連れ去ってやる!!!」

半ば悪人のようなセリフを吐きながら、智宏は人生で初めて自覚的に他人の意思を踏みにじる覚悟を決めた。

13：彼女の闘争（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

14：価値ある存在

磯鈿船里いそもりせんりはその晩、なかなか帰らない上の息子に不審なものを感
じていた。

息子の海流カイルを最後に見たのは夕方近く。妙に顔色が悪く、思いつ
めたような表情をしていたのを覚えている。

だが、これまでも息子がそう言った表情を見せることはあつた
し、その原因はこの村に住むものなら皆が抱えている共通のものだ。
そのため船里も特に気にかけることもなく、残酷な話だが夕食の時
間になればそれ相應の態度に戻っているだろうと思っていた。

だが、この日、海流は出掛けたまま夕食の時間になっても戻らな
かった。

嫁の水瀬と結婚する前はたまにそんなこともあつた海流だが、結
婚後こうして夜になっても帰らないと言うのは初めてだ。ここに来
て、ようやく船里は息子が何か問題に直面したのではないかという
疑いを持った。

そうして下の息子である海人カイトと海流を探し始めた船里は、探し始
めて少して自宅の方で何かの破碎音を聞く。

音に驚いた船里が家に戻って見たものは、この世のものとは思えな
い、しかし常に忌々しく思っていた人物の顔をした、鱗だらけの怪
物だった。

ミシオが駆け付けたとき、物心つく頃から見ていた村の一軒家は
壁に大穴をあけていた。

周囲には、騒ぎを聞きつけた付近の家の住人が集まり始め、目の

前で起こる現実味のない惨状に目を見開いている。

体のあちこちから血を流し、地面にうずくまるセンリ。頭から血を流し、ピストルを握ったまま意識を失っている村で唯一の駐在。そして、ミナセを庇いながら、家の前で立ちふさがるカイトの姿。そしてその中心、彼らから視線を外してこちらを見るエイガの異形と化した姿があった。

「ようミシオ。やっと来たのかぁ。カイトの具合はどうだい？」

「エイガ……、なに、してるの……！！」

「何ってお前を歓迎する準備だよ。せつかくあんなヤバい世界から帰って来たんだ。パーティーくらいしてもいいんじゃないか？」

「パー、テイ？」

「ああそうだ。ただし、パーティーのごちそうはお前で、こいつらはその調味料。そして味わうのは俺だけだな。俺だって異世界帰りだ。祝いの一つも味わってもいいだろう？」

そう言っただけでエイガは妖装の異形の姿を黒い霧へと変え、元の姿へと戻る。だが表情だけは禍々しさを残し、欲望に満ちた目でミシオを見据えていた。

「その様子だと、あの小僧教えちまったみたいだな。おかげで調理のやり直しだ。その癖本人はどっかに行っちゃったようだし。まったく、勝手なことをしてくれたもんだぜ」

「……センリ達に、なにしたの!？」

「んー？ ああ、安心しろよ。そのおっさんも駐在も、見ての通りまだ殺しちゃいないよ。お前の目の前でないと意味がないからなあ」

「……私の、目の前？」

エイガの物言いに、ミシオは痺れるような寒気を覚える。以前からミシオを苦しめることにこだわりを見せていたエイガだが、さっきや今の物言いは以前以上に邪悪さと不気味さを感じさせるものだった。

「俺はさあ、お前が死ぬところなんて別に見たい訳じゃないんだよ。親父はお前に死んでもらう必要があるみたいだが、俺は別におまえがへし折れるところを見られればそれでいい。殺すのだから今みたいに立ち直った姿を見せられるのが興ざめってだけの理由だしな」

「私が、折れる？」

「ああそつだ。そのためにこいつらがいる」

言つが早いか、再びエイガの体から黒い煙が吹き荒れる。周りが驚くなかで煙はエイガの体を鱗だらけのそれに変貌させると、身構えるミシオではなく、離れたところにへたり込むミナセと、その前に立つカイトのもとへと距離を詰めた。

「やめて!!」

ミシオの叫びもむなしく、振りかぶられたエイガの腕が、まず前に立つカイトの体を殴り飛ばす。とつさに腕で体を庇ったカイトだが、努力もむなしくカイルに勝るとも劣らない巨体が宙に浮き、そばにあった生垣に突っ込んだ。

「カイト!!」

「おっと、まだこっちに来るなよミシオオ？ 姉貴分のねえちゃんをバラバラにされなくなかったらな」

「!!!」

駆け寄ろうとしたミシオは、その言葉に反射的に立ち止まる。エイガの腕の先に光る爪は、本物の竜猿人ダイノロイドよりも大きく、まるで刃物のような鋭さを持ってミナセの目の前に突きつけられていた。

「シオ、ちゃん……!!」

「はい喋らな〜い。他の連中も、余計な手出しはするなよ。まあ、したらしたでそいつから見せつけるように殺すけどな」

「なんで、こんな……!!」

「さつきカイルの野郎の見るも無残な姿を見せたときさ、お前えらく動揺してたじゃん？ まあ、あんときはお前自身が犯人って吹き込んだのもあったんだろうけどさ。でももしかしたらこっちの方も結構ダメージになってたんじゃないかって思ったんだよね」

「貴様!! 水瀬や海人だけじゃなく、海流にまで何かしたのか!」

それに対し、ミシオのそばでうずくまっていたセンリが声を上げる。突然の発言にエイガは顔をしかめると、視線をミシオからセンリに移した。

「したらどうだってんだ？ 例えば俺が、この爪でカイル君に瀕死の重傷を負わせましたあって言ったら、あんたなんかしてくれんのか？」

「貴つ様あ……、普段の嬢ちゃんへの仕打ちといい、ここでのことといい」

「許さん、とでも言うつもりか？ 今まで許してきたあんたらが？ 偉そうなこと言って強がるなよ。親父に逆らえなくてミシオ一人を生贄にしてきた奴らがさあ」

その言葉に、センリや周りの人々の表情が苦渋に満ちたものになる。

ミシオは知っている。彼らが自分たちの生活を人質に取られ、逆らうこともできずに苦悩してきたことも、彼らがサデンマクラに抗議し、一時は生活が立ちいなくなるほどの嫌がらせを受けたことも。だからミシオはサデン親子と戦うこと決めたのだ。それこそが、遺産を勝手に使われる事態を防げなかった自分の責任だと考えて。

「確かに今さらな話だ。俺達は嬢ちゃんが頑張っているのをいいことに、仮初の平和の上で胡坐をかいてきた」

皆がうつむくなか、センリはそう言って立ち上がる。その右手を血が出るほど握って。

「だがな、お前らがそこまですると言うのならこちらにも考えがある！！ 今まで何もしてこなかった俺だが、本当にお前らがこの娘や村の者を手に掛けるなら！！」

「ほづ、どつするってんだ？」

「貴様ら親子をぶち殺して、一緒に海に沈んでやる！！」

言つが早いか、ミシオがその言葉の意味を理解するよりわずかに早く、センリはエイガ目がけて駆けだした。その左手にはいつから握っていたのか、ミシオの腕ほどの長さ太さの角材が握られている。

「待って！！ やめて！！」

慌ててミシオも駆けだすが、わずかに遅い。周りがどよめくのが聞こえるが止められるものは一人もない。

視界の先、角材を振りかぶるセンリに向けて、エイガが鱗だらけの腕を振りかぶる。その先には先ほどミナセにつきつけた鋭い爪が残酷な光を放っている。

「予定変更だ。最初の調味料はお前にしてやる」

エイガが言った言葉が届くと同時に、周囲にいた群衆はその場所に鮮血が散るのを目撃した。

「あん？」

振り下ろした右腕が肉を裂くのを感じ、しかし予定外の光景が目の前に広がっているのを知って、栄河は間の抜けた声を上げた。

角材を振り上げ向かってきた老人が倒れているはずの視界には、まったく別の人間が倒れている光景が広がっている。

背中から血を流し、ぴくりとも動かないハマシマミシオが。

「嬢ちゃん！！」

ミシオに庇われたことで尻もちをついただけで済んでいた船里がようやくその事態を把握する。その声によって周りの人だかりが悲鳴に似た声をあげ、栄河はようやくその現実に気が付いた。

ミシオがとるに足らない老人を庇い、代わりに自分の爪を受けたという現実には。

「何やってんだよてめえ！！」

予定外の事態に、だれよりも早く栄河自身がまず怒りをあらわにする。ミシオを抱き起こそうといていた老人を蹴り飛ばすと、倒れたミシオの頭をつかみ、そのまま宙に釣り上げた。

「やめろおおお！！」

背後の声に振り向くと、海人を始めとした数人の男たちがそれぞれ武器になりそうなものを持って向かって来る。どうやらこの事態に彼らの我慢が限界を超えたらしい。

「邪魔してんじゃあ、ねえよっ！！」

だがその反抗を、栄河は腕のひと振りで黙らせた。爪など使わなくても、巨大化した爬虫類の腕はそれだけで十分に凶器だ。ふるわれたその腕は、向かってきた男たちを軽々と吹き飛ばし、あるものを家の壁に叩きつけ、あるものを地面に沈める。行動を縛ることな

どできない単純な暴力ではあるが、それは十分な効果を持って彼らの反抗を鎮圧した。

「や、めて……！ みんなに、酷いこと……！！！」

「おお、よかった生きてるじゃん」

弱々しくも確かな意思を伴ったミシオの声に、栄河は若干の安堵をおぼえる。どうやら傷は出血こそ酷いが致命的と言っほど深い訳ではないらしい。

どうやらミシオは、船里を庇うときに霧状の魔力で身を守っていたらしい。妖属性の魔力は霧状の状態でもある程度の防御力を持つ。流石に密度を増して作られた栄河の爪を完全に防ぐことはできなかったようだが、傷を浅くするくらいの効果はあったようだ。

「まあ、ちょうどいいか。お前には今死んでもらっちゃあ困る訳だしな」

「……な、んで？」

「あん？」

「なんで、そんなに、こだわると……？ 私を、折ることに」

この状態でなおこんな疑問をぶつけてくる相手に、栄河は無性に笑いがこみあげてくる。やはりこいつは一味違つと再認識し、そうなるって初めて栄河はその理由を話してもいいような気分になってきた。ひよっとすると栄河自身話して見ることを望んでいたのかもしれない。

「俺はさあ。ガキの頃から親父のそばでいろんな人間を見てたんだよ。親父は裏でいろいろ悪いことやっててさあ。ヤクザなんかとも繋がってたりしたんだけど、おかげでいろんな人間が親父にひれ伏すのを見られたんだよ」

幼いころから、父であるマクラは多くの人間を従えていた。マクラに逆らおうとする者も多くいたが、マクラはそう言った人間たちを徹底的に追い詰め、最後には敗北させてきた。

「親父に逆らいきれぬ奴なんていなかった。俺にとってはそれが普通だった。そんなときさ。お前に出会ったのは」

今でもその光景を覚えている。ミシオの親権を奪い取り、遺産までも奪うべく家へ乗り込んだ真倉と栄河を見た、ミシオの反抗的な態度。自分の命が狙われていると知れば家出をし、行方が分かったときには森の中に潜んで籠城の体制を築いていた。何度も真倉が事故に見せかけて殺害しようとしたが、ミシオはそのたびに逃げ延びて見せ、その強かさを見せつけた。

「初めてだったよ。親父に逆らい続けられる人間を見たのは。それも当時十二、三の小娘が、それをやってのけてたんだから驚いた。……そして同時にこうも思った」

そこで栄河はミシオを釣り上げたままこちらに体制を変えさせ、苦痛で脂汗を浮かべるその顔に自身の顔を突きつける。

「親父でも折れなかったお前の心を、親父にも屈さなかったお前という存在を、俺自身の手で屈服させ、絶望させることができたなら、俺は親父以上の存在になれる！！ お前の処分を買って出たのはそのころさ。俺はな、お前の強さをこの手でへし折って自分のすごさ

を証明したいんだよ!!」

「……………!!」

言いながら、栄河はミシオの頭をつかむ手に力を込める。万力のような力で頭を締めあげられたミシオはしかし、体から黒い霧を出すことでそれにあらがった。今込めている力ならばそれでも相応の痛みを感じているはずだが、その眼は反抗的な光を失わない。

先ほどの葉鳥とは天地の差がある反応に満足し、手から力を抜いてミシオを地面に落とす。まともな受け身も取れずに地面に叩きつけられるが、その程度栄河は知ったことではなかった。栄河にとっては生きてさえいればそれでいいのだ。

「まあ、って言うのが俺が(・)異世界に(・)行く(・)ま(・)で(・)の(・)話だ。実はこの話には続きがある」

自身がふるう暴力に気分が良くなり、栄河は地面にうつぶせに倒れるミシオの頭を踏みつける。踏みつぶさない程度の力を加えながら、痛みだけで屈服させることができないかという考えが頭をよぎるが、その考えはすぐに却下した。それで屈服するくらいならここまで話はややこしくなっていない。

「なあ、ミシオオ？　そもそも何で俺がこの力を持っているか、おかしいとは思わないか？　お前は俺があいつ等の仲間だからこの力を持っていると思ってたのかもしれないが、七日ほど前によく一人目であるおまえが成功したばかりだったのに、それでいきなり身内の改造ってのはおかしく思えないか？」

栄河たちの体はいわば新兵器だ。栄河とてそう言った事情を詳しく知っているわけではないが、いくら非合法組織であったとはいえ、

世界をまたにかけられるほどの組織が七日やそこらで新兵器を量産し始めると言うのはあまりにも性急だ。

「俺がこんな体になったのはさあ、お前が原因なんだよ。端的に言えば俺はお前の代わりにこんな体になったんだ」

「……………!？」

言われた言葉に、足の下にいるミシオが反応するのを感じる。痛みで流石に声を出す余裕はないようだが、意識はしっかりと保てているようだ。そうでなければ困る。

「おまえもある程度察してるんだろうけどな。俺たちはお前を改造した奴らと繋がってた。正確には親父が繋がって俺は最近まで知らなかったんだけどな。でも仕事には手を貸してた。仕事は簡単。行方不明になっても騒がれそうにない奴で、かつ能力を持たない人間をリストアップしてその情報を渡すこと。そうすれば後はあいつ等が勝手にリストの人間を攫って実験に使う」

栄河は知る由もないが、それはまさに智宏が予想していたことと寸分たがわぬ内容だった。ミシオも智宏からその話を聞いたわけではないが、自分が攫われたことについてその可能性は予測している。

「ところが少し前、お前の十六歳の誕生日まであと五十日に迫った頃、追いつめられた親父は欲を掻いた。お前をそれとは分らない方法で殺そうとしていた親父だが、お前がほとんど捕まらないことに業を煮やしたんだろうなあ。財産の奪還を恐れた親父は、お前の始末を異世界の研究者共に任せられないかと考えた」

それまで聞かされていただけでも、この実験はおびただしい数の

死者を出していた。その死因は内臓機能に障害が出たものから、初期のころにあつた実験の失敗で人の形すら保てなくなったものまでさまざまだったが、連れて行かれたものは最終的に死を迎えるという結末だけは共通していた。最悪死亡が確認できなくても、行方不明にさえできればいいマクラにとつて、研究者に攫わせて実験に使うというのは、あまりにも都合のいい方法だった。

「ところが、あろうことかお前は実験で生き延び、そればかりか能力を使って脱走までしちまった。おかげでお前に能力があるのを知りながら、お前が非能力者であると偽って報告していた親父はその責任を問われる立場になつちまったのさ」

今でも栄河はあの晩のことを思い出せる。自分が殺そうとしていた娘によつて一転して窮地に立たされた父親が、それまでにないほど取り乱し、怒り狂う様はいつそ滑稽でさえあつた。もしもミシオが復讐を考えていたなら、それはあの晩成功していたと言つてもいいくらいだ。

そしてそのころからだ。それまで栄河が理想としていた父親が、徐々にくすんで見えるようになったのは。

「一方研究者の連中も、お前の脱走で一つの不都合を抱えていた。お前は一応実験を生き延びた訳だが、その直後に脱走してしまつたため後遺症の有無を確認できなかった。ひよつとすると何か重大な欠陥を抱えているかもしれない以上、同じ条件でもう一度実験をやり直す必要がある。そこで奴らは親父に一つのペナルティを突きつけたのさ」

そう言った瞬間、足の下の子シオが明確に動揺するのが伝わってくる。恐らく話の先が予測できたのだらう。だが栄河もここまで来て話をやめるつもりはない。

「ペナルティの内容は親父の身内であるこの俺を、新しい実験体として差し出すこと！！　そして親父はその条件に迷うことなく飛び付いた！！　なあ、信じられるかあ？　下手をすると命にかかわるかもしれない実験に、実の息子を簡単に放り込んだんだぜ？」

実際、下手をすれば栄河は異世界で死んでいたかもしれない。いくらミシオという成功例があるとはいえ、その成功自体が疑わしいからこそその再実験だ。彼らが成功した後の栄河を返さない可能性も考えれば、その生存率は五割もなかったかもしれない。

「……それで、私に復讐を？」

「んん？　ああ、違う違う」

絞り出すようなミシオの疑問に、しかし栄河は首を横に振る。

「俺はさあ、お前が逃げ出したことなんかどうでもいいんだよ。むしろお前が帰って来てくれたことに喜びさえ感じてる。親父に関しても元からああいう性格だから諦めもつくし、この体だって、なるまでの過程はどうあれ、なってみれば結構便利なもんだ。こっちに関しても特に不満はない」

実際、それは栄河の本音だった。それはたった一つの問題がエイガの内心で渦巻いていたせいだとも言える。

「俺が我慢できないのは、この俺が、よりもよってお前なんかと同価値だと親父に判断されたことだ！！　……わかるかあ？　よりもよってあの親父は、遺産を奪うために殺そうとしている小娘と息子であるこの俺を同程度の価値しかないと判断しやがったのさ！

！それが俺にはどうにも我慢がならねえ！！」

ミシオの代わりとして異世界の送られたことで、栄河の価値は決定的に貶められた。それは栄河のプライドを徹底的に傷つける行為だ。断じて許すわけにはいかない。

「俺はお前をへし折ることで、俺自身の価値を証明しなければならぬ。お前の屈服を持って俺の上位を確認し、あらゆる奴らにそれを見せつける！！ そうしたら後は異世界だ。憧れの親父もいつの間にかくたなくなっちまったから始末したし、このくだらない世界にも未練はない。最後の心残りであるおまえをへし折って、とつとこの世界を旅立つことにしたのさ」

「な、に……？ おい、貴様。今何と言った！？」

栄河の言葉に、どうにか立ち直った船理が口をはさむ。

「おいおい、爺さん。俺は今ミシオと話してるんだ。何を言っただて……、ああ、親父のことか？ そういやお前らに朗報だ。親父はさつき死んだぜ。俺の獲物に勝手に手を出したもんだからプツンしちまってな」

「貴様の、親だろっ！？」

「ああ？ うっせえなあ。いいだろ人の家庭の事情なんだから。つかお前らは喜べよ。今まで散々親父の好き勝手にされてたんだろっ？ 良かったじゃねえか。これからはお前ら借金盾に脅されなくて済むぜ。……まあ、その代り大半はここで死ぬんだけど」

「……………！！」

栄河の意識が周りの人間に向けられたことに反応し、ミシオが足を掴んで引きとめる。だがそれを、栄河は振り払うと同時に、腹部を蹴りつけることで黙らせた。勢いあまってミシオの軽いからだが浮き上がり、近くのブロック塀に傷ついた背中から叩きつけられる。

「う、あ………!!」

痛みと衝撃に苦悶の声をあげ、それでも性懲りもなくもがく姿に栄河は興奮を覚える。もうすぐその強さを地に貶められる。そのための調味料は周りの無数に転がっているのだ。ここにいる者もいない者も、意識のある者も無い者も、男も女も老人も子供もなんでもござれだ。村一つ殺しつくす頃には流石のミシオも壊れているだろう。

邪魔する者、できる者はだれもない。そう思ったそのとき、その考えを裏切る光が、視界の隅で瞬いた。

「な!?!」

猛烈な速度で顔面めがけて飛んできた炎弾を鱗だらけの腕でとっさに防ぐ。

覚えのあるそのやり取り。栄河が視線を炎弾の飛んできた先に向けてると、先ほど邪魔をした少年が、先ほどと同じようにこちらに向かって来ていた。

「また、お前かあつ………!!」

再び現れた敵が栄河の憎悪に火をつける。霧と消えた腕の一部を修復し、向かって来る敵を迎え撃つ。

「邪魔をつ、するなああああ!!」

理性をきれいに吹き飛ばし、栄河は怒りのままに敵のもとへと突進した。

14：価値ある存在（後書き）

先日、アルカディアの方にも投稿いたしました。
ご意見感想お待ちしております。

15：魚寝村の戦い（前書き）

復・活！！

15：魚寝村の戦い

(よし、来たな……!!)

炎弾を腕でガードしながらこちらに突っ込んでくるエイガを見て、智宏は自分の挑発が成功したことを悟った。

智宏としてはここまで事態が進行する前にミシオを連れ去ってしまおうと思っていたのだが、どうやらそれをするには間に合わなかったようだ。視線の先に、背中から血を流して倒れるミシオが見える。動いているのでどうにか生きてはいるようだが、それでも、自身の決断の遅さを悔みたくなる光景だ。

(いや、悔やむのは後だ。あいつがここにいる状態じゃ、ミシオの手当てもままならない。とにかくエイガを何とかしないと!!)

幸い、ミシオの周りには村の人間と思われる人々が何人もいる。彼らの様子と背後関係を考えれば、エイガを遠ざければミシオの手当てをしてくれるかもしれない。

智宏個人としては彼らの生活よりもミシオの命を優先する腹積もりだったため、彼らに頼るのは少々罪悪感があるが、それでも今は彼らを信じるよりしようがない。

【銃炎弾】を三発立て続けに発砲し、怒りにまかせて猛スピードで突っ込んでくるエイガを誘導しながら走りだす。向かう場所は海、そしてその手前にある砂浜だ。

「ちよっかい出しておいて、逃げてんじゃねえ!!」

エイガの怒号に反応するように、智宏はとっさに頭を下げる。すると下げた頭の上を、何かが通り過ぎ、右手にあった家の壁が大きい

く陥没した。どうやら石か何かを投げつけてきたらしい。

「この、馬鹿力あー!!」

さらに石を投げつけようとしていたエイガに炎弾を叩きつけ、智宏はエイガに背を向けて走り出す。足は恐らく相手の方が早い。必要以上に攻撃しながら走ればたちまち追いつかれてしまう。

走りながらも魔力の動きで相手の動きを感知し、海へと続く下り坂を駆け降りる。ミシオや村人、さらには人家まであるあの場所は戦うには都合が悪すぎる。強力な魔術を使うことや、もう一人の敵の存在などを考えれば浜辺の方が都合がいい。

家々の並ぶ小道を走りぬけ、その先にある申し訳程度の大きさの砂浜にたどり着く。階段を無視して高台から砂浜に飛び降りると、すかさず振り向いて背後のエイガに向きなおった。

(術式同時展開

チェーンロック
【蛇式縛鎖】!!!)

「なにいつ!?!」

両手から同時に鎖を生み出し、こちらに向けて飛び上がったエイガを空中で捕らえる。二本の鎖は空中で身動きが取れないエイガの手足に絡みつき、エイガの体は鎖を引く智宏の動きによって思いきり砂浜に叩きつけられた。

強力な衝撃に、舞い上がった砂埃と霧散した黒い霧が空気周囲に広がる。

(この魔力、霧と違って実体はあるようだが強い攻撃を受けると霧散するのは霧と同じか。なら、攻撃し続ければいつか魔力は枯渇する!!!)

その推測のもと、すかさず追撃をかけるべく鎖を消し、右手に【バルカン・ファイア回転機関砲】を展開する。だが発砲しようとしたその行為は霧と砂煙の煙幕を突き破って表れたそれによって中断された。

上半身の魔力を霧状に戻し、手の先の爪と腰から下だけを竜人のそれへと変えたその姿、エイガが組み上げた体は明らかに機動力を意識したものだだった。

「つう!!」

慌てることで鈍る思考を刻印による強化で埋め、左肩に新しい魔方陣を展開しながら【バルカン・ファイア回転機関砲】を発砲する。だが案の定、吐き出された炎弾は砂浜に着弾して砂埃を上げるばかりでエイガには当たらず、エイガは多少のタイムロスはあったものの一気に智宏の距離を詰めてくる。

左手に発動させた【土人形の鉄腕ゴレムアーム】がエイガの爪を受け止めることができたのは、かなりギリギリのタイミングだった。

発動の間に合った鉄腕のプレート部で振り下ろされた爪を受け止め、力任せに振りぬいてエイガを跳ね飛ばす。だがエイガは空中で体制を整えると、砂浜に着地して智宏を睨みつけた。

「……お前え、いつたいなんのつもりだあ？　なんで事あることに俺の邪魔をする訳？」

「さあな、案外急に大きな力をいきなり手に入れて、いい気になってるかもしれないぞ？」

「そうかい。じゃあ身の程を教えてやるうか？」

「そつちこそ、もう一度海に叩きこんでやるから、水面に映る自分の顔でも見えてきな！」

互いに相手を挑発し合う二人は、次の瞬間には両者とも両腕を巨
大化させて激突した。

離れた場所で連続して魔力が激突するのを感じながら、しかしミ
シオは動くことができなかった。

「……………う……………う……………」

斬られた背中に焼けるような痛みが走る。だと言うのに寒気がし
てしょうがない。体に力が入らず、意識を保つだけでも精いっぱい
だ。

(……………トモ、ヒロは？ ……村の人たちは、どうなったの)

痛みと出血によるショックで朦朧とした意識の中で、それでもミ
シオは意思だけでもがき続ける。

そうしていると急に周囲であわただしい足音がし、ミシオの体が
いきなり宙に浮きあがった。

「おい嬢ちゃん。生きてるか！？ おいつ！ 早く持ってこい！！」

「こんなもん何に使うんだよ！！」

「ぐだぐだ言っていないでとっとと運んで！！」

ミシオが誰かに抱きあげられているのだと悟ると同時に、周りにさらに二人分の気配がやってくる。聞き覚えのある三人の声にそれが誰かを思い出そうとするが、朦朧とした意識ではよく思い出せない。ただ奇妙な懐かしさだけがミシオの心の中を満たし始める。こんなことが以前にもあったような、いとおいしい感覚。

「悪いけどシオちゃん、これを噛んで少し我慢して！」

(?)

言われた言葉の意味をミシオが理解する前に、口の中に無理やり何か詰め込まれる。ミシオが一転してパニックに陥りかけると、そうなる前に背中に強烈な痛みが走って頭が真っ白になった。口をふさがれたままぐもった悲鳴をあげ、同時に手足を死に物狂いで動かそうとする。だがその動きはあらかじめ予測されていたのか、手足は抑え込まれてビクともしなかった。

「おい！！ 苦しんでるぞ！！ 本当にこんな方法で助かるのか！？」

「やかましい！！ 昔の刀傷なんかはこうして焼酎を掛けて直したんだ！！ 消毒程度の効果だが、やらんよりました。そんなことよ
り止血の手伝いでもしやがれ！！」

どうやら傷口に酒を掛けて強引に消毒したらしい。口をふさがれたのは痛みを反応して舌を噛まないための処置だろう。そうかと思えば背中を圧迫される感覚と、体を締め付けるような感覚が立て続けに襲ってくる。

どうやら手近にあるもので消毒と止血を試みているらしい。強引な手段だが、医者はいないこの村で出来ることといったらこれが精一

杯なのだろう。

「よし、できたよ二人とも。これからどうしたらいい？」

「他の怪我人は命にかかわるほどじゃなさそうだが、嬢ちゃんのははやい。大至急町まで運ぶぞ。海人、お前車出せ。いつものトラックでいい」

「わ、わかった」

一人の気配が遠ざかり、痛みにグッタリとしたミシオの体が持ちあがる。誰かの大きな背中に背負われ、そのまま走るのが振動で伝わってくる。

(ああ、これ、覚えがある……)

やがて、エンジンの音が聞こえ始め、ミシオの体がある上に乗せられた。硬い鉄板の感触、エンジンによる振動、懐かしいトラックの良いとは言えない乗り心地。昔はよく乗せてもらった、いまだにタイヤが三つしかないオンボロトラック。

「俺はさっきの小僧の方に行ってくる。お前らは大至急嬢ちゃんを町の医者まで運べ」

「あ、ああ」

「義父さんも気をつけて」

薄れゆく意識の中で、ミシオは懐かしさの正体を思い出した。

迫りくる巨大な拳を右腕の巨腕で逸らし、左手で反撃の一撃を叩き込む。

「ぐっ！！」

殴られた胸のあたりから黒い煙をあげながら後退するエイガに向けて、智宏は顔の前に魔方陣を展開する。展開する魔術は【銃炎弾】ファイア・バレット。両腕に【土人形の鉄腕】ゴレム・アームを展開した今の状態ではこの程度の魔術が限界だった。

魔術を扱う上で【集積演算】スマートブレインによる脳機能の強化が出来る智宏は、魔術の本場のオズ人と比べてもかなりのアドバンテージを握っている。高速で思考できるがゆえに魔術の展開イメージを瞬間的に行えるし、複数の事項を同時思考することも可能なことから、魔方陣の展開、操作のイメージを複数同時に行うこともできる。

だが、だからと言って魔術をいくらでも同時に使えるのかといえばそうではないらしい。

世界の挟間の魔力を取り込んでいる刻印使用である智宏は、たしかに莫大な量の魔力を保有している。だが、だからと言ってそれを一度に無尽蔵に放出することができると言う訳ではない。どんなに巨大な貯水タンクを持っていても、出せる水の量は取り付けられる蛇口の大きさに縛られるのと同じように、智宏が一度に放出できる量にも流石に限界があるらしい。もっとも魔術三つと気功術、そして刻印を同時に使用できると言う時点で驚異的ではあるのだが。

炎弾を三発連続で発射し、二発までエイガの胴体に命中させる。三発目はエイガが逃れたことで地面に着弾するが、それはそれで問題ない。現状砂埃を上げることが決してマイナスではないし、何より

相手の神経を逆なで出来ていい気味だ。

「くそつたれえ!! うざったいことばかりしやがって!!」

再び上半身の妖装を解き、突進してくるエイガに、カウンターで右拳を叩き込む。エイガ自身は本人の能力によって智宏の視界を盗み見、その狙いを顔面と読んで右に体をずらして回避しようとするが、

「ぶつ!!」

その推測は外れ、もろに拳の軌道上に飛び込む羽目になった。

先ほどミシオを追いかける直前、海流に話を聞いたとき、智宏はカイルからエイガの能力については聞きだしている。そのおかげで他人の視界を盗み見られるというエイガの能力が、相手の狙いを看破するのに効果的な能力であるのは予測できた。そして智宏にとって、相手の手の内とその使い方が判明している状態でそれに対策を練ることは造作もない。

視線を相手の顔面に固定し、左の拳で追撃を掛ける。

「つぐう!!」

慌てて自身の顔を腕でかばおうとしたエイガは、予想に反して腹部に強い衝撃が加えられ、さらに遠くに跳ね飛ばされた。

こちらの視界を盗み見るというエイガの能力に対し、智宏のとした手段は実にシンプルだ。視線を狙いとは別の場所に固定し、それに対して相手がとるであろう行動を先読みして攻撃を放つ。普通なら思いつきはしても、その手の技術を持っていなければ実行しがた
【集積演算】^{スマートプレイン}によって脳の処理能力が大幅に向上している智宏にとってこの程度の芸当は朝飯前だ。

加えて、戦闘の場所を砂浜に設定したのもここで効いてきている。いくらエイガが機動力のある形態に妖装を行っても、足場となるのは足を取られやすい砂地だ。流石に魔術で一気に削り切れるような隙こそ見せないものの、エイガが出せるスピードは智宏にとって十分対応できるものでしかない。

「くそお！！　なんでだ！？　俺はすげえ力を手に入れたはずなのに！！！」

あまりにも一方的なやられ方にエイガが悪態をつく。防御性能でこそ黒い霧とその本領である妖装によってエイガが勝っているが、それが無ければ確実にやられている。なにしろ智宏は先ほどから戦っていてエイガの攻撃を一発も食らっていないのだ。生身である智宏にとつてはただの一撃でも防御し損ねればそれだけで危険ではあるのだが、どれだけ攻撃しても対応されてしまうこの現状ではエイガは圧倒的に不利だった。

加えて新たな敵がエイガをさらに追い詰める。

「うああああ！！！」

「なっ！？？」

砂煙の向こうからいきなり振り下ろされたハンマーに、エイガは慌てて腕でハンマーを受け止める。見れば、そこにいたのは村の漁師の一人だった。先ほどはいなかった顔だが、どうやら騒ぎを聞きつけて駆けつけたらしい。

「お呼びじゃあ、ねえんだよお！！！」

「うわあ！！！！！」

膂力にものを言わせて漁師を跳ね飛ばす。力にものを言わせた反撃はたやすく相手を砂浜に叩きつけるが、

「後ろか!？」

背後から上がった二つの雄叫びに、エイガは参戦したのが一人ではないことをようやく悟る。背後にいた二人も同じく村の漁師。手に武器となる鈍器や銚を持ち一直線にエイガめがけて突っ込んでくる。

「甘えぞお!!！」

それに対し、エイガは新たな妖装で対応した。本物の竜猿人ダイノロイドに有つて、今までのエイガに無かったものを作りだす。すなわち、

「しっぽお!？」

「ぎゃ!!！」

いきなり背中に生えた爬虫類の尾に、漁師たちは驚愕と共に跳ね飛ばされる。だがそれに安心する間もなく、エイガの目の前に巨大な影が現れた。

「観念しろお!! ドラ息子オ!!！」

「チイイイ!!！」

振りおろされた角材をとっさに腕で防御し、角材を持つ相手にエイガは大きく舌打ちをする。

そこにいたのは先ほど蹴り飛ばしたばかりのセンリだった。村の漁師の中でも一際大きいこの老人が、エイガを角材と力で抑え込む。

「てめえらあつ！ 勝てそうになったとたんに調子づきやがって！ さつきまでミシオに任せつきりだつたくせに！！」

「やかましい！！ 調子がいいってのは判つてんだよあ！！ …… だがな、ここで動かなくて、どうして罪滅ぼしが出来るってんだ！ ここでも何もできなけりや、それこそ嬢ちゃんに顔向け出来やしねえ！！」

そこでエイガはセンリの背後で一台のトラックが走っているのを見つけた。森に向かって走るトラック、今この局面で町へと向かうそれに、エイガは相手の狙いを察する。

「てめえ！！ まさかミシオを！？」

「ああ、そうだ！！ お前はここでふん縛る！！ 嬢ちゃんには病院でそのことを教えてやりやあいい！！」

「ふ、ざ、けやがつてええええええ！！」

「海の男を、なめんじゃねええええ！！」

互いに雄叫びを上げ、二人はその腕に全力を注ぎこむ。通常なら圧倒的にエイガが有利なはずの力比べだが、力に劣るセンリ上から抑え込む形になったことで状況は互角となっていた。

だがその均衡は、ベキリという何か折れる音によって崩れ去る。二方向からかけられた力に、角材の方が耐えきれずに折れたのだ。

「なっ！！」

「はっはあ！！」

驚愕するセンガを、尾のひと振りで吹き飛ばす。その表情を苦渋に歪めたセンガはそれによって背後の海へと跳ね飛ばされた。

だが、

「ありがとう、海の男……！！！」

その頃には既に智宏が準備を終えている。

「しまっ」

(術式展開

【蛇式縛鎖】
チェーンロック)

振り向く間もなく、エイガの両足に鎖が絡みつき、足を取られたエイガは砂浜に成す術もなく倒れこむ。慌てて身を起こそうともがくと、視線の先に腕を元のサイズに戻し、魔方陣を構える智宏の姿があった。

「確かにその妖装とやらは強力な鎧だ。だけどそいつが魔力だと言
うのなら、使い過ぎれば必ず魔力切れをおこす。なら話は簡単だ

」

魔方陣に無慈悲に魔力を注ぎ込み、智宏はエイガに向けとその魔術を解放する。直前に怒りを込めた一言を添えて。

「まずは百発ほどぶち込んでやる！！！」

〔術式展開

バルカン・ファイア
【回転機関砲】
〕

宣言通り、エイガの体に大量の炎弾が降り注ぐ。炎弾は次々にエイガの妖怪に着弾し、爆発してエイガの魔力を削り取る。

「ぐぞおおおおー！」

降り注ぐ炎弾から逃れるべく、エイガも必死に身を擦るが、炎弾の爆発と足に絡みついた鎖がそれを許さない。妖怪を解けば鎖からは逃れられるかもしれないが、そんなことをすれば炎弾によってバラバラにされてしまう。漁師たちが智宏に与えた魔術の準備期間は、今決定的なものとなってエイガを敗北へと導いていた。

（くそっ！ くそっ！ くそっ！！ ふざけやがつてー！！）

危機的状况に、エイガは莫大な怒りを内心で爆発させる。村の漁師たちが、逃げるミシオが、何よりも目の前の少年がエイガにとつて圧倒的に邪魔だった。

「……排除しろ」

（？）

爆音にまぎれて、エイガが発した言葉に智宏は妙な胸騒ぎを覚える。変わらず周囲には砂で煙幕を張っている。周囲にはまだ他の漁師たちが控えている。視界がきかないこの状態ではさ（・）っ（・）き（・）の（・）よ（・）う（・）な（・）こ（・）と（・）は（・）で（・）きなはずだ。

だが、それでもエイガはその命令を下す。

「こいつを排除しろ！！　ぶち殺せ！！　俺の前から今すぐ消し去れえ！！」

エイガが上げるのは明らかに悪あがきにもならない痼癢とも言える叫び。

だが、

「了解した」

瞬間、智宏の見る景色が突然切り替わり、同時に背後から聞こえた声と強烈な拳が智宏の頭に直撃した。

15：魚寝村の戦い（後書き）

長らくお待たせいたしました。復旧したデータが帰って来たのでとりあえず更新を再開します。データに異常が無いかのチェックと微調整はしなければなりません。早めに二章は完結させるつもりなのでしばしお待ちください。

ご意見ご感想など頂けると幸いです。

16：たった一つの大切な理由

海から引き揚げられたミシオを介抱し、その息が吹き返すのを確認した智宏は、そのそばで自分の傷の手当てを行っていた。

葉鳥という小金属を操る超能力者、その襲撃によって体のあちこちに負った傷である。

それまではミシオのもとに駆けつけ、その介抱のためそれどころではなかったが、介抱している最中もミシオの服に血が付くほど出血しているとなれば、流石に放っておくわけにもいかなかった。

そしてそのとき初めて試したのが異世界で自分が受けた治療法、気功術だ。

最初こそ手を触れ、傷口を抑えるようにして行っていたが、慣れてくると自身の傷口に魔力を集中させるだけで行えるようになってくる。

そうして血が止まり、傷口が目立たなくなるまで治った頃、

智宏の視界が突然切り替わり、同時に強烈な拳撃が頭を襲った。

丁度今のよう。

(ぐ、あ……!!)

頭に食らった一撃に強烈に脳を揺さぶられ、智宏の思考能力が急激に低下する。

何も思考能力だけではない。脳が揺さぶられたことでバランス感覚が失われ、目の焦点が合わず、手足に力が入らなくなる。脳震盪

を起し、脳機能が低下した結果だろう。
だが、

（スマートプレイイン）【集積演算】！！）

それに対して智宏は、額の刻印に流す魔力を増やし、自身の脳の機能を強化することで対処した。

低下した脳機能を強化することで底上げし、瞬く間に体の制御を回復する。

結果として智宏は、倒れる直前には体勢を立て直し、背後の男から距離をとることに成功した。

「驚いた。確かに行動不能になる一撃のはずなのだがな」

距離を取り、向きなおったその先で、帽子を目深にかぶった大柄な男が表情をまるで変えずにそう言った。やはり今の状況は先ほどミシオから引き離れた時と同じらしい。ただし先ほどは森に僅かに入ったところに移動させられたのに対し、今智宏達がいる場所は、先ほどミシオを介抱した岩場だった。よく見ると遠くに今までいたはずの砂浜も見える。

「くそ、こうなることを警戒して煙幕を張ってたはずなんだけどな」

「ほう？ 私の能力を一度で見抜いていたのか？」

「テレポートか何かだろうか？ 超能力としてはサイコキネシスと並んでメジャーな能力だ。それに、例えわからなくても位置がわからなければ狙えない」

一瞬で別の場所に移動する。それはテレポートの余りにもわかり

やすい特徴だ。二回とも恐らくテレポートで智宏を自身の間合いまで引きよせ、現れたところを殴り倒したのだろう。

(いや……！ こいつの場合、引き寄せて殴ったと言うよりも、拳の軌道の上に僕を呼び出したと見た方がいいか？ 現れるとほぼ同時に殴られたこともその方が納得できる)

相手の能力を分析しつつ、同時に現状も分析し焦りを覚える。どう考えても状況は最悪だった。魔術というアドバンテージを持つ智宏の存在によってようやく抑えられていたエイガから、そのストッパーである智宏がまんまと引き離されてしまったのだ。妖装という異能を操るエイガが相手では、あの場にいる漁師たちでは時間稼ぎにもなるまい。

こちらに智宏が呼び出されてしまったことで、事実上エイガは自由を得たと言っている。それほど致命的な逆転が一瞬に行われてしまったのだ。

「くそ、位置さえわからなければ能力も使えないと思っていたんだがな」

「生憎だったな。ごく最近、砂殿栄河の能力は急成長している。それまでは他人の視界を盗み見るだけだったようだが、今は自身の視界を他人に見せることもできるのだ」

「それで僕の居場所の見当をつけて引き寄せたってことか。……いや、それとも見えればテレポートさせられるのか？」

「……」

エイガが使ったのは恐らくミシオの使う感覚投影と同じものだろう

う。話から察するに視覚だけのようだが、それでもこの相手との相性は抜群だ。現に使われたとたんにこうして智宏は窮地に立たされている。

(いや、違うか。窮地に立たされているのはミシオだ)

エイガが自由になった今、あの男がそのままミシオを逃がすとは考えにくい。町に逃げ込むことでこの世界の警察が本格的に動く可能性を考えても、あの男自身のミシオへの執着を考えれば、追撃をかけるのは明らかだ。むしろ警察の存在は間に合わないだろうことを思えばエイガに追撃を促す要因にしかなるまい。ミシオの安全を考えれば大至急彼女のもとへ向かわなければならぬ。そのためには、

「どうやらあんたを倒さないとミシオのところには行けないようだ
な」

「そういうことだ」

にらみ合いは起こる暇もなかった。

瞬間的に魔方陣を展開しようとした智宏の顔面に、男の右拳が突き刺さる。

「ぐっ、うー!!」

反射的につめき、それでも、魔術で反撃しようとして手を前に向けるが、

「があー!!」

視界が唐突に切り替わり、同時に側頭部を襲った衝撃によってそれを封殺された。

直前まで前にいた男は背後に回り、その右裏拳が智宏を直撃している。

（いや、違う。僕が背後に移動させられたんだ！！）

互いの位置をすぐさま把握してそう判断し、よるめきながらも振り返り、再び魔方阵を向け直す。

「ぐっ！！」

しかし再び顔を襲った衝撃が、それを完全に封殺してのけた。

再び繰り出された右手による正拳に、一瞬だけ智宏の意識が消えかける。

だが、

（そうか、こいつ……！！）

【スマートブレイン集積演算】で脳機能を回復させると同時に、智宏は相手の能力を看破していた。

「右手、ただだ……！！」

「む……！！？」

智宏の言葉に、相手の動きが止まる。その反応からしてどうやら正解のようだ。

「さっきからの攻撃、あなたは右手の周辺にしか僕を呼び出してい

ない。自分が移動した方が良さそうな局面でもそうしていない。あなたのレポート、どうやら対象を自分の（・）右手の（・）周辺に（・）し（・）か（・）呼び出せないようだな」

「……驚いた。見破ったこともそうだが、まだまともものを思考することができるとはな」

目の前の男からの攻撃は計五回。そしてその全てが右手で行われていた。最初の二回はそれでもまだ納得できるが、後の三発はすべて右手で行う必要はない。自由な場所に転移させられるのなら、よりの強い足なども使って徹底的に打ちのめす方法もある。何より、すべての攻撃が転移とほぼ同時になされているという事実が決定的だった。

攻撃を防ぐのにわざわざ智宏を背後へ転移させたことも大きい。自身が移動するのではなく、わざわざ相手を背後に呼び出すと言う事は、自分をどこかに移動させることができないという証拠だ。

『視界に収めた相手を右手周辺にレポートさせる』。それこそがこの相手の持つ能力なのだ。

（……とはいえ）

わかったからと言って勝てるかどうかとなれば話は別だ。自分だろうが他人だろうが無尽蔵に好きな場所に移動させられるわけではないというのは確かに救いではあるが、逆に言えば右手の周辺ならば自由にものを呼び出せることになる。

先ほどから行われている攻撃、インパクトの瞬間に拳の軌道上に相手呼び出しているらしいが、そうだとすると攻撃を避けることはまず不可能と考えた方がいい。なにしろ呼び出された瞬間には拳がヒットするのだ。たとえ防御を固めてもその隙間を自由に狙えるとなれば防ぐことはもう不可能だ。

「予想どおりだ刻印使い。逃げられないことまで含めてな。私の前では回避も逃走も意味をなさん。渦にのまれたものがその中心へと引き寄せられるように、すべてこの拳が引き寄せる」

言葉と共に、男は六発目の拳を振りかぶる。身がまえ、反撃の糸口を探す智宏をあざ笑つかのように拳は空を貫き、

「ゆえに私は渦と名乗っているのだ」

言葉と共に景色が切り替わり、視界に現れた回避不能の拳が智宏の顔面に突き刺さった。

トラックの荷台で周りの風景を見る。

坂を登り、村を出る道へと入り込む。左右に森が現れ、水瀬達を光ある村から遠ざける。

しかし左右の森の内、左に広がっているのはミシオが長い間隠れ家としていた森だ。もともとミシオの家の私有地で名前はなかったが、ミシオが住み着いたことでミシオの森などと呼ばれている。

道路の左右に電線を通じて送られてくる電気もなく。道を照らす申し訳程度の明かりもない森の中で、今ミナセの膝の上で眠る少女は三年もの間耐えてきたのかと思うと、水瀬はどうしようもなく辛い気分になった。

幼い頃、今の夫である海流や、その弟の海人と遊ぶとき、いつの間にか後ろからついてくるようになった妹のような少女。

兄弟姉妹のように共に過ごし、遊び、ときには喧嘩したりして過

ごした時代は、三年前のあの日、ミシオの祖父、波晃の死と共に終わりを告げる。

両親を亡くしたミシオの唯一の肉親が死に、その財産を相続する立場となったミシオをめぐり、彼女の親戚たちはかなり争つたらしい。もしかしたらそのとき、純粹にミシオを心配してくれていた親戚もいたのかもしれないが、最終的に、ほかの意見を封殺する形でやってきたのがあの砂殿親子だった。

その後の展開は一方的だった。ミシオの様子は明らかにおかしくなり、ついには一時期行方をくらませるまでに至った。事態を重く見た大人たちが、砂殿を問い詰めに行き、帰って来た時には逆に何かを突きつけられたような深刻極まりない顔をしていた。

そしてその数日後、ミシオが森にいたことを突き止めた水瀬達三人は、そこでミシオに決別を突きつけられる。

今でも思い出す。「私が何とかする」というミシオに対し、その言葉を信じることしかできなかった無力感。海人などは本で調べ上げた法律の知識を吹き込むことはしていたようだが、それでもなにもできなかったと感じていることに変わりはない。

例えば海人が都会の学校を目指せるほど勉強し始めたきっかけは、いざというときにミシオに知恵を貸せる存在になりたかったことなのかもしれない。

（だから、守る。この娘を今度こそ！）

そう決意し、水瀬はふたたび眠るミシオに目を向ける。現在ミシオは消毒と止血だけを行った状態でミナセの膝を枕に眠っている。背中の傷は深くはないようだが出血が激しく、とりあえず服の破れ目からタオルを押し込み、その上から着物の帯で縛って圧迫することで、どうにか止血している状態だ。

うつぶせに寝かせた華奢な体に、ボロトラックの激しい揺れが響かないか心配ではあったが、こればかりはどうしようもない。何し

る普通なら始末しているだろう骨董品を、修理に修理を重ねて使っているような状態なのだ。

「ミナ姉、シオちゃんの様子はどんな状態だ？」

「よく寝てるよ。今のところ特に苦しそうってこともない」

背後の運転席にいる海人にそう答え、水瀬は少しだけ意識をミシオから村へと向ける。

村が今頃どうなっているのかは、正直想像もつかない。途中で乱入してきた能力者ら（・）し（・）き（・）少年は味方ではあるようだったが、それでも相手の栄河はなにやら得体の知れない変貌を遂げている。

「あれ、なんだったんだらうな……」

「……わからない。私はシオちゃんとあいつの会話も、ちゃんと聞けたわけでもないし……」

「俺、少しだけ話を聞きとれたけど、異世界やら改造やらって訳の分からないことばっかだったよ。後分かったのはエイガがやばいってことだけだ。シオちゃんにこだわってる理由はなんか話してたけど、俺には正直それが正気でいつてたかどうかもわからない」

「……もしかしたら、シオちゃんは私たちが考えているよりもずっと危険な目に遭ってたのかもしれないね。それこそ栄河みたいな化け物がいるような状況に……」

「兄貴は、大丈夫なのかな……」

そこで海人は、水瀬も気になっていたもう一人の名前を紡ぎだす。今ここにいない彼女の夫。話からすると、重傷を負ったという話だが、今生きているのかどうかもわからない。

「……いや、兄貴ならきつと生きてるな」

「え?」

「きつと生きてる。兄貴は能力者だし、そう簡単には殺せない。それでも、もし重傷を負ったってのが本当なら、行くところは一か所しかない」

「……病院?」

「そつだ。これから俺達が行くところだ」

それは彼なりの励ましだったのだろう。そう思ったことで、初めて水瀬は自分の心境が良くない方向に進んでいたことを自覚する。危険な目に遭い、ついつい思考がマイナスな方向に向きがちだが、今はやるべきことがある。それに集中するためにはくよくよしてはられない。

「ん? 何だ?」

「どうしたの?」

「いや、今バックミラーに何か……」

「え?」

言われ、水瀬も車の後ろに注目する。背後に広がる暗闇、だが、ほんの一瞬、トラックの横を通過した街灯が、その場所にさしかかったとき、水瀬の視線は確かにその存在を捕らえた。

「……な!？」

背後で海人が驚きの声をあげるのを聞きながら、水瀬もその姿を確認する。暗闇でどす黒い煙に包まれているというのに、なおはっきりと見える異形の姿。今の三人にとって間違いない最悪の化け物。

「砂殿、栄河!！」

「見iiiiiiiiつけたあああ!！」

驚く二人と視線が合い、栄河が雄叫びを上げる。上半身を下半身を異形のそれに変えた栄河が、信じがたい速度でこちらに走って来ていた。

「くそ!！ なんであいつがここに!？ 親父達はどつなつたんだ!？」

「そんなことはいい!！ 今とはかくスピードをあげて!！」

「これで精いっぱい! このオンボロにそんなスピード出せねえよ!！」

「っ!！」

自身が乗る車のあまりの不甲斐無さに、流石の水瀬も不満を覚える。だが、現在出している速度も相当なものだ。そう考えればこの

車に追い付こうとしている栄河が異常ともいえる。

(でも、どうしてそんなことができるの？ 栄河の能力って確か趣味の悪い盗視能力だったはず……。能力じゃない？)

「とにかく全速力で逃げる！！ ミナ姉はシオちゃん抱えてしっかりと掴まっててくれ！！」

「わかった！！」

返事をしながら、しかし水瀬は絶望的な気分で背後を意識する。短時間でトラックを追って来れる化け物を相手に、この骨董品はあまりにも分が悪い。

まだ幼い頃、ミシオは遊んでいて足をくじいたことがある。今に思えばたいしたことのない怪我だったが、幼かったミシオにはそれは大きな問題で、痛みには歩けないという事態に大泣きしたのをよく覚えている。

『おう、嬢ちゃんどうした？』

そんなとき、ミシオに手を貸し、家まで運んでくれたのはセンターだった。

大きな背中に背負われて、普段より遙かに高い視界に感動したのも覚えている。

(……そう、他にも……)

トラックに乗せてもらい、カイル達と町まで遊びに言ったこともある。

駐在のおじさんにはよくお菓子をもらっていた。

埼頼さきらいのおばさんには遅くまで遊んでいるとよく注意された。

他にも、他にも、他にも、他にも、他にも。

遊んだ思い出も、がんばった思い出も、怒られた思い出も、楽しい思い出も、辛い思い出も。

ミシオの記憶によみがえる思い出は皆村の人々との思い出ばかりだ。

(……ああ、そうだ。あの村は、私の家族だったんだ……)

三年の月日の中で、忘れかけていた彼らと触れ合う際の暖かな感覚。両親と同じ家族のような、ぬくもりのある暖かな感覚。その感覚が急速にミシオの中に蘇っていく。

『なんのために……!』

智宏と別れる際、背後からかけられた言葉を思い出す。あのときミシオは責任だと答えた。村の人たちを自分の家のトラブルに巻き込んでしまった責任だと。確かにそういう思いが無かったわけではない。村で昔のように暮らしたいという、ミシオ自身が抱く願望もあった。

だが、結局のところ、ミシオが心の底から抱いていた理由はもっと単純なのだ。

(そうだ……。だから守ろうと思ったんだ)

この三年間、辛くなかったと言えば間違いなく嘘になる。むしろ辛いことばかりだったと言ってもいい。

暗い森の中で一人で暮らすなか、心細さを覚えたことは数えきれないほどある。

他人を巻き込むのを避けるため、学校に行っても極力人を避けていたし、そもそも学校にも自身の生存をアピールするための最低限しか行っていない。

サデンの息のかかった者たちに命を狙われたことは何度もあったし、そのうち一度はかなり危険な状態にまで陥り、傷だらけ、痣だらけになりながら命からがら逃げたこともある。

だが、それでもミシオはこの場所に留まって来たのだ。大切な家族を守るために。例え、もうその輪の中に入ることができなくなっただとしても。

(帰ろう。答えを言い直しに、家族に会いに)

体に力が戻ってくる。薄れていた感覚が記憶と共によみがえる。まるでミシオの意志に答えるように。

(私の家族を、守りに行かなきゃ)

それが、彼女が戦う理由。彼女を支えるたった一つの大切な理由。

16：たった一つの大切な理由（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

17：手にした魔力

地面が消え、視界が切り替わる感覚と共に顔面に強烈な拳がめり込む。

「ぐ、うー！」

それでも負けじと付きつけた魔方陣の先は、再びの場所の変化で虚空へと変わる。

同時に襲ってくるのは、胸倉を掴まれる乱暴な感覚。

(っ！！)

ほとんど反射に近い速度の思考で、腕で腹をガードする。すると間一髪、渦のはなった膝蹴りがそのガードによって阻まれ、同時に胸倉を掴んでいた手が離れていく。

(させ、るか！)

着地と同時に地面をけり、こちらとの距離をあげようとする渦に肉薄する。

渦と戦う上で、智宏が最初に取った対策は、まず超のつく接近戦だ。渦の能力はどれだけ距離をおいてもそれを好きなタイミングで無力化できるものだ。そんな能力を相手に距離を置いて戦っても優位には立てない。遠距離で攻撃できる魔術を発動しても、位置を変えられて見当違いの方向に放つはめになるのは目に見えているし、下手をするとはなった攻撃の盾としてトモヒロ本人が使われてしまう可能性すらある。

故に接近戦。それも、相手の体を死角として使えるほどの超の付

く接近戦だ。

だが、相手もそれを理解している以上、易々と距離を詰めさせない。

「あまりよるな」

距離を詰めようとする智宏に対し、渦はその顔の先に手を突きつけることで対応する。智宏が相手の意図を理解すると同時に、現れた海水が智宏の顔に大量に浴びせられた。

「っ!!」

混乱はしない。だがかけられた海水は、智宏の眼に入り込み一時的に視界を奪う。そして瞬きによってその痛みから回復する頃には、すでに渦の拳は振りかぶられている。

「う、あ……!!」

顔、ひいては脳への攻撃が効かないものと判断したのか、今度狙われたのは胸だった。胸に突き刺さる拳の勢いに身を任せ、できるだけ衝撃を受け流すように身を捻る。肺を強打されて乱れた呼吸と倒れそうになる体を強引に立て直し、再び智宏は間合いを詰めにかかると。

対策と言うなら、このダメージコントロールも対策と言えるだろう。相手の拳が回避不能だというのなら、食らってから攻撃に対処するしかない。受けるダメージをできるだけ小さくし、危険な個所への攻撃を牽制する。同じ殴られるにしても、衝撃を受け流すなどして致命傷となるものを避け、眼つぶしなどの危険な攻撃を防御したり隠したりして回避する。対策と言うには余りにも効果が薄い策だったが、それでもやらないよりはましだった。

幸いなことに智宏の体は世界を超えたことでかなり丈夫になっている。さらに言うなら前の世界で気功術を身につけていたのも幸いした。気功術の効果で骨や筋組織を強化することで体自体の頑丈さを底上げし、受けたダメージを血属性の魔力で治療する。そのかきもあり、すでに十発以上殴られているにも関わらず智宏は骨を折られるような事態にさえなっていなかった。

だが、それだけの異能を同時に使用して、なお智宏は思ってしまう。

(……強い!)

確かに最近急に得てしまった戦闘経験のなかでも危険な相手というのはいた。能力の強さで言うなら、条件が限定されはするものの刻印使用であるオチシロの方が強力な能力を持っていたし、応用性なら魔術や葉鳥の能力の方が上だろう。

だがこの敵は、今までの敵が至っていなかった、自身の能力を完全に使いこなすという領域に至っている。

オチシロのように能力に振り回されているわけでもない。葉鳥やエイガのように能力の強さの上に胡坐をかいているわけでもない。強いて言うなら魔術とコンビネーションで戦っていたアルダスとウンベルトあたりが近いかもしれないが、それよりはるかに高いレベル。

自身の能力を把握し、効果的な運用法を熟知し、それを最適に、効果的に運用する。そういう意味での強さは、智宏が異世界に飛ばされてから出会った敵の中でもトップになるだろう相手だった。

(多分、こいつもプロだ。それもエデンであった連中よりはるかに上の!)

さらに言えば、場所も悪い。先ほどのように砂浜ならばまだ砂煙

で煙幕を張るといふ手にも出られたが、ここは岩場。それも海からは若干離れているため、海に魔術を打ち込んで蒸気を発生させても遠すぎて煙幕がここまで届かず役に立たない。そういうところでも対策をきつちりと封じられている。

それゆえに防戦一方。事実上智宏は、反撃に成功することなく一方的に殴られているような状態だった。いくら攻撃から身を守っていてもダメージは体中に蓄積しているし、脳への攻撃による脳機能へのダメージを【集積演算】スマートプレイスで相殺しているため、魔力の消耗も激しい。先ほど二割を切っていた魔力量は、ついにその量を一割近くにまで減らしていた。

(くそ！ このままじゃ)

「らちがあかな」

(!?)

智宏の考えを代弁し、しかしそれが渦の認識であったことを証明するように、左手が素早く腰の後ろに回される。同時に右手を振りかぶり、何かを握った左手がそれに追隨する。

(っ!!) 【鉄甲】!!
アイアン・ガント

とつさに魔術を発動すると同時、景色が切り替わる。

次の瞬間に智宏を襲ったのは、不可避の掌と、それに追隨した必殺の凶刃だった。

ぼろぼろのトラックに追い付くのに、今の栄河の足は十分も必要としなかった。

巨大化した腕で荷台をつかみ、それを引き剥がそうと寄って来た水瀬を蹴り飛ばす形でその上に飛び乗る。

そんな普通では考えられない力技が、今の栄河にはいともたやすく行えた。

「ミナ姉!!」

運転席の壁に叩きつけられた水瀬に、海人が声を上げる。肝心のミシオは意識を失った状態で荷台に転がっていた。

「渡、さない……!!」

そのミシオを、水瀬がすがりつくように抱きしめる。

「……絶対に、あんたなんかに!!」

呻くような声で水瀬はそう宣言する。まだ運転席の壁に叩きつけられたダメージは残っているはずだったが、その眼には今までにないほどの反抗の光が宿っていた。

「いいねえ、興に乗った」

その光に、栄河は強く触発される。自分に反抗する人間の強い意志。それをこの場でどうすれば折ることができるか。

答えはすぐに導き出せた。

「じゃあ、試験開始だあ！！」

気分を高揚させ、栄河は荷台から飛び上がる。向かう先は水瀬の向こう側、トラックの運転席の真上だ。

「うわあっ!？」

運転席の中で海人が驚きを交えた悲鳴を上げる。

だがその声を上げるのはまだ早い。そう思いながら栄河は、自身の手を鱗だらけのそれに変え、思いきりトラックのフロントガラスに叩きつけた。

ガラスの割れるけたたましい音と共に、車体が大きく揺れる。水瀬の体がミシオを抱えたまま荷台の隅から隅へ対角線上に転がり、栄河の鱗だらけの腕が運転席の天井の端を掴む。

「海人！！」

水瀬が悲鳴を上げるがもう遅い。割れたガラスで傷だらけになった海人は、運転席で栄河によってその首を鷲掴みにされていた。いつでも命を奪えるように、爪を頸動脈にしっかりと突きつけ、さらにアクセルやブレーキを踏めないようにカイルの体を持ち上げておく。運転席の上から行うにはかなり無理な体制だったが、それは妖装の腕の長さを調節することで解決した。

結果的に栄河は運転席の上に、前方に背中を向ける形で張り付く形となる。

「おっと、運転が乱れてるぜ？」

運転手に対する暴拳によって、激しく揺れる車体を、栄河は尻尾でハンドルを操作することで安定させる。いくら対向車もなく、力

「ブまで間がある道路だったとはいえ、これだけのことをしてハンドル操作を誤らなかつたのは奇跡に近かった。その点でだけは、栄河も海人を褒めてやるべきかもしれないと思う。」

「放せ、放せこのっ！！」

「暴れるなよあ。お前さんは大切な人質なんだからよあ。んで、水瀬さんに問題なんですがあ、このままミシオを抱きしめたまま海人の首から血が噴き出すのを見ると、ミシオを渡して俺がこの車から降りるの、どっちがいい？ 制限時間は車がカーブにぶつかるまで、さあ、どっち？」

荷台の隅でミシオを抱きかかえながらうずくまる水瀬に、栄河はそう質問を投げかける。

ミシオの命と自分と海人の命。その二つを天秤にかけさせる残酷な問いに、流石に水瀬は色を失う。もしここで海人が死ねば、水瀬だけでなく同じくトラックに乗っているミシオもトラックの事故に巻き込まれるだろう。冷静に考えるなら、ここはミシオを手放して時間稼ぎを図るべきところだ。

（でも、一度でもそうすれば渡さないっていう決意は折れるぜえ。さあ、どうする？ お前はどっちを選　！？）

愉悦に満ちた思考はしかし自身を襲う奇妙な感覚によって中断される。まるで誰かに肩を掴まれたようなそんな感覚。

（　　なっ！？　　いったい誰がっ！？）

感覚に驚きながらも、慌てて背後、トラックの前へと振り返る。だが、そこにはカーブを目前に控えた闇があるばかりで、人らしき

ものは一人も見当たらない。それどころか移動中のトラックでこの場所に立つことなど不可能だ。そもそも、霧で体を覆っている栄河に、あそこまではつきりとした感覚など感じられるわけがない。

(まさか……!!)

今頃になって先ほどの感覚の違和感に気が付く。まるで自分の感覚でないような、誰か()が()感じ()て()い()る()。感覚を()押し()付け()ら()れ()て()。そ()れ()を()自分の()感覚だ()と()錯覚し()て()い()た()よ()う()な()違和感。何よりも肩に感じた感覚が、誰かに抱きかかえられているようなものだったという事実。

(まさか!?)

慌てて背後を振り返るがもう遅い。振り返る先にはすでに、自分と同質の魔力を放つ影が迫っている。

「つぐう!!」

影の巨大な腕に顔面を殴られ、栄河の体が宙に浮きあがる。慌てて海人を掴んでいた腕を消し、天井の端をそれぞれの手で掴んで踏みとどまる。

「え?」

「なっ!?!」

水瀬と海人が揃って驚きの声を上げるが、それを気にする余裕は

ない。影は栄河に対し既に追撃の構えを見せている。

ほとんどギリギリのタイミングで、栄河は両手を天井から放し、迫る巨大な拳を受け止めた。

だが、そこで気が付く。妖装によって得た今までの自分にはなかった器官、すなわち竜猿人の尾が、トラックのハンドルに絡みついたまま引つ張られ、車体を思いきり左に曲がらせていることに。

「しまっ　！！」

慌てて尻尾を消すが、それはもはや逆効果にしなければならない。

急激に左に旋回してトラックは、そのままガードレールの激突し、巨大な衝撃を乗る者たちに叩きつけた。

「ぬ、あああああ！！」

海人や水瀬は、あらかじめ誰かに指示されていたように車体にしがみついていたためことなきを得た。だが、腕を防御に使い、捕まることすらしていなかった栄河の体は、当然のように背後へと投げ出される。背後にあるのは、ミシオが今まで根城にしていた森だ。

「てっ、んめえええええええ！！」

そして正面、栄河がトラックから投げ出されると同時に飛び出した黒い影は、空中でふたたびその拳を巨大化させ、振りかぶっている。

「ミシオオオオオオ！！」

三度目の拳撃がエイガの構えた腕に激突する。

空中で受けた強力な打撃に吹き飛ばされ、栄河の体が森の奥へと

「もう、みんなのもとへも行かせない。あなたはこの森でやつつける！！」

「上等だあ！！　いいぜ、望むところだよ！！　販めてやるぞミシオオツ！！！」

森の中に僅かに注ぐ月明かりのもと、二人の悪魔憑きが黒い霧と共に激突した。

17：手にした魔力（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

智宏がそれを防ぐことができたのは偶然に近かった。

空間移動で移動したとたんに髪の毛を掴まれ、そのまま刃を突きこまれる。それを右手に展開した【鉄甲】アイアン・ガントで弾き、防ぐことができたのは、攻撃される位置をギリギリで判断し、その刃を受け止めることができたからだ。

その判断とて明確な根拠があつたわけではない。余裕があれば相手の態勢や視線、これまでの攻撃が頭以外では胸を狙つて行われていたことなどから判断することもできたかもしれないが、それに気が付いたのは受け止めた直後だった。

言つてしまえばただの勘。【集積演算】スマートブレインという、判断能力において最も力を発揮する能力を持つ智宏にとつては一番あてにならないものこそが、智宏の命を救つた物の正体だった。

そして今の智宏には、そのことに冷や汗をかく余裕すらない。

（まずその手を、放せ！！）

掴まれた髪を放させるべく、あわゆくばこのまま渦を打倒するべく智宏は左手に魔方陣を展開する。使用する魔術は【強放雷】メガボルト。何よりも速さを意識した選択だった。

「っ！！」

今度冷や汗を流すのは渦の方だった。とつさに掴んだままだった智宏の髪を引っ張り、腕の延長線上から体をそらし、智宏の腕が再度照準を合わせる前に手を離す。

だがそれでも放たれた雷撃は渦の服をかすめて焦げ目を残した。

「づうー!!」

放電の光に目をくらませながら、それでも渦は右手を振りかぶる。ただしそれは、相手と距離をとる、いわば防御のために。

(引け、るか!ー!)

だがそれに対して智宏も一つの行動を起こした。両腕を顔の前と胸の前にぴったりとつけ、急所のみを防御したのだ。そして景色が切り替わる。

「ぐっ……!!」

繰り出された拳撃。だがそれにつめき声をあげたのは渦の方だった。それはそうだろう。よりもよって彼は【鉄甲】アイアン・ガントで硬化した腕を素手で殴ってしまったのだから。

不安定な体制で渦の拳を受けることになり、智宏自身もたたたらを踏む。それによって渦が智宏の間に距離をとるが、それでも智宏が初めて渦に一矢報いたことには変わらない。

そして距離が空いたことではやく彼の持ちだしたものについて考える余裕が生まれる。

(あの武器……!!)

前方痛みに顔をしかめる渦の右手に智宏は注目する。その手に握られていたのは魔力の刀身を展開する奇妙な刃物だった。

片手で握る柄の部分にトリガーが付き、その先に四角い柄とも鏢とも違う奇妙なパーツが接続されている。そしてその先に展開されているのが問題の魔力でできた刃だ。

SFなどで良くあるビームソードの類とはまた違う。刀身が確か

な形を持って存在し、それでも魔力によって作られていることを示すように魔力の感覚を放ち、その刀身は透けて見えている。展開された二十センチほどの刃は明らかに魔術と同じような技術で作られていた。

（いや、魔術の世界ではあんなものは存在しない。あれは見るからに機械だ！！）

何より、実際に魔石という『携帯できる魔術』を知っているからこそ分かる。目の前にあるそれは、魔石ほどの技術が必要としないレベルのものであり、同時に魔術という技術を知らない人間が作ったものであると。

（エデンの文明レベルではあんなものは作れない。それは魔力を知らないアイデアやアースでも同じだ。となると残るのは……！！）

智宏の中に最後の一つの世界が浮かび上がる。第四世界ウートガルズ。アースよりもさらに発達した科学が息づく世界。そして目の前の男がそれを持っていることで明らかになることは一つだ。

（こいつら……、五つの世界全てを股にかけてやがった！！）

まったく考えていなかった可能性ではない。だが、その事実やはり智宏にとって衝撃だった。何しろこの事実は相手の組織が世界の一国家であるレンドたちに匹敵する規模で動いていることを示しかねないからだ。

「やはり、慣れないものを使ってもあまり上手くはいかないな」

「！？」

警戒を続ける智宏に対し、渦はそう言うといきなり魔力の刀身を消して見せた。

だが、それは全くと言っていいほど攻撃意思を失ったことを意味しない。なぜなら刀身を失ったそれはいきなり真つ二つに折れ、どこことなく見覚えのある形に変わったからだ。

「早く慣れてしまわねば」

(っ!!) 銃か!!)

形状から武器の正体を看破し、智宏はすぐさまその場を飛び退いて走り出す。

案の定直前まで智宏がいた場所は、ジツ、ジツという音を立てて魔力による弾痕を刻まれた。

(くっ!!) これじゃ接近戦にも持ち込めない!!)

内心で焦りを覚えながら、智宏は銃弾から逃れるべく岩場を逃げ回る。視線だけは渦へと向け、岩から岩に跳び移りながらもその拳動を観察しテレポートによる攻撃の予兆も見逃さないよう注意を払う。

と、視界の小さな岩のくぼみと、取り残されたように残る水たまりを見つけた。

(あれだ!!) 術式展開)

見つけた水たまりに走り寄りながら、智宏は自身の体で隠しながら左手で魔方陣を展開する。発動の直前、渦が気付いたようなそぶりを見せるがもう遅い。

（ファイヤーバードストライク）
【火炎鳥襲撃】！！）

反撃を求めて、展開した魔方陣から勢いよく四羽の炎鳥が飛び出す。そして智宏は、そのうちに一羽を目の前にある水たまりの中に飛び込ませた。

爆音とともに水が蒸発し、蒸気の壁が生まれる。

「む！？」

驚く渦をしり目に、智宏は蒸気のなかに思い切って飛び込む。渦の能力から逃れるための即興で作った白い壁。そしてそれに隠れたことで智宏は残る三羽を操る余裕を得る。

「ちいつ！！」

舌打ちと共に渦は左手の銃で炎鳥を撃ち落としかかる。だが智宏の操作する炎鳥にはそう当たらない。三発目にしてようやく一羽を打ち抜き爆破する頃には、他の二羽が既に間近にまで迫っていた。

「やむをえん……！！」

迫る二羽の炎鳥に対し、渦は苦肉の策を打つ。迫る炎鳥の一羽に右手を向け、もう一羽を手から飛び出す向きで呼び寄せた。

渦の至近距離で二羽の炎鳥が激突し爆発する。

「ぐうっ！！」

うめき声をあげながら渦が爆風と熱にたたらを踏む。そしてそんな絶好の隙を見逃す智宏ではない。

(術式展開

【轟放雷】ギガボルト!!!)

瞬間的に使える魔術を選び発動させる。できれば【極放雷】テラボルトを発動させたかったが今は一秒に満たない間でも惜しい。何より放たれた雷撃はすでに渦を捉え、倒すのには十分な威力と規模を持っている。

だがそれに対して渦は左手の銃口を向けることで抗った。

(なっ!?)

銃口から先ほどまでの魔力の銃弾とは違う、巨大な魔力のエネルギーが噴き出す。噴き出した魔力は智宏の雷撃と激突し、強力な爆発を引き起こした。

(くっ……!!? あんな使い方もできるのか!?)

驚きながらも智宏は次の魔術を展開する。だが今度は渦の方が早かった。蒸気の壁が爆風で吹き飛ばされるのと同時に、渦自身も素早く体勢を立て直し、智宏に向けて己の能力を行使する。

智宏が魔法陣を展開するより早く、景色が切り替わる。

切り替わる直前、智宏は両腕で胸と顔を庇ったが、転移と同時にえぐられたのは腹だった。

(ぐ、あっ!!)

腹部を襲う痛みに、智宏は昼食を取り損ねて胃の中に物が入っていなかったことを感謝する。だが、それを安堵する暇はない。銃から先ほどの刃物へと変化した異世界の武器が、追撃をかけるべく振り上げられている。

「っおおー!!」

迫る刃を智宏はどうにか鉄の右手で受け止めた。そのまま二人の戦いは刃物と手甲を介した力比べに持ち込まれる。互いに自分の片手にもう片方の手を添えて全力を注ぎ込むが、戦況は尻もちをつく態勢になっている智宏の方が圧倒的に悪い。

「ぐ、う、うっうー!!」

「しび、といな……!!」

決着のつかない力比べの中で、思いがけず渦が口を開く。その声は相も変わらず淡々として、それでも僅かにいらだちがにじんできた。

「正直驚きだ。刻印があるとは言え、平和なアースの人間にここまで手古摺らされるとは」

「そっいうあんたは、随分と、慣れてるんだな？」

「生憎とこちらが本業なのでな」

本業、という言葉に、無意識に智宏の意識が反応する。やはり彼もエデンで会ったアルダスやウンベルト、オチシロなどと同じように荒事を専門にしている裏社会の人間なのだろう。

だがそれは問題ではない。問題なのは彼に言い回しが、まるで本業とは違うことをやっていたように聞こえる点だ。それともちろん合法的なものではないだろう。そして、彼の能力を有効に用いることのできる仕事に、智宏は心あたりがあった。

「……そう、か、あ（・）の（・）ミシオを捕まえたのはお前か……！！！」

「あの娘一人、だけではないかな」

智宏にして見ても、あれだけの防護策を講じていたミシオを、異世界人の技術を持っているとはいえどうやって捕らえたのか気にはなっていたのだ。だが、その謎が今ようやく解けた。確かにこの男の能力をもつてすれば人一人を捕らえるなど訳はない。

「あんだ、そんなことをしてて、何とも思わないのか？」

「思わん。こちらはただ金と仕事をもらうだけだ。もらえるものは何でも貰う」

あまりにも淡々とした口調に智宏の心にこれまでとは別種の恐怖が湧きあがる。相手の内面が見えているのに全く理解できない。あるいは人間性は分かるのに受け入れられない。得体の知れない生き物を見てしまったようなそんな恐怖と嫌悪感だった。

智宏自身その恐怖の正体がわからない。いくら思考力が上がっていても、理屈でわからないものはいくら考えても無意味だ。

だが、それと同時にエイガとは別の理由で、この男をミシオに近づけてはいけないことだけは理解できた。

「そろそろ、終わりだ」

智宏がそれまでとは別の決意を固めたそのとき、言葉と共に渦が視線を別のものに向ける。だがそれが隙になる寸前、智宏の体を莫大な量の水が押し流した。

(海水……！？まさか、こんな量でも呼び寄せられるのか！？)

現れた海水に押し流されながら、智宏は相手が勝負を決めに来たことを悟る。これだけの水があれば、先ほどのようにそれを蒸発させて目くらましに使うこともできる。それは渦自身もわかっているはずだ。それでもこんな手を使ったという事は、目くらましにする前に決着をつけるつもりということ。

(思考を続ける……！)

水が周囲に拡散し、智宏が体勢を立て直す。

(もつと考える……！)

そして視線を向けたその先には、案の定、刃物を銃に変形させ、拳を振りかぶった渦の姿がある。

(術式展開……！！)

「っああ……！」

そして、景色が切り替わる。

智宏の防御もむなしく、相手の拳が頭を横から殴りつける。

さらにそれに追撃をかけるべく、衝撃で宙を舞う智宏に、渦は銃口を突き付けた。先ほどの強力な砲撃か、あるいは連続の銃撃か、どちらにしろこの場で智宏を仕留めるべく放たれようとする一撃。

それ対して智宏は、自身のかかと(……)に展開した魔術で応じる。

（ エア・バスター
【空圧砲】！！ ）

渦が智宏に照準を合わせ、引き金を引く寸前、智宏の左足が跳ね上がる。かかところから空気を噴射し、空中で回転するように放たれた蹴りは、もの見事に渦の持つ銃を横から蹴りつけた。

「く、う、ああああああっ！！」

だが銃を失っても渦の判断は早かった。銃を構えるにあたって引いていた拳を再度握り、能力を行使して再度拳を撃ち放つ。

再び智宏の体を拳が、しかしながら先ほどよりはるかに多い数でもって襲う。

頭、胸、腹。その他至るところに渦の拳が雨のように降り注ぐ。

威力よりも素早く殴り続けることを重視しているため、一発一発の威力はそこまで高くはないが、能力によって智宏が地に足をつける前に再び拳のもとに呼び寄せられるのは致命的だった。

何割かは手足で防御もしているし、そのうち何発かは【鉄甲】アイアン・ガントに包まれた右手にヒットしてもいるが、それでも猛烈なラッシュが智宏を襲い続ける。厳しくはあるが致命的ではない。一見すると自暴自棄のように見える攻撃。

だが、

（このままで済むはずもない！！ こいつはきつと最後に致命的な一撃を放ってくる！！）

拳から身を守りながら、智宏はそのことに確信を持つ。額の刻印に流せるだけの魔力を流し込み、この後相手が打つであろう一手を、そしてそれに対応する一手を死に物狂いで思考する。

そしてその瞬間、渦が一気に腕を振りかぶり、智宏の景色が切り替わる。

(来た!!)

景色が半分黒くなり、智宏は自分が頭を掴まれていることを悟る。同時に渦の叩きつけるような動きによって、自分が拳よりも硬い岩で頭を叩き割られようとしていることも。

(抜けさせてもらうぞ、この渦を!!)

それでも、その方法は智宏も予測していた。

背中に魔方陣を展開し、地面に叩きつけられる寸前に発動させる。

「なにっ!？」

発動させた魔術はまたも【エア・バスター空圧砲】。岩に触れる寸前で放たれた空気圧は、岩を砕きながらも行き場を失い、逆に発動させた本人を跳ねあげる。本人を掴む渦の腕ごと。

(う、ぐっうっうっうっ!!)

背中にかかる強力な圧力に、智宏の背骨が軋むような悲鳴を上げる。だが、精神的な衝撃は渦の方が大きかった。

「う、おおおおおおお!？」

智宏もとるとも跳ね上がる右手に体勢を崩し、渦は驚きの声が上がげながらも智宏の頭から手を放そうとする。だが智宏は、すかさずその手を捉えなおし、自分の胸に押しつけた。

「なっ!？」

「そう言えば渦つてのは中心は動かないって話があつたな!？」

渦の能力は視認したものを手元に転移させる能力だ。だが、それは、あらかじめ手元に対象がない状態だからこそ有効に活用できる能力である。もしもその手を誰かに掴まれ、さらには体に押し付けられでもすれば、出口を（・）ふ（・）さ（・）が（・）れ（・）た（・）状態にされてしまえば能力は使えない。

「貴、様あ……!！」

「お別れにこいつもくれてやる!! 遠慮せざるえ!!！」

宣言と共に体制の崩れた渦の胸を蹴りつける。体重も乗っていない、大した威力もないただの蹴り。だがそれは、足の裏に魔方阵を展開することで突きつけられた銃口が変わる。

（術式展開

エア・バスター
【空圧砲】!!）

その瞬間、空気圧に胸部を殴打され、岩場に叩きつけられたことで渦は昏倒した。

苦戦の末の完全な勝利。だが、智宏にはその余韻に浸る余裕もない。

「ミシオオオオオ!!！」

視線の先、その日何度も出入りした森の中で、二つの魔力が激突しているのを感じる。間違いようのない二人の悪魔憑きの魔力の感覚。それは傷を負った少女が、それでも己の力で戦っている証でもあった。

状況はなおも継続中。戦況はいまだ最悪だった。

18：戦渦（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

19：人間の証明

最初の激突で、ミシオは自身の圧倒的不利を悟っていた。

おかしなことなど何も無い。単純にミシオが体格とパワーでエイガの足元にも及ばなかったのだ。

そもそもミシオは、エイガのように全身を妖装に包める訳ではない。

全身を包む魔力はそのほとんどが黒い霧の状態。かろうじて妖装と言える、ダイノロイド竜猿人の体を再現できている部分は、両腕の肩から先と足のひざから下だけである。しかも、腕こそ先ほど巨大化させることに成功したが、今の手足は明らかに元の体より若干太くなった程度で、とてもエイガほどのパワーを発揮できるほどの太さにはなっていない。この状態で正面からぶつかろうものなら、間違いなくイチやパワーで負けてしまうのだ。故にミシオは、最初に殴り飛ばされた後すぐさま作戦を変えた。

「チイツー！！ ちょこまかと！！」

背後の、足元からエイガの苛立つ声が聞こえてくる。ミシオはその声に相手が所定の位置まで来たことを確認すると、木の上で近くに張ってあるロープを妖装で纏った手の爪で掻き切った。

目の前にあったドラム缶が支えを失い、重力に引かれてエイガを襲う。

「またか、くそー！！」

迫るドラム缶に、エイガは巨大な体をもって迎え撃つ。

本来なら巨大な打撃音を立てるはずのドラム缶は、エイガの巨大な腕で受け止められることで、その役目を完全に封じられた。

(この罨じゃだめ、か。ならあの罨に……!!)

力ではかなわないと悟ったミシオが、ならばと取り始めた手段がこれだ。自分を囷にしてエイガを誘導し、攻撃に使えるトラップのある場所へと誘い込む。

もともとこの森は、ミシオが住むにあたって自衛用のトラップを大量に仕掛けている、いわばミシオのホームグラウンドと言ってもいい場所だ。森の中のこととはトラップを仕掛けるにあたって細部に至るまで知り尽くしているし、木から木に飛び移るような行為も日常的にやっている。ミシオが身を隠し、逃げ回るといふ選択をする上で、この森以上の環境はないのだ。

とは言え、それも簡単という訳ではない。

「降りて、来いよお!!」

「っ!!」

移動しようとして背を向きかけて、エイガの声に危険を感じて身を伏せる。するとまさにいまミシオの頭があった場所を先ほど叩きつけたドラム缶が飛んで行った。

(……中に水を入れて重くしていたはずなのに……!!)

見せつけられたことで改めてその怪力に戦慄する。ぐずぐずしていると木の上にもたたき落とされてしまう。そんな確信をもってミシオは、木の枝を蹴って空中に舞い上がった。

ひととき軽く感じる体が狙った木の枝にたどり着く。簡易なものとはいえ、妖装を纏った体はただの霧で体を強化している以上の効果をもたらしていた。

背後を見るとエイガはしつかりとこちらを追ってきている。途中には拘束系のトラップがあるがその程度では時間稼ぎにしかならな
いだろう。それどころか一か所に留まっていると狙い撃ちにされて
しまう。

ミシオは再び足に力を込め、別の枝へと飛び移った。

「ええい、うつつうしい!!」

飛んできた石を弾き飛ばし、絡みついた縄を掻き斬り、踏み抜い
た落とし穴から這い上がる。

先ほどから栄河が行っているのは、そんな不毛なトラップの相手
だった。

明らかにこちらを誘いながら逃げ回るミシオに対し、エイガがで
きることはそれしかなかったと言ってもいい。

ミシオを放置してこの森から脱出し、村人を人質にしてミシオを
おびき出すという方法も考えたが、ぐずぐずしているとまた邪魔が
入りかねない。この森のトラップがあれば下手な邪魔者は入って来
られないと考えるなら、むしろ好都合とも言えるのだ。

幸いなことに、異世界で手に入れた妖装という力はものの見事に
エイガをトラップの数々から守っている。この体ならいくらものを
ぶつけられても応えないし、強力な攻撃にも魔力の消費を覚悟すれ
ば耐えられる。

「無駄だぞミシオオ!!　こんなもん俺には効かねえ!!」

声をあげ、再びミシオに向かって手近なものを投げつける。今度

投げつけるのは人間の頭ほどもある大きな石だ。霧があれば大きなダメージを被ることはないだろうが、木から叩き落とすくらいはできる。

「ダラア！！」

気合いと共に空中を跳ぶミシオ目掛け、手にした石を投げつける。投げられた石は投石機で放たれたような速度でミシオの足元、今まさに着地しようとしていた枝に直撃した。

狙いとは外れ、だが石を食らった枝はミシオを乗せたまま砕け散り、その足場を奪い去った。

「っ！？」

突然着地点が消えるという状況に、ミシオの表情が驚愕に歪む。だが、ミシオはすぐに空中で態勢を変えると、着地しようとしていた枝のすぐ上にある別の枝を両手でつかみ取り、鉄棒で行うような見事な回転と共にその上に乗り、跳び上がった。

「チイツー！！」

無駄の全くない運動で、栄河からさらに距離をとるミシオに、栄河は憎々しげに舌打ちすると、これ以上距離をあげられてたまるかとばかりに足に力を込める。

だが、その力が加速に変わる直前、再び足に何かが引っかかるような感覚を感じた。

「っ！！ またトラップか！？」

先ほどから嫌というほど感じてきた予兆に、栄河はすかさず身構

える。すると案の定、栄河の真上から黒い影が真つ逆さまに落ちてきた。

「何度も同じような手を、食つかあー!!」

言葉と共に跳び退り、同時に落ちてきたものを鱗だらけの腕で近くの木に叩きつける。

(あん？ 妙に脆いような ！？)

次の瞬間には落ちてきたものへの違和感と、妖装に包まれた足に何かが食い付くような感覚が襲ってきた。

「なっ!? トラバサミ!?」

感覚に従い足元を見て、自分の足に齧り付いているものの存在に驚愕する。そこにあったのは猛獣の顎を模したような、獣を捕らえるのに使うバネ仕掛けのトラップだった。

だが、驚愕はそれだけでは終わらない。栄河の耳に、虫が羽ばたく音が大量に聞こえてきたからだ。

「ハチだとお!?」

同時に先ほど上から落ちてきたものの正体がわかる。そこにあつたのは、夏になるとそこかしこに作られ、ときに人間を脅かすスズメバチの巣だった。

背後から聞こえた羽音と悲鳴に、ミシオはエイガが見事に罠にかかったことを知った。

今エイガを襲っているのは、この夏できたばかりのスズメバチの巣だ。できてしまったときはどうしたものかと悩んだが、できたのがよ（・）り（・）の（・）も（・）よ（・）っ（・）て（・）こ（・）の（・）場所だ（・）っ（・）た（・）こ（・）と（・）か（・）ら（・）思いつきでトラップに組み込んでしまった。

もちろん、今の状態のエイガに蜂の針など通用するかどうかかわからない。だが、蜂に囲まれるというのは素人にはかなりの恐怖を誘う事態ではあるし、もしかしたら妖怪の薄い部分を見つけて、そこを刺す可能性もある。何より蜂達はトラバサミと同じ足止めだ。本命はこの先にある。

（場所があそこだから、使うのは三番……！！）

相手に位置を確認し木から飛び降りると、足元にあった先ほど投げられたのと同じサイズの石を拾いながら、ミシオは一本の木に走り寄る。

木の幹が根元近くで二股に分かれたまだ若い木。ミシオはその後ろに回り込むと、幹の分かれ目のあたりに設置されていた木のレールを起こし、折りたたまれていた足と、根元の金具で地面と水平になるように固定した。

さらに、木の分かれ目の上、二つに分かれた木の両方の幹に括りつけられた綱を引っ張り、先にあるフックをレールの上の台に引っ掛ける。その台の向こう側に石を乗せれば、出来上がるのは巨大なパチンコを模した投石機だ。

（これ、使わないつもりだったんだけど……！！）

そう思いながらも台を引っ張り、投石機を引き絞る。妖装により強化された身体能力は、ためしに使ってみたときの倍以上の速さで台を引っ張り、作ったレールのギリギリの場所まで引っ張ることも成功した。

同時に、蜂を殺すことに気を取られていたエイガが不穏な気配を感じてこちらを振り返る。眼を凝らし、こちらの様子を見て表情を恐怖に歪めるがもう遅い。

手を離すと同時に、先ほど投げられた時の倍以上の速さで石が発射される。

「ゴアッ!!」

発射された石が空を貫き、蜂を蹴散らし、轟音を上げてエイガの胸に直撃する。真つ当な人間ならばそれだけで粉々になってしまうような一撃に、流石の妖装も激しくその魔力を霧散させ、エイガの体も耐えきれず倒れこむ。足をトラバサミに拘束されていないければ、そのまま後方に吹き飛んでいたかもしれない。

「……………がつ、あ……………、し、信じらんねえ。ミシオ、てめえ正気か!」

投げかけられた悪態に、ミシオ自身も若干自分の正気を疑ってしまふ。この投石機に限らず、このあたりにあるのは本気で人の命を奪いうる危険なトラップばかりだ。作ったミシオ自身勢いに任せて作ったはいいものの、使うわけにいかないと判断し、この場所に近づけないように念入りにトラップを張り巡らした経緯さえあるのだ。正直使う日が来ることすら予想していなかった。

だが今この場に限っては、自分のやりすぎを褒められる。今のミシオに容赦している余裕はまるでないのだ。

(もう一発!!)

石を拾い上げ、木の前方に飛び出して台を手繰り寄せてセツトし直し、ミシオは第二射の発射態勢を整える。

慌てたエイガが自身を拘束するトラバサミを叩き割る直前、発射台の角度を調整しながら引き絞られた投石機が再び石で空を貫いた。

「ぐうぐうぐうぐう!!」

土壇場で拘束の解除を諦め、エイガは体の前で腕を交差して石を受け止める。防御している分、先ほどよりもダメージ自体は小さい。だが、受け止めた腕の妖装は確実に霧散し、エイガの魔力を容赦なく削り取る。

(ぐ、ミシオのやつ、俺に魔力を全部吐き出させるつもりか!!)

防御しているのも関わらず強行された攻撃に、エイガはようやく相手の狙いを悟る。いかに強力な防御力を誇る妖装でも、攻撃を受けるたびに魔力を霧散させている以上その力は無限ではない。加えて先ほどエイガは刻印使いの少年の攻撃を受けて大量に魔力を消費したばかりだ。残りの魔力はかなり少ないといってもいい。

(まずい……!! こんな場所で魔力切れなんて起こしたら……!!)

二発の投石でこちらに近づこうとはしないものの、周囲にはまだスズメバチが飛び回っている。妖装という防護服を失えば、待っているのはスズメバチによる直接攻撃だ。

そして、ミシオ自身それを狙っている。

(もう、一発!!)

相手の様子を確認しながら、ミシオは次なる石に手を伸ばす。近くにはあらかじめ、手ごろな大きさの石をいくつも転がしてある。今の身体能力なら、エイガが体勢を立て直す前にあと二発は打ち込むことが可能だ。

だがその計算は、直後に襲ってきた強烈な目眩によって乱された。

(……え?)

足から力が抜け、倒れそうになるのを慌てて近くの木に手を付くことで支える。だが、その体からは魔力の鎧が失われ、手足の力も体を支えるだけで精いっぱいだ。

(あ、血……)

強烈な倦怠感と寒気に、ミシオはようやくその原因を思い出す。先ほど斬りつけられた背中への傷が、動き回ったことで激しく出血しているのだ。

元より背中への傷は塞がっていたわけでも治っていたわけでもない。傷を圧迫し、その出血を抑えていただけだ。激しく動き回っていれば当然傷も悪化するし、出血だって抑えきれなくなる。

(待って、もう少しだけ……!!)

気力で魔力を纏い直し、己の体に懇願するように鞭を打つ。熱を持った背中と不気味な寒気を強引に無視し、ミシオは無理やりに体勢を立て直す。

「よおうミシオオ……、流石のお前もそろそろグロッキーかい？」

だがその頃には、罨を破壊したエイガが蜂を半ば突き破る形で背後まで迫っていた。

「しまっ　　！！」

「逃がすかよ！！」

慌てて距離を置こうとするミシオを、巨大化したエイガの腕が鷲掴みにする。両肩を挟み込むようにして掴まれ、ミシオも手足を妖装で包んで必死で抵抗するが、単純な力比べではとてもエイガには敵わない。

「さてえ、このままここでお前の手足をへし折るっのもいいが、ここはちよつと蜂がうるさい」

言葉通り、エイガの背後からは先ほど壊した八チの巣の住人達が羽音を響かせながら近づいている。

それに対してエイガがとった決断は、あまりにも単純で、

「ちよつとこの場所を　　」

そして残虐なものだった。

「　　離れようぜ？」

言葉と共に、掴まれたままのミシオの体が思い切り地面に叩きつけられる。直前でエイガがやるうとして悟りミシオ自身も必死でもがくが、それも虚しく、エイガは地面にミシオを押し付

けたままの態勢で走りだした。

「う、あああああああ！！！」

途端に、ミシオの傷ついた背中に猛烈な痛みが走り、流石のミシオもたまらず悲鳴を上げる。地面との接触面は魔力によって守られているが、衝撃まで完全に殺せているわけではない。エイガの走る速さも相まって、傷ついた背中をさらに連続で殴られているような、強烈な衝撃が襲って来ていた。

「ギャアツハアアアアア！！ もつと叫べえ！！！」

もちろん、この森をそんな速さで走りまわってただで済むはずがない。猛烈な速さで走ることから落ちてくるものなどは置き去りにしているが、四方からは泥や石、タワシやゴミなど様々なものが飛んでくるし、足元は何度も陥没している。

だが、それをエイガはミシオの体を使って無理やり防御する。

ミシオを自分前の地面に押し付けることで足元の陥没を察知し、飛んでくるものをミシオの体を持ち上げることで受け止める。

ミシオの体、それも傷ついた背中を痛めつける残酷な防御法。

それによる呼吸すらままならない強烈な痛み、ミシオはなす術もなく曝されていた。視界が明滅し、痛みで頭の中を真っ白に塗りつぶされる。意識も定かではなく、下手をすると何度か気絶しているかもしれない。妖属性の魔力を植え付けられたときも強烈な痛みを覚えたものだが、この痛みはそれと勝るとも劣らない。

だからからこそ、その痛みに反発するように、思考もままならない頭で一つの抵抗を行った。

「いがあああああ！！！」

それ（・・・）の効果により、走るエイガも背中に強烈な痛みを覚える。通念能力テレパシーの応用による感覚投影。痛覚情報をも送りつけることのできるそれによって、エイガはたまらずミシオの体を地面から離す。

だが、それで安心することなどできるはずもなかった。

「いつてえなあ！！」

持ち上げられた体が宙で弧を描き、振りかぶられた腕からミシオの体が投げ飛ばされる。背中から木に思い切り叩きつけられ激突し、体が碎けるような痛みと共に魔力を霧散させる。

痛みで意識までバラバラになるような錯覚を覚え、ミシオは木の根元へもたれかかるように崩れ落ちた。

「まったく迂闊だったぜ。そういやお前感覚投影までできるようになつてたんだっけ。まあ、それに関しちやあ俺も人のことは言えねえんだけど」

「う……、く……、あ……」

明滅する意識をギリギリでつなぎ留め、ミシオは少しでも痛みを和らげようと必死で呼吸を繰り返す。背中はいまだに殴り続けられてでもいるかのように痛みを発し、体には力が入らず立ち上がることもできない。猛烈な速さで刻まれている心臓の鼓動自体が、鞭のように背中を叩いて意識を切り刻んでいる。先ほどまで身を守っていた魔力も、今では見る影もないほど霧散し、わずかに霧がまとわりついている程度だ。

「それにしてもがっかりだ。俺としては、お前はもつとその力を使いこなしてるかと思つてたのに。まあ、教えられてもいないのに部

分的とはいえ妖装にまで至っていたつてのはむしろ褒めるべきか？」

言いながら近寄り、ぐったりと宙を見上げるミシオに、エイガは視線を合わせる。その表情からはすでに優越感が見え隠れして、もはや自身の勝利を疑ってもいない。

「ついでだから教えてやるけどさ。『妖装』の形は元になった生物もそうだが、使う俺達のイメージにも結構左右されるんだよ。ちゃんとこうして化け物になることをイメージできなけりゃ、もつと言えは自分が化け物になることを受け入れなけりゃあ、力を完璧に扱うことなんてできねえよ」

そう言つてエイガは変わり果てた自分の体を見せつける。そうされて初めて、ミシオは自分が今の体を受け入れきれしていないことを自覚した。ミシオの妖装が手足に留まっていた原因。それはミシオ自身がエイガのような姿になることを拒んでいたことなのだ。

(「こんな、姿にならないと、勝てない?」)

ミシオは自身の精神が徐々に弱っていくのを感じる。立ち上がりなければという意識だけは残っているのに、痛みで意識がまとまらない。

(「だめ、ここで負けたら、村の、みんなが……!!」)

苦痛が精神を蹂躪し、ミシオの意識を塗りつぶそうとしたその時、

『シオちゃん!!』

急に遠くで自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「……え？」

「あん？」

聞こえてきた声に二人揃って反応し、耳を澄まして声の出所を探る。するとかなり遠く、それこそ森の入り口付近から、幾人もの声がミシオを呼んでいるのが聞こえた。

『シオちゃん、どこだあ！？』 『こつちだ。こつちに派手に暴れた跡がある』 『さっきの坊主はどこ行った？』 『わからん。勢いよくどっかに行つちまった』 『くそ、シオちゃん、返事してくれ』 『とにかく痕跡を追うぞ。罨に気をつける』

一人や二人ではない。大勢の聞き覚えのある声が、この場所を探しているのが分かる。

彼らはきつと、この場所を見つければミシオを助けるべく戦うつもりなのだろう。そのことがミシオ自身確信をもつて感じられる。おそらく彼らは、命がけの戦いになることを覚悟しているのだろう。長い間耐え忍んできた分、今の彼らを突き動かすものは大きい。恐らくもうミシオを助けるまで止まらない。

(でも、それは私も同じなんだよ。みんなに死んでほしくないのは同じ)

だから今回は気持ちだけで十分だ。その気持ちを感じられただけで、ミシオは十分に立ち上げられる。

「それに、みんなのおかげで思い出した。竜猿人を倒す方法を」

「あん？」

エイガが疑問の声をあげると同時に、ミシオは体から黒い魔力が噴き上がる。霧状の魔力が確かな意志によって統率され、ミシオの全身を覆い始める。

「あなたのような化け物と、戦い続けている『人』がいたことを！！！」

瞬間、ミシオの体を覆う魔力が手と足元から確かな実体を持ち始めた。生まれるのは鱗だらけの竜猿人の手足。だがその形は先ほどまでのそれともまた違う形だ。

（スカートは、ちょっと邪魔。あと髪も）

どうせ下はスパッツだと割り切り、ミシオはスカートを魔力で吹き散らす。さらには制服の胸元のスカーフを抜き取り髪の毛を頭の後ろで適当に括る。

そして変貌が進む。

胴体を漆黒の魔力に包み、その上に鱗だらけの肌を生み出す。肩に、胸に、腹に、腰に、それぞれの形で鱗だらけのそれを具現化し、纏う。

「なっ……！！？ その形……！！！」

イメージするのは異世界の人々の姿。この村の人々と同じように、自分を助けてくれた人々の、戦う時に纏う戦装束。

「……鎧、だと！？」

ミシオの妖装が自分のものと違うことに、エイガが呆然とつぶやく。ミシオの妖装はエイガのように全身を別生物のそれに変貌させるものではなかった。鱗だらけの竜猿人の外皮を鎧のように具現化し、体の各部にまとわせる。化け物へと変貌するのではなく、人間として変身する。そのミシオが選んだ妖装の形だった。

最後に頭に兜をかぶり、一纏めにした髪の毛も魔力で包む。その形は少し迷ったが、エイガの姿を見て尾のような形にした。他の場所に造るよりもその方が操りやすい。

完成するのは黒いスーツの上から鎧をまとったような戦士の姿。化け物のような生物の外皮で作った鎧をまとい。より強い化け物と戦う異世界の戦士の姿がそこにはあった。

ここに来る前、ミシオが訪れることとなった異世界は、ミシオの目から見ても恐ろしい世界だった。見上げるほどの巨大生物をはじめ、強力な野生動物が闊歩する世界。文明の発展すらままならないその世界で、それでも人々はそういった生物たちと戦っていたのだ。倒した生物の鱗を纏い。奪った牙を刃に変えて。

「は、はははは……！！　なんだよ、それ。俺への当てつけのつもりか？」

自分と違い、明らかに人間としての姿を保ったミシオに、エイガは言いようのない怒りを覚える。妖装を纏った自分の姿がやけに醜く見え、エイガの心に言いようのない劣等感を呼び起こす。

「見下すつもりかあ！！　ミシオオオオオオ！！」

激情に駆られ、エイガはミシオめがけて飛びかかる。意思一つで腕を巨大化させると、その拳を容赦なくミシオめがけて振り下ろした。

「なにいつ!?!」

だが拳が直撃する寸前、ミシオは拳を避け、エイガの真横に移動する。どうやら身体能力は不完全だった先ほどよりもさらに上がっているらしい。

そのことを確認し、ミシオは自身の拳を巨大化させ、驚き無防備になったエイガめがけて突き出した。

「うあつ!?!」

黒い煙を噴き出し、エイガの体があつさり飛ばされる。

それと同時に、ミシオはな(・)せ(・)こ(・)の(・)拳の(・)巨大化だ(・)け(・)は(・)最初か(・)ら(・)で(・)き(・)た(・)の(・)か(・)をようやく理解した。

(そう言えば、智宏もこんな感じの魔術、使ってた)

たいしたことではない。同じように拳を巨大化させることのできる人間をあらかじめ知っていた。そういう形でも助けられていたという、ただの救われる話だった。

「くそおおおお!?!」

再びエイガの拳がミシオに襲いかかるが、ミシオはそれを木の上で一息で跳び上がることで回避し、さらに着地と同時に別の枝に飛び移った。

そしてさらにエイガの視線がこちらを向く前に別の枝に飛び移り、そこからエイガの背後目指して飛び降りる。

着地と同時に攻撃できるよう、右腕を巨大なそれに変えて。

「ぐぶうううううう！！」

巨大な拳で殴られたエイガが、その重みに耐えられず地面に転がる。体勢を立て直す頃には再び木の上に飛び上がり、再び背後に回って襲いかかる。

もはや展開は一方的だった。

木の上を移動するミシオの居場所がエイガには追い切れない。木の幹を、枝を、そして地面を蹴って移動するミシオが、そのスピードに追い付けないエイガを一方的に攻撃して、再び移動を開始する。エイガにできたのは、残り少ない魔力を浪費してミシオの攻撃から身を守ることだけだった。

ここに来て、エイガはミシオと自分の決定的な差を悟る。スピードが段違いなのだ。エイガが巨大な^{ダイノロイド}竜猿人の体を完全に再現しているのに対し、ミシオは鎧という形でしか再現していない分圧倒的に軽い。加えて^{ダイノロイド}竜猿人は元々木の上を移動することにも長けた生物だ。木から木へ移動するというのは、この力の正しい使い方とも言える。ミシオはエイガ以上にこの力を使いこなしている。そういう意味ではこの場所は、ミシオにとって二重の意味でホームグラウンドなのだ。

もちろん、エイガの妖装の元になっているのも同じ^{ダイノロイド}竜猿人だ。だが、エイガの妖装の巨体ではここまでのスピードは出せない。それにそもそも、木に登り飛び回る技術を身につけているミシオと違い、エイガはまともに木に登ったこともないのだ。ミシオの使っている移動術など到底真似できない。

「くそっ！　こんなはずがあー！！」

背後でミシオが着地と同時に拳を振りかぶるのを知覚する。だがエイガは振り返る暇さえない。無様に魔力を霧散させ、地面に沈むことしかできないのだ。

そして、霧散した魔力はそう簡単には戻らない。

「くそつたれえ！！ てめえの場所なんかああああ！！」

叫びながら、エイガは自分に残った最後の手札、ハッキング・アイ【盗撮眼】を使用する。周囲を駆け回るミシオの視界を盗み見て、その視界に映る景色からミシオの居場所を探し出す。

そして数瞬後、ミシオから流れ込む視界が、確かにエイガの後姿を捕らえた。

「みいいいいいつけたああああああ！！」

咆哮と共に振り返り、右腕にありつたけの魔力を込めてこちらめがけて飛び込んでくるミシオめがけて振りかぶる。魔力によって巨大化した腕はミシオの腕のおよそ倍。今のミシオには間違いないく耐えきれない一撃だ。加えて、空中にいるミシオには回避する術もない。

「くたばれええ！！ ミシオオオオオオオ！！」

空を切り、巨大な腕が周囲を薙ぎ払う。途中にあった茂みの一部をえぐり取り、かすめた木の幹を切り裂き、途中にあったすべてのものを巻き込んで最後に反対側の地面を吹き飛ばす。だが、

「なん、で……！？」

数ある手ごたえのなかに、ミシオを砕き散らす手ごたえだけが感

肩を持って行かれるような痛みには耐えながら、上がった悲鳴ごと
エイガを殴り飛ばす。殴られたエイガはトラックにはねられたよう
に森を突き破り、地面に叩きつけられることで、最後の魔力と意識
を失った。

（やつ、た……！！）

エイガが地面に着弾するのを確認しミシオはようやく勝利を実感
した。

ミシオの体は現在、拳を突き出した状態のまま前へと引つ張られ
ている。巨大化した腕は意識が緩んだことで霧散してしまったが、
このままでは地面に倒れこんでしまう。

（あ……、だめだ）

崩れた態勢を立て直そうとしてしかし、ミシオは自分の体がもは
やその力を使い果たしていることを悟った。

（そう、だよな。背中の中の痛いのが、血が出てるのが、全部無視
してたし）

意識が軽くなり、浮き上がっていくような感覚を覚えながら、ミ
シオは地面に膝をつき、そのまま地面へと吸い寄せられる。地面が
森の中ゆえに柔らかいものであることに安堵しながら、ミシオは目
を閉じてその衝撃を待った。

だが、直後その身に感じたのはあまりにも軽い衝撃と、確かな温

かみ。

「…………え？」

驚いて目を開け、ミシオは自分が誰かに抱きとめられているのを知覚する。抱きとめている人間の顔は見えないが、

「…………トモ、ヒロ？」

顔の横にあつた長く尖つた耳と黒髪で、それが自分を心配してくれていた少年だと察する。智宏も泥だらけのびしょ濡れで酷い有様だったが、その体温だけは酷く温かかった。

「来て、くれたんだ…………」

智宏が何かを叫んでいるのが雰囲気ではわかるが、すでに意識はふわふわと水に浮かんでいるかのように不安定で、音はおろか、あれほどミシオを苦しめていた背中痛みすら感じない。ただ一つ感じられる暖かさを味わいながら、ミシオは返事のできなかつた叫びを思い出す。

「そう、だ…………。トモヒロに言わなきゃ。さっきの本当の答え」

『なんのために』と叫んだ少年に、今こそ答えを伝えきる。

「私が、戦つたのは、責任なんかじゃない。私が、大切だったから」

今もここを探して森の中を彷徨っているだろう村人たち、彼らと過ごした、生まれてからこれまでの記憶。その一つ一つが、ミシオを構成する大切な理由だ。

「この村は、私の家族だから。小さい頃から、一緒に、過ごした。大切な……。だから守って、取り返したかった……。責任なんて関係ない。私がそうしたかったから、ここでこうしてる」

ぼやけていた視界が徐々に光を失い始める。自分の言葉がちやんと伝わっていることを祈りつつ、ミシオは猛烈な眠気を感じて目を閉じる。自分がこれからどうなるうとしていいのかは、何となく理解できた。

（ああ、でも、トモヒロの世界にも行ってみたかったな）

薄れる意識の中、ミシオは最後に一つだけ思い出した未練に思いをはせる。今となっては叶うことのないだろう、一度は諦めたささやかな望み。ならばせめて、これから見る夢はそういうものであることを祈ろう。どうせ長い夢を見るのならそれは楽しいほうがいい。

そんな小さな願いを胸に、ミシオは意識を手放した。

19：人間の証明（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6092w/>

CROSS WORLD

2011年12月10日02時09分発行